210.3
R472
S(h)
00001465

複写

佐伯有義校訂標注

増補 六國史

巻貳

朝日新聞社藏版

日本書紀

巻下

210.3
R472
S

1465

校訂標注 六國史第二卷目次

日本書紀下卷【自卷十六至卷卅】

卷第十六【武烈紀】

小泊瀨稚鷦鷯天皇（武烈天皇）

即位前紀……一

元年—四年……五

五年—八年……六

卷第十七【繼體紀】

男大迹天皇（繼體天皇）

即位前紀……九

元年……一〇

二年—六年……一四

七年……一六

八年……一八

九年—十年……一九

十二年—廿一年……二〇
廿二年……二一
廿三年……二二
廿四年……二五
廿五年……二八

卷第十八【安閑紀宣化紀】

廣國押武金日天皇（安閑天皇）

即位前紀—元年……二九
二　年……三三

武小廣國押盾天皇（宣化天皇）

即位前紀—元年……三五
二年—四年……三七

卷第十九【欽明紀】

天國排開廣庭天皇（欽明天皇）

即位前紀……三九
元　年……四〇

二　年……四二
四　年……四七
五　年……四八
六　年……五六
七　年……五七
八年—九年……五八
十年—十一年……五九
十二年—十三年……六〇
十四年……六三
十五年……六五
十六年……六九
十七年—廿一年……七一
廿二年—廿三年……七二
廿六年……七六
廿八年—卅一年……七七
卅二年……七八

卷第廿【敏達紀】

渟中倉太珠敷天皇（敏達天皇）

即位前紀—元年……八一
二年—三年……八三
四　年……八四
五　年……八五
六年—十年……八六
十一年—十二年……八七
十三年……九〇
十四年……九二

卷第廿一【用明紀崇峻紀】

橘豊日天皇（用明天皇）

即位前紀……九五
元　年……九六
二　年……九八

泊瀬部天皇（崇峻天皇）

即位前紀……九九
元　年……一〇三
二年—三年……一〇四
四年—五年……一〇五

卷第廿二【推古紀】

豊御食炊屋姫天皇（推古天皇）

即位前紀—元年……一〇七
二年—三年……一〇八
四年—七年……一〇九
八年—九年……一一〇
十年……一一一
十一年……一一二
十二年……一一三
十三年—十四年……一一七
十五年……一一八
十六年……一一九

十七年―十八年……一二二
十九年……一二三
廿　年……一二四
廿一年……一二六
廿二年―廿五年……一二七
廿六年―廿八年……一二八
廿九年……一二九
卅一年……一三〇
卅二年……一三二
卅三年―卅六年……一三四

巻第廿三【舒明紀】

息長足日廣額天皇（舒明天皇）

即位前紀……一三七
元年―二年……一四三
三年―四年……一四四
五年―八年……一四五

日本書紀下巻

九年―十年……一四六
十一年―十二年……一四七
十三年……一四八

巻第廿四【皇極紀】

天豐財重日足姬天皇（皇極天皇）

即位前紀―元年……一四九
二　年……一五五
三　年……一六〇
四　年……一六四

巻第廿五【孝德紀】

天萬豐日天皇（孝德天皇）

即位前紀……一六九
大化元年……一七一
同　二年……一七七
同　三年……一九一
同　四年……一九三

大化五年……一九四
白雉元年……一九七
同　二年……二〇〇
同　三年……二〇一
同　四年……二〇二
同　五年……二〇四

卷第廿六【齊明紀】

天豐財重日足姬天皇（齊明天皇）

卽位前紀—元年……二〇七
二　年……二〇八
三　年……二〇九
四　年……二一〇
五　年……二一四
六　年……二一七
七　年……二二二

卷第廿七【天智紀】

天命開別天皇（天智天皇）

卽位前紀……二二五
元　年……二二七
二　年……二二八
三　年……二三〇
四　年……二三二
五　年……二三三
六　年……二三四
七　年……二三五
八　年……二三八
九　年……二四〇
十　年……二四一

卷第廿八【天武紀上】

天渟中原瀛眞人天皇（天武天皇）

卽位前紀……二四七
元　年……二四八

卷第廿九【天武紀下】

天渟中原瀛眞人天皇（天武天皇）

二年……二六五
三年……二六八
四年……二六九
五年……二七三
六年……二七七
七年……二七九
八年……二八〇
九年……二八四
十年……二八六
十一年……二九〇
十二年……二九四
十三年……二九七
十四年……三〇三
朱鳥元年……三〇七

卷第卅【持統紀】

高天原廣野姫天皇（持統天皇）

卽位前紀……三一五
元年……三一七
二年……三一九
三年……三二一
四年……三二五
五年……三二九
六年……三三三
七年……三三七
八年……三三九
九年……三四一
十年……三四三
十一年……三四四

附錄

一、日本書紀所見宮都並山陵一覽……一

二、書紀所見冠位並位階表……五
三、天武天皇紀賜姓一覽……六
四、書紀關係三韓官位一覽……一四
五、書紀所見韓國地名略攷……二二
扉題字……三上參次筆

日本書紀卷第十六

小泊瀬稚鷦鷯天皇　武烈天皇

小泊瀬稚鷦鷯天皇、億計天皇太子也、母曰春日大娘皇后、億計天皇七年、立爲皇太子、長好刑理、法令分明、日晏坐朝、幽枉必達、斷獄得情、又頻造諸惡、不脩一善、凡諸酷刑無不親覽、國內居人咸皆震怖、十一年八月、億計天皇崩、大臣平群眞鳥臣、專擅國政、欲王日本、陽爲太子營宮、了即自居、觸事驕慢、都無臣節、於是太子思欲聘物部麁鹿火大連女影媛、遣媒人向影媛宅期會、影媛曾姧眞鳥大臣男鮪、鮪、此云茲寐、恐違太子所期、報曰、妾望奉待海柘榴市巷、由是太子欲往期處、遣近侍舍人就平群大臣宅、奉太子命求索官馬、大臣戲言陽進曰、官馬爲誰飼養、隨命而已、久之不進、太子懷恨、忍不發顏、果之所期、立歌場衆、歌場、此云宇多我岐、執影媛袖、躑躅從容、俄而鮪臣來、排

【即位前紀】○長好刑理、以下斷獄得情に至る二十字は後漢書明帝紀に據れり刑理は罪人を刑罰し裁斷するを云ふ法令分明は法令に明かなるを云ふ日晏坐朝は晏は晚也時刻の遲くなるまで朝に坐して訴訟を聞食すなり幽枉必達云々は僥倖を得て罪を免るゝものなく判決實狀に叶へるを云ふ○類造諸惡、按に武烈天皇を暴虐の君としたるは百濟の沓加等が末多王を誣て暴虐無道なりと奏上せし百濟記の文の轉じて本文となりしにて上代よりの誤傳なることを書紀類聚解(內山眞龍)に既に之を辨じ齋藤彥麻呂は武烈天皇暴虐正論を落合直澄氏は武烈天皇聖德考を著して之を細說せり水鏡正統記に天皇の崩御の御

太子與影媛間立、由是太子放影媛袖、移廻向、前立直當鮪、歌曰、之哀世能、儺鳴理鳴彌黎麼、阿蘇寐倶屢、思寐我簸多泥儞、都摩陀氏理彌喩、一本、以之哀世易彌儺斗、鮪答歌曰、飫彌能古能、耶陛耶哿羅哿枳、瑜屢世登耶彌古、太子歌曰、飫裒陀智嗚、多黎播枳多智氏、農哿儒登慕、須衞婆陀志氏、謀阿波夢登茹於謀賦、鮪答歌曰、飫裒枳彌能、耶陛能矩彌哿枳、哿哿梅騰謀、儺鳴阿摩之耳彌、哿々農倶彌柯枳、太子歌曰、於彌能姑能、耶賦能之魔柯枳、始陀騰余彌、那爲我與蠱據魔、耶黎夢之魔柯枳、一本、以耶賦能之魔柯枳易耶陛哿羅哿枳、太子贈影媛歌曰、擧騰我彌儞、枳謂屢箇皚比謎、拕摩儺羅磨、婀我裒屢拕摩能、婀波寐之羅陀魔、鮪臣爲影媛答歌曰、於裒枳彌能、彌於寐能之都波陀、夢須寐陀黎、陀黎耶始比登謀、阿避於謀婆儺倶儞、太子甫知鮪曾得影媛、悉覺父子無敬之狀、赫然大怒、此夜速向大伴金村連宅、會兵計策、大伴連將數千兵、傲之於路、戮鮪臣於乃樂山、一本云、鮪宿影媛舍、即夜被戮、是

年を十八歲とし十歲にて御卽位ありしなれば紀に見ゆるが如き御所行のあるべきにあらず
○居人、人民を云毛詩鄭風に巷無居人と見ゆ
○營宮、宮の字は中イ本及集解に據て補ふ
○於是太子、寮本並に楓本太子の上に武烈天皇爲の五字、其下に時の字あり應本には太子の二字なし又記には影媛を菟田首の女大魚とし顯宗天皇の御事とす其方正しからむ
○聘、履中紀卽位前紀に納采をアトフルと訓り
○麁鹿火大連、記に荒甲之大連とあり物部氏纂記に饒速日命十二世孫木蓮子大連の孫にして麻佐良大連の子とあり
○媒人、ナカタチは中立の意、今仲人(ナカウド)と云媒は字書に謀也謀合二姓以成昏媾也とあり
○期會、字書に要約曰期とあり相會すべき日を約せしむるを云
○海柘榴市、大和志に城上郡金屋村地名尙存とあり(今磯城郡三輪村大字金屋)

時影媛逐行戮處、見是戮已、驚惶失所、悲涙盈目、遂作歌曰、伊須能箇彌賦屢鳴須擬底、擧慕摩矩羅、拕箇播志須擬、暮能娑幡儞、於裒野該須擬、播屢比能、箇須我鳴須擬、逗摩御暮屢、鳴佐裒鳴須擬、拕摩該儞播、伊比佐倍母理、拕摩暮比儞、彌逗佐倍母理、儺岐曾裒遲喩倶謀、柯㝵比謎阿婆例、於是影媛收埋既畢、臨欲還家、悲鯁而言、苦哉、今日失我愛夫、即便灑涕愴矣、纒心歌曰、婀鳴儞與志、乃樂能婆娑摩儞、斯斯貳暮能、彌逗矩陛御暮黎、彌儺曾曾矩、思寐能和倶吾鳴、阿娑理逗那偉能古、冬十一月戊寅朔戊子、大伴金村連謂太子曰、眞鳥賊可擊、請討之、太子曰、天下將亂、非希世之雄不能濟也、能安之者其在連乎、即與定謀、於是大伴大連率兵、自將圍大臣宅、縱火燔之、所撝雲靡、眞鳥大臣恨事不濟、知身難免、計窮望絕、廣指鹽詛、遂被殺戮、及其子弟、詛時、唯忘角鹿海鹽、不以爲詛、由是角鹿之鹽爲天皇所食、餘海之鹽爲天皇所忌、十二月、大伴金村連平定賊訖、反政太子、請上尊號曰、今億計天

○官馬、公の馬なり
○大臣、原本大を太に作る諸本に據て改む
○歌場、多くの男女相集まり歌の贈答をなして樂しみ遊ぶを云萬葉九に登筑波嶺爲嬥歌會日作歌見え其注に嬥歌者東俗語曰賀我比とあり常陸風土記に嬥歌會を俗云宇太我岐又云加我毘と記したり記傳に歌(ウタ)加賀比の賀比を切めて伎と云るにて加賀比は又カグレアヒの切りたるなりカグレは妻をよばふ事を云古言なるべくカガヒは互に歌をよみてカグレ交すよしの名なるべしと云ひ倭訓栞にはかけあふの義けあの反加也と言ひ言別にも歌を以て互に掛合をするなりと云りカヾヒとウタガキとは同じものなれど歌垣は人垣を作りて歌を謠ふより云ひカヾヒは歌を以て唱和し掛合をするよりいへるにて言の意は同じからず
○躑躅、タチアタリは影媛の前に當りて立給ふを云字書に行不進也また不能行貌とあり
○從容、字書に舒緩貌と

皇子、唯有陛下、億兆欣歸、曾無與二、又賴皇天翼戴、淨除凶黨、英略雄斷、以盛天威天祿、日本必有主、主日本者、非陛下而誰、伏願陛下仰答靈祇、弘宣景命、光宅日本、誕受銀鄕、於是太子命有司、設壇場於泊瀬列城、陟天皇位、遂定都焉、是日、以大伴金村連爲大連、

あり多くはオモムロニさ訓るが此にタチホコルさあるは立詣にて威容を示し給ふ意に取れり　○之裒世能云々、潮瀬の波の高く立る處を見れば其處に遊び來る鮪の鰭手に吾めづる妻は立てりさなり凡て海には潮の路ありて流るゝものなればそを潮瀬さ云ナヲリは波折にて波の高く立つ處を云抄龍魚部に鮪は鮪一名黄頰魚（之比）鰭は文選注云鰭（波太俗云比禮）魚背上鬣也さあり鮪に鮪臣を含め其側に妻の立るが見ゆるさなりタテルミユさ云が普通の格なれどかくタテリミユさいふも一の格なり麼は原本磨に作る寮本に據て改む都麻は原本に都の字一字衍れり楓本及釋紀に據て削る　○飫瀰能古能云々、臣之子は鮪自らを指せり臣の子の八重の韓垣を結ひめぐらせるを皇子は許せさ宣給ふにやさいひて鮪臣の影媛の前に立塞れるを君は許せさ宣給ふにやさ詰り問ひたるなりユルセは或は緩くせよにてもあるべし耶陛耶の下の耶は記傳に能さす　○飫裒陀攝鳴云々、大太刀を垂佩き立ちては皇子の佩き給ふを云今は之を拔ず暫時猶豫すれども若し我意に應ぜざればたさひ汝を殺しても影媛に遇はむさぞ思ふさなり　○飫裒枳瀰能云々、大王の爲に八重の組垣をかゝむかさも思へどさる必要もなければ組垣をばかゝず若し隔ての垣を除かむさ欲せば除き給へさなりナヲアマシヾミは詳ならねど汝を甘じみにて甘しさ思ふ故にの意か記傳言別を始め種々の解あれどいづれも解き得ず尚よく考ふべし　○於彌能姑能云々、オミノコは鮪臣を云臣の子の八節の柴垣は下動み地震がゆり來らば直に破るべき柴垣なりさなり、ヤフは八節にて柴垣の幾所も葛を以て結べるを云ひ下動みは柴垣の柱の朽ちて下の方のふら〳〵になれるを云　○擧騰我瀰爾云々、琴頭に來居る影媛玉ならば我が欲する玉の鮑眞珠なりさ影媛の容姿の美しき狀をめで、詠みませるなり　○於裒枳瀰能云々、大王の御帶の倭文繒結垂れまでは誰さ云む爲の序に置るなり誰やし人は誰れ人にてヤシは助辭、オモハナクニは思はぬになりナクはヌを延べて云り大王は妾をあはれさ思召せど既に鮪臣さ契りて今は誰人をも思はずさなり　○赫然、毛詩大雅の注に赫は怒意さありオモホテリは神代紀下に見ゆ中本に四字引合さあり赫然大怒の四字にてオモホテリさ訓べしさ云へり　○大伴金村連、錄左京神別神松造の條に道臣命八世孫金村大連公さあり室屋大連の子談の子なり（公卿補任）　○徼、字書に徼を要也遮也さ注すれば徼字の意に用ひしなるべし名義抄にいづれもサイキルさ訓り　○乃樂山、大和國添上郡　○伊須能箇瀰云々、此歌は鮪臣の誅せられしを悲しみて詠めるにて其喪をさむらはむさ布留を過ぎ高橋を過ぎ大宅を過ぎ春日を過ぎ夫の籠る佐保をも過ぎて玉笥には飯を盛り玉鋺には水を盛り之を鮪臣に手向けむさ遠路を泣きそぼち往くかもさ云るなり、石上、薦枕、物多に、春日のは何れも枕詞なり、布留は山邊郡、高橋も同郡なるべし大宅、春日、佐保は何れも添上郡なり影媛は鮪臣を弔はむさ其の本居の地なる山邊郡石上より添上郡乃樂山まで尋來りしなり、飯さ水さは死者に供へむが爲に持來りしにて上古は喪を弔ふ時に之を携往くこさ例なりしなるべし玉笥は笥は抄器皿部に禮器注云笥（介）盛食器也さあり玉鋺は神代紀下に見ゆ、ソボツは濡るゝを云ひカゲヒメアハレのアハレは歎息の辭　○悲鯁、字書に鯁哽通ずさあり哽は咽悲塞也さあり　○愴矣、原本愴を搶に作る北本楓本應本に據て改む　○纒心、ムスボレは思ひ亂れて晴れやらず氣の塞がるを云　○婀嗚儞與志云々、大伴連に對して奈良の谷間に葬れる鮪臣は罪人なれども之を求め出で、其墓を發掘するこさ勿れさいへるにてアヲニヨシは奈良の枕詞奈良の谷間に猪鹿自物水漬隔籠り水灑ぐ鮪の稚子を求食出づるこさ勿れさなり猪鹿自物云々は猪鹿の叢に隱るゝが如く深く葬りたる鮪臣をさ云なり、水漬隔籠さいひ水灑ぐさ云は鮪の緣語なりミナソヽクは水動くなりさも云アサリは搜し求むるをいひツは出なりキノコは大伴連を云猪は山野にありて食物をあさり此處彼處を荒すもの故に之に譬へて云り　○

所摛、摛は麾さ同じ指揮するを云　○雲靡、文選長楊賦の注に如雲靡々而進さあり　○廣指鹽詛、大王は鹽を聞食すべからずさ廣く海の名を擧て詛ひ奉りしなり楓本詛をノコフ（ノロヒトコフの略か或はコはロの誤か）中本はノロフテ又トコフさ訓り　○角鹿、越前國敦賀郡　○爲天皇所食、契沖本爲の上得の字あり　○欣歸、文選勸進表に惟有陛下億兆攸歸曾無與二さあり欣は攸の訛ならむか應本は陛下を階下（下同じ）に欣歸を依歸に作る　○曾無與二、文選の注に無二心也さあり　○翼戴、字書に輔翼尊戴之意さあり　○英略、原本英を莫に作る寮本應本に據て改む　○景命、景は字書に大也さあり天下に君たるの大命なり　○誕受銀鄕、誕は字書に大也さあり銀鄕は韓國を云顯宗紀元年（巻上二九八頁）に金銀蕃國さあり　○泊瀬列城、編年記に泊瀬列城宮大和國城上郡、通證に在城上郡長谷寺南出雲村（今磯城郡朝倉村大字出雲）さ云り

【元年】（注）娘子父、原本父を文に作る楓本中本に據て改む集解に此六字を私記攙入さす　【二年】刳孕婦之腹云々、類聚解の說の如く百濟記の文なるべし此筆勢いかにも他の文中より拔抄せるものさ思はる三年の文も亦同じ　【三年】指甲、指甲は爪なり抄形體部に爪甲四聲字苑云爪（豆米）手足指上甲也さあり　○署預、抄果蓏部に本草云薯蕷一名山芋（夜萬乃伊毛）さあり箋注に爾雅翼所引本草醫心方及廣雅唐書地理志等に署預に作るさあり原本署を暑に作る應本に據て改む　○城像、集解に像の字を傍訓攙入さす　○城上、廣瀬郡城戸鄕あり萬葉に木𤭖之宮木上宮さも見ゆ大和志に廣瀬郡

（己卯）元年春三月丁丑朔戊寅、立春日娘子爲皇后、未詳娘子父、是年也太歲己卯、

（庚辰）二年秋九月、刳孕婦之腹而觀其胎、

（辛巳）三年冬十月、解人指甲、使掘署預、十一月、詔大伴室屋大連、發信濃國男丁、作城像於水派邑、仍曰城上也、是月、百濟意多郎卒、葬於高田丘上、

（壬午）四年夏四月、拔人頭髮、使昇樹巓、斮倒樹本、落死昇者爲快、是歲、百濟末多王無道、暴虐百姓、國人遂除而立嶋王、是爲武寧王、

百濟新撰云、末多王無道、暴虐百姓、國人共除、武寧立、諱斯麻王、是混支王子之子、則末多王異母兄也、混支向倭時、至筑紫嶋、生斯麻王、自嶋還送、不至於京、產於嶋、故因名焉、今各羅海中有主嶋、王所產嶋、故百濟人號爲主嶋、今案嶋王是蓋鹵王之子也、末多王是混支王之子也、此曰異母兄未詳也、

城上岡在大塚村とあり（今北葛城郡馬見村大字大塚）○高田丘、大和志に葛下郡百濟意多郎墓在岡崎村とあり（今北葛城郡陵西村大字岡崎）

【四年】斮、字書に斬也とあり　○末多王、雄略紀二十三年（卷上二八五頁）に出づ我國より立てゝ王と爲せし人なり　○國人遂除、三國史記に百濟東城王二十三年冬十一月熊川及泗沘に獵せしに其臣苩加人をして王を刺しむとあり二十三年は辛巳にて武烈天皇三年に當れば一年の差あり　○武寧王、雄略紀五年（卷上二六七頁）に出づ三國史記に武寧王諱斯摩牟大王之第二子也とあり紀の文と異れり　○（注）異母兄、集解雄略紀五年に據て母を父に改む○故因名焉、原本因を固に焉を島に作る固は應本中本に據て、島は北本應本中本に據て改む　○各羅、雄略紀五年（卷上二六七頁）に見ゆ　○今案云々、以下廿九字集解に私記攙入とす

【五年】塘楲、字書に塘は池塘也圓曰池方曰塘とあり楲は抄天地部水土類に淮南子云決塘發楲（和名以飛）許愼曰楲所以通陂竇也とあり　○三叉矛、此より外には見えず是も亦我國のものに非ず三韓のものなるべし

【六年】小泊瀬舍人、清寧紀二年白髮部舍人同膳夫同靭負を置かれし例に據て小泊瀬舍人を置せらる故に天皇の舊例に依てと云り卽ち子代の民なりと孝德紀大化二年を參照すべし

○代號、此天皇小泊瀬稚鷦鷯天皇と申奉り泊瀬列城に天下を知食せば小泊瀬舍人と云るは御代の號を傳へむ爲に置かせられたりと申して聞ゆれど或說には代號は號代の轉倒せるにてナシロと訓むべしとも云り　【七年】骨族、東國通鑑に眞骨王族也とあり　○斯我君、蕃神考に聖明王の子とす　○倭君之祖、倭君は錄左京諸蕃に和朝臣出自百濟國孝墓王十八世孫武寧王也とあり武寧王の子は聖明王其子は斯我君にて其子倭君なれば武寧王の曾孫なり祖の字北本寮本中本先に作り寮本也の下未詳の二字あり

【八年】遊牝、抄毛群部に禮記云遊牝于野（此間云由比日本紀私記云豆流比）廐牧令義解に遊牝猶交接也とあり

（癸未）五年夏六月、使人伏入塘楲、流出於外、持三叉矛、刺殺爲快、

（甲申）六年秋九月乙巳朔、詔曰、傳國之機、立子爲貴、朕無繼嗣、何以傳名、且依天皇舊例、置小泊瀬舍人、使爲代號、萬歲難忘者也、冬十月、百濟國遣麻那君進調、天皇以爲百濟歷年不修貢職、留而不放、

（乙酉）七年春二月、使人昇樹、以弓射墜而咲、夏四月、百濟王遣斯我君進調、別表曰、前進調使麻那者、非百濟國主之骨族也、故謹遣斯我奉事於朝、遂有子、曰法師君、是倭君之祖也、

（丙戌）八年春三月、使女倮形坐平板上、牽馬就前遊牝、觀女不淨、沾濕者殺、不濕者沒爲官婢、以此爲樂、及是時穿池起苑、以盛禽獸、而好田獵、走狗試馬、出入不時、不避大風甚雨、衣溫而忘百姓之寒、食美而忘天下之飢、大進侏儒倡優、爲爛熳之樂、設奇偉之戲、縱靡靡之聲、日夜常與宮人沈湎于酒、以錦繡爲席、衣以綾紈者衆、冬十二月壬辰朔己亥、天皇崩于列城宮、

日本書紀卷第十六

○苑、字書に畜養禽獸處也とあり　○甚雨、ヒサメは垂仁紀五年に大雨を訓り倭名抄箋注にヒタアメの急呼ヒタメの轉なりと云　○衣溫、原本溫を濕に作る應本及紀略に據て改む　○侏儒倡優、字書に侏儒は短小人也倡優は女樂也とあり　○爛熳之樂、文選長笛賦の注に聲亂而多也とあり　○奇偉之戲、列女傳孽嬖傳に桀既棄禮義淫于婦人求美女積之於後宮收倡優侏儒狎徒能爲奇偉戲者聚之于旁造爛漫之樂とありアヤシクウタテと訓るアヤシクは奇怪なる意ウタテは穩ならず善からぬ所業を云　○靡靡之聲、タハシは字鏡に妖樂戲也婬也躭也太波志とあり淫聲を云なり尙書畢命の疏に韓宣子稱紂使師延作靡々之樂靡々者相隨從之意とあり　○沈湎、字書に沈湎溺於酒也とありヱヒサマタレは字鏡に酩酊を惠比佐萬太古留と訓ると同じかるべし　○綾紈、紈は字書に素也また素之輕者也白熟也とあり　○天皇崩、大日本史に本書享年缺水鏡神皇正統記並曰年十八歷代皇紀皇年代略記皇代記帝王編年記並五十七今按主前說則帝未即位挑影媛時方十歲豈有此事哉主後說則帝在位八年應以四十九歲即位仁賢帝壽五十或五十一是二三歲而生帝也豈復有此理二說共不可信とあり按るに仁賢天皇は顯宗天皇と共に早くより難を避けて身を隱し給ひしかば清寧天皇三年以前に御子のましますべき理なくこれに依て推算すれば水鏡の說據ありといふべし

【即位前紀】男大迹天皇、記に袁本杼命とあり北本中本大を太に作る
○彦主人王之子、紹運録に應神天皇の御子稚渟毛二派皇子次に太郎子次に彦大人王とあり、是は釋紀に引ける上宮記の傳へにて（異なるは彦大人王を汙斯王に作れり）正統記には隼總別皇子の子大迹王其子志斐王其子彦大人王とつゞけたるは傳の異れるなり王の下之の字原本なし前本北本に據て補ふ彦主人は比古宇志と訓むべしアルジ又ヌシヒトなど訓むは非なり
○七世之孫、釋紀所引の上宮記に伊波都久和希兒伊波智和希兒伊波己里和氣兒麻和加介兒阿加波智君兒乎波智君兒布利比禰命とあり之の字は前本北本に據て補ふ

日本書紀卷第十七

男大迹天皇　繼體天皇

男大迹天皇、（更名彦太尊）譽田天皇五世孫、彦主人王之子也、母曰振媛、振媛、活目天皇七世之孫也、天皇父聞振媛顏容姝妙甚有媺色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、（中此云那）納以爲妃、遂產天皇、天皇幼年父王薨、振媛迺歎曰、妾今遠離桑梓、安能得膝養、余歸寧高向、（高向者、越前國邑名、）奉養天皇、天皇壯大、愛士禮賢、意豁如也、天皇年五十七歲、八年冬十二月己亥、小泊瀨天皇崩、元無男女可絕繼嗣、壬子、大伴金村大連議曰、方今絕無繼嗣、天下何所繫心、自古迄今、禍由斯起、今足仲彦天皇五世孫、倭彦王、在丹波國桑田郡、請試設兵仗、夾衞乘輿、就而奉迎、立爲人主、大臣大連等一皆隨焉、奉迎如計、於是倭彦王遙望迎兵、懼然失色、仍遁山壑、不知所詣、

(丁亥)元年春正月辛酉朔甲子、大伴金村大連更籌議曰、男大迹王性慈仁孝順、可承天緒。冀慇懃勸進、紹隆帝業。物部麁鹿火大連、許勢男人大臣等僉曰、妙簡枝孫、賢者唯男大迹王也。丙寅、遣臣連等、持節以備法駕、奉迎三國。夾衞兵仗、肅整容儀、警蹕前駈、奄然而至。於是男大迹天皇晏然自若、踞坐胡床。齊列陪臣、既如帝坐。持節使等由是敬憚、傾心委命、冀盡忠誠。然天皇意裏尚疑、久而不就。適知河內馬飼首荒籠、密奉遣使、具述大臣大連等所以奉迎本意。留二日三夜、遂發。乃喟然而歎曰、懿哉、馬飼首。汝若無遣使來告、殆取蚩於天下。世云、勿論貴賤、但重其心、蓋荒籠之謂乎。及至踐祚、厚加荒籠寵待。甲申、天皇行至樟葉宮。二月辛卯朔甲午、大伴金村大連乃跪上天子鏡劍

○姝妙、端正と同訓なり原本姝を妹に作る北本舊紀に據て改む妹は字書に美好也とあり ○孅、新撰字鏡に孅媄同支良支良志字鏡集に孅美同美良とあり ○三尾、抄に近江國高島郡三尾鄕(今大溝村)とある是なり ○別業、別館なり仁德紀十一年に田宅を訓り業(ナリ)處の義、田に作りたる物の生(ナル)より出たる語にて田邊に家を造り居るを云 ○三國坂中井、坂中井は越前國坂井郡なり三國は今も地名存せり按に上代は三國が大名なりしを坂名井を郡名とせしより三國は狹まりて郡に屬せり大日本史に古事記曰意富々杼王三國君等之祖也舊事紀曰二派王者三國君祖也姓氏錄曰三國眞人出自繼體皇子椀子王蓋天皇初在三國故其裔孫冐三國姓乎と云 ○桑梓、顯宗紀二年(卷上三〇一頁)に出づ ○安能得膝養、前本得の字なし是なるに似たり ○歸寧、左傳莊廿七年の杜注に寧問父母安否とあり文字は毛詩周南に出づ ○高向、越前國坂井郡高向鄕(今高椋村及丸岡町)是なり ○(注)高向、以下八字集解に私記攙入とす ○壬子、前本になし ○倭彥王、世系詳ならず ○兵仗、書言故事の注に兵仗兵甲隊仗也とあり ○隨焉、原本焉を爲に作る前本北本中本に據て改む ○懼然、舊紀懼を愕に作る

【元年】大伴金村大連、原本伴の下大連の二字あり前本北本に據て削る ○天緒、後漢書順帝紀及文選薦譙元彥表に見ゆ ○勸進、集解に按文選有劉琨勸進表臣勸其主受禪卽尊謂之勸進また通證に今按俗謂化度爲勸進謂招禱爲勸請蓋借此義也とあり ○許勢男人、公卿補任に巨勢小柄宿禰四世孫父河上臣也とあり ○枝孫、字の如しミアナスヱは景行紀四年(卷上一四四頁)に苗裔を訓り ○法駕、御輿なり後漢書輿服志に天子出有大駕有法駕有小駕と見ゆ ○警蹕、先を追ふを云集解に古今注輿服曰警蹕所以戒行徒也云々蹕路也謂行者皆警於途路也とあり

璽符再拜。男大迹天皇謝曰、子民治國重事也。寡人不才、不足以稱。願請廻慮擇賢者。寡人不敢當。大伴大連伏地固請。男大迹天皇西向讓者三、南向讓者再。大伴大連等皆曰、臣伏計之、大王子民治國最宜稱。臣等爲宗廟社稷計、不敢忽。幸藉衆願、乞垂聽納。男大迹天皇曰、大臣大連將相諸臣、咸推寡人。寡人敢不承。乃受璽符。是日卽天皇位。以大伴金村大連爲大連、許勢男人大臣爲大臣、物部麁鹿火大連爲大連、並如故。是以大臣大連等各依職位焉。庚子、大伴大連奏請曰、臣聞、前王之宰世也、非維城之固、無以鎭其乾坤。非掖庭之親、無以繼其趺萼。是故白髮天皇無嗣、遣臣祖父大伴大連室屋、每州安置三種白髮部、(言三種者、一白髮部舍人、二白髮部供膳、三白髮部靫負也。)以留後世之名。嗟夫可不愴歟。請立手白香皇女、納爲皇后、遣神祇伯等、敬祭神祇、求天皇息、允答民望。天皇曰、可矣。三月庚申朔、詔曰、神祇不可乏主、宇宙不可無君。天生黎庶、樹以元首、使司助養、令全性命。大連憂朕無息、披誠款以國家、世々盡忠、豈唯

○奄然、字書に奄は忽也遽也とあり ○晏然、漢書董仲舒傳の注に自安意也とあり ○胡床、抄調度部に風俗通云靈帝(後漢)好胡服京師皆作胡床(阿久良)とあり ○齊列、原本齊を齋に作る北本楓本中本に據て改む ○陪臣、左傳僖十二年の注に諸侯之臣曰陪臣また玉篇に家臣也とあり ○河內馬飼首、河內飼部のこと履中紀五年に見ゆ ○取蚩、字書に蚩は笑也とあり北本蚩を嗤に作る ○樟葉宮、河內志交野郡の條に古蹟在楠葉村と云今北河內郡に屬す ○鏡劍璽符、鏡劍の璽符なり此は鏡劍を璽符と申したるにて鏡劍と曲玉とにはあらず然らば何故に曲玉を省きたるかと云ふに神代紀には八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍を三種の神器として天祖より皇孫に傳へ給ひ次々に相傳へ給ひしを崇神天皇天祖親授の鏡劍を摸造せられ眞の鏡劍をば伊勢神宮及熱田神宮の御靈代と齋ひ奉

朕日歟、宜備禮儀奉迎手白香皇女。甲子、立皇后手白香皇女、脩教于內。遂生一男。是爲天國排開廣庭尊。（開、此云波羅企。）是嫡子而幼年。於二兄治後、有其天下。（二兄者、廣國排武金日尊與武小廣國押盾尊也。見下文。）戊辰、詔曰、朕聞、士有當年而不耕者、則天下或受其飢矣。女有當年而不績者、天下或受其寒矣。故帝王躬耕而勸農業、后妃親蠶而勉桑序。況厥百寮暨于萬族、廢棄農績而至殷富者乎。有司普告天下、令識朕懷。癸酉、納八妃。（納八妃、雖有先後、而此曰癸酉納者、據卽天位占擇良日、初拜後宮爲文。他皆效此。）元妃尾張連草香女曰目子媛、（更名色部。）生二子。皆有天下。其一曰勾大兄皇子。是爲廣國排武金日尊。其二曰檜隈高田皇子。是爲武小廣國排盾尊。次妃三尾角折君妹曰稚子媛、生大郎皇子與出雲皇子。次坂田大跨王女曰廣媛、生三女。長曰神前皇女、仲曰茨田皇女、少曰馬來田皇女。次息長眞手王女曰麻績娘子、生荳角皇女。（荳角、此云娑佐礙。）是侍伊勢大神祠。次茨田連小望女（或曰妹）曰關媛、生三女。長曰茨田大娘皇女、仲曰白坂活日姬皇女、少曰小野稚郎皇女。（更名長石姬。）次

り御摸造の鏡劍をば齋部氏をして御卽位の時に奉らしめ八坂瓊曲玉は天皇御親ら次の天皇に傳へ給ふことゝなりしかば古語拾遺に以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永爲天璽矛玉自從なごと記せるが如く曲玉を鏡劍に附屬せし物の如く思ひ誤りしなり然るからに又紀中に神器の御事を記せる體區々にて淸寧顯宗允恭紀等に天皇之璽とあるは論なきを本紀には上の如く記し推古紀舒明紀には天皇之璽印孝德紀には璽綬などゝ記せり、是等は支那の天子の印章の名を借りたるまでにて後の制の符節鈴印などいふ類の物にあらず ○西向讓者云々、漢書文帝紀に出でたる文字にて數度謙讓し給ひしを潤飾せし記者の文なり ○大王子民云々、原本子民以下於二兄治後に至る三百十七字及細注二十八字錯亂して其三曰耳皇子の下にあり前本北本楓本中本及類史に據て訂す ○不敢忽、原本忽を忽に

三尾君堅楲女曰倭媛、生二男二女。其一曰大娘子皇女、其二曰椀子皇子。是三國公之先也。其三曰耳皇子、其四曰赤姬皇女。次和珥臣河內女曰荑媛、生一男二女。其一曰稚綾姬皇女、其二曰圓娘皇女、其三曰厚皇子。次根王女曰廣媛、生二男。長曰菟皇子。是酒人公之先也。少曰中皇子。是坂田公之先也。是年也、太歲丁亥。

作る前本楓本北本に據て改む忽は名義抄字鏡並にイルカセと訓り ○幸藉衆願、原本藉を籍に作る諸本に據て改む ○敢不承、原本承を乖に作る前本北本に據て改む ○璽符、上に云る鏡劍璽符なり支那に所謂璽符は史記孝文紀に上天子璽符とと見え唐六典節寶郎の注に玉璽は傳國璽也秦始皇取藍田玉刻而爲之其書李斯所制而文曰受命于天云々秦滅傳漢云々とあり符は其璽を符節とするなり、我三種の神器と同一視すべからず ○是日、原本日を曰に作る前本北本楓本中本に據て改む ○卽天皇位、大日本史に時年五十八注に據水鏡愚管抄皇代記及本書崩年八十二之文とあり ○以大伴金村大連爲大連云々、金村は武烈紀に帝卽位の日爲大連とあれど男人麁鹿火の大連となりしことは前に見えず公卿補任にも二人初任年月未詳とあり男人大臣の下なる爲大臣の三字麁鹿火大連の下なる爲大連の三字並に北本に無ければなくては意通ぜず ○維城、訓の如く儲君をいふ、文字は毛詩大雅生民之什に宗子維城とあるを取る箋に宗子は王の適子を謂ふ懷德維寧宗子維城無俾城壞とあり民を治るに德を懷ひ酷虐の政なければ汝の國を安くす是を以て宗子の城となすとあり一轉して宗子の稱とす ○披庭、訓の如く皇后を申す仁德紀卽位前紀（上二一三頁）に見ゆ ○趺蕚、趺は跗又柎に同じ字書に柎は花蕚之房也蕚は花未開時所藉以保護者在花瓣外部數片輪生亦稱蕚片とあり倭名抄にハナフサと訓り毛詩小雅に棠棣之華鄂不韡韡、箋に承華者曰鄂不當作拊拊鄂足也鄂足得華之光明則韡々然盛興者、喩弟之以敬事兄兄以榮覆弟恩義之顯亦韡々然古聲不柎同とあり柎蕚相俟て花の光明を得るが如く兄弟相親みて榮顯に至るの意なり、それより轉じて昭穆の意に用ひこゝは正嫡の意に用ひたりミツギは御繼嗣なり ○大伴大連室屋、大伴の二字は前本北本楓本に據て補ふ ○（注）白髮部舍人、以下淸寧紀に詳なり北本供膳を供部に作り前本北本靫負の下に也の字あり ○手白香皇女、仁賢天皇の皇女 ○神祇伯、記の神武の段に神八井耳命爲忌人而仕奉とある忌人は伯に當れりされば後の神祇伯に當る職掌は古くよりありしなるべし但し當時は未だ神祇伯とは言はず後の名を古へに廻らしていへるなり ○求天皇息、此は天皇の嫡子を求め給ふなり上に維城の固に非ざれば云々とあるに應ず此時既に勾大兄檜隈高田の二皇子坐せばたゞ皇子を求むるの意にはあらず ○神祇不可乏主、左傳桓五年に民神之主也今民各自心而鬼神乏主とあるに據れり主は民を云下文天生黎民の句に應ず ○元首、尙書益稷の注に元首君也とあり ○令全性命、集解令を各に作る ○朕日、朕が世の意 ○脩敎于內、訓の意は內つ政事せしむなり內政は後べの政事卽ち後宮の事を云 ○（注）波羅企、原本企を爾に作る前本北本中本に據て改む ○幼年、原本幼を多に作る前本北本中本に據て改む ○（注）二兄者云々、以下二十一字集解に私記攙入とす ○士有當年云々、以下三十一字は淮南子齊俗訓の文に據れり ○不績者、前本北本績を續に作る下同じ字書に續は與績同とあり又績者の下則の字あるべしと云 ○萬族、人民を云 ○蠶、前本北本は蚕に作り原本蚕に作る今中本に從ふ蚕は蠶の俗字蚕は略字なるべし ○桑序、水本に序を事に作る ○帝王躬耕、禮記月令に見ゆ ○目子媛、原本目を日に作る北本中本に據て改む記に尾張連之祖凡連之妹目子郎女とあり ○三尾角折君、三尾君は垂仁紀に見ゆ角折は名なり ○稚子媛、記に若比賣とあり ○出雲皇子、原本子を女に作る北本に據て改む記にも出雲郎子とあり ○坂田大跨王女、錄左京皇別に坂田宿禰息長眞人同祖應神皇子稚渟毛二派王之後也とあり其同族なるべし ○廣媛、記に黑比賣と見ゆ ○少、前本

（戊子）二年冬十月辛亥朔癸丑、葬小泊瀨稚鷦鷯天皇于傍丘磐杯丘陵。十
二月、南海中耽羅人初通百濟國。
（己丑）三年春二月、遣使于百濟。（百濟本記云、久羅麻致支彌從日本來、未詳。）括出在任那日本縣邑百濟
百姓浮逃絶貫三四世者、並遷百濟附貫也。
（辛卯）五年冬十月、遷都山背筒城。
（壬辰）六年夏四月辛酉朔丙寅、遣穗積臣押山使於百濟。仍賜筑紫國馬四十
匹。冬十二月、百濟遣使貢調。別表請任那國上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁
四縣。哆唎國守穗積臣押山奏曰、此四縣近連百濟、遠隔日本。旦暮易
通、鷄犬難別。今賜百濟、合爲同國、固存之策、無以過此。然縱賜合國、後
世猶危。況爲異場、幾年能守。大伴大連金村具得是言、同謨而奏。迺以

小に作る　○馬來田皇女、記には漏る　○息長眞手王、大跨王と同族ならむ　○荳角皇女、記に佐々宜郎女と見ゆ倭名抄籑注に荳角は角荳の倒置なるべしと　○(注)娑佐礙、前本娑佐を沙左に作る　○白坂活日姬皇女、記には白坂活日子郎女とあり記傳に子字は衍字なるべしとて刪る　○小野稚郎皇女、原本小を北に作る前本北本中本に據て改む記にも小野郎女とあり　○(注)更名長石姬、記には長目比賣とあり　○堅楲、記に加多夫とあり　○大娘子皇女、記には大娘郎女とあり　○椀子皇子、記に丸高王とあり記傳に麻呂古と訓むべしと云　○三國公、錄左京皇別に三國眞人繼體天皇皇子椀子王之後也天武紀十三年眞人を賜ふ　○和珥臣、記に阿倍之波延比賣とあり和珥臣は孝昭紀六十八年に見ゆ　○稚綾姬皇女、原本稚を雅に作る前本北本に據て改む記に若屋郎女とあり　○圓娘皇女、記に都夫良郎女とあり　○厚皇子、記に阿豆王とあり　○根王、詳かならず　○菟皇子、記になし　○酒人公、錄左京皇別に酒人眞人繼體天皇皇子菟王之後也天武紀十三年に眞人を賜ふとあり　○中皇子、記に見えず舊紀に田中皇子に作れり　○坂田公、錄右京皇別に坂田眞人繼體皇子仲王之後也天武紀十三年眞人を賜ふ　○太歲、原本太を大に作る北本に據て改む

【二年】傍丘磐杯丘陵、諸陵式に大和國葛下郡とあり陵墓要覽に北葛城郡志津美村大字今泉と見ゆ　○耽羅、今の朝鮮全羅南道濟州島なり天智天武持統紀等に貢物を奉れること見ゆ隋書百濟傳には其南海行三月有聃牟羅國附庸于百濟とあり
【三年】(注)久羅麻致支彌、原本彌を禰に作る前本中本に據て改む按に車持君の訛れるならむ車持君は履中紀五年に見ゆ　○任那、原本那の字なし前本北本に據て補ふ　○日本縣邑、邦人の彼國に渡り住みて設けたる村邑なるべし　○絶貫、貫はヘと訓む戸籍を云
【五年】筒城、原本筒を箇に作る前本北本に據て改む筒城は山城國綴喜郡

物部大連麁鹿火宛宣勅使。物部大連方欲發向難波館、宣勅於百
濟客、其妻固要曰、夫住吉大神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任
那等、授訖胎中譽田天皇。故大后氣長足姬尊與大臣武内宿禰、每國
初置官家、爲海表之蕃屛、其來尙矣。抑有由焉。縱削賜他、違本區域、
綿世之刺、詎離於口。大連報曰、教示合理、恐背天勅。其妻切諫云、
稱疾莫宣。大連依諫。由是改使而宣勅。付賜物幷制旨、依表賜任
那四縣。大兄皇子前有緣事、不關賜國、晩知宣勅、驚悔欲改。令曰、自
胎中之帝置官家之國、輕隨蕃乞、輙尒賜乎。乃遣日鷹吉士、改宣百
濟客。使者答啓、父天皇圖計便宜、勅賜既畢。子皇子豈違帝勅、妄改而令。
必是虛也。縱是實者、持杖大頭打、孰與持杖小頭打痛乎。遂罷。於是
或有流言曰、大伴大連與哆唎國守穗積臣押山受百濟之賂矣。

なり古蹟は山城志に自多々羅林至水取村地名尙存すとあり今も同郡普賢寺村に都谷の名遺ると
【六年】穗積臣、開化紀（卷上一〇九頁）に見ゆ　○上哆唎下哆唎、雄略紀二十一年に久麻那利者任那國下哆唎縣之別邑也とあり　○娑陀牟婁、上下哆唎と接近せる地にて蟾津江の東岸なるべし　○日本、紀略に大倭に作り北本には此二字なし集解之を日本府と解し官府の二字に改む　○鷄犬難別、其境の近きを云　○後世猶危、日本府に隔る地なれば後世に至らば尙危しとなり永く任那國として保存することの困難なるを云　○異場、原本場を塲に作る集解に據て改む場は字書に大界曰疆小界曰場とあり　○難波館、韓使を宿泊せしむる館舍なり抄居處部に唐韻云館（字亦作舘）館太知日本紀私記云无路都美）客舍也とあり浪華名所圖會に難波館趾は攝津國東生郡眞田山の北に在り字を唐居殿といふとあり　○固要、要は字書に求也却也勠也とありイサムは諫むの義　○住吉大神、大の字は前本北本中本に據て補ふ　○授訖、訖は原本記に作る京極本託に作るとあれど未だ其書を見ざれば姑く中本に據る　○胎中、中本に中を内とす　○氣長足姬、前本氣を息に作る　○初置官家、神功紀攝政前紀征韓の條に因以定内官家とさ見ゆ　○區域、原本域を城に作る前本に據て改む　○綿世、永世に同じ　○切諫、原本切を功に作る前本楓本中本に據て改む　○不關賜國、原本關を聞に作る前本及釋紀に據て改む　○驚悔欲改、原本欲改令にて句とするは誤れり　○輙尒、原本尒を示に作る前本北本に據て改む　○日鷹、原本日を曰に作る諸本に據て改む　○子皇子、天皇の御子に坐す皇子の意

○持杖大頭云々、天皇の勅は重く皇子の令は輕しとの意に譬へしなり

【七年】五經博士、五經は白虎通に謂易尙書詩禮春秋也とあり五經博士は漢書武帝紀に建元五年に置くとあり

○伴跛國、釋紀に任那國之別種とあり慶尙南道蟾津江上流東岸の地にて百濟と境を接す

○己汶、錄左京皇別吉田連條に御間城入彥天皇御代任那國奏曰臣國東北有三己汶地（上己汶中己汶下己汶）地方三百里土地人民亦富饒與新羅國相爭彼此不能攝治兵戈相尋民不聊生臣請將軍令治此地卽爲貴國之部也とあり文獻備考に忠淸道己汶縣本今勿今德山縣百濟時號今勿とあり今忠淸南道に屬す

○百濟太子淳陀、太子の訓は韓語なり淳陀は續紀延曆九年正月十四日條に百濟武寧王之子純陀太子とあり和氏の祖なり

○勾大兄皇子、上に大兄皇子とあり

○春日皇女、仁賢天皇皇女

○斐然之藻、斐然は論語

（癸巳）七年夏六月、百濟遣姐彌文貴將軍・洲利卽爾將軍、副穗積臣押山、（百濟本記云、委意斯移麻岐彌。）貢五經博士段楊爾。別奏云、伴跛國略奪臣國己汶之地。伏請、天恩判還本屬。秋八月癸未朔戊申、百濟太子淳陀薨。九月、勾大兄皇子親聘春日皇女。於是月夜淸談、不覺天曉。斐然之藻、忽形於言。乃口唱曰、

野絁磨倶儞、都磨々祁哿泥底、播屢比能、哿須我能倶儞々、倶婆絁謎鳴、阿利等枳々底、與慮志謎鳴、阿利等枳々底、莽紀佐倶、避能伊陀圖鳴、飫斯毗羅枳、倭例以梨魔志、阿都圖唎、都磨怒唎絁底、魔倶囉圖唎、都磨怒唎絁底、伊慕我堤鳴、倭例儞魔柯絁毎、倭我堤鳴麼、伊慕儞魔柯絁毎、磨左棄逗囉、多々企阿藏播梨、矢自矩矢盧、于魔伊禰矢度儞、儞播都等唎、柯稽播儺倶儺梨、奴都等唎、枳蟻矢播等余武、婆絁稽矩謨、伊麻娜以幡孺底、阿開儞啓梨、倭蟻慕。

妃和唱曰、

莒母唎矩能、簸都細能哿婆庚、那峨例倶屢、駄開能、以矩美娜開、余嚢開、謨等陛鳴麼、莒等儞都倶

公冶長の注に文貌藻は尙書孔安國注に水草之有文者以喩文焉とあり

○口唱曰、此歌古事記に見ゆる八千矛神の御歌と甚よく相似たり

○野絁磨倶儞、八洲國にて大八洲國なり

○播屢比能、春日（カスガ）の枕詞なり

○哿須我能倶儞々、一郷をも國と云こと吉野國泊瀬國など云る類なり

○莽紀佐倶、檜の枕詞なり冠辭考に拆て板にも何にもすれば拆きたる檜といへり

○阿都圖唎都磨怒唎絁底、懇切を盡す意にて俗にいふ手取り足取りしてもてなすといふが如くにして春日皇女の待ち取り歡び給ふ狀を表はせり次句も同じ

○覽倶囉圖唎、枕と記せど御頭の意と見るべし

○伊慕我堤鳴、春日の皇女の手をばなり

○倭例儞覽柯絁毎、纏くは手枕せしむるを云

○倭我堤鳴麼、原本麼を磨に作る前本中本に據て改む下同じ

○磨左棄逗囉、眞辟葛（マサキヅラ）は國史草木攷に今正木葛といふものは本草拾遺に載せたる扶芳藤なり俗につるまさきと云とあり此句は次句多々企を隔てゝ阿藏播梨にかゝれり

○多々企阿藏播梨、記上卷の歌にソタヽキタヽキマナカリとある曾陀多岐も素手抱きにてこゝに同じ字鏡集に糾にアザハルの訓ありアザナフと同義なり

○矢自矩矢盧、次句の枕詞、冠辭考に繁釧美（シヽクシロウマ）しとほむる語を熟寐し時と云ひかけたりと云り

○于魔伊禰矢度儞、熟睡寢し時になり度儞を時にの意に用ひたるは萬葉十同十九に例あり

○儞播都等唎、庭つ鳥なり、萬葉に庭津鳥可鷄（カケ）乃垂尾などあり

○枳蟻矢播等余武、ドヨムは鳴りひゞく

唎、須衛陛鳴麼、府曳儞都倶唎、府企儺須、美母盧我紆陪儞、能朋梨陀致、倭我彌細麼、都奴娑播符、以簸例能伊開能、美儺矢駄府、紆鳴謨、紆陪儞堤々那皚矩、野須美矢々、倭我於朋枳美能、於魔細屢、娑佐羅能美於寐能、武須彌陀例、駄例夜矢比等母、紆陪儞泥堤那皚矩。

冬十一月辛亥朔乙卯、於朝庭引列百濟姐彌文貴將軍、斯羅汶得至、安羅辛已奚、及賁巴委佐、伴跛既殿奚、及竹汶至等、奉宣恩勅、以己汶・帶沙賜百濟國。是月、伴跛國遣戢支、獻珍寶、乞己汶之地、而終不賜。十二月辛巳朔戊子、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢々業々、間者天下安靜、海內淸平、屢致豐年、頻使饒國。懿哉摩呂古、示朕心於八方。盛哉勾大兄、光吾風於萬國。日本邕々、名擅天下、秋津赫々、譽重王畿。所寶惟賢、爲善最樂。聖化憑茲遠扇、玄功藉此長懸。寔汝之力。宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕。

さゞろきひゞく意雄の鳴聲の健きを云 ○婆絁稽矩謨、愛しけくもなりケリは明らかを明らけくさいふに同じく古言の常なり、もは歎辭なり ○阿開儞啓梨、夜は明けぬさなり ○妃和唱曰、此御歌は前の御歌の和唱にはあらず言別に云ろが如く天皇崩御の際の御愴みの歌なりかく見ざれば解き難し故に言別に據りて注す ○莒母𠰏矩能、泊瀨の枕詞、雄略紀に出づ ○簸都細能哿婆庾、ユはヨリなり古言にヨリをユさもヨさもいふ前本婆を波に作る ○以矩美娜開余嚢開、イクミダケは記雄略の段の大御歌の句に毋登爾波伊久美陀氣淤斐須惠幣波多斯美陀氣淤斐さ見え生茂りたる竹を云ヨタケは節竹又は吉竹にてもあるべし次の句に本方は琴に作り末方は笛に作りさあればいくみ竹さよ竹さ名は異なれど一つものにて異なる竹にはあらざるべし ○謨等陛嗚麼、原本謨を漢に作る前本北本中本に據て改む又等一字衍れり前本に據て削る ○府企儺須、吹鳴すなり御靈を慰奉り又招魂の爲に琴を撫き笛を吹くを云 ○美母慮我紆陪儞、御室が上になり殯宮のある地の山の上を云 ○都奴娑播符、磐余の枕詞 ○以簸例能伊開、磐余の池は大和國十市郡にあり原本簸を斯に作る北本中本に據て改む ○美儺矢駄府紆嗚謨云々、水中の魚も上に出て歎くさなり ○野須美矢々、大君の枕詞 ○於魔細屢、帶ぶるを延べていへり帶び給へるなり ○婆佐羅能美於寐能、細紋の御帶のなり允恭紀八年の御歌に注せり ○駄例夜矢比等母、誰人もにてヤシは助辭なり ○紆陪儞泥提那豈矩、御前に出で歎くさなり ○斯羅、新羅なるべし集解に新羅傳曰魏時曰新盧宋時曰新羅或曰斯羅さ云 ○汝得至、狩谷氏云至讀爲遲 ○奉宣、宣の字は北本中本に據て補ふ ○帶沙、蟾津江卽ち帶沙江の上流東岸にあり伴跛の領地原本賜の下國の字あり前本寮本に據て削る ○天下、原本下を丁に作る前本楓本に據て改む ○摩呂古、安閑天皇の別號 ○邕々、邕は雝さ相通ず毛詩周頌の注に雝和也さあり ○所寶惟賢、尙書旅獒に出づ ○爲善最樂、後漢書蒼平王蒼の傳に出づ ○藉此、原本藉を籍に作る前本寮本中本に據る ○春宮、禮記の注に青宮一名春宮太子宮也さありミコノミヤさ訓る例は古今集に見ゆ ○翼吾、原本吾を五に作る前本寮本中本に據て改む

【八年】○惋痛、神代紀上四神出生章第四一書(卷上一一頁)に悶熱をアツカヒさ訓り ○匝布、大和國添上郡佐保に同じ ○子呑、下文二十一年紀に已呑に作る洛東江の上

八年(甲午)春正月、太子妃春日皇女、晨朝晏出、有異於常、太子意疑、入殿而見、妃臥床涕泣、惋痛不能自勝、太子恠問曰、今旦涕泣、有何恨乎、妃曰、非餘事也、唯妾所悲者、飛天之鳥、爲愛養兒、樹巓作巢、其愛深矣、伏地之蟲、爲護衞子、土中作窟、其護厚焉、乃至於人、豈得無慮、無嗣之恨、方鍾太子、妾名隨絕、於是太子感痛、而奏天皇、詔曰、朕子麻呂古、汝妃之詞、深稱於理、安得空爾無答慰乎、宜賜匝布屯倉、表妃名於萬代、三月、伴跛築城於子呑帶沙、而連滿奚、置烽候邸閣、以備日本、復

流にて慶尙南道靈山縣附近の地 ○烽候、抄燈火部に烽燧說文云烽燧(度布比)邊有警則擧之さあり通證に蓋飛火也飛謂速達如飛脚之飛也索隱(史記)纂要曰烽見敵則擧燧有難則焚烽主晝燧主夜さあり候は斥候なり ○邸閣、烽候の居所 ○爾列比麻須比、前本爾の上に子呑の二字あり北本寮本中本須を次に作る ○麻且奚推封、未詳

【九年】文貴、原本父に作る前本北本中本に據て改む ○(注)物部至々連、下文に見えたる物部伊勢連父根さあるさ同人ならむか北本連の下也の字あり ○沙都嶋、詳ならねど帶沙江卽ち今の蟾津江口に近き嶋ならむ ○停住六日、集解日を月に作る ○逼脫、原本脫を晚に作る前本北本楓本に據て改む ○帷幕、通證に謂陣營也さあり ○汶慕羅、詳ならず

【十年】前部、後漢書東夷傳高勾麗條に有五族云々四曰南部一名前部北史百濟傳に都下有方爲五部曰上部中部下部前部後部さあり ○木劦

築城於爾列比麻須比、而絙麻且奚推封、聚士卒兵器、以逼新羅、駈略子女、剝掠村邑、凶勢所加、罕有遺類、夫暴虐奢侈、惱害侵凌、誅殺尤多、不可詳載、

九年(乙未)春二月甲戌朔丁丑(四)、百濟使者文貴將軍等請罷、仍勅副物部連(闕名)遣罷歸之、(百濟本記云、物部至至連、)是月、到于沙都嶋、傳聞伴跛人懷恨銜毒、恃强縱虐、故物部連率舟師五百、直詣帶沙江、文貴將軍自新羅去、夏四月、物部連於帶沙江停住六日、伴跛興師往伐、逼脫衣裳、劫掠所齎、盡燒帷幕、物部連等怖畏逃遁、僅存身命、泊汶慕羅、(汶慕羅、嶋名也、)

十年(丙申)夏五月、百濟遣前部木劦不麻甲背、迎勞物部連等於己汶、而引導入國、群臣各出衣裳斧鐵帛布、助加國物、積置朝廷、慰問慇懃、賞祿優節、秋九月、百濟遣州利即次將軍、副物部連來、謝賜己汶之地、別貢五經博士漢高安茂、請代博士段楊爾、依請代之、戊寅(十四)、百濟遣灼莫古將軍日本斯那奴阿比多、副高麗使安定等、來朝結好、

不麻甲背、劦は劦の誤り木劦は姓、不麻甲背は名なり　○迎勞、途上に迎て勞ふを云　○助加、キクヘテは古言ならむも用例他に見えず天智紀に側助をキイタスクとありキは率(キ)にて物を添ふる義なり　○優節、通證に過於常時也とあり　○秋九月、前本寮本秋の字なし　○州利即次、七年紀には次を爾に作れり　○漢高安茂、後年に見えず　○段楊爾、原本楊を陽に作る前本北本寮本に據て改む　○代之、之の字は前本中本に據て補ふ　○斯那奴阿比多、前本那を奈に作る御國の人の百濟にて生みし子の名にや

【十二年】弟國、山城國乙訓郡なり山城志に弟國故都遺亘上羽井內上植野等有地名御垣本今同郡乙訓村に弟國宮址と稱ふる所あり
【十七年】武寧薨、三國史記に武寧王二十三年五月至自漢城夏五月王薨諡曰武寧とあり
【十八年】太子明、三國史記に聖王諱明禮武寧王之子也武寧薨繼位國人稱爲聖王とあり欽明十五年新羅の爲に殺さる
【廿年】磐余玉穗、編年記に大和國十市郡とあり今の磯城郡安倍村池內の邊なるべし
【廿一年】近江毛野臣、記に波多八代宿禰者淡海臣祖とあれど此氏姓氏錄に見えず
○率衆、原本率を卒に作る諸本に據て改む
○復爲、原本爲復とあり前本寮本に據て改む
○南加羅喙己呑、南加羅喙國は神功紀(卷上一九

(戊戌)十二年春三月丙辰朔甲子、遷都弟國、

(癸卯)十七年夏五月、百濟國王武寧薨、

(甲辰)十八年春正月、百濟太子明即位、

(丙午)廿年秋九月丁酉朔己酉、遷都磐余玉穗、一本云、七年也、

(丁未)廿一年夏六月壬辰朔甲午、近江毛野臣率衆六萬、欲往任那、爲復興建新羅所破南加羅喙己呑而合任那、於是筑紫國造磐井陰謨叛逆、猶豫經年、恐事難成、恒伺間隙、新羅知是、密行貨賂于磐井所、而勸防遏毛野臣軍、於是磐井掩據火豐二國、勿使修職、外邀海路、誘致高麗百濟新羅任那等國年貢職船、內遮遣任那毛野臣軍、亂語揚言曰、今爲使者、昔爲吾伴、摩肩觸肘、共器同食、安得率爾爲使、俾余自伏儞前、遂戰而不受、驕而自矜、是以毛野臣乃見防遏、中途淹滯、天皇詔大伴

〇頁)に出で己呑は上に見ゆ　○而合任那、而は前本北本に據て補ふ　○筑紫國造磐井、國造本紀に筑志國造高穴穗朝御世阿倍臣同祖大彥命五世孫田道命定賜國造とあり此國造を君ともいへり記に筑紫君石井とあり其子葛子を此紀に筑紫君と記せり　○猶豫、ウラモヒは裏思ひなり心に思ひつゝ行はざるを云　○火豐二國、火は肥前肥後豐は豐前豐後なり　○誘致、訓ワカヅリは欽明紀に同じ靈異記に機の字を訓り　○亂語、下文に輕を續紀に無禮いづれもナメと訓みたれどナメリと訓るは見えず　○通於兵事、通の訓天武紀に有意を訓り　○弗率、原本率を卒に作る諸本に據て改む　○不庭、左傳隱十年の注に下之事上皆成禮於庭中とあり不庭は禮を庭中になさゞるを云　○拯民塗炭、字書に塗は泥也炭は火也とあり民の泥に陷り火に墜つるを拯ふを云尙書仲虺之誥に出づ　○彼此一時、時は異なれど功勞は同じきを云　○良將之軍也、以下戰如風發に至る二十一字は三略の文なり原文軍の上に統の字あり　○大將民之司命、此句孫子作戰に出づ　○親操斧鉞、漢文の潤飾なり神功紀攝政前紀(卷上一七六頁)に親執斧鉞と見ゆるも亦同じ

【廿二年】賊帥、原本並に諸本賊師に作る中本の傍訓に據て改む　○筑紫御井郡、筑後國に屬す　○旗鼓相望云々、梁書侯景傳に出づ

大連金村、物部大連麁鹿火、許勢大臣男人等曰、筑紫磐井反、掩有西戎之地、今誰可將者、大伴大連等僉曰、正直仁勇通於兵事、今無出於麁鹿火右、天皇曰、可、秋八月辛卯朔、詔曰、咨、大連、惟茲磐井弗率、汝徂征、物部麁鹿火大連再拜言、嗟、夫磐井、西戎之奸猾、負川阻而不庭、憑山峻而稱亂、敗德反道、侮嫚自賢、在昔道臣爰及室屋、助帝而罰、拯民塗炭、彼此一時、唯天所贊、臣恒所重、能不恭伐、詔曰、良將之軍也、施恩推惠、恕己治人、攻如河決、戰如風發、重詔曰、大將民之司命、社稷存亡、於是乎在、勗哉、恭行天罰、天皇親操斧鉞、授大連曰、長門以東朕制之、筑紫以西汝制之、專行賞罰、勿煩頻奏、

(戊申)廿二年冬十一月甲寅朔甲子、大將軍物部大連麁鹿火親與賊帥磐井交戰於筑紫御井郡、旗鼓相望、埃塵相接、決機兩陣之間、不避萬死之

○決機云々、吳志孫策傳に出づ
○斬磐井、筑後風土記上妻縣の條に縣南二里有筑紫君磐井之墓墳云々古老傳云當雄大迹天皇之世筑紫君磐井豪强暴虐不偃皇風生平之時預造此墓俄而官軍動發欲襲之間知勢之不勝獨自遁于豐前國上膳縣終于南山峻嶺之曲於是官軍追尋失蹤士怒未泄擊折石人之手打墮石馬之頭古老傳云上妻縣多有篤疾蓋由茲歟とありて南山に終れりとす　○壃場、原本壃を壃に作る前本北本中本に據て改む　○糟屋、筑前國糟屋郡　○贖死罪、葛子は父謀にくみせず由て恭順を表はさむがため屯倉を獻じて罪を贖むことを請ひしなり武藏國造の屯倉を獻りしと似たるを思ふに死罪を贖ふ古例と見えたり

【廿三年】嶋曲、訓の如く御埼なり
○加羅多沙津、加羅は卽ち任那國多沙は九年紀に出たる帶沙と同地なり此地は神功皇后五十年に百濟に賜ひしを今又改め賜はらむと奏請せるなり
○物部伊勢連、出自詳かならず天孫本紀に物部建彥連公伊勢荒田連祖とあり又伊勢國飯野郡物部神社あり
○吉士老、錄攝津皇別に吉士難波忌寸同祖大彥命後也とあり
○大嶋、此大島は多沙河口よりさまで遠からぬ南海島と河口との中間にある大島ならむ雄略紀七年にも見えたれど同じきか否やはよく考ふべし
○錄史、文書を掌る吏なり原本に佐官と傍書せるは後より及ぼしたる訓なり職員令に神祇曰史省曰錄とあるは後の制なり

地、遂斬磐井、果定壃場、十二月、筑紫君葛子恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

（己酉）廿三年春三月、百濟王謂下哆唎國守穗積押山臣曰、夫朝貢使者恒避嶋曲、（謂海中嶋曲碕岸也、俗云美佐祁、）每苦風波、因茲濕所賷、全壞無色、請以加羅多沙津、爲臣朝貢津路、是以押山臣爲請聞奏、是月、遣物部伊勢連父根、吉士老等、以津賜百濟王、於是加羅王謂勅使云、此津從置官家以來、爲臣朝貢津渉、安得輙改賜隣國、違元所封限地、勅使父根等因斯難以面賜、却還大嶋、別遣錄史（佐官）果賜扶餘、由是加羅結儻新羅、生怨日本、加羅王娶新羅王女、遂有兒息、新羅初送女時、幷遣百人爲女從、受而散置諸縣、令著新羅衣冠、阿利斯等嗔其變服、遣使徵還、新羅大羞、飜欲還女曰、前承汝聘、吾便許婚、今既若斯、請還王女、

○扶餘、東國通鑑に漢鴻嘉三年百濟溫祚王元年改國號曰百濟系與高勾麗同出扶餘故以扶餘爲氏とあり卽ち百濟を云ふ其地名は忠清南道扶餘郡に存し錦江の上流なり
○娶新羅王女、北本娶の下に於の字あり
○令著新羅衣冠、加羅國人と混ぜざらしめむが爲なり
○阿利斯等、垂仁紀二年に阿羅斯等と見ゆ王といふ韓語ならむ
○嗔其變服、女從の新羅服をやめて加羅服に變ぜしを嗔りしなり
○遣使徵還、原本徵を微に作る中本に據て改む
○加羅己富利知伽、未詳
○（注）未詳、此二字集解に私記攙入とす
○刀伽古跛布那牟羅、刀伽、古跛、布那は三城の名、牟羅は梁書新羅傳に其俗呼城曰健牟羅とあり城の韓名なり、原本牟

加羅己富利知伽（未詳）報云、配合夫婦、安得更離、亦有息兒、棄之何往、遂於所經、拔刀伽、古跛、布那牟羅三城、亦拔北境五城、是月、遣近江毛野臣、使于安羅、勅勸新羅更建南加羅、㖨己呑、百濟遣將軍君尹貴、麻那甲背、麻鹵等、往赴安羅、式聽詔勅、新羅恐破蕃國官家、不遣大人、而遣夫智奈麻禮、奚奈麻禮等、往赴安羅、式聽詔勅、於是安羅新起高堂、引昇勅使、國主隨後昇階、國內大人預昇堂者一二、百濟使將軍君等在於堂下、凡數月、再三謨謀乎堂上、將軍君等恨在庭焉、夏四月壬午朔戊子、任那王己能末多干岐來朝、（言己能末多者、蓋阿利斯等也、）啓大伴大連金村曰、夫海表諸蕃、自胎中天皇置內官家、不棄本土、因封其地、良有以也、今新羅違元所賜封限、數越境以來侵、請奏天皇、救助臣國、大伴大連依奏聞、是月、遣使送己能末多干岐、幷詔在任那近江毛野臣、推問所奏、和解相疑、於是毛野臣次于熊川、（一本云、次于任那久斯牟羅、）召集新羅百濟二國之王、新羅王佐利遲遣久遲布禮、（一本云、久禮爾師知于奈師磨里、）百濟遣恩率彌騰利、赴

集毛野臣所、而二王不自來參、毛野臣大怒、責問二國使云、以小事大、天之道也、（一本云、大木端者以大木續之、小木端者以小木續之、）何故二國之王不躬來集受天皇勅、輕遣使乎、今縱汝王自來聞勅、吾不肯勅、必追逐退、久遲布禮、恩率彌騰利、心懷怖畏、各歸召王、由是新羅改遣其上臣伊叱夫禮智干岐（新羅以大臣爲上臣、一本云、伊叱夫禮知奈末、）率衆三千來、請聽勅、毛野臣遙見、兵仗圍繞、衆數千人自熊川入任那己叱巳利城、伊叱夫禮智干岐次于多多羅原、不敢歸、待三月、頻請聞勅、終不肯宣、伊叱夫禮智所將士卒等、於聚落乞食、相遇毛野臣傔人河內馬飼首御狩、御狩入隱他門、待乞者過、捲手遙擊、乞者見云、謹待三月、佇聞勅旨、尚不肯宣、惱聽勅使、乃知欺誑誅戮上臣矣、乃以所見具述上臣、上臣抄掠四村（金官、背伐、安多、委陀、是爲四村、一本云、多多羅、須那羅、和多、費智爲四村也、）盡將人物入其本國、或曰、多多羅等四村之所掠者、毛野臣之過也、秋九月、許勢男人大臣薨、

な字に作る前本北本寮本等に據て改む　○安羅、任那の日本府ある地　○更建、原本建を遣に作る前本寮本楓本に據て改む　○尹貴麻那甲背麻鹵、四人の名なり欽明紀四年に佐平木劦麻那下佐平木尹貴と見え尹貴麻那は二人甲背は十年紀に前部木劦不麻甲背欽明紀二年に中佐平麻鹵城方甲背昧奴と見ゆ是また二人なり　○大人、官位高き人をいふ下文にも見ゆ　○夫智奈麻禮奚奈麻禮、奈麻禮は新羅十七等の官名の内にて第十一に當れり夫智、奚は氏なるべし　○國主、安羅卽ち任那王なり前本寮本主を王に作る　○預昇堂、原本預を賴に作る北本中本に據て改む　○凡數月、集解月を日に改む　○已能末多干岐、原本干を于とす下文に據て改む　○本土、原本土を王に作る北本に據て改む　○因封其土、因の字は前本北本中本に據て補ふ　○和解相疑、二國の相疑ふを和解せしむるなり原本にワキラヘトクと在はワはネの誤にてネキラヒは和（ナゴ）め勞（ネギラ）ふ義なりアマナハシムは相和せしむるを云　○熊川、慶尙南道熊川　○（注）久斯牟羅、慶尙南道昌原地方ならむ　○佐利遲、新羅二十三世法興王に當る　○恩率、百濟の官位十六品中の第三位なり原本率を卒に作る北本中本に據て改む下同じ　○（注）

（庚戌）廿四年春二月丁未朔、詔曰、自磐余彥之帝、水間城之王、皆賴博物之臣、明哲之佐、故道臣陳謨、而神日本以盛、大彥申略、而膽瓊殖用隆、及乎繼體之君、欲立中興之功者、曷嘗不賴賢哲之謨謀乎、爰降小泊瀨天皇之王天下、幸承前聖、隆平日久、俗漸蔽而不寤、政浸衰而不改、但須其人各以類進、有大略者、不問其所短、有高才者、不非其所失、故獲奉宗廟不危社稷、由是觀之、豈非明佐、朕承帝業、於今廿四年、天下清泰、內外無虞、土壤膏腴、穀稼有實、竊恐元元由斯生俗、藉此成驕、故令人擧廉節、宣揚大道、流通鴻化、能官之事、自古爲難、爰曁朕身、豈不愼歟、秋九月、任那使人奏云、毛野臣遂於久斯牟羅、起造舍宅、淹留二歲、（一本云、三歲者、連去來歲數也、）懶聽政焉、爰以日本人與任那人、頻以兒息、諍訟難

大木端云々、大國は大國として仕ふべきに新羅百濟小國の分として大國の勅を受る爲に國王自ら來らざるは相應ぜざるを云　○迫逐退、集解に退を爲に改作る　○上臣、前本に私記に云上臣讀萬加利陁魯とあり韓語ならむ　○干岐、原本干を于に作るは訛れり前後の例に據て改む干岐の下の注は集解に私記攙入として削る　○率衆、原本率を卒に作る前本北本中本に據て改む　○己叱巳利城、未詳　○多々羅原、神功紀五年に蹈鞴津とあると同地なり　○相遇、原本遇を過に作る北本に據て改む　○（注）金官、以下いづれも洛東江河口附近の地ならむ金官は駕洛にて今の金海府　○背伐、原本伐を戌に作る北本及釋紀に據て改む寮本代に作る　○委陀、推古紀四年に見ゆ　○須那羅、推古紀に素奈羅とあり　○和多、原本知多に作る北本釋紀に據て改む　○費智、敏達紀四年に發鬼、推古紀八年に弗智鬼とあり　○許勢男人大臣、原本許を臣に作る北本楓本中本に據て改む

【廿四年】詔曰、以下の詔文は後漢書崔寔傳に據れり　○道臣、大伴氏の祖　○大彥、大彥命にて阿倍氏等七族の祖　○繼體之君、アマツヒツギウクルキミと訓るが如く天位を受繼給ふ君の意にて男大迹天皇を直に指し奉れるにはあらず此文字は史記外戚世家に自古受命帝王及繼體守文之君とあるに據れり其注に謂非創業之主而是嫡子繼先帝之正體而立者也とあり漢風の御諡號はこれを採れり　○隆平、原本平を乎に作る北本に據て改む　○漸蔽、集解蔽を敝に改作る　○豈非明佐、上に明哲之佐とあればこの下脫字あらむ　○土壤、原本壤を脉に作る北本に據て改む前本壤

決、元無能判。毛野臣樂置誓湯曰、實者不爛、虛者必爛。是以投湯爛死者衆。又殺吉備韓子那多利斯布利。（大日本人娶蕃女所生爲韓子也。）恒惱人民、終無和解。於是天皇聞其行狀、遣人徵入、而不肯來。顧以河內母樹馬飼首御狩、奉詣於京而奏曰、臣未成勅旨、還入京鄕、勞往虛歸、慚惡安措。伏願陛下待成國命、入朝謝罪。奉使之後、更自謨曰、其調吉士、亦是皇華之使。若先吾取歸、依實奏聞、吾之罪過、必應重矣。乃遣調吉士、率衆守伊斯枳牟羅城。於是阿利斯等知其細碎爲事不務所期、頻勸歸朝、尚不聽還。由是悉知行迹、心生飜背。乃遣久禮斯己母、使于新羅請兵、奴須久利使于百濟請兵。毛野臣聞百濟兵來、迎討背評、（背評地名、亦名能備己富里。）傷死者半。百濟則捉奴須久利、杻械枷鏁、而共新羅圍城。責罵阿利斯等曰、可出毛野臣。毛野臣嬰城自固、勢不可擒。於是二國圖度便地、淹留弦晦、築城而還。號曰久禮牟羅城。還時觸路、拔騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳五城。冬十月、調吉士至

を地に作る地壤意相通ず　○元元、漢書文帝紀に元々之民、注に善意也とあり　○藉此、原本藉を籍に作る北本に據て改む藉の上に蒼生などの二字を脫せるか上の句と對せず　○宣揚大道、大道は惟神の道なり葦原の瑞穗國を千秋の長五百秋に平けく安けく知食さむ道は他國に之を求むるを得ずたゞ皇祖天神の神勅のまゝに行はせ給ふの外なし此詔古語のまゝならむにはいかに莊嚴ならむを漢語に移したる爲によく其神髓を發揚する事能はざれど之を熟讀し奉れば自ら往昔の狀の目前に髣髴としていとも尊き詔なり　○能官云々、ツカサメシは官召なり其人を得て官に任ずることは難しとなり　○任那使人、人の字は北本に據て補ふ　○久斯牟羅、前年四月の下に出づ　○(注)一本云々、北本連を遂に作り前本北本年を歲に作る此注集解に私記攙入として削る

自任那奏言、毛野臣爲人、傲恨不閑治體、竟無和解、擾亂加羅、倜儻任意、而思不防患。故遣目頰子徵召。是歲、毛野臣被召到于對馬、逢疾而死。送葬尋河而入近江。其妻歌曰、比攞哿駄喩、輔曳輔枳能朋樓、阿符美能野、愷那能倭俱吾伊、輔曳府枳能朋樓。目頰子初到任那時、在彼鄕家等贈歌曰、柯羅屨儞嗚、以柯儞輔居等所、梅豆羅古枳駄樓、武哿左屨樓、以祇能和駄唎嗚、梅豆羅古枳駄樓。

○懶聽政、原本政を改に作る前本北本中本に據て改むヨソホシスは他所（ヨソ）にする義なるべし　○以兒息諍訟、日本人と任那人と生兒の種を爭ふなりアラガフは後撰集に爭ひてしこともゆゝしくあらがふなゆめと見ゆ　○誓湯、允恭紀四年（卷上二四六頁）に見ゆ　○(注)大日本人、通證に大は凡の誤とす　○遣人、原本遣を違に作る諸本に據て改む　○顧以、原本顧を領に作る北本中本に據て改む

○母樹、地名なり神武紀戊午年に見ゆ　○勞往虛歸、赴任の時に人に勞はれて往き何の功績もなく空しく歸るを云　○慚惡安措、水本に惡疑當作恧とありオモナキコトは無面目ことなり　○調吉士、調は氏吉士は尸なり名は缺く錄左京蕃別に百濟國努理使主之後也とあり此の同族ならむ　○皇華之使、京よりの使なり　○率衆、原本率を卒に作る前本北本に據て改む　○伊斯枳牟羅、所在詳ならず　○所期、和解のことを契り居るを云　○背評、詳ならず熊川とあるは採り難し評は郡なり續紀一文武天皇四年六月大神宮儀式帳等に郡に評の字を用ひたり　○(注)亦名云々、名は前本北本に據て補ふ富里の下に前本北本中本也の字あり　○捉、カスヰテは掠めてなり　○杻械枷鏁、抄調度部刑罰具に杻をテカシ械をアシカシ盤枷をクビカシ鏁をカナツガリと訓り鏁は前本北本に據て改む鏁は鎖に同じ　○責罵、原本罵を駟に作る諸本に據て改む　○嬰城、字書に閉城而守也とあり　○便地、原本便を使に作る諸本に據て改む地利よき所なり　○淹留弦晦、通證に言渉月也とあり　○久禮牟羅城、詳ならず或は慶尙南道宜寧郡嘉禮面ならむか　○觸路、沿道なり　○騰利枳牟羅、以下五城所在詳ならず　○傲恨、續後紀十九に世中乃伊須賀志態遠添飭利字鏡集名義抄等にヒスカシと訓み神武紀に愎恨をクスカシマと訓り不經の意　○倜儻、字鏡にメヅラシと注したれど釋紀にタカホニと訓り傲ぶる意なるべし又カタホとも訓り原本倜の上又の字あり前本寮本に據て削る　○思不防患、通證に思當作忍とあり殘忍の意　○徵召、原本此下目頰子未詳也の六字を分注とす前本寮本に據て削る　○尋河、淀川なり　○比攞哿駄喩、今河內國北河內郡枚方町ありそこなりユはヨリの意　○輔曳輔枳能朋樓、上代は喪中に舞樂をなして靈を慰めしこと神代紀、允恭紀四十二年に見ゆ　○阿符美能野、爰は唯近江にて野は調を整ふる爲に添へたる辭　○愷那能倭俱吾伊、毛野の若子なり伊は助辭にて多く人名の下につく那をヌに用ひしは古音を取れり　○在彼鄕家等贈歌曰、原本鄕を卿に贈を賜に作る鄕は釋紀に據り贈は前本北本中本に據て改む　○以柯儞輔居等所、フはイフのイを略せるなり古語及今にてもトイフをチフといふ方言あるに異ならず　○梅豆羅古枳駄樓、上句韓國は訓の如くカラクニにてそのカラは辛（カラ）に通ひて海山越えて行く辛き國なるに何と思ひてか珍らしき人の目頰子來るとの意　○武哿左屨樓、韓國は壹岐より遠く向へ離（サカ）り居ればなり、原本屨を屢に作る前本中本に據る

廿五年(辛亥)春二月、天皇病甚、丁未、天皇崩于磐余玉穗宮、時年八十二、冬十二月丙申朔庚子、葬于藍野陵、或本云、天皇廿八年歲次甲寅崩、而此云廿五年歲次辛亥崩者、取百濟本記爲文、其文云、太歲辛亥三月、師進至于安羅、營乞乇城、是月、高麗弑其王安、又聞、日本天皇及太子皇子俱崩薨、由此而言、辛亥之歲、當廿五年矣、後勘校者知之也、

日本書紀卷第十七

【廿五年】二月、安閑紀を考ふるにこゝに辛丑朔是月の五字あるべし　○崩于磐余玉穗宮、原本玉を土に作る北本中本に據て改む記には丁未年四月九日崩とあり丁未は二十一年なれば四年の差あり月日も異なれり　○年八十二、即位前紀に武烈天皇八年御年五十七歲と見ゆれば八十四歲なるべし記に四十三歲とあるは由なし　○葬于藍野陵、式に攝津國嶋上郡攝津志に在嶋下郡太田村土人曰池上陵とあり郡名に異同あるは兩郡の境にある故まがへるなり今三島郡三島村に屬す　【注】或本云、以下九十三字集解に私記攙入とす二十八年崩とすれば安閑天皇元年太歲甲寅にて論なきも本文の如く二十五年崩させば安閑天皇の太歲まで二年間空位となる此由は天書に二十六七の二年を空位とし源平盛衰記に帝位空しき例として繼體天皇二十五年辛亥崩ず安閑天皇元年甲寅即位二年空しとあり何故の空位なるか他の書に見えれど、欽明天皇御即位に當りて安閑天皇の皇后と御互に遜讓し給ひしを見れば、御兄には坐せど庶子なる安閑天皇が太子には立たせ給へれど嫡子に坐す欽明天皇に讓り給はむとし給へる中に二ケ年を過ごし給へるが傳に漏れたるか、然るに爲文と注せるは又二十五年崩御の說ありて撰者は之を採りしなり　○乞乇城、原本乇を亡に作る北本楓本に據て改む　○弑其王安、王安は高麗王名は安なり三國史記に五月高勾麗王興安薨號安藏王とある是なり　○俱崩薨、原本薨を葬に作る前本中本に據て改む此に太子皇子俱に薨ぜさせ給ふとあるは訛傳なり太子皇子遜讓の御事ありて空位二年に渉りしをひがめ傳へしなるべし

日本書紀卷第十八

廣國押武金日天皇　安閑天皇

武小廣國押盾天皇　宣化天皇

廣國押武金日天皇　安閑天皇

勾大兄廣國押武金日天皇、男大迹天皇(繼體)長子也、母曰目子媛、是天皇爲人、墻宇凝峻、不可得窺、桓々寬大、有人君之量、廿五年春二月辛丑朔丁未、男大迹天皇立大兄爲天皇、即日、男大迹天皇崩、是月、以大伴大連・物部麁鹿火大連爲大連並如故、

元年(甲寅)春正月、遷都于大倭國勾金橋、因爲宮號、三月癸未朔戊子、有司爲

【即位前紀】勾大兄、勾は大和國高市郡の地名大兄は元よりの御名以下は後より稱へ奉れるなり　○墻宇、通證に器宇也とあり文選名臣序贊に墻宇高嶷と見ゆ　○凝峻、晉書に風操凝峻易鼎卦注凝嚴整貌とあれば訓の如く御爲人嚴格の意なり中本峻を岐に作る　○桓々、尙書武成に桓々如虎注に威武貌とあり　○立大兄爲天皇、通證に之を以て我國御讓位の始なりといへるは後世を以て上代を測りし說にて非說なり我國には上古より御在位中に禪讓の事なし當時支那思想は傳はりたりしかど未だ厭世思想の佛教傳はらざりしかば御讓位のことなかるべし御讓位の始は皇極天皇なり是女帝なるに因れり然るに聖武天皇は男帝に坐しながら深く佛教を信ぜられしより祖宗の御掟に違ひ皇女に讓位し給ひて惡例を貽し給へれば鎌倉時代には三上皇も坐して皇室は益々式微せり　○大伴大連、金村なり北本應本中本連の下爲大連の三字あり

【元年】勾金橋、大和志に在高市郡曲川村　○納采、仁德紀即位前紀

に見ゆ、春日皇女の大兄皇子の妃とならせられしことは已に繼體紀七年に見えたれば更に納采など書くべきにあらず舊紀には立春日皇女爲皇后とあり
○木蓮子、天孫本紀に布都久留大連の子とあり饒速日命十二世の孫
○內膳卿、職員令に內膳司奉膳二人掌總知御膳進食先嘗事とあり奉膳卽ち卿なり
○膳臣、錄左京皇別高橋朝臣の條に天武天皇十二年膳臣を改て高橋朝臣を賜ふとあり卽ち高橋朝臣を云磐鹿六獦命の後なり
○求珠、珠は眞珠なるべし
○伊甚國造、記に天菩比命之子建比艮命伊自牟國造之祖也國造本紀に伊甚國造志賀高穴穗朝御世安房國造祖伊許保止命孫伊己侶止直定賜國造とあり伊甚は上總國夷灊郡今の夷隅郡是なり
○闌入之罪、漢書成帝紀の注に無符籍妄入宮曰闌とあり
○上總國、總國を分て上總下總としたるは大化改

天皇納采億計天皇女春日山田皇女、爲皇后、(更名山田赤見皇女)別立三妃、立許勢男人大臣女紗手媛、紗手媛弟香香有媛、物部木蓮子(木蓮子、此云伊拕寐)大連女宅媛、夏四月癸丑朔、內膳卿膳臣大麻呂奉勅、遣使求珠伊甚、伊甚國造等詣京遲晩、踰時不進、膳臣大麻呂大怒、收縛國造等、推問所由、國造稚子直等恐懼、逃匿後宮內寢、春日皇后不知直入、驚駭而顚、慚愧無已、稚子直等兼坐闌入罪、當科重、謹專爲皇后獻伊甚屯倉、請贖闌入之罪、因定伊甚屯倉、今分爲郡、屬上總國、五月、百濟遣下部脩德嫡德孫、上部都德己州己婁等、來貢常調、別上表、秋七月辛巳朔、詔曰、皇后雖體同天子、而內外之名殊隔、亦可以充屯倉之地、式樹椒庭、後代遺迹、廼差勅使、簡擇良田、勅使奉勅、宣於大河內直味張(更名黑梭)曰、今汝宜奉進膏腴雌雉田、味張忽然悋惜、欺誑勅使曰、此田者天旱難漑、水潦易浸、費功極多、收穫甚少、勅使依言服命無隱、冬十月庚戌朔甲子(十五)、天皇勅大伴大連金村曰、朕納四妻、至今無嗣、萬歲之後、朕名絕矣、大伴伯父、今作何

新の時なるべし
○下部脩德嫡德孫、下部は北史百濟傳に都下有方、爲五部曰上部中部下部前部後部とある其一なり脩德は同書に官品十六等の七品將德なるべし
○秋七月辛巳朔、通釋にこの干支よく當れど此こゝにありては下文に合はずと云り以下是に由て注す尙ほ下の今汝味張の條に記せり
○內外之名殊隔云々、皇后は後宮卽ち內に坐して御名を傳へ知らぬ人も多ければ屯倉を置きて御名を後世に遺し給はむとの意なり
○椒庭、內つ宮にて皇后の居を云文選外天行の注に椒庭取其芳香也とあり
○大河內直、神代紀瑞珠盟約章(卷上二三頁)に大凡に作る天津彥根命の後也
○(注)黑梭、原本黑を里に作る北本中本に據る
○汝宜、原本宜を宣に作る應本北本中本に據て改む
○雌雉田、集解に河內國地名とあれど膏腴の田な

計、毎念於玆、憂慮何已、大伴大連金村奏曰、亦臣所憂也、夫我國家之王天下者、不論有嗣無嗣、要須因物爲名、請爲皇后次妃、建立屯倉之地、使留後代、令顯前迹、詔曰、可矣、宜早安置、大伴大連金村奏稱、宜以小墾田屯倉與毎國田部、給貺紗手媛、以櫻井屯倉(一本云、加貺茅渟山屯倉)與毎國田部、給賜香香有媛、以難波屯倉與毎郡钁丁、給貺宅媛、以示於後、式觀乎昔、詔曰、依奏施行、閏十二月己卯朔壬午(四)、行幸於三嶋、大伴大連金村從焉、天皇使大伴大連問良田於縣主飯粒、縣主飯粒慶悅無限、謹敬盡誠、仍奉獻上御野、下御野、上桑原、下桑原、幷竹村之地、凡合肆拾町、大伴大連奉勅宣曰、率土之下莫匪王封、普天之上莫匪王域、故先天皇建顯號垂鴻名、廣大配乎乾坤、光華象乎日月、長駕遠撫、横逸乎都外、瑩鏡區域、充塞乎無垠、上冠九垓、旁濟八表、制禮以告成功、作樂以彰治定、福應允臻、祥慶符合於往歲矣、今汝味張、率土幽微百姓、忽爾奉惜王地、輕背使乎宣旨、味張自今以後、勿預郡司、於是縣主飯粒喜懼交懷、

るべし　○悋惜、悋は字書に恡に同じとあり　○水潦、潦は字書に雨水大貌又路上流水也一曰積水とありイサラミヅは少量の水の意ならむ　○易浸、コミは應神紀に澇を訓り浸は字書に漬也又潤也又沒也とあり　○收穫、原本穫を獲に作る獲穫通ず北本に據る　○服命無隱、服は復と通ず復命なり　○大伴伯父、伯父とは金村を親み宣給へるなりオキナドモは翁共の意なり　○因物爲名、御名代の民を云　○小墾田屯倉、大和國高市郡にあり　○田部、景行紀五十七年（卷上一六三頁）に見ゆ　○櫻井、河內國河內郡（今の中河內郡）櫻井鄕なり　○（注）茅渟山、茅は中本楓本に據て改む　○每郡钁丁、原本钁を鑼に作る集解に據て改む钁丁は公田を作るに役せらるゝ民を云　○閇、北本潤に作る　○三嶋、攝津の郡名後島上島下の二郡に分る　○縣主飯粒、三島の縣主なり錄に三嶋宿禰神魂命十六世孫建日穗命之後也とあり　○飯粒慶悅、通釋に此の上に慶悅せし謂れの文あるべしと云り　○御野、抄に攝津國西成郡三野鄕あり是なり　○桑原、攝津國には見えず抄に大和國葛上郡桑原鄕とある是か考ふべし　○竹村、下に三嶋竹村屯倉とあると同所なり　○凡合、原本凡を元に作る集解に據て改む

廼以其子鳥樹、送大連爲僮豎焉、於是大河內直味張恐畏求悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百姓、罪當萬死、伏願每郡以钁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絕、藉此祈生、永爲鑒戒、別以狹井田六町賂大伴大連、蓋三嶋竹村屯倉者、以河內縣部曲爲田部之元、於是乎起、是月、廬城部連枳莒喩女幡媛、偸取物部大連尾輿瓔珞、獻春日皇后、事至發覺、枳莒喩以女幡媛獻釆女丁、（是春日部釆女也）幷獻安藝國過戸廬城部屯倉、以贖女罪、物部大連尾輿恐事由己、不得自安、乃獻十市部、伊勢國來狹狹、登伊、（來狹狹、登伊、二邑名也、）贄土師部、筑紫國膽狹山部也、武藏國造笠原直使主、與同族小杵相爭國造、（使主、小杵、皆名也、）經年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君小熊、而謀殺使主、使主覺之走出、詣京言狀、朝庭臨斷、以使主爲國造、而誅小杵、國造使主悚憙交懷、不能默已、謹爲國家奉置横渟、橘花、多氷、倉樔、四處屯倉、是年也太歲甲寅、

○大伴大連奉勅宣曰、縣主飯粒並に味張を召し勅旨を宣示し給ひしならむ　○率土之下云々、率土は普天の誤なるべし毛詩小雅に溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣とあるに據れり字書に率は遵也又領也又皆也とあり溥は大也徧也又通作普とあり　○先天皇、先をば元に作るを北本中本に據て改む　○長駕遠撫、遠く行幸ありて民を愛撫し給ふを云以下旁濟八表までは都外の地に行幸あらせられ聖德の遠きに及ぶを稱へ奉れり　○無垠、垠は字書に地垺也岸也界限也とあり　○上冠九垓、垓は字書に重也とあり德は九重の天に達するを云　○旁濟八表、濟は應本中本に據て補ふ北本滲に作るは濟の訛なるべし字書に表は外也とあり洽く八方の外までずくふを云　○允臻、原本臻を致に作る集解に據て改む　○制禮云々、制禮作樂は此に直接用なきが如し、此地にて樂を奏せしめ給ひしことありそれを指して云るか　○郡司、こゝに郡司とあるは孝德紀以後及び令制の郡司とは異なり國造のことを云ひしならむ　○於是縣主飯粒云々、今宣旨を承り味張が郡司を廢せられしを懼れ己が良田を獻りしことの勅旨に叶へるを喜びて、尙將來を思て其子を大連に送りしなるべし　○送大連爲僮豎、原本送を獻に作る北本に據て改む又諸本豎を竪に作るは訛れり僮豎は字書に未冠也又婢妾之總稱豎は童僕之未冠者とありシトへは倭訓栞に後執部ならむと云　○汗流、原本汗を汙に作る楓本に據て改む　○藉此、原本藉を籍に作る北本に據て改む　○狹井、大和國城上郡にあれどこゝは河內國なるべきか　○三島竹村屯倉云々、古より三島の竹村屯倉の御田を佃るには河內各縣の百姓を以て田部として使役するは味張が領せし郡を云部曲は我領內の民を云故にウチツヤッコと訓り　○廬城部連、雄略紀三年に見ゆ　○物部大連尾輿、天孫本紀に荒山大連子也とあり　○瓔珞、頸玉なり祖庭事苑に在頭曰瓔在身曰珞とあり　○釆女丁、孝德紀二年に釆女者從丁一人從女二人とあり釆女の召使ふ女なり　○過戶、通釋にコシベとあれど過戶卽餘戶にてアマルベと訓べしと云　○十市部、大和國十市郡にあり大連の領せる部曲　○來狹狹、所在未詳登伊も同じく詳ならず雄略紀十七年に攝津國來狹々村とあれば或は伊勢は誤かとも云　○贄土師部、雄略紀十七年に見ゆ　○膽狹山部、抄に豐前國京都郡諫山鄕ありこゝの部民なり　○笠原直、抄に武藏國埼玉郡笠原鄕あり是なり　○性阻、訓義詳かならず　○横渟、抄に武藏國横見郡あり是なるべし　○橘花、同國橘樹郡あり　○多氷、通證に疑多麼郡と云されば氷は末の誤ならむか　○倉樔、通證に疑久良郡東鑑作海月郡と云倭名抄に久良岐とあれば樔は樹の誤ならむか

【二年】間者、類史に間を向に作る　○飢饉、字鏡に饑を伊比爾宇々と訓り　○大酺、淸寧紀四年に見ゆ史記始皇本紀に天下大酺注に酺歡樂大飮酒也とあり　○勾舍人部勾靫部、共に天皇の御名代　○穗波、筑前國穗波郡穗波鄕なり　○鎌、同國嘉麻郡是なり　○媵碕、通證に媵當作湊と云　豐前國企救郡湊碕あり又社埼に作る今の

二年（乙卯）春正月戊申朔壬子、詔曰、間者連年登穀、接境無虞、元元蒼生、樂於稼穡、業業黔首、免於飢饉、仁風暢乎宇宙、美聲塞乎乾坤、內外淸通、國家殷富、朕甚欣焉、可大酺五日、爲天下之歡、夏四月丁丑朔、置勾舍人部、勾靫部、五月丙午朔甲寅、置筑紫穗波屯倉、鎌屯倉、豐國媵碕屯倉、桑原屯倉、肝等屯倉、（取音讀）大拔屯倉、我鹿屯倉、（我鹿、此云阿柯、）火國春日部屯倉、播磨國越部屯倉、牛鹿屯倉、備後國後城屯倉、多禰屯倉、來履屯倉、葉

門司關なるべし ○桑原、豐前國築城郡(今の築上郡)桑田鄕あり此地か ○肝等、豐前國京都郡苅田鄕あり式に苅田驛あり肝等と音相近し此地ならむ ○大拔、豐前國企救郡貫庄あり今芝津村大字貫あり此地か ○我鹿、豐前國田川郡赤村あり彦山の麓なり此地か ○春日部、肥後國託麻郡(今の飽託郡)三宅鄕あり此地ならむ ○越部、播磨國揖保郡越部鄕是なり同國風土記に越部里舊名皇子代里所以號皇子代者勾宮天皇之世寵人但馬君小津蒙寵賜姓爲皇子代君而造三宅於此村令仕奉之故曰子代村後改號越部里 ○牛鹿、播磨國飾磨郡ならむ記に針間國牛鹿臣見ゆ ○備後國後城、備中國後月郡あり是なり老牛餘喘に後城屯倉は高屋村後月谷にありと云北本備の上吉の字あり ○多禰、後月郡種村にありと云 ○來履、同郡出部村九履(コウツ)に在りと云と ○葉稚、同國小田郡大江村にあり今波良加と云と ○河音、後月郡江原村にあり今加夫登と云 ○婀娜國膽殖、備後國安那郡なり抄に夜須奈と訓るは後に音を訓に換たるなり此郡は後月郡小田郡に接す膽殖は小田郡大江村に伊夜と云地あるは是なるべしと(以上老牛餘喘) ○膽年部、北本年を牛に作る備後國安那郡(今の深安郡)大宅鄕あり福山東北の地是ならむ ○春日部、阿波志に那賀郡宮倉村(今羽浦村大字宮倉)なりと云 ○經湍、名草郡布施屋(今の海草郡和佐村の大字)是なり紀之川に近し ○(注)經湍云々、原本湍の字なく世を矣に作る湍は北本中本に據て補ひ世は楓本中本に據て改む ○河邊、名草郡川邊村(今海草郡川永村の大字となる)紀之川を隔てゝ布施屋と相對す ○蘇斯岐、丹波國桑田郡三宅村(今南桑田郡龜岡村の大字となる)是か ○葦浦、栗太郡葦浦鄕葦浦村(今常盤村大字となる)あり是か ○間敷、中島郡三宅鄕あり今も三宅村あり又海部郡にも三宅鄕あり此の內ならむ ○入鹿、未詳集解に丹羽郡蟲鹿莊入鹿池あり古の入鹿邑卽此とあり ○綠野、上野國綠野郡是なり ○稚贄、富士郡生贄川また牲淵あり此地かといへど詳ならず集解に按筑紫至駿河國十三國列國無次疑有錯亂と云 ○國々犬養部、集解に蓋爲屯倉畜犬以防偸盜と云 ○櫻井田部連、應神紀二年に見ゆ ○縣犬養連、錄左京神別に縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也とあり天武天皇十三年に宿禰を賜ふ ○難波吉士、雄略紀八年に見ゆ ○屯倉之稅、稅はチカラともオホチカラとも云令義解に新輪曰租經貯曰稅とあり田部連は田部に關する事を犬養は犬養に關する事を難波吉士は簿記計算する事を各自に分擔せしめられしなり此は屯倉の數の餓に增加せしよりかく定められしにて此には稅とあれどそれのみにはあらざるべし難波吉士等とあれば任官せられし人も尙此以外にありしならむ ○勅大連云、集解に云を曰に改む ○難波大隅島、應神紀二十二年に見ゆ ○媛島松原、姬島攝津國西成郡にあり續紀七に靈龜二年令攝津國罷大隅媛島二牧とあり ○垂名於後世、世は北本に據て補ふ ○天皇崩、記には乙卯年三月十二(イ三)日崩とあり ○時年七十、記には御年を記さず ○舊市高屋丘陵、諸陵式に河內國古市郡とあり陵墓要覽に南河內郡古市村大字古市とあり河內志には高屋村とす

稚屯倉、河音屯倉、婀娜國膽殖屯倉、膽年部屯倉、阿波國春日部屯倉、紀國經湍屯倉、（經湍、此云府世）河邊屯倉、丹波國蘇斯岐屯倉、（皆取音）近江國葦浦屯倉、尾張國間敷屯倉、入鹿屯倉、上毛野國綠野屯倉、駿河國稚贄屯倉、秋八月乙亥朔、詔置國國犬養部、九月甲辰朔丙午、詔櫻井田部連、縣犬養連、難波吉士等、主掌屯倉之稅、十三丙辰、別勅大連云、宜放牛於難波大隅嶋與媛嶋松原、冀垂名於後世、冬十二月癸酉朔己丑、天皇崩于勾金橋宮、時年七十、是月、葬天皇于河內舊市高屋丘陵、以皇后春日山田皇女、及天皇妹神前皇女、合葬于是陵、

【卽位前紀】武小廣國押盾天皇、御名は檜隈高田皇子と申し奉る ○使卽天皇之位、大日本史に時年六十九とあり正統記には明年の卽位とす ○不以才地矜人爲王、オホキミノオモヘリは大君振りし給はずとなり按るに王は恐らくは士の誤にて爲士の二字下句に屬し爲士君子所服と句讀すべし

【元年】檜隈廬入野、大和國高市郡檜前鄕是なり今も坂合村の大字に檜前あり此天皇を檜隈高田皇子と申し奉れば元より此地に坐しゝなるべし ○物部麁鹿火大連爲大連、大日本史に此下に物部尾輿亦爲大連如故說見安閑紀とあり ○蘇我稻目宿禰、錄右京皇別田中朝臣の條に武內宿禰五世孫稻目宿禰之後

武小廣國押盾天皇　宣化天皇

武小廣國押盾天皇、男大迹天皇第二子也、勾大兄廣國押武金日天皇之同母弟也、二年十二月、勾大兄廣國押武金日天皇崩無嗣、群臣奏上劍鏡於武小廣國押盾尊、使卽天皇之位焉、是天皇爲人、器宇清通、神襟朗邁、不以才地矜人爲王、君子所服、

元年（丙辰）春正月、遷都于檜隈廬入野、因爲宮號也、二月壬申朔、以大伴金村大連爲大連、物部麁鹿火大連爲大連、並如故、又以蘇我稻目宿禰爲大臣、阿倍大麻呂臣爲大夫、三月壬寅朔、有司請立皇后、己酉、詔曰、立前正妃億計天皇女橘仲皇女爲皇后、是生一男三女、長曰石姬皇女、次曰小石姬皇女、次曰倉稚綾姬皇女、次曰上殖葉皇子、亦名椀子、是丹比公、偉那公、凡二姓之先也、前庶妃大河內稚子媛生一男、是曰火焰皇

子、是椎田君之先也、夏五月辛丑朔、詔曰、食者天下之本也、黃金萬貫不可療飢、白玉千箱何能救冷、夫筑紫國者、遐邇之所朝屆、去來之所關門、是以海表之國候海水以來賓、望天雲而奉貢、自胎中之帝洎于朕身、收藏穀稼、蓄積儲粮、遙設凶年、厚饗良客、安國之方、更無過此、故朕遣阿蘇仍君（未詳也）加運河內國茨田郡屯倉之穀、蘇我大臣稻目宿禰、宜遣尾張連運尾張國屯倉之穀、物部大連麁鹿火、宜遣新家連運新家屯倉之穀、阿倍臣、宜遣伊賀臣運伊賀國屯倉之穀、修造官家那津之口、又其筑紫肥豐三國屯倉、散在懸隔、運輸遙阻、儻如須要、難以備率、亦宜課諸郡分移、聚建那津之口、以備非常、永爲民命、早下郡縣令知朕心、秋七月、物部麁鹿火大連薨、是年也太歲丙辰、

とあり公卿補任に父は高麗と見ゆ　○阿倍大麻呂臣、大は原本に火とあり北本中本に據て改む阿倍臣は大彥命の後なり　○大夫、訓の如く大臣大連に亞ぐの執政官なるべし天智紀に左右大臣の外に御史大夫を置かれたりそれと似たる職にて後の納言の如きものならむ　○立前正妃云々、前正妃と書する例始めて見ゆ伴信友は仲皇女は此時既に薨去ありて世に坐さぬを今新に皇后に立つべき妃もまさゞれば皇后の號を前妃に贈り給へるものか次文に前庶妃とあるも即位前に亡せ給ひしなるべしと云　○石姫、　欽明天皇皇后と爲給ふ　○小石姫皇女、　欽明天皇妃と爲給ふ　○倉稚綾姫皇女、記に倉之若江王と記し男王とす　○上殖葉皇子、記には上の字なく御母も異れり　○丹比公、天武天皇十三年十月姓眞人を賜ふ故に姓氏錄には多治比眞人とあり三代實錄十二貞觀八年二月廿一日條に左中辨丹墀眞人貞峯の上表に宣化天皇皇子加美惠波皇子生十市王、十市王生多治比古王、此王生產之夕忽多治比花飛浮湯沐釜、以斯冥感名多治比王、成長之後固執謙退奏請求姓因賜姓多治比公とあり　○偉那公、錄右京皇別に爲名眞人宣化天皇皇子火焰王之後也とあり同攝津皇別亦同じ記紀の傳と違へり　○火焰皇子、攝津志に河邊郡東桑津村に火焰皇子墓ありと云　○椎田君、記に志比陀君とあり此姓他書に見えず椎田は攝津國河邊郡の地名なり　○黃金萬貫云々、漢書景帝紀に農天下之本也黃金珠玉飢不可食寒不可衣云々とあり　○冷、字書に寒也とありコイはコヾユに同じ　○筑紫國、通證に此專指太宰府といへど然らず太宰府の事は次にいふべし　○關門、抄居處部に蔡邕月令章句云關(日本紀私記云關門世岐度)在境所以察出禦入也とあり　○候海水、次の望天雲と對句にて天候を窺ひ風波を察するを云　○收藏穀稼云々、後の所謂義倉の設備を爲し凶年に備ふるを云　○阿蘇仍君、河內國の人ならむと思へど詳ならず　○茨田郡屯倉、仁

二年（丁巳）冬十月壬辰朔、天皇以新羅寇於任那、詔大伴金村大連、遣其子磐與狹手彥以助任那、是時、磐留筑紫、執其國政、以備三韓、狹手彥往鎭任那、加救百濟、

四年（己未）春二月乙酉朔甲午、天皇崩于檜隈廬入野宮、時年七十三、冬十一月庚戌朔丙寅、葬天皇于大倭國身狹桃花鳥坂上陵、以皇后橘皇女及其孺子合葬于是陵、（皇后崩年傳記無載、孺子者蓋未成人而薨歟、）

日本書紀卷第十八

德紀十三年に見ゆ　○尾張國屯倉、前紀二年に見ゆ　○新家連、錄河內未定に新家首汙麻憙足尼命(百樹云汙麻斯麻尼足尼命之誤)之後と見ゆ　○新家屯倉、鈴木重胤氏說に尾張と伊賀との間に載せられたれば伊勢國なり同國壹志郡に新家村あり式に同郡物部神社あり又度會郡に新家屯倉を移すと孝德紀に見えたれば伊勢國なりと云　○阿倍臣、阿倍大麻呂　○伊賀臣、阿倍氏と同祖にて孝元紀七年に見ゆ　○官家、原本官を宮に作る應本楓本に據て改む　○那津之口、筑前國那珂郡にあり仲哀紀八年に儺縣、齊明紀七年に娜大津を改て長津と云と見え今の博多の古名　○筑紫肥豐三國屯倉、前紀二年に見ゆ當時は分國以前なりし故に筑紫肥豐國と云　○懸隔、原本懸を縣に作る北本楓本中本に據て改む　○難以備卒、卒は急卒なり急卒に準備し難しとなり原本卒を率に作る北本に據て改む　○永爲民命、永く人民の生命を繫ぐべしとなり　○物部麁鹿火大連薨、武烈、繼體、安閑、宣化四帝に歷仕し大連たること三十餘年なりき

【二年】狹手彥、三代實錄五貞觀三年八月十九日伴大田宿禰常雄の欵に謹稽家牒伴大田宿禰同祖金村大連公第三男狹手彥之後也とあり金村の三男なり

【四年】時年七十三、記に御年を記さず　○身狹桃花鳥坂上陵、諸陵式に大和國高市郡陵墓要覽に同郡白橿村大字鳥屋とあり　○孺子、詳ならず此は皇后の御子にて既に薨去ありしを遺詔などありて合葬し給へるなるべし

【即位前紀】
○天國排開廣庭天皇、記には天國押波流岐廣庭命とあり之に據らば開はハルキと訓べきなり
○秦大津父、秦氏なること明なれど戸なも記さゞれば一商人にて賤しきものなりしなるべし
○寤驚、原本寤を寐に作る舊紀集解に據て改む字書に寤は寐覺也とあり寐は臥也息也とありて通ぜず
○紀伊郡、北本伊の字なし
○深草里、倭名抄に紀伊郡深草鄕見ゆ即是なり（今深草村大字深草）
○忻喜、原本忻を所に作る楓本中本に據て改む
○商價、原本商を啇に作る啇は和也本也とあれば誤なり依て今正す字書に

日本書紀卷第十九

天國排開廣庭天皇　欽明天皇

天國排開廣庭天皇、男大迹天皇嫡子也、母曰手白香皇后、天皇愛之、常置左右、天皇幼時夢、有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寤驚遣使普求、得自山背國紀伊郡深草里、姓字果如所夢、於是忻喜遍身、歎未曾夢、乃告之曰、汝有何事、答云、無也、但臣向伊勢商價來還、山逢二狼相鬪汙血、乃下馬洗漱口手、祈請曰、汝是貴神、而樂麁行、儻逢獵士、見禽尤速、乃抑止相鬪、拭洗血毛、遂遣放之、倶令全命、天皇曰、必此報也、乃令近侍、優寵日新、大致饒富、及至踐祚、拜大藏省、四年冬十月、武小廣國押盾天皇崩、皇子天國排開廣庭天皇令群臣曰、余幼年淺識、未閑政事、山田皇后明閑百揆、

行曰レ商處曰レ賈とあり價は賈と通用すアキナヒは東雅に古は毎歳之秋布穀之類既に成し後に、商價の道通じたれば百貨を以て布帛に代るをアキモノスと云とあり
○猥、倭名抄に於保加美と訓り卽ち大神の義
○汙血、原本汙を汚に作る北本楓本中本に據て改む
○貴神、神代紀(三七頁)に大虵を可畏之(カシコキ)神、下文六年の下に虎を威神と云ると同じ
○見禽、字書に擒通作レ禽 捉也とあり ○拜大藏省、秦氏は大藏の官に深き關係あり(雄略紀十五年參照)故に特にこの省に任ぜられむ事を希望して任官せしなるべし ○皇子、天皇は繼體天皇の皇子にて先帝とは御兄弟に坐す ○未閑、閑は字書に習也とあり、熟練の意 ○山田皇后、仁賢天皇の皇女にて安閑天皇の皇后に坐す ○百揆、尙書舜典の注に揆度也度二百事一總二百官一とあり原本揆を探に作る中本に據て改む ○山海詎同、原本詎を誰に作る北本中本に據て改む恩寵を蒙ること山より高く海より深くして山海も同じからずとなり ○敬老云々、以下以待レ士まで十五字は史記周本紀の文に據れり ○顯脫、原本顯を類に作る中本に據て改む顯穎の俗、字書に穎錐末也言其末全體脫出非二止微見一喩三能自顯二其才一也とあり ○令登位、原本令の下に臨の字あり北本中本に據て削る ○時年若干、北本及原本傍書に此四字を分注とす集解に蓋後人攙入として削る

請就而決、山田皇后怖謝曰、妾蒙恩寵、山海詎同、萬機之難、婦女安預、今皇子者、敬老慈少、禮下賢者、日中不食以待士、加以幼而穎脫、早擅嘉聲、性是寬和、務存矜宥、請諸臣等、早令登位光臨天下、

冬十二月庚辰朔甲申、天國排開廣庭皇子卽天皇位、時年若干、尊皇后曰皇太后、大伴金村大連、物部尾輿大連爲大連、及蘇我稻目宿禰大臣爲大臣、並如故、

【元年】
○箭田珠勝大兄、記に八田王に作る
○笠縫皇女、記に笠縫王に作る
○投化、賦役令義解に投化猶二歸化一也とあり
○山村、大和國添上郡山村鄕あり大和志に山村一

(庚申)元年春正月庚戌朔甲子、有司請立皇后、詔曰、立正妃武小廣國押盾天皇女石姬爲皇后、是生二男一女、長曰箭田珠勝大兄皇子、仲曰譯語田渟中倉太珠敷尊、(敏達)少曰笠縫皇女、(更名狹田毛皇女)二月、百濟人己知部投化、置倭國添上郡山村、今山村己知部之先也、三月、蝦夷隼人

名己知山(今屬二八島鄕一)山村に百濟己知部宅趾ありと云(今帶解村)
○山村己知部、錄大和諸蕃に山村忌寸己智同祖古禮公之後也續紀三十四に寶龜八年七月甲子山村許智大足等四人賜二姓山村忌寸一と見えたり
○磯城郡、城上城下の二郡となしたるは和銅の頃なるが明治廿九年合せてまた磯城郡とす
○磯城島、地理志料に據るに城上郡上市鄕に屬す
○金刺宮、大和志に城上郡金刺宮在二金屋村西南初瀨川南一とあり聖德太子傳評注には玉林曰三輪山邊有二一鄕一曰二磯城島一竹原中有二小社一相傳宮蹟と云
○大藏掾、原本掾を椽に作る中本に據て改む集解に按前年所レ任秦大津父也とあれど證とすべきものなし
○秦伴造、秦伴は秦人の部曲造は其首長なり諸處に分散する秦部をば造をして統率せしむるなり
○祝津宮、攝津志に河邊郡祝津宮在二西難波村一今有二八幡小祠古梅樹一株一とあり ○許勢臣稻持、錄右京皇別に巨勢朝臣巨勢雄柄宿禰之後也とあり天武紀十三年に朝臣の姓を賜ふ通證に疑巨勢男人大臣之子とあり ○上哆唎、以下の四縣は繼體紀六年に出づ ○怨曠、魏志蔣濟傳に怨曠積年と見ゆ字書に曠は空也廢也又遠也とあり ○大伴大連金村、大連の二字楓本中本に據て補ふ ○住吉宅、攝津志に住吉郡大伴金村第古蹟在二堺北莊高洲

並率衆歸附、秋七月丙子朔己丑、遷都倭國磯城郡磯城嶋、仍號爲磯城嶋金刺宮、八月、高麗、百濟、新羅、任那、並遣使獻、並脩貢職、召集秦人漢人等諸蕃投化者、安置國郡、編貫戶籍、秦人戶數惣七千五十三戶、以大藏掾爲秦伴造、九月乙亥朔己卯、幸難波祝津宮、大伴大連金村、許勢臣稻持、物部大連尾輿等從焉、天皇問諸臣曰、幾許軍卒伐得新羅、物部大連尾輿等奏曰、少許軍卒不可易征、曩者、男大迹天皇(繼體)六年、百濟遣使表請任那上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁四縣、大伴大連金村輙依表請、許賜所求、由是新羅怨曠積年、不可輕爾而伐、於是大伴大連金村居住吉宅、稱疾不朝、天皇遣青海夫人勾子、慰問慇懃、大連怖謝曰、臣所疾者非餘事也、今諸臣等謂臣滅任那、故恐怖不朝耳、乃以鞍馬贈使、厚相資敬、青海夫人依實顯奏、詔曰、久竭忠誠、莫恤衆口、遂不爲罪、優寵彌深、是年也太歲庚申、

濱東」とあり　○青海夫人、原本人の字なし北本中本に據て補ふ夫人は反正紀元年（卷上二四二頁）に出づ　○鞍馬、鞍を置きて飾れる馬推古紀に飾騎莊馬とも見ゆ　○資敬、通證に以物表敬意也とあり此句文選褚淵碑文に出づ

【二年】稚綾姬、宣化天皇々女、宣化紀元年に倉稚綾姬とあり
○日影皇女、小石姬皇女の一名か編年記には稚綾姬の次に山下日影皇女を載せたれど恐らくは本紀に據て補へるならむ
○（注）此曰皇后弟云々、集解に私記攙入として削る檜隈高田天皇は宣化天皇なり
○磐隈皇女、諸陵式に龍田菀部墓石前皇女在大和國平群郡」と見ゆ
○皇子茨城、下に見ゆ
○解、解職なり齋宮を下り給ふを云
○臘嘴鳥皇子、原本嘴の字なし北本に據て補ふ中本嘴に作る記に足取王とあり倭名抄には鵤子鳥をアトリと訓り
○椀子皇子、繼體天皇々子に同名あり記に麻呂古王に作る
○大宅皇女、記に大宅王
○石上部皇子、記に伊美賀古王
○山背皇子、記に山代王
○大伴皇女、記に大伴王

（辛酉）二年春三月、納五妃。元妃皇后弟曰稚綾姬皇女。是生石上皇子。次有皇后弟曰日影皇女。（此曰皇后弟明是檜隈高田天皇女、而列后妃之名、不見母妃姓與皇女名字、不知出何書、後勘者知之。）是生倉皇子。次蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛。（堅鹽、此云岐拖志。）生七男六女。其一曰大兄皇子。是爲橘豐日尊。（用明）其二曰磐隈皇女。（更名夢皇女）初侍祀於伊勢大神。後坐姧皇子茨城解。其三曰臘嘴鳥皇子。其四曰豐御食炊屋姬尊。（推古）其五曰椀子皇子。其六曰大宅皇女。其七曰石上部皇子。其八曰山背皇子。其九曰大伴皇女。其十曰櫻井皇子。其十一曰肩野皇女。其十二曰橘本稚皇子。其十三曰舍人皇女。次堅鹽媛同母弟曰小姉君。生四男一女。其一曰茨城皇子。其二曰葛城皇子。其三曰埿部穴穗部皇女。其四曰埿部穴穗部皇子。（更名天香子皇子。一書云、更名住迹皇子。）其五曰泊瀨部皇子。（崇峻）一書云、其一曰茨城皇子。其二曰埿部穴穗部皇女。其三曰埿部穴穗部皇子。更名住迹皇子。其四曰葛城皇子。其五曰泊瀨部皇子。一書云、其一曰茨城皇子。其

諸陵式に押坂內墓大伴皇女在大和國城上郡押坂陵域內」とあり
○櫻井皇子、記に櫻井之玄王
○肩野皇女、記に麻奴王
○橘本稚皇子、記に橘本之若子王
○舍人皇女、記に泥杼王
○小姉君、記に岐多志比賣命之姨小兄比賣
○茨城皇子、記に馬木王
○葛城皇子、記に葛木王
○埿部穴穗部皇女、用明天皇の皇后用明紀元年に穴穗部間人皇女とあり
○埿部穴穗部皇子、記に間人穴太部王
○（注）更名云々、集解に私記攙入として削る
○泊瀨部皇子、記に長谷部若雀命
（注）天香子、集解此下に皇子の二字を補ふ
○帝王本紀、推古紀に所謂天皇記にして厩戸太子の撰
○古字、通證に謂古名字」とあり
○撰集之人屢經遷易、日本紀撰錄に至るまで幾度か遷し易へたりとなり
○兄弟參差、參差は公式令義解に猶不齊」也とあり

二曰住迹皇子。其三曰埿部穴穗部皇女。其四曰埿部穴穗部皇子。更名天香子。其五曰泊瀨部皇子。帝王本紀多有古字。撰集之人、屢經遷易。後人習讀、以意刊改。傳寫既多、遂致舛雜。前後失次、兄弟參差。今則考覈古今、歸其眞正。一往難識者、且依一撰而注詳其異。他皆效此。

次春日日抓臣女曰糠子。生春日山田皇女與橘麻呂皇子。

夏四月、安羅次旱岐夷吞奚・大不孫・久取柔利、加羅上首位古殿奚、卒麻旱岐、散半奚旱岐兒、多羅下旱岐夷他、斯二岐旱岐兒、子他旱岐等、與任那日本府吉備臣（闕名字）往赴百濟、倶聽詔書。百濟聖明王謂任那旱岐等言、日本天皇所詔者、全以復建任那。今用何策、起建任那。盍各盡忠、奉展聖懷。任那旱岐等對曰、前再三廻、與新羅議、而無答報。所圖之旨、更告新羅、尚無所報。今宜倶遣使往奏天皇。夫建任那者、爰在大王之意。祇承敎旨。誰敢間言。然任那境接新羅。恐致卓淳等禍。（等謂喙己呑・加羅。言卓淳等國有敗亡之禍。）聖明王曰、昔我先祖速古王・貴首王之世、安羅・加羅・卓淳旱岐等、初遣使相通、厚結親好、以爲子弟、冀可恒隆。而今被誑新羅、使天皇忿怒、而任那

り御兄弟の順序の違へるを云
○考覈、原本覈を竅に作る中本に據て改む覈は類篇に考事而笮邀遮其辭得實曰覈とありアナグルは齊明紀四年に撿覆を舒明紀に探を字鏡集に撿及括を訓り（以上注）
○春日日抓臣女云々、抓は北本中本抓に作り記には爪に作る集解に按玉篇抓測孝切木刺（ハリ）名以義宜訓觸とあり仁賢紀に見ゆる日爪一本に日觸さあるに據れば之に從ふべきか仁賢紀元年（卷上三〇四頁）に和珥臣日爪女糠君娘生一女是爲春日山田皇女とあり此條と頗る相似たり
○安羅次旱岐、安羅は任那十國の一神功紀四十九年に出づ加羅多羅亦同じ次旱岐は爵名
○夷呑奚、大不孫、久取柔利、三人の名
○卒麻、散半奚、斯二岐、子他、皆任那十國中の國名なり卒麻は慶尙南道統營郡沙等面（巨濟島）散半奚は三嘉附近、斯二岐は泗川、子他は晉州なりと云

慣恨寡人之過也、我深懲悔、而遣下部中佐平麻鹵、城方甲背昧奴等、赴加羅、會于任那日本府、相盟、以後繫念、相續圖建任那、旦夕無忘、今天皇詔稱、速建任那、由是欲共爾曹謨計樹立任那國、宜善圖之、又於任那境、徵召新羅、問聽與不、乃俱遣使奏聞天皇、恭承示敎、儻如使人未還之際、新羅候隙侵逼任那、我當往救、不足爲憂、然善守備、謹警無忘、別汝所導、恐致卓淳等禍、非新羅自强故所能爲也、其㖨己呑居加羅與新羅境際、而被連年攻敗、任那無能救援、由是見亡、其南加羅、蕞爾狹小、不能卒備、不知所託、由是見亡、其卓淳上下携貳、主欲自附、內應新羅、由是見亡、因斯而觀、三國之敗、良有以也、昔新羅請援於高麗、而攻擊任那與百濟、尙不剋之、新羅安獨滅任那乎、今寡人與汝戮力幷心、翳賴天皇、任那必起、因贈物各有差、忻忻而還、秋七月、百濟聞安羅日本府與新羅通計、遣前部奈率鼻利莫古、奈率宣文、中部奈率木劦昧淳、紀臣奈率彌麻沙等、（紀臣奈率者、蓋是紀臣娶韓婦所生、因留百濟、爲奈率者也、未詳其父、他皆效此、）

○上首位、旱岐、下旱岐、皆爵名なり
○（注）闕名字、集解に私記撿入とす
○奉展聖懷、聖懷は聖慮に同じ聖慮をのべ奉るを云通證には展をカナヒさ訓り
○而無答報、通證に句也舊讀誤とあり今之に據る
○尙無所報、所の字は北本中イ本に據て補ふ
○爰在大王之意、原本爰を奚に作る北本中イ本に據て改む
○誰敢間言、間言は言をさしはさむを云敎旨は謹で之を奉じて言を差挾むことなしとなり
○（注）己呑、原本己を答に作る北本中本に據て改む
○忿恐、原本忿を恕に作る楓本中本に據て改む
○下部中佐平、原本下部を下郡に作る北本中本に據て改む下部は安閑紀元年に出づ佐平は東國通鑑に百濟古爾王二十七年置六佐平一品とあり
○麻鹵城方甲背昧奴、中本背を背に作る通證通釋に四人の名とし集解標注に麻鹵、昧奴の二人とす
○汝所導、原本導を導に

使于安羅、召到新羅任那執事、謨建任那、別以安羅日本府河內直通計新羅、深責罵之、（百濟本記云、加不至費直、阿賢移那斯、佐魯麻都等、未詳也、）乃謂任那曰、昔我先祖速古王、貴首王、與故旱岐等、始約和親、式爲兄弟、於是我以汝爲子弟、汝以我爲父兄、共事天皇、俱距强敵、安國全家、至于今日、言念先祖與舊旱岐和親之詞、有如皎日、自玆以降、勤修隣好、遂敦與國、恩踰骨肉、善始有終、寡人之所恒願、未審何緣輕用浮辭、數歲之間慨然失志、古人云、追悔無及、此之謂也、上達雲際、下及泉中、誓神乎今、改咎乎昔、一無隱匿、發露所爲、精誠通靈、深自克責、亦所宜取、蓋聞、爲人後者、貴能負荷先軌、克昌堂構、以成勳業也、故今追崇先世和親之好、敬順天皇詔勅之詞、拔取新羅所折之國南加羅、㖨己呑等、還屬本貫、遷實任那、永作父兄、恒朝日本、此寡人之所食不甘味、寢不安席、悔往戒今之所勞想也、夫新羅甘言希誑、天下之所知也、汝等妄信、旣墮人權、方今任那境接新羅、宜常設備、豈能施柝、爰恐陷羅誣欺網穽、喪國

亡家爲人繫虜寡人念茲勞想而不能自安矣竊聞任那與新羅運策席際現蜂蛇恠亦衆所知且夫妖祥所以戒行災異所以悟人當是明天告戒先靈之徵表者也禍至追悔滅後思興孰云及矣今汝遵余聽天皇勅可立任那何患不成若欲長存本土永御舊民其謨在茲可不愼也聖明王更謂任那日本府曰天皇詔稱任那若滅汝則無資任那若興汝則有援今宜興建任那使如舊日以爲汝助撫養黎民謹承詔勅悚懼塡胸誓効丹誠冀隆任那永事天皇猶如往日先慮未然然後康樂今日本府復能依詔救助任那是爲天皇所必褒讃汝身所當賞祿又日本卿等久住任那之國近接新羅之境新羅情狀亦是所知毒害任那謨防日本其來尚矣匪唯今年而不敢動者近羞百濟遠恐天皇誘事朝廷僞和任那如斯感激任那日本府者以未禽任那之間僞示伏從之狀願今候其間隙詁其不備一擧兵而取之天皇以詔勅勸立南加羅喙己呑非但數十年而新羅一不聽命

作る北本に據て改む　○其喙己呑、原本呑を谷に作る北本中本に據て改む　○蕞爾、字書に小貌とあり　○携貳、周語韋昭注に携離也貳二心也とあり　○主欲自附、原本主を至に作る北本中本に據て改む　○前部奈率、中部奈率、前部中部は五部の一、奈率は六品の官　○(注)紀臣奈率云々、集解に私記攙入とすれど恐らくは本注ならむ次の百濟本記云々の注亦同じ原本効此の下也の字あり北本に據て削る　○深責罵之、原本罵を駟に作る北本楓本中本に據て改む　○(注)費直、二字にてアタヘと訓む其例は稀なれど費の一字を訓めるは稱德紀(神護景雲元年)光仁紀(寶龜四年)等に見ゆ　○言念、字書に言は我也とあり　○晈日、晈は字書に與皎同とあり皎は白也明也と注す　○誓神乎今改咎乎昔、今神に誓て昔の咎を悔改めむとなり　○爲人後者云々、以下成勳業也まで十九字は吳志張昭傳に據れり　○堂構、尙書大誥に若考作室旣底法厥子乃弗肯堂矧肯構孔傳に以作室喩治政也父已致法子乃不肯爲堂基況肯構立屋乎不爲其易則難者可知とあり　○永作父兄、永は原本求に作る北本中本に據て改む　○既隨入權、權は權謀なり　○施析、原本析を析に作る楓本に據て改む字書に析は戒夜者所擊とあり水訂本施を弛に改作る　○席際現蜂蛇怪、蜂蛇は室内にあるべきものにあらず然るに蜂蛇の怪席際に現れたりとなり　○明天告戒、明天の下疑らくは之の字を脫す　○丹誠、文選勸進表の注に丹誠赤心也　○詁其不備、原本詁を諸に作る楓本中本に據て改む詁は恐らくは估の訛、字書に估は覘と同じとあり　○以詔勅、以は北本楓本中本に據て補ふ　○秋七月、集解に秋の上に三年の二字を補ひ原直書秋七月而係二年二年既上書秋七月今照前後二年以接四年脫三年明矣と云下文紀臣奈率彌麻沙の罷歸りしは四年四月なるを思ふに集解の說是なるべし　○下韓、下哆唎に同じ馬山府附近なるべきか

亦卿所知且夫信敬天皇爲立任那豈若是乎恐卿等輙信甘言輕被謾語滅任那國奉辱天皇卿其戒之勿爲他欺秋七月百濟遣紀臣奈率彌麻沙中部奈率己連來奏下韓任那之政幷上表之

四年(癸亥)夏四月百濟紀臣奈率彌麻沙等罷之秋九月百濟聖明王遣前部奈率眞牟貴文護德己州己婁與物部施德麻哥牟等來獻扶南財物與奴二口冬十一月丁亥朔甲午遣津守連詔百濟曰在任那之下韓百濟郡令城主宜附日本府幷持詔書宣曰爾屢抗表稱當建任那十餘年矣表奏如此尙未成之且夫任那者爲爾國之棟梁如折棟梁詎成屋宇朕念在茲爾須早建汝若早建任那河內直等(河內直已見上文)自當止退豈足云乎是日聖明王聞宣勅已歷問三佐平內頭及諸臣曰詔勅

【四年】

○護德、固德に同じきか固德は九品の官(附錄參照)　○物部施德麻哥牟、施德は八品の官(同上)麻哥牟は名なり　○扶南、晉書南蠻扶南國傳に扶南西去林邑三千餘里在海大灣中と見ゆ今の暹羅の地なりと云　○奴二口、奴の字は北本中本及紀略に據て補ふ　○津守連、名闕く、神功紀攝政前紀(卷上一八一頁)に見ゆ　○郡令、下文に郡領とあ

り郡司なり
○抗表、原本抗を搆に作る北本中本に據て改む抗は字書に擧也とあり
○詎成、原本詎を誰に作る北本中本に據て改む
○早建、原本早一字衍れり北本楓本中本に據て除く
○内頭、東國通鑑（古爾王二十七年）に百濟置内頭佐平掌庫藏事とあり
○上佐平、東國通鑑に百濟腆支王四年に始て置くとあり
○德率、德率は四品の官（附錄參照）
○移那斯麻都、蓋二人なり上文に引く百濟本記に阿賢移那斯、佐魯麻都とあり
○高分、北イ本に分を文に作る
○正旦、正月元旦なり
【五年】祭神時到、祭神の時とは正月を指せるか支那にては四時孟月に祭祀を行ふ三韓も亦然るか

如是、當復何如。三佐平等答曰、在下韓之我郡令城主、不可出之。建國之事、宜早聽聖勅。十二月、百濟聖明王復以前詔、普示群臣曰、天皇詔勅如是。當復何如。上佐平沙宅己婁、中佐平木劦麻那、下佐平木尹貴、德率鼻利莫古、德率東城道天、德率木劦昧淳、德率國雖多、奈率燕比善那等同議曰、臣等稟性愚闇、都無智略。詔建任那、早須奉勅。今宜召任那執事國國旱岐等、倶謀同計、抗表述志。又河內直、移那斯、麻都等猶住安羅、任那恐難建之。故亦幷表乞移本處也。聖明王曰、群臣所議、甚稱寡人之心。是月、乃遣施德高分、召任那執事與日本府執事。倶答言、過正旦而往聽焉。

(甲子)五年春正月、百濟國遣使召任那執事與日本府執事。倶答言、祭神時到、祭了而往。是月、百濟復遣使召任那執事與日本府執事。日本府・任那倶不遣執事、而遣微者。由是百濟不得倶謀建任那國。二月、百濟遣施德馬武、施德高分屋、施德斯那奴次酒等、使于任那、謂日本府與任那旱岐

○用歌多、北本中本及釋紀歌を奇に作る
○（注）百濟本記、原本記を紀に作る北本に據て改む
○河內直、集解此下に曰の字を補ふ
○爲哥可君、注に爲哥岐彌、下文に印哥臣とあり可の字衍ならむ原本哥を歌に作る楓本中本に據りて改む下同じ
○（注）有非岐、北本岐を跛に作る
○職汝之由、集解に此四字衍さして削る
○汝等、楓本等の字無し
○連延、原本延を近に作る北本楓本に據て改む

等曰、我遣紀臣奈率彌麻沙、奈率己連、物部連奈率用歌多、朝謁天皇。彌麻沙等還自日本、以詔書宣曰、汝等宜共在彼日本府、早建良圖、副朕所望。爾其戒之、勿被他誑。又津守連從日本來、（百濟本記云、津守連己麻奴跪、而語訛不正、未詳。）宣詔勅、而問任那之政。故將欲共日本府任那執事、議定任那之政、奉奏天皇。遣召三廻、尚不來到。由是不得共論圖計任那之政、奉奏天皇矣。今欲請留津守連、別以疾使、具申情狀、遣奏天皇。當以三月十日、發遣使於日本。此使便到、天皇必須問汝。汝日本府卿、任那旱岐等、各宜發使、共我使人、往聽天皇所宣之詔。別謂河內直、（百濟本記云、河內直、移那斯、麻都、而語訛未詳其正也。）自昔迄今、唯聞汝惡。汝先祖等、（百濟本記云、汝先那干陀甲背、加臘直岐甲背。亦云、那哥陀甲背、鷹哥岐彌。語訛未詳。）倶懷姧僞誘說。爲哥可君、（百濟本記云、爲哥岐彌、名有非岐。）專信其言、不憂國難、乖背吾心、縱肆暴虐。由是見逐。職汝之由。汝等來住任那、恒行不善。任那日損、職汝之由。汝是雖微、譬猶小火燒焚山野、連延村邑。由汝行惡、當敗任那。遂使海西諸國官家、不得長奉天皇之闕。今遣奏天皇、乞移汝等、還其本處。汝

○印哥臣、北本哥を奇に作る下同じ

○阿乇得文、原本乇を亡に作る北本楓本に據て改む

亦往聞、又謂日本府卿・任那旱岐等曰、夫建任那之國、不假天皇之威、誰能建也、故我思欲就天皇、請將士而助任那之國、將士之粮、我當須運、將士之數、未限若干、運粮之處、亦難自決、願居一處、倶論可不、擇從其善、將奏天皇、故頻遣召、汝猶不來、不得議也、日本府答曰、任那執事不赴召者、是由吾不遣、不得往之、吾遣奏天皇、還使宣曰、朕當以印哥臣（語訛未詳）遣於新羅、以津守連遣於百濟、汝待聞勅際、莫自勞往新羅百濟也、宣勅如是、會聞印哥臣使於新羅、乃追遣問天皇所宣、詔曰、日本臣與任那執事、應就新羅聽天皇勅、而不宣就百濟聽命也、後津守連遂來、過此謂之曰、今余被遣於百濟者、將出在下韓之百濟郡令城主、唯聞此說、不聞任那與日本府會於百濟聽天皇勅、故不往焉、非任那意、於是任那旱岐等曰、由使來召、便欲往參、日本府卿不肯發遣、故不往焉、大王爲建任那、觸情曉示、覩茲忻喜、難可具申、

三月、百濟遣奈率阿乇得文・許勢奈率哥麻・物部奈率哥非等、上表曰、奈率彌麻沙・奈率己連等、至臣蕃、奉詔書曰、爾等宜共在彼日本府、同謀善計、早建任那、爾其戒之、勿被他誑、又津守連等至臣蕃、奉勅書、問建任那、恭承來勅、不敢停時、爲欲共謀、乃遣使召日本府（百濟本記云、遣召烏胡跛臣、蓋是的臣也、）與任那、倶對言、新年既至、願過而往、久而不就、復遣使召、倶對言、祭時既至、願過而往、久而不就、復遣使召、而由遣微者、不得同計、夫任那之不赴召者、非其意焉、是阿賢移那斯・佐魯麻都（二人名也、已見上文、）姧佞之所作也、夫任那者以安羅爲兄、唯從其意、安羅人者以日本府爲天、唯從其意、（百濟本記云、以安羅爲父、以日本府爲本也、）今的臣・吉備臣・河內直等、咸從移那斯・麻都指撝而已、移那斯・麻都雖是小家微者、專擅日本府之政、又制任那、障而勿遣、由是不得同計奏答天皇、故留己麻奴跪（蓋是津守連也）別遣疾使迅如飛鳥、奉奏天皇、假使二人（二人者移那斯與麻都也、）在於安羅、多行姧佞、任那難建、海西諸國必不獲事、伏請移此二人、還其本處、勅喩日本府與任那、而圖建任那、故臣遣奈率彌麻沙・奈率己連等、副己麻奴跪、上表以聞、於是詔曰、

○(注)烏胡跛臣、原本烏を焉に作る中本及水本に據て改む

○祭時既至、原本祭を奈に作る中本に據て改む

○的臣吉備臣、安羅及任那の日本府の卿なるべし

○指撝、指揮に同じ

○遣疾使、疾の字は北本中本に據て補ふ

○（注）弟君、原本君の下臣の字あり北本に據て削る集解に此の分注十二字を私記攙入とす
○印支彌、下文十一月の條に印岐彌謂在任那日本臣名也とあり
○不能救急、急を楓本にマタイコト中本にマタキと訓りマタキは未時にて景行紀四十年に豫をマタキと訓ると同じく未然に救ふこと能はざる意か
○喙淳、集解に按喙蓋卓謂卓淳卓淳之滅已見于二年紀蓋至此取以爲新羅之地照五年十一月紀爲卓淳明矣と云
○久禮山戍、戍は原本戎に作る北本に據て改む
○（注）旣洒臣、許勢臣なり
○荷山、慶尙南道固城郡閑山島か東國通鑑百濟腆支王三年の條に擯女于荷山島とあり
○頃得書信、原本頃を項に作る中本に據て改む
○懈怠、原本怠を息に作る北本に據て改む
○曉然、アラハニと訓るが如き意、字書に曉は明也とあり
○位居大連、通證に謂

的臣等（等者、謂吉備弟君河內直等也。）往來新羅、非朕心也。曩者印支彌（未詳。）與阿鹵旱岐在時、爲新羅所逼、而不得耕種。百濟路迥、不能救急。由的臣等往來新羅、方得耕種。朕所曾聞。若已建任那、移那斯麻都、自然却退、豈足云乎。伏承此詔、喜懼兼懷。而新羅誑朝、知匪天勅。新羅春取喙淳、仍擯出我久禮山戍、而遂有之。近安羅處安羅耕種、近久禮山處新羅耕種。各自耕之、不相侵奪。而移那斯麻都過耕他界。六月逃去。於印支彌後來許勢臣時、（百濟本記云、我留印支彌之後、至既洒臣時。皆未詳。）新羅無復侵逼他境。安羅不言爲新羅逼不得耕種。臣嘗聞、新羅毎春秋、多聚兵甲、欲襲安羅與荷山。或聞、當襲加羅。頃得書信、便遣將士擁守任那、無懈怠也。頻發銳兵、應時往救。是以任那隨序耕種。新羅不敢侵逼。而奏百濟路迥、不能救急。由的臣等往來新羅、方得耕種。是上欺天朝、轉成奸佞也。曉然若是、尚欺天朝、自餘虛妄、必多有之。的臣等猶住安羅、任那之國恐難建立。宜早退却。臣深懼之。佐魯麻都雖是韓腹、位居大連、廁日本執事之間、入榮班

執政事也とあり
○廁、字書に間也雜也とあり
○貴盛之例、原本之一字衍れり北本楓本に據て削る例は列と通用す
○奈麻禮冠、奈麻は新羅の官十七等の第十一（附錄參照）禮冠は禮式に用ふる冠なるべし
○於他易照、その心骨の趨く所自ら彼が所行に照して見易しとなり
○新羅域、北本楓本中本域を城に作る
○喙國之滅、繼體紀二十一年（二一〇頁）に見ゆ
○加羅、原本羅の下國の字あり北本に據て削る
○雖小、原本小を少に作る北本に據て改む
○安羅下旱岐、原本安を新に作る北本楓本中本に據て改む二年紀に下を次に作る
○二首位、通證に二恐上

貴盛之例、而今反著新羅奈麻禮冠、卽身心歸附、於他易照。熟觀所作、都無怖畏。故前奏惡行、具錄聞訖。今猶著他服、日赴新羅域、公私往還、都無所憚。夫喙國之滅、匪由他也。喙國之函跛旱岐貳心加羅、而內應新羅、加羅自外合戰。由是滅焉。若使函跛旱岐不爲內應、喙國雖小、未必亡也。至於卓淳、亦復然之。假使卓淳國主不爲內應新羅招寇、豈至滅乎。歷觀諸國敗亡之禍、皆由內應貳心人者。今麻都等腹心新羅、遂著其服、往還旦夕、陰搆奸心。乃恐任那由茲永滅。任那若滅、臣國孤危。思欲朝之、豈復得耶。伏願天皇玄鑒遠察、速移本處、以安任那。冬十月、百濟使人奈率得文・奈率哥麻等罷歸。（百濟本記云、冬十月、奈率得文・奈率哥麻等還自日本曰、所奏河內直・移那斯・麻都等事、無報勅也。）十一月、百濟遣使召日本府臣・任那執事曰、遣朝天皇奈率得文・許勢奈率哥麻・物部奈率哥非等、還自日本。今日本府臣及任那國執事、宜來聽勅、同議任那。日本吉備臣・安羅下旱岐大不孫・久取柔利、加羅上首位古殿奚・卒麻君・斯二岐君・散半奚君兒・多羅二首位訖乾

字之謬とあり
○久嵯、慶尙南道固城地方なりと云
○印岐彌、原本彌を禰に作る北本に據て改む
○既計新羅、原本計を討に作る北本に據て改む
○伐我、原本伐を代に作る北本中本に據て改む
○印岐彌、原本岐を支に作る北本中本に據て改む
○（注）未詳、此二字集解に私記攙入として削る
○食言、爾雅釋詁に食僞也とあり食言の字左傳哀二十五年に出づ
○滅卓淳股肱之國云々、此句義詳ならず通證に滅卓淳を句として股肱之國欲快返悔と讀み卓淳滅則任那諸國皆急矣言雖爲新羅股肱耳目之國而悞其饕食逼已故欲快返悔也といひ集解は舊の儘に滅卓淳股肱之國と讀み股肱之國は卽

智、子他旱岐、久嵯旱岐、仍赴百濟。於是百濟王聖明略以詔書示曰、吾遣奈率彌麻佐、奈率己連、奈率用哥多等、朝於日本。詔曰、早建任那。又津守連奉勅問成任那。故遣召之。當復何如能建任那。請各陳謀。吉備臣、任那旱岐等曰、夫建任那國、唯在大王。欲冀遵王倶奏聽勅。聖明王謂之曰、任那之國、與吾百濟、自古以來、約爲子弟。今日本府印岐彌（謂在任那日本臣名也。）既計新羅、更將伐我。又樂聽新羅虛誕謾語也。夫遣印岐彌於任那者、本非侵害其國。（未詳。）往古來今、新羅无道、食言違信、而滅卓淳。股肱之國、欲快返悔。故遣召到、倶承恩詔、欲冀興繼任那之國、猶如舊日、永爲兄弟。竊聞、新羅安羅兩國之境、有大江水。要害之地也。吾欲據此脩繕六城。謹請天皇三千兵士、毎城充以五百、幷我兵士、勿使作田而逼惱者、久禮山之五城、庶自投兵降首。卓淳之國、亦復當興。所請兵士、吾給衣粮。欲奏天皇、其策一也。猶於南韓置郡令城主者、豈欲違背天皇、遮斷貢調之路。唯庶克濟多難、殲撲強敵。凡厥凶黨、誰不謀附。

百濟自言也欲快返悔は報恨于新羅也とあれど兩說共によく通ぜず
○大江水、洛東江を云
○六城、北本六の下に地の字あり
○作田而逼惱、六城を守る兵士をして作田の爲に逼惱せしむることなく專ら防禦に當らしむれば久禮山五城の兵は自ら投降すべしとの意なるべし集解に令新羅不得耕也とあるはいかゞ此句も尙よく考ふべし
○久禮山、繼體紀二十四年に見ゆ
○降首、後漢書西域傳注に首猶服也とあり
○北敵、原本北を此に作る北本楓本中本に據て改む北敵は高麗なり
○奏於天皇、奏の上恐らくは欲の字を脫す
○此誠云々、以下十六字吳志胡綜傳に出づ
○佐度島、原本度を渡に作る北本に據て改む當時佐度嶋は越國に屬し越前越中越後分國の後も尙越後に屬す
○御名部、佐渡志に加茂郡南片部村に充てたれど吉田氏の說に同島最北端

北、敵強大、我國微弱。若不置南韓郡領城主、脩理防護、不可以禦此強敵。亦不可以制新羅。故猶置之、攻逼新羅、撫存任那。若不爾者、恐見滅亡、不得朝聘。欲奏天皇、其策二也。又吉備臣、河內直、移那斯、麻都、猶在任那國者、天皇雖詔建成任那、不可得也。請移此四人、各遣還其本邑。奏於天皇、其策三也。宜與日本臣、任那旱岐等、倶奉遣使、同奏天皇、乞聽恩詔。於是吉備臣、旱岐等曰、大王所述三策、亦協愚情而已。今願歸以敬諮日本大臣、（謂在任那日本府之大臣也。）安羅王、加羅王、倶遣使同奏天皇。此誠千載一會之期、可不深思而熟計歟。十二月、越國言、於佐度嶋北御名部之碕岸、有肅愼人、乘一船舶而淹留。春夏捕魚充食。彼嶋之人、言非人也。亦言鬼魅、不敢近之。嶋東禹武邑人、採拾椎子、爲欲熟喫。著灰裏炮。其皮甲化成二人、飛騰火上一尺餘許。經時相鬪。邑人深以爲異、取置於庭。亦如前飛、相鬪不已。有人占云、是邑人必爲魅鬼所迷惑。不久如言被其抄掠。於是肅愼人移就瀨波河浦。浦神嚴忌、人不敢近。渴飲其水、

死者且半、骨積於巖岫、俗呼肅愼隈也、

(乙丑)六年春三月、遣膳臣巴提便、使于百濟、夏五月、百濟遣奈率其㥄、奈率用歌多、施德次酒等上表、秋九月、百濟遣中部護德菩提等、使于任那、贈吳財於日本府臣及諸旱岐、各有差、是月、百濟造丈六佛像、製願文曰、蓋聞、造丈六佛、功德甚大、今敬造、以此功德、願天皇獲勝善之德、天皇所用彌移居國、俱蒙福祐、又願普天之下、一切衆生、皆蒙解脫、故造之矣、冬十一月、膳臣巴提便還自百濟言、臣被遣使、妻子相逐去、行至百濟濱、濱海濱也 日晚停宿、小兒忽亡、不知所之、其夜大雪、天曉始求、有虎連跡、臣乃帶刀擐甲、尋至巖岫、拔刀曰、敬受絲綸、劬勞陸海、櫛風沐雨、藉草班荊者、爲愛其子、令紹父業也、惟汝威神、愛子一也、今夜兒亡、追蹤覓至、不畏亡命、欲報故來、既而其虎進前、開口欲

の鷲崎願浦なりと云

○肅愼、朝鮮の東北卽ち今の滿洲吉林省及露領沿海洲の地に古へ在りし國の名にて周代に肅愼と云ひ漢代には挹婁、隋唐の代に靺鞨、遼代に女眞と稱す續紀八養老四年に遣渡島津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國觀其風俗又多賀城碑にも去靺鞨國界三千里と見ゆ　○禹武邑、釋紀に禹武邑者羽茂郡也佐渡志に禹武は羽茂に轉じ今は又ハモチと讀換たるなりと云るを吉田氏の說に舊加茂郡梅津のウメはウモの轉にて同地なりと云り　○瀨波河、原本波の字なし北本中本に據て補ふ

○浦神、式に佐渡國羽茂郡渡津神社(現に國幣小社)あり釋紀に浦神若此度津神社歟と云ひ吉田氏は阿津久志彦神社なりと云　○嚴忌、イチハヤシは稜威速の義靈威の速なるを云

【六年】遣膳臣巴提便、天書に百濟援兵を請ひしに依て巴提便を遣すとあり便を使に作る

○奈率、原本率を卒に作る北本中本に據て改む下同じ

○其㥄、楓本㥄を捘に作り七年紀に己連とあり

○用歌多、北本及釋紀歌を奇に作る下同じ

○造丈六佛像、觀佛三昧經に釋迦牟尼佛身長丈六圓光七尺とあり一丈六尺の釋迦の像なりホトケは梵語佛陀の轉、ケは韓語を添たるものならむと云 祖庭事苑に浮圖梵語佛陀或云浮圖或云部多或云母馱或沒陀皆五天語今並譯爲覺とあり

○願文、コトチカヒ文とあり立願の趣旨を述べたる文

○功德、僧尼令義解に謂修善也又修營功德之條に謂書寫經典莊嚴佛像之類也とあり

○甚大、オキロはオキは奧ロは助辭幽深の意

○勝善之德、原本勝を膳に作る北本中本及紀略に據て改む勝れて善き德を云

○一切衆生、シカシナガラはサナガラと云に同じく有の盡くと云が如し　○解脫、飜譯名義集に心得自在不爲不能所縛故曰解脫とあり煩惱を脫がるれば心自ら安し故に其意を得てヤスラカナリと訓り　○虎、抄毛群部に虎說文云虎(乎古反止良)山獸之君也箋注に按宣四年左傳云楚人謂虎於菟方言虎江淮南楚之間或謂之於䖘王念孫曰今江南山邊呼虎爲䖘則知於䖘之於發語然則和名止良之止卽䖘良助語也とあり言海に朝鮮語ならむと云　○擐甲、擐は字書に貫也とあり甲を身に著くるを云　○絲綸、文選齊竟陵王文宣王行狀に絲綸允緝、注に善曰禮記(緇衣)曰王言如絲其出如綸翰曰絲綸天子之言也とあり　○劬勞、毛詩邶風凱風の傳に劬勞病苦也とあり　○櫛風沐雨、魏志鮑勛傳に出づ風に髮を櫛けづり雨に頭を洗ふを云倭訓栞にゆするはゆすぐに同じと云ひ字書に沐は濯髮也とあり　○藉草、原本藉を籍に作る北本中本に據て改む字書に身之所依曰藉とありシキモノ、シクと訓り班と相對してマクラと訓り　○班荊、左傳襄廿六年に出づ杜注に班布也とありシクと訓り　○威神、萬葉十六に韓國乃虎云神乎生取爾八頭取持來と見ゆ

○(注)細群麁群、詳ならず　○官門、北本中本宮門に作る　○狛國香岡上王、狛は高麗なり國香岡の國の字は原本鵠に作る中本及釋紀に據て改む北本には國の字なし三國史記に廣開土王好太王碑には國岡上廣開土境平安好太王とあり朱蒙十七世の孫なり

噬、巴提便忽申左手、執其虎舌、右手刺殺、剝取皮還、是歲、高麗大亂被誅殺者衆、

百濟本記云、十二月甲午、高麗國細群與麁群、戰于官門、伐鼓戰鬭、細群敗不解兵三日、盡捕誅細群子孫、戊戌、狛國香岡上王薨也、

(丙寅)七年春正月甲辰朔丙午、百濟使人中部奈率己連等罷歸、仍賜以良馬七十匹、船一十隻、夏六月壬申朔癸未、百濟遣中部奈率掠葉禮等獻調、秋七月、倭國今來郡言、於五年春、川原民直宮名登樓騁望、乃見良駒、紀伊國漁者貢贄草馬之子也、睨影高鳴、輕超母脊、就而買取、襲養兼年、及壯鴻驚龍翥、別輩越群、服御隨心、馳驟合度、超渡大內丘之壑十八丈焉、川原民直

【七年】己連、上に出し其㥄なり

○一十隻、原本隻を雙に作る北本中本に據て改む

○今來郡、坂上系圖所引姓氏錄廿三阿智王奏建今來郡後改號高市郡とあり

○川原、高市郡高市村大字川原

○民直、錄和泉神別に民直天兒屋根命之後也又天穗日命十七世孫若桑足尼之後也と見ゆ

○(注)紀伊國云々、集解に紀伊以下十二字原爲注蓋轉寫者偶或脫字因補爲小書耳と云て本文とす
○草馬、字書に牝馬也とあり抄牛馬部に牝馬一名騲馬上音草和名米萬と見ゆ
○睍影高鳴、文選赭白馬賦に出づ注に睍視也馬有視影高鳴者良馬也とあり　○襲養兼年、同賦序に出づ注に襲受也とあり　○鴻驚云々、以下合度までは同賦及序中の句、原文隨心馳驟を順志馳驟に作る纛は字書に飛擧也とあり　○大內丘、大和國高市郡、諸陵式に檜隈大內陵と見え檜隈の內なり今畝傍町大字五條野なりと云北本丘を岳に作る　○檜隈邑、高市郡檜前鄉是なり　○二千餘、通釋考本に據て餘の下人の字を補ふ　○(注)中夫人、オリケは杜氏通典に百濟王號於羅瑕夏言王也王妻號於陸夏言妃也とあり　○世子、マカリトモも韓語なるべし
【八年】德率、百濟第四品の官
【九年】眞慕、原本眞を直に作る北本及上文に據て改む
○杆率、百濟第五品の官
○喜慶、原本喜を嘉に作る北本に據て改む
○馬津城、文献備考に馬津縣本孤山按今禮山縣百濟時號烏山斯羅改名孤

宮檜隈邑人也、是歲、高麗大亂、凡鬪死者二千餘、

百濟本記云、高麗以正月丙午、立中夫人子為王、年八歲、狛王有三夫人、正夫人無子、中夫人生世子、其舅氏麁群也、小夫人生子、其舅氏細群也、及狛王疾篤、細群麁群各欲立其夫人之子、故細群死者二千餘人也、

(丁卯)八年夏四月、百濟遣前部德率眞慕宣文、奈率哥麻等、乞救軍、仍貢下部東城子言、代德率汶休麻那、

(戊辰)九年春正月癸巳朔乙未、百濟使人前部德率眞慕宣文等請罷、因詔曰、所乞救軍、必當遣救、宜速報王、夏四月壬戌朔甲子、百濟遣中部杆率掠葉禮等奏曰、德率宣文等奉勅至臣蕃曰、所乞救兵、應時遣送、祇承恩詔、喜慶無限、然馬津城之役(正月辛丑、高麗率衆圍馬津城、)虜謂之曰、由安羅國與日本府、招來勸罰、以事准況、寔當相似、然三廻欲審其言、遣召、而並不來、

山とあれど三國史記百濟本記に聖王廿六年春正月高勾麗王平成與濊謀攻漢北獨山城とあり此獨山城なるべし其地詳ならざれど今の京城に近き所ならむか
○(注)正月辛丑、集解此上に一本云の三字を補ふ
○准況、字書に准は比照之意況は譬也とあり
○三廻、集解に其言の下にあり
○當復何如、原本此下に消息何如の四字あり北本に據て削る
○策勵、通證に倒置なるべしと云
○得爾辛、詳ならず馬津城の附近か
【十年】將德、百濟第七品の官位
○久貴、原本久を文に作る北本に據て改む
○延那斯、上文に移那斯とあり
【十一年】(注)阿比多率三叔舟、原本率を卒に作り叔の字なし北本中本に據て補訂す叔は中イ本姘に作る三以下誤あるべし
○將德、北本施德に作る
○大市頭、未詳、錄左京

故深勞念、伏願、可畏天皇(西蕃皆稱日本天皇、為可畏天皇、)先為勘當、暫停所乞救兵、待臣遣報、詔曰、式聞呈奏、爰覿所憂、日本府與安羅、不救隣難、亦朕所疾也、又復密使于高麗者、不可信也、朕命即自遣之、不命何容可得、願王開襟緩帶、恬然自安、勿深疑懼、宜共任那、依前勅、戮力俱防北敵、各守所封、朕當遣送若干人、充實安羅逃亡空地、六月辛酉朔壬戌、遣使詔于百濟曰、德率宣文取歸以後、當復何如、朕聞汝國為狛賊所害、宜共任那策勵、同謀如前防距、閏七月庚申朔辛未、百濟使人掠葉禮等罷歸、冬十月、遣三百七十人於百濟、助築城於得爾辛、

(己巳)十年夏六月乙酉朔辛卯、將德久貴、固德馬次文等請罷歸、因詔曰、延那斯、麻都、陰私遣使高麗者、朕當遣問虛實、所乞軍者、依願停之、

(庚午)十一年春二月辛巳朔庚寅、遣使詔于百濟曰、(百濟本記云、三月十二日辛酉、日本使人阿比多率三舟、來至都下、)朕依將德久貴、固德馬進文等所上表意、一一教示、如視掌中、思欲具情、冀將盡抱、大市頭歸後、如常無異、今但欲審報辭、故遣使之、又

蕃別に大市首用明紀二年に大市造等見ゆれば姓か通證に一說市當作刀浣水續談古詩大刀頭註大刀頭鐶還也歸字疑衍旁註誤入本文者蓋大刀頭後如常無異四字爲句言使人還後王無恙耶とあり　○又復朕聞、朕の字は北本中本に據て補ふ　○矢卌具、類聚三代格に以十隻爲一具、兵庫式に五十隻爲一具とあり　○王人、公羊傳莊六年に出づ王命を含みて四方に使する人を云　○(注)百濟本記、原本記を紀に作る北本中本に據て改む　○延那斯、原本延を近に作る北本に據て改む　○(注)皆攻爾林云々、爾林は顯宗紀三年（卷上三〇二頁）に出づ禽は原本會に作る北本中本に據て改む　○施德、原本施を他に作る北本楓本中本に據て改む　【十二年】麥種、種とあれば食糧にはあらず種子として賜はりしなり　○斛、楓本中本にサカと訓み北本にはツカと訓り顯宗紀二年（卷上三〇一頁）に見ゆ　○往伐高麗、三國史記新羅本紀眞興王十二年に命居柒夫等侵高句麗乘勝取十郡とあり　○漢城、南漢山城にて今の京畿道廣州の地なり　○平壤、北漢山城にて今の京城なり　○遂復故地、遂の字は北本中本に據て補ふ　【十三年】箭田珠勝大兄皇子、天皇の第一皇子元年紀に出づ　○河内部、通證に蓋日本府河内直之部屬と云り

復朕聞、奈率馬武是王之股肱臣也、納上傳下、甚協王心、而爲王佐、若欲國家無事、長作官家、永奉天皇、宜以馬武爲大使、遣朝而已、重詔曰、朕聞、北敵強暴、故賜矢卅具、庶防一處、夏四月庚辰朔、在百濟日本王人方欲還之、〔百濟本記云、四月一日庚辰、日本阿比多還也、〕百濟王聖明謂王人曰、任那之事奉勅堅守、延那斯麻都之事、問與不問、唯從勅之、因獻高麗奴六口、別贈王人奴一口、〔皆攻爾林所禽奴也、〕乙未、百濟遣中部奈率皮久斤、下部施德灼干那等、獻狛虜十口、

(辛未)十二年春三月、以麥種一千斛賜百濟王、是歲、百濟聖明王親率衆及二國兵〔二國謂新羅任那也、〕往伐高麗、獲漢城之地、又進軍討平壤、凡六郡之地、遂復故地、

(壬申)十三年夏四月、箭田珠勝大兄皇子薨、五月戊辰朔乙亥、百濟加羅安羅遣中部德率木劦今敦、河內部阿斯比多等奏曰、高麗與新羅通和并勢、謀滅臣國與任那、故謹求請救兵、先攻不意、軍之多少、隨天皇勅、詔曰、今百濟王安羅王加羅王、與日本府臣等、俱遣使奏狀聞訖、亦宜共任那并心一力、猶尚若茲、必蒙上天擁護之福、亦賴可畏天皇之靈也、冬十月、百濟聖明王〔更名聖王、〕遣西部姬氏達率怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷、別表讚流通禮拜功德云、是法於諸法中最爲殊勝、難解難入、周公孔子尚不能知、此法能生無量無邊福德果報、乃至成辨無上菩提、譬如人懷隨意寶、逐所須用、盡依情、此妙法寶亦復然、祈願依情無所乏、且夫遠自天竺、爰洎三韓、依教奉持、無不尊敬、由是百濟王臣明謹遣陪臣怒唎斯致契、奉傳帝國、流通畿內、果佛所記我法東流、是日、天皇聞已歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未曾得聞如是微妙之法、然朕不自決、乃歷問群臣曰、西蕃獻佛相貌端嚴、全未曾看、可禮以不、蘇我大臣稻目宿禰奏曰、西蕃諸國一皆禮之、豐秋日本豈獨背也、物部大連尾輿、中臣連鎌子同奏曰、我國家之

○冬十月、一代要記此下に十三日辛酉の五字あり　○西部姬氏達率、西部は部曲の名姬氏は通證に乃所出之本姓とあり達率は百濟第二品の官　○釋迦佛金銅像、飜譯名義集に本起經飜釋迦爲能仁とあり金銅像とは金と銅とを和ぜて鑄造せるを云　○幡蓋、抄調度部伽藍具に幡を波太、蓋を岐沼加散と訓り　○經論、佛經祖論に聖哲彝訓曰經述經敍理曰論とありて經は經典論は釋氏要覽に有二論一宗論卽宗大小乘經造也二釋論釋大小乘經也とあり　○是法於諸法中云々、以下四十二字は金光明最勝王經如來壽量品に據れり　○菩提、飜譯名義集に道之極者稱曰菩提とあり　○譬如人懷隨意寶云々、楞嚴經に據れり　○天竺、唐書西域傳に天竺國漢身毒國也或曰摩伽陀曰婆羅門とあり印度を云　○陪臣、百濟は我國に臣として仕へり其臣なれば

○陪臣と云　○怒唎斯致契、契は北本楓本及上文に據て補ふ　○帝國、此文字始て見ゆ　○果佛所記云々、大般若經難聞功德品に甚深般若波羅密多我滅度已後時後分後五百歲於東北方當廣流布云々とあり通釋に記を傍訓によりて說に改むも是なるが如し敷田氏の說に此上表百十九字は恐らくは推古天皇後に追作たるものなるを親王（舍人親王）是を信じ眞の上表ならむと撰入たる事こそ疑はしけれ此表中に是法云々とあるは最勝王經の語なるが此經は唐にて譯せしものなり此十三年は唐の初代より數へても六十五年前なれば其語の表中にあるべき理なし云々とさて佛敎の支那に入りしは後漢明帝永平十年にて本年に至るまで四百八十八年其百濟に入りしは枕流王元年（東晉太元九年）仁德天皇七十二年にて欽明天皇十三年より百八十餘年以前なり　○從昔來、集解來の上に以の字を補ふ　○歷問、トナメテは問並めてなり　○端嚴、北本嚴を麗に作る　○豐秋日本、大日本豐秋津洲を漢譯したるなり　○中臣連鎌子、中臣系譜に天兒屋根命十七世の孫鎌大夫公あり是なるべし子は方子國子御食子など世々此家の通稱となれり故に鎌足をも鎌子と云り　○天地社稷百八十神、天地社稷にてアマツヤシロクニツヤシロと訓べし百八十神は汎數にて正數にはあらず當時神祇官に祭り官幣に預りし座數なりしにやと云說あれど然らずこゝはたゞおほらかに官にて祭らせ給ふ總ての天津社國津社を指奉りてかく申せるなり　○祭拜爲事、祭は神祇令及延喜式等に載する四時の祭祀を云天社國社を定め四時に之を祭祀し給ふを以て重要なる事と爲給ふを云禁中作法先神事後他事と禁祕御抄に記させ給ひしは是なり　○蕃神、隣國の神の意卽ち佛を云　○小墾田、大和國高市郡　○懃脩出世業、略記及濫觴抄懃を勤に作り世の下に之の字あり是なるに似たり　○淨捨、通證に當訓須且と云　○向原家、大和志に高市郡廣嚴寺在豐浦村舊作向原又名豐浦寺と見ゆ寺址今飛鳥村大字豐浦にあり　○爲寺、テラは韓語なり　○不遠而復、易復卦の象に初九不遠復无祇悔元吉とあり一度之を失ふも久からずして元に復するを云　○難波堀江、通證に寺島氏曰豐浦寺東飛鳥川西也といひ平氏傳雜勘文抄にも其事見ゆれど尙攝津國の難波堀江ならむと思はるよく考ふべし　○伽藍、飜譯名義集に僧伽藍譯爲衆園僧史略云爲衆人園圃園圃生植之所佛弟子則生殖道芽聖果也とあり

王天下者、恒以天地社稷百八十神、春夏秋冬、祭拜爲事、方今改拜蕃神、恐致國神之怒、天皇曰、宜付情願人稻目宿禰試令禮拜、大臣跪受而忻悅、安置小墾田家、懃脩出世業爲因、淨捨向原家爲寺、於後國行疫氣、民致夭殘、久而愈多、不能治療、物部大連尾輿、中臣連鎌子、同奏曰、昔日不須臣計、致斯病死、今不遠而復、必當有慶、宜早投棄、懃求後福、天皇曰、依奏、有司乃以佛像、流棄難波堀江、復縱火於伽藍、燒燼更無餘、於是天無風雲、忽災大殿、是歲、百濟棄漢城與平壤、新羅因此入居漢城、今新羅之牛頭方、尼彌方也、地名未詳

【十四年】

○中部德率木劦今敦、原本德を杆に作る釋紀及上文に據て改む　○戊辰朔、通證に當作壬戌朔戊辰七日也とあり　○泉郡、當時和泉國は河內國に屬す　○茅渟海、古は和泉日根大鳥の三郡に亘て茅渟と云り　○梵音、歌讃の聲なり法苑珠林に魏陳思王曹子建游魚山忽聞空中梵天之音乃摹其節寫爲梵唄梵音玆爲始也と見ゆ　○溝邊直、姓氏錄に見えず右京諸蕃に雲梯（ウナテ）連寶德公之後也と見ゆれど是とは別なるべし　○吉野寺、編年記に現光寺字檜曾、大和志に吉野郡比蘇寺池田莊比曾村一名現光寺又名吉野寺と見ゆ元亨釋書に此寺を聖德太子の建立とす　○內臣、錄大和皇別に內臣孝元天皇皇子彥太忍信命之後也とあり　○同船、皇極紀元年の訓注にも同船母慮紀舟とあ

十四年（癸酉）春正月甲子朔乙亥、百濟遣上部德率科野次酒、杆率禮塞敦等、乞軍兵、戊寅、百濟使人中部德率木劦今敦、河內部阿斯比多等罷歸、夏五月戊辰朔、河內國言、泉郡茅渟海中有梵音、震響若雷聲、光彩晃曜如日色、天皇心異之、遣溝邊直（此但曰直、不書名字、蓋是傳寫誤失矣、）入海求訪、是月、溝邊直入海、果見樟木浮海玲瓏、遂取而獻天皇、命畫工造佛像二軀、今吉野寺放光樟像也、六月、遣內臣（闕名）使於百濟、仍賜良馬二疋、同船二隻、弓五十張、箭五十具、勅云、所請軍者、隨王所須、別勅、醫博士、易博士、曆博士等、宜依番上下、今上件色人、正當相代年月、宜付還使相代、又卜書、曆本、種種藥物、可付送、秋七月辛酉朔甲子、幸樟勾宮、蘇我大臣稻目宿禰奉勅、遣王辰爾數錄船賦、卽以王辰爾爲船長、因賜姓爲船史、今船連之先也、八月辛卯朔丁酉、百濟遣上部奈率科野新羅、下部固德汶休帶山等上表曰、去年臣等同議、遣內臣德率次酒、任那大夫等奏海表諸彌移居之事、伏待恩詔、如春草之仰甘雨也、今年忽聞、新羅與狛

り抄舟車部に游艇を波師不爾と訓り同は字書に艑音同或作䑼（短船）とあれば此の字の意にて用ひしか
○醫博士、職員令典藥寮に醫博士一人掌諸藥方脈經教授醫生等とあり職掌略之に類せしなるべし
○易博士、令制（陰陽寮）の陰陽博士に類せしものなるべし
○曆博士、職員令陰陽寮に曆博士一人掌造曆及教曆生等とあり
○依番上下、職務の繁閑と人數の多少に依て當番を定めて奉仕するを云
○今、原本令に作る北本中本及釋紀に據て改む
○卜書曆本、支那の卜筮及曆の書なりコヨミは倭訓栞に日讀の義二日三日と數へて其事を考へ見るものなれば名させりタメシは俗に事の手本なごいふ是也とあり卜占は神代より存し曆法も古くより固有のものありしかご參考の爲に獻らしめ給ひしなり
○樟勾宮、所在未詳
○王辰爾、續紀四十延曆

國通謀云、百濟與任那頻詣日本、意謂是乞軍兵伐我國歟、事若實者、國之敗亡可企踵而待、庶先日本軍兵未發之間、伐取安羅絶日本路、其謀若是、臣等聞茲深懷危懼、卽遣疾使輕舟馳表以聞、伏願天慈速遣前軍後軍相續來救、逮于秋節以固海表彌移居也、若遲晩者噬臍無及矣、所遣軍衆來到臣國、衣糧之費臣當充給、來到任那亦復如是、若不堪給、臣必助充、令無乏少、別的臣敬受天勅來撫臣蕃、夙夜乾乾勤修庶務、由是海表諸蕃皆稱其善、謂當萬歲肅淸海表、不幸云亡、深用追痛、今任那之事誰可修治、伏願天慈速遣其代以鎭任那、又復海表諸國甚乏弓馬、自古迄今受之天皇、以禦强敵、伏願天慈多貺弓馬、冬十月庚寅朔己酉、百濟王子餘昌（明王子威德王也）悉發國中兵向高麗國、築百合野塞、眠食軍士、是夕觀覽、鉅野墳腴、平原瀰迤、人跡罕見、犬聲蔑聞、俄而儵忽之際、聞鼓吹之聲、餘昌乃大驚打鼓相應、通夜固守、凌晨起見、曠野之中、覆如靑山、旌旗充滿、會明有著頸鎧者一

九年六月津守連眞道等上表言應神天皇命上毛野氏遠祖荒田別使於百濟搜聘有識者國主貴須王恭奉使旨擇採宗族遣其孫辰孫王隨使入朝天皇嘉焉以爲皇太子之師矣仁德天皇以辰孫王長子太阿郎王爲近侍太阿郎王子亥陽君亥陽君子午定君午定君生三男長子味沙仲子辰爾季子麻呂從此而別始爲三姓各因所職以命氏（節略）と見ゆ
○船長、職員令に主船司正一人掌公私舟檝及舟具事とある是なるべし　○船連、天武天皇十二年船史に連の姓を賜ふ　○新羅、正月乙亥の條に科野次酒とあり音近きに由て誤れるか新羅の二字は疑はし　○固德、原本固を因に作る北本中本に據て改む　○通謀云、集解に云を曰に改作る　○企踵、文選劇秦美新の注に企擧也踵足也とあり　○噬臍、左傳莊六年注に若齧腹齊（與臍通）喩不可及とあり　○軍兵、軍の字は北本に據て補ふ　○的臣、仁德紀十二年に見ゆ　○乾々、易乾卦に出づ字書に自强不息貌とあり　○速遣、原本速を連に作る北本中本に據て改む　○（注）威德王、原本威を盛に作る北イ本及下文に據て改む　○百合野塞、三國史記に此事見えず十五年十月高勾麗熊川城（公州）を攻めし事見えたれば其誤かよく考ふべし百合野塞は詳ならざれご公州附近なるべし　○鉅野、鉅は字書に與巨同大也とあり　○墳腴、墳は字書に土膏肥也とあり　○瀰迤、文選蕪城賦の注に瀰（與瀰同）相連漸平之貌とあり迤は字書に與池同地勢斜延曰迤と見ゆ　○蔑聞、蔑は字書に無也とあり　○頸鎧、說文に鏂鍜頸鎧也釋紀に頸鎧者俗號與多利加氣之物也とあり　○插鐃、鐃は說文に小鉦也軍法卒長執鐃とあり　○（注）鐃字未詳、此四字釋紀に私記曰可削委解別記とあり　○珥豹尾、珥は字書に插也とあり豹は原本狗に作る北本に據て改む抄毛群部に豹似虎而圓文者也日本紀私記云奈賀豆可美と見ゆ　○與吾、北本楓イ本に與の下德の字あり　○問答者、集解に答の字を客に改む通釋は者は其字の誤にあらざるかと云　○杆率、第五品の官　○標、字書に旌旗也とあり　○東聖山、詳ならず

【十五年】曰佐、錄山城皇別に武内宿禰之後也欽明天皇御世率同族四人國民三十五人歸化天皇務以其遠來勅稱珍勳

騎、插鐃者（鐃字未詳）二騎、珥豹尾者二騎、幷五騎、連轡到來問曰、小兒等言、於吾野中客人有在、何得不迎禮也、今欲早知與吾可以禮問答者姓名年位、餘昌對曰、姓是同姓、位是杆率、年廿九矣、百濟反問、亦如前法而對答焉、遂乃立標而合戰、於是百濟以鉾刺墮高麗勇士於馬斬首、仍刺擧頭於鉾末、還入示衆、高麗軍將憤怒益甚、是時百濟歡叫之聲可裂天地、復其偏將打鼓疾鬪、追却高麗王於東聖山之上、

十五年（甲戌）春正月戊子朔甲午、立皇子渟中倉太珠敷尊爲皇太子、丙申、百濟遣中部木劦施德文次、前部施德曰佐分屋等於筑紫、諮內臣佐伯連

臣爲三十九人之譯時人號曰譯氏云々とあり中本水訂本曰を日に作る
○閏月、集解に按十四年十一月とあり
○來年、原本今年に作る北本に據て改む
○營壁、壁は字書に軍壘也とあり
○奉聞、原本聞奉に作る北本に據て改む
○來詣、原本來を未に作る北本中本に據て改む
○令遣、原本令を命に遣を遺に作る北本中本に據て改む
○前番奈率東城子言、本紀八年に百濟より貢する所なり
○曇惠、諸本惠を慧に作る
○採藥師、職員令典藥寮に藥園師掌知藥性色目種採藥園諸草及教藥園生とあり
○樂人、職員令雅樂寮に百濟樂師四人とあり其四人は笛師箜篌師莫目師儛師なり
○施德三斤、原本施の字なし北本中本に據て補ふ
○汶斯干奴、北本干を于に作る
○斯羅、北本楓本斯を新

等曰、德率次酒、杆率塞敦等、以去年閏月四日到來云、臣等（臣等者、謂內臣也、）以來年正月到、如此噵而未審來不也、又軍數幾何、願聞若干、預治營壁、別諮、方奉聞可畏天皇之詔、來詣筑紫看送賜軍、聞之歡喜無能比者、此年之役甚危於前、願遣賜軍使逮正月、於是內臣奉勅而答報曰、即令遣助軍數一千、馬一百疋、船四十隻、二月、百濟遣下部杆率將軍三貴、上部奈率物部烏等、乞救兵、仍貢德率東城子莫古、代前番奈率東城子言、五經博士王柳貴代固德馬丁安、僧曇惠等九人代僧道深等七人、別奉勅貢易博士施德王道良、曆博士固德王保孫、醫博士奈率王有㥄陀、採藥師施德潘量豐、固德丁有陀、樂人施德三斤、季德己麻次、季德進奴、對德進陀、皆依請代之、三月丁亥朔、百濟使人中部木刕施德文次等罷歸、夏五月丙戌朔戊子、內臣率舟師詣于百濟、冬十二月、百濟遣下部杆率汶斯干奴上表曰、百濟王臣明及在安羅諸倭臣等、任那諸國旱岐等奏、以斯羅無道、不畏天皇、與狛同心、欲殘

に作る斯羅卽ち新羅なり
○有至臣、釋紀に私記曰案假名本作內臣とあり通釋に此五字衍文次の天皇遣有至臣の紛れ入りしものなるべしと云るは然るべし
○東方領、百濟の東方を領り掌る職なり
○莫哥武連、北本哥を奇に作る
○函山城、函山は下文に久陀牟羅塞とある久陀牟羅に同じ三國史記に管山城とあり忠淸北道沃川地方なり
○竹斯物部、竹斯は原本筑紫に作る北本中本に據て改む百濟にて筑紫を竹斯と書きし事下文にも竹斯嶋とあるにて明なり筑紫物部は舊事紀に筑紫聞物部同贄田物部見ゆ莫奇委沙奇は詳ならず
○火箭、魏志諸葛誕傳に臨高以發石車火箭逆燒其攻具とあり國史に於ては此に始て見ゆ三才圖會に火箭施火藥於箭者とあれど詳ならず
○酉時、今の午後六時
○單使、其事のみに就ての使を云
○竹斯嶋上、竹斯は筑紫

滅海北彌移居、臣等共議遣有至臣等仰乞軍士征伐斯羅、而天皇遣有至臣、帥軍以六月至來、臣等深用歡喜、以十二月九日遣攻斯羅、臣先遣東方領物部莫哥武連、領其方軍士攻函山城、有至臣所將來民、竹斯物部莫奇委沙奇能射火箭、蒙天皇威靈、以月九日酉時焚城拔之、故遣單使馳船奏聞、別奏、若但斯羅者、有至臣所將軍士亦可足矣、今狛與斯羅同心戮力、難可成功、伏願速遣竹斯嶋上諸軍士、來助臣國、又助任那、則事可成、又奏、臣別遣軍士萬人助任那、幷以奏聞、今事方急、單船遣奏、但奉好錦二疋、𣰰𣯍一領、斧三百口、及所獲城民男二女五、輕薄追用悚懼、餘昌謀伐新羅、耆老諫曰、天未與、懼禍及、餘昌曰、老矣何怯也、我事大國、有何懼也、遂入新羅國、築久陁牟羅塞、其父明王憂慮餘昌長苦行陣、久廢眠養、父慈多闕、子孝希成、乃自往迎慰勞、新羅聞明王親來、悉發國中兵、斷道擊破、是時新羅謂佐知村飼馬奴苦都（更名谷智）曰、苦都賤奴也、明王名主也、今使賤奴殺名主、冀傳後世莫忘於口、已而苦都乃獲明王、再拜曰、請斬王首、明王對

嶋上は嶋のほとりなるべし嶋を筑前斯摩郡とした説あれど採り難し　○單船、原本單を草に作る北本中本に據て改む單は單使の單に同じ　○毾㲪、北本中本に毾㲪に作る釋紀に私記曰案假名本作織氈氈玉篇云毛爲席また抄調度部坐臥具に氈（賀毛）毛席撚毛爲席也と見え毛を以て作れる席なり傍訓アリカモとあれど中本にはチリカモとも訓り天武紀の訓を併考るにオリカモと訓む方よきか　○一領、ヒトキは一匹（ヒトヒキ）なるべしと通釋にいへどいかゞあらむキの義未詳　○追用悚懼、通證に以上表文今按此下疑有脱簡と云り　○大國、北史倭國傳に新羅百濟皆以倭爲大國と見ゆ　○久陁牟羅塞、上に見ゆる函山城の附近に築きしものなるべし　○行陣、原本陣を陳に作る諸本に據て改む　○佐知村、三國史記に三年山郡とあるに同じきか三年山郡は忠淸北道報恩地方　○苦都、三國史記に高于都刀とあり　○已而、原本已を卯に作る通釋に據て改む　○入骨髓、原本入を人に作る北本中本に據て改む　○顧、原本願に作る北本中本に據て改む　○明王云々延首受斬、此事三國史記百濟本紀に聖王三十二年七月王欲襲新羅親帥歩騎五十夜至狗川新羅伏兵發與戰爲乱兵所害薨とあり同新羅本紀には眞興王十五年七月修築明活城百濟王明襛與加良來攻管山城軍主角干于德伊飡耽知等逆戰失利新州軍主金武力以州兵赴之及交戰裨將三年山郡高于都刀急擊殺百濟王於是諸軍乘勝大克之斬佐平四人卒二萬九千六百人匹馬無反者と見ゆ　○掘坎、原本掘を堀に作る北本中本に據て改む　○（注）都堂、唐制尙書省（我太政官）の正中の廳を都堂と稱す之に據て名けしなるべし　○遑駭、遑は字書に急也又後漢書に諸郡遑急と見え注に急迫は驚懼也とあり依てアハテと訓す　○筑紫國造、孝元紀七年に出づ大彦命の後なり　○占擬、字書に占は視也擬は度也謂揣度以待也とあり　○鞍前後橋、雄略紀九年に出づ　○被甲領會、著たる甲の領

曰、王頭不合受奴手、苦都曰、我國法、違背所盟、雖曰國王、當受奴手、（一本云、明王乘踞胡床、解授佩刀於谷知、令斬、）明王仰天大息涕泣、許諾曰、寡人毎念、常痛入骨髓、顧計不可苟活、乃延首受斬、苦都斬首而殺、掘坎而埋、（一本云、新羅葬理明王頭骨、而以禮送餘骨於百濟、今新羅王埋明王骨於北廳階下、名此廳曰都堂、）餘昌遂見圍繞、欲出不得、士卒遑駭、不知所圖、有能射人筑紫國造、進而彎弓占擬、射落新羅騎卒最勇壯者、發箭之利、通所乘鞍前後橋、及其被甲領會也、復續發箭如雨、彌厲不懈、射却圍軍、由是餘昌及諸將等、得從間道逃歸、餘昌讃國造射却圍軍、尊而名曰鞍橋君、（鞍橋、此云短羅賦、）於是新羅將等、具知百濟疲盡、遂欲謀滅無餘、有一將云、不可、日本天皇、以任那事、屢責吾國、況復謀滅百濟官家、必招後患、故止之、

會なり領會は中本にシキアハセと訓み事跡抄に鐙ノ引合也冑ト云ハ悪シと云中本に會を冑に講述抄に冑に作るに據りて領冑なりと云る説あれど冑に領と云こと例なく北本楓本共に會とあれば原本に據れり　○彌厲不懈、原本厲を屬に作る北本楓本中本に據て改む厲は字書に嚴也又烈也猛也とあり　○鞍橋君、鴨祐之の説に筑前國に鞍手郡あり此射手の舊地なりと云注にクラヂとあるはクラは馬の鞍ヂは琴柱のヂにて鞍をば矢もて射貫き琴柱の動かぬが如くにしたるに因れりと云

【十六年】王子餘昌、子は衍なるべしとも云へど未だ卽位せざるによりて王子と書けるなるべし　○（注）威德王、餘昌なり　○爲當、萬葉一に爲當（ハたやこよひも我ひとりれむ）と見えハタに爲當の字を充つ　○考王、考は父也字書に生曰父死曰考とあり　○眇然、字書に眇は遠也　○昇遐、天子の崩御を登遐と云之に同じ　○玄室、墓室を云　○哀、アカラシキはアカラサマに同じきか中本には昇遐の傍訓にもアカラシテとあり急に又は俄にの意なるべし哀を訓るは義訓なるべし　○何術、術をバケと訓みたれど當らずミチと訓む方穩なるべし　○蘇我卿、詳ならず　○汝國爲高麗所逼、雄略紀二十年（卷上二八四頁參照）　○策、タヽマと訓るは義

（乙亥）十六年春二月、百濟王子餘昌、遣王子惠、（王子惠者、威德王之弟也、）奏曰、聖明王爲賊見殺、（十五年、爲新羅所殺、故今奏之、）天皇聞而傷恨、廼遣使者、迎津慰問、於是許勢臣問王子惠曰、爲當欲留此間、爲當欲向本鄕、惠答曰、依憑天皇之德、冀報考王之讎、若垂哀憐、多賜兵革、雪垢復讎、臣之願也、臣之去留、敢不唯命是從、俄而蘇我臣問訊曰、聖王妙達天道地理、名流四表八方、意謂、永保安寧、統領海西蕃國、千年萬歲、奉事天皇、豈圖、一旦眇然昇遐、與水無歸、卽安玄室、何痛之酷、何悲之哀、凡在含情、誰不傷悼、當復何咎、致玆禍也、今復何術、用鎭國家、惠報答之曰、臣禀性愚蒙、不知大計、何況禍福所倚、國家存亡者乎、蘇我卿曰、昔在天皇大泊瀨之世、（雄略）汝國爲高麗所逼、危甚累卵、於是天皇命神祇伯、敬受策於神祇、祝者廼託神語報曰、屈請建邦之神、往救將亡之主、必當國家謐靖、

人物乂安。由是、請神徃救、所以社稷安寧。原夫建邦神者、天地割判之代、草木言語之時、自天降來、造立國家之神也。頃聞、汝國輟而不祀。方今悛悔前過、脩理神宮、奉祭神靈、國可昌盛。汝當莫忘。秋七月己卯朔壬午、遣蘇我大臣稻目宿禰・穗積磐弓臣等、使于吉備五郡、置白猪屯倉。八月、百濟餘昌謂諸臣等曰、少子今願奉爲考王、出家脩道。諸臣百姓報言、今君王欲得出家脩道者、且奉教也。嗟夫前慮不定、後有大患、誰之過歟。夫百濟國者、高麗新羅之所爭欲滅。自始開國、迄于是歲。今此國宗、將授何國。要須道理分明應教。縱使能用耆老之言、豈至於此。請悛前過、無勞出俗。如欲果願、須度國民。餘昌對曰、諾。即就圖於臣下。臣下遂用相議、爲度百人、多造幡蓋、種種功德云々。

詳ならず中本にハカリコトと訓るに從ふべし　○屈請、通證に枉屈招請也請訓麻世徹達紀舒明紀同とありマセは令坐なり　○乂安、原本乂を又に作るは非なり講述鈔に據て改む乂は字書に治也とあり　○建邦神、淸在講述鈔に古事記韓國征伐ノ段ニ以墨江之荒御魂爲國守神而祭鎭還渡也ト云然レバ韓國降伏以後此國ノ神ヲ祭ラシタル古文尙シと云通證には此專指素戔嗚尊也兼方以爲大己貴命恐不是とあり　○草木言語之時、神代紀天孫降臨章（卷上四三頁）に草木咸能言語とあり　○汝國輟而不祀、此文に據て考るに百濟にても雄略天皇以來建邦の神卽ち天降來まして國家を造立せられし神靈をば神宮を造立して齋祀りしを其後佛敎などを信ぜし結果にや捨て、祀らずなりしなり依て舊の如く神宮を修理して神靈を祭り奉れと諭されしなり　○白猪屯倉、吉備國には白猪と云る地名聞えず續紀稱德紀天平神護二年十二月に美作國人白猪臣大足、神護景雲二年五月美作國大庭郡人白猪臣見ゆれば今の美作國（古の備前の內和銅六年分國）の內ならむか　○諸臣等、原本諸の字なし北本中本に據て補ふ　○少子、通證に少當作小とあり　○國宗、宗は字書に人所尊祭者曰宗又尊祖廟也とあり此は傍訓の如く國の祭卽ち宗廟の祭祀を何れの國に授けむとするかと云るなり　○出俗、北本俗の下家の字あり　○須度國民、度は化度なり自ら出家せむよりは國民を出家せしめよと云なり　○就圖於臣下、諸臣の企圖に從ふを云　○功德、佛敎にて念佛誦經布施供養等の諸事を稱す

（丙子）十七年春正月、百濟王子惠請罷。仍賜兵仗良馬甚多、亦頻賞祿、衆所欽歎。於是、遣阿倍臣・佐伯連・播磨直、率筑紫國舟師、衞送達國。別遣筑紫火君、（百濟本記云、筑紫君兒、火中君弟。）率勇士一千、衞送彌氐。（彌氐、津名。）因令守津路要害之地焉。秋七月甲戌朔己卯、遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒嶋郡、置屯倉、以葛城山田直瑞子爲田令。（田令、此云陀豆歌毗。）冬十月、遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭國高市郡、置韓人大身狹屯倉、（言韓人者、百濟也。）高麗人小身狹屯倉、紀國置海部屯倉。（一本云、以處處韓人爲大身狹屯倉田部、高麗人爲小身狹屯倉田部、是即以韓人高麗人爲田部、故因爲屯倉之號也。）

（丁丑）十八年春三月庚子朔、百濟王子餘昌嗣立、是爲威德王。

（庚辰）廿一年秋九月、新羅遣彌至己知奈末獻調賦。饗賜邁常。奈末喜歡而罷曰、調賦使者國家之所貴重、而私議之所輕賤。行李者百姓之所懸命、而選用之所卑下。王政之弊、未必不由此也。請差良家子爲使者、不可以卑賤爲使。

【十七年】衆所欽歎、通證に言天皇頻加賞賜故衆羨歎其優待舊讀非と云　○筑紫火君、記に神八井耳命者火君之祖とあり原本火を大に作る北本中本及紀略に據て改む　○彌氐、天智紀二年に牟弖とあり全羅南道高敞郡茂長面なるべし　○置屯倉、抄に兒島郡三家（ミヤケ）鄕あり是なり　○葛城山田直、未詳　○田令、屯田の首なりツカヒと云は屯倉の首として京より差遣さるゝによれる名なり　○大身狹屯倉、式に高市郡牟佐坐神社あり大和志に三瀬村に在りと云即其地なり身狹は今畝傍町大字見瀨の地、大身狹小身狹は相對して云　○（注）言韓人云々、韓は三韓の總稱にて百濟も其一なるが高麗は北方に遙かに距りて三韓の內にあらず故に此は高麗人に對して百濟人を韓人と云るなり　○海部屯倉、海部は紀伊國海部郡（今海草郡に入る）なり

【十八年】威德王、三國史記に甲戌年卽ち欽明天皇十五年に威德王諱昌繼位とあり十八年は卽位四年なり然るに此に嗣立とあるは此年卽位の式を行ひしにや

【廿一年】奈末、諸本末を未に作る東國通鑑に據て改む下同じ　○調賦使者云々、以下未必不由此也までは魏

(辛巳)廿二年、新羅遣久禮叱及伐干貢調賦、司賓饗遇、禮數減常、及伐干忿恨而罷、是歲、復遣奴氏大舍獻前調賦、於難波大郡、次序諸蕃、掌客額田部連、葛城直等、使列于百濟之下而引導、大舍怒還、不入館舍、乘船歸至穴門、於是脩治穴門館、大舍問曰、爲誰客造、工匠河内馬飼首押勝欺紿曰、遣問西方無禮使者之所停宿處也、大舍還國告其所言、故新羅築城於阿羅波斯山以備日本、

(壬午)廿三年春正月、新羅打滅任那官家、(一本云、廿一年、任那滅焉、總言任那、別言加羅國、安羅國、斯二岐國、多羅國、卒麻國、古嵯國、子他國、散半下國、乞飡國、稔禮國、合十國、)夏六月、詔曰、新羅西羌小醜、逆天無狀、違我恩義、破我官家、毒害我黎民、誅殘我郡縣、我氣長足姬尊靈聖聰明、周行天下、劬勞群庶、饗育萬民、哀新羅所窮見歸、全新羅王將戮之首、授新羅要害之地、崇新羅非次之榮、我氣長足姬尊於新羅何薄、我百姓於新羅何怨、

志衞覬傳に據れり原文に調賦使を刑法に、行李を獄吏に作り選用の下者の字あり　○行李、左傳僖三十年杜注に行李は使人とあり　○懸、北本縣に作る縣懸通用す　○差、字書に使也 如差遣とあり

【廿二年】久禮叱及伐干貢調賦、此事も三國史記に見えず及伐干はまた級伐飡に作る第九位の官　○司賓、下文に見ゆる掌客に同じ唐書百官志に司賓典賓掌賓客各二人と見ゆ　○大舍、新羅第十二位の官　○難波大郡、攝津志に東生郡高津宮一名大郡宮とあり國郡沿革考に和銅中國郡の名を定むるに及び東生と稱せしなるべしと云　○掌客、治部式蕃客入朝の條に掌客二人 掌在京雜事 と見ゆ　○穴門館、後の長門館にて所謂臨海館なり亦間闕の地にありしものなれど舊址詳ならず　○阿羅波斯山、詳ならず或は慶尙南道東萊郡南面附近ならむか釋紀阿を何に作る

【廿三年】新羅打滅任那官家、東國通鑑に新羅眞興王二十三年秋九月新羅滅大加耶とあり　○(注)廿一年任那滅焉、此一本の說は誤なるべし　○任那十國、加羅以下八國は二年及五年紀に出づ　○古嵯、上文に久嵯とあり　○子他、北本子の上に古の字あり　○散半下、上文に散半奚とあり

而新羅長戟強弩、淩蹙任那、距牙鉤爪、殘虐含靈、刳肝斮趾、不厭其快、曝骨焚屍、不謂其酷、任那族姓百姓以還、窮刀極俎、既屠且膾、豈有率土之濱謂爲王臣、乍食人之禾、飲人之水、孰忍聞此而不悼心、況乎太子大臣處趺蕚之親、泣血銜冤之寄、當蕃屏之任、摩頂至踵之恩、世受前朝之德、身當後代之位、而不能瀝膽抽腸、共誅姧逆、雪天地之痛酷、報君父之仇讎、則死有恨臣子之道不成、是月、或有譖馬飼首歌依曰、歌依之妻逢臣讚岐、鞍韉有異、熟而熟視、皇后御鞍也、即收付廷尉、鞫問極切、馬飼首歌依乃揚言誓曰、虛也非實、若是實者、必被天災、遂因苦問伏地而死、死未經時、急災於殿、廷尉收縛其子守石與中瀨氷、(守石、名瀨氷、皆名也、)將投火中、(投火爲刑、蓋古之制也、)呪曰、非吾手投、以祝手投、呪訖欲投火、守石之母祈請曰、投兒火裏、天災果臻、請付祝人使作神奴、乃依母請許沒神奴、秋七月己巳朔、新羅遣使獻調賦、其使人知新羅滅任那、恥背國恩、不敢請罷、遂留不歸本土、例同國家百姓、今河内國更荒郡、

○乞飡國、按に史記に居漆山郡とある地にて慶尙南道東萊方面ならむか　○稔禮國、按に五年紀に荷山とあると同じ地にあらざるかよく考ふべし　○詔曰、此詔文は梁書王僧辯傳の盟誓の文に據りて書せり　○西羌、說文に羌は西戎牧羊人也とあり　○黎民、原本黎を梨に作る諸本に據て改む　○哀新羅所窮見歸、皇后御征韓の時新羅王降服の事を云るなるべし　○非次之榮、文選羊祜讓開府表の注に謂不依班次とあり班次に依らず優待せらるゝを云　○淩蹙、原本蹙を慼に作る北本中本に據て改む　○距牙、距は巨と通ず集解には文選吳都賦に據て鋸に改め作る　○含靈、人民を云廣く生物の意にも及ぶ　○百姓以還、通證に言諸侯以及萬民也と云　○率土之濱、原本率を卒に濱を賓に作る率は北本中本に據り濱は集解に據て改む　○乍、集解に私記攙入と

して削る
○熟、通證に當作執と云
○悼心、原本悼を憚に作る北本中本に據て改む
○跌夢、繼體紀元年に見ゆミアナスヱと訓るが如く子孫の意此句は主として太子に係て見るべし
○銜寃之寄、北本中本寃を怨に作り梁書哀に作る之の字は北本中本に據て補ふ
○當蕃屛之任、此句は主として大臣に係れり
○摩頂至踵之恩、文選廣絶交論の注に言盡心也とあり頂より踵に至るまで摩で、愛撫するを云
○瀝膽抽膓、忠を盡すを云原本膽を瞻に作る中本に據て改む
○譖、原本讃に作る北本に據て改む
○逢臣讃岐、舊訓に逢臣とあるを通釋に逢臣は氏讃岐は名なりと云
○韉、抄調度部に唐韻云韉（之太久良）鞍韉也とあり説文に馬鞁具と見ゆ通證に新井氏曰今云切付也と云
○熟而熟視、楓本熟而の

鸕鷀野邑、新羅人之先也、是月、遣大將軍紀男麻呂宿禰、將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、而欲問新羅攻任那之狀、遂到任那、以薦集部首登弭、遣於百濟、約束軍計、登弭仍宿妻家、落印書弓箭於路、新羅具知軍計、卒起大兵、尋屬敗亡、乞降歸附、紀男麻呂宿禰取勝旋師、入百濟營、令軍中曰、夫勝不忘敗、安必慮危、古之善教也、今處疆畔、豺狼交接、而可輕忽不思變難哉、況復平安之世、刀劍不離於身、蓋君子之武備、不可以已、宜深警戒務崇斯令、士卒皆委心而服事焉、河邊臣瓊缶獨進轉鬪、所向皆拔、新羅更擧白旗、投兵降首、河邊臣瓊缶元不曉兵、對擧白旗、空爾獨進、新羅鬪將曰、將軍河邊臣今欲降矣、乃進軍逆戰、盡銳遄攻破之、前鋒所傷甚衆、倭國造手彥自知難救、棄軍遁逃、新羅鬪將手持鉤戟、追至城洫、運戟擊之、手彥因騎駿馬、超渡城洫、僅以身免、鬪將臨城洫而歎曰、久須尼自利、（此新羅語、未詳也、）於是河邊臣遂引兵、退急營於野、於是士卒盡相欺蔑、莫有遵承、鬪將自就營中、悉生虜河邊

二字なし熟而の熟は恐らくは就の誤なるべし或は既の誤ならむとも云
○收付廷尉、漢書百官表に廷尉掌刑辟とあり職員令に囚獄司正一人掌禁囚罪人徒役功程及配決事と見ゆ後世檢非違使の佐の唐名を廷尉と稱したれど此はそれにはあらざるべし付は北本中本及紀略に據て補ふ
○鞫問、字書に鞫は窮理罪人とあり
○急、北本忽に作る
○中瀨氷、中本中を名に作る
○非吾手投以祝手投、以より下の四字北本楓本に據て補ふ
○天灾、原本天を大に作る楓本中本に據て改む
○祝人、神社の祝部なり
○神奴、神社に使役する賤民なり又神賤とも云鹿島神宮住吉神社等に之を附せらる
○更荒郡、讃良郡（今北河内郡に入る）なり
○鸕鷀野邑、今詳ならず
○紀男麻呂宿禰、崇峻紀即位前紀及四年紀に見ゆ
○哆唎、繼體紀六年（一四頁）に見ゆ

臣瓊缶等及其隨婦、于時父子夫婦不能相恤、鬪將問河邊臣曰、汝命與婦、孰與尤愛、答曰、何愛一女以取禍乎、如何不過命也、遂許爲妾、鬪將遂於露地姧其婦女、婦女後還、河邊臣欲就談之、婦人甚以慚恨而不隨曰、昔君輕賣妾身、今何面目以相遇、遂不肯言、是婦人者坂本臣女、曰甘美媛、同時所虜調吉士伊企儺、爲人勇烈、終不降服、新羅鬪將拔刀欲斬、逼而脫褌、追令以尻臀向日本、大號叫曰、日本將囓我臗脽、即號叫曰、新羅王啗我臗脽、雖被苦逼、尙如前叫、由是見殺、其子舅子亦抱其父而死、伊企儺辭旨難奪、皆如此、由此特爲諸將帥所痛惜、其妻大葉子亦並見禽、愴然而歌曰、柯羅俱爾能、基能陪爾陀致底、於譜磨故幡、比例甫囉須母、耶魔等陛武岐底、或有和曰、柯羅俱爾能、基能陪爾陀陁志、於譜磨故幡、比禮甫羅須彌喩、那爾婆陛武岐底、八月、天皇遣大將軍大伴連狹手彥、領兵數萬、伐于高麗、狹手彥乃用百濟計、打破高麗、其王踰墻而逃、狹手彥遂乘勝以入宮、盡得珍寶貨賂七織帳鐵

屋還來。舊本云、鐵屋在高麗西高樓上、織帳張於高麗王內寢。以七織帳奉獻於天皇。以甲二領・金飾刀二口・銅鏤鐘三口・五色幡二竿・美女媛媛、名也。幷其從女吾田子、送於蘇我稻目宿禰大臣。於是大臣遂納二女以爲妻、居輕曲殿。鐵屋在長安寺。是寺不知在何國。一本云、十一年、大伴狹手彥連共百濟國、駈却高麗王陽香於比津留都。冬十一月、新羅遣使、獻幷貢調賦。使人悉知國家憤新羅滅任那、不敢請罷、恐致刑戮、不歸本土。例同百姓。今攝津國三嶋郡埴廬新羅人之先祖也。

(乙酉)廿六年夏五月、高麗人頭霧唎耶陛等投化於筑紫、置山背國。今畝原・奈

○河邊臣、記に蘇我石河宿禰者川邊臣之祖也とあり錄右京皇別に河邊朝臣（天武紀十三年朝臣を賜ふ）武內宿禰四世孫宗我宿禰之後也と見ゆ ○居曾山、詳ならず ○鷹集部首、錄大和未定雜姓に鷹集造天津彥根命之後と見ゆれば或はその同族か ○印書、釋名に印信也所以封物爲信驗也とあり ○尋屬敗亡、新羅大兵を起して至りしも程なく敗亡したるを云 ○夫勝不忘敗云々、以下務崇斯令までは吳志吳主傳黃初二年八月の下令の文に據れり原本必を心に作る北本楓本中本に據て改む ○不可以已、可の字は北本中本に據て補ふ ○空爾、原本爾を示に作る北本中本に據て改む ○鈎戟、漢書陳勝傳贊の注に戟及勾曲者也と云 ○城洫、洫は字書に城池也とあり ○姧、集解姦に作る ○坂本臣、安康紀元年（卷上二五六頁）に見ゆ ○調吉士、繼體紀二十四年（二六頁）に見ゆ ○號叫、原本叫の下叫也の三字を注す攙入なること明なれば削る ○臆腓、字書に臆は臂也尻也腓は尻骨也又臂謂之腓とあり ○男子、子の名なり ○抱、ムダカヘテはムダキなり萬葉にもイダキをムダキと云り ○柯羅俱爾能云々、一首の意は聞えたるが如し比例甫曬須母は領巾振るなり領巾は抄裝束部に楊氏漢語抄云背子婦人表衣以錦爲之領巾（日本紀私記云比禮）婦人項上飾也とありフラスは振るを延べて云モは助辭なり ○或有和曰、此歌も聞えたるが如し、二首共に愛國憂憤の情語句の上に歷々たり ○大伴連狹手彥、宣化紀二年（三七頁）に見ゆ ○其王、高麗平原王四年なるべし ○貺、貨の異體なるべし ○七織帳、七綵を織出せし帳なるべし ○鐵屋、集解に按今寺中所在置舍利等小寶塔之類とあり ○金飾刀、金を以て裝飾せる刀なり ○銅鏤鐘、原本鐘を鍾に作る北本及釋紀に據て改む鏤は字書に彫刻也とあり銅の彫刻せる鐘を云 ○（注）媛名也、集解に私記攙入として削る ○輕曲殿、大和國高市郡懿德紀二年（卷上二〇四頁）に見ゆ ○（注）長安寺、扶桑略記に長安寺在近江國栗太郡多他郎寺是也と云通證に百濟大寺謂之大官大寺一名大安寺在高市郡疑長安寺亦此也とあり ○十一年、集解には十の上に二の字を脫すと云 ○高麗王陽香、二十一年は高麗平原王陽成二年に當る陽成を陽香に云しか ○比津留都、詳ならず ○埴廬、抄に島上郡土室（ハムロ）鄉あり是なるべしと云（今三島郡阿武野）原本廬を盧に作る北本中本に據て改む

【廿六年】畝原、未詳 ○奈羅、抄に久世郡那羅鄉あり（今綴喜郡都々城

羅・山村、高麗人之先祖也。

(丁亥)廿八年、郡國大水、飢。或人相食。轉傍郡穀、以相救。

(己丑)卅年春正月辛卯朔、詔曰、量置田部、其來尙矣。年甫十餘、脫籍免課者衆。宜遣膽津膽津者、王辰爾之甥也。檢定白猪田部丁籍。夏四月、膽津檢閱白猪田部丁者、依詔定籍、果成田戶。天皇嘉膽津定籍之功、賜姓爲白猪史。尋拜田令、爲瑞子之副。瑞子見上。

(庚寅)卅一年春三月甲申朔、蘇我大臣稻目宿禰薨。夏四月甲申朔乙酉、幸泊瀨柴籬宮。越人江渟臣裙代詣京奏曰、高麗使人、辛苦風浪、迷失浦津、任水漂流、忽到著岸。郡司隱匿。故臣顯奏。詔曰、朕承帝業、若干年。高麗迷路、始到越岸。雖苦漂溺、尙全性命。豈非徽猷廣被、至德巍々、仁化傍通、洪恩蕩々者哉。有司宜於山城國相樂郡、起館淨治、厚相資養。是月、乘輿至自泊瀨柴籬宮。遣東漢氏直糠兒・葛城直難波、迎召高麗使人。五月、遣膳臣傾子於越、傾子、此云舸陁部古。饗高麗使。大使審知膳臣是皇華使、

村）○山村、錄山城皇別曰佐の注に山代國相樂郡山村とあれど今詳ならず

【廿八年】郡國、信友云郡疑くは諸の誤なるべし

【卅年】田部、景行紀五十七年（卷上一六三頁）に見ゆ ○年甫十餘、戶令に男女十六以下爲小、二十以下爲中、男二十一爲丁とあり此御代の頃にも之に類せし規定ありしなるべし ○脫籍免課、戶籍を脫して課役を免かるゝを云 ○白猪田部、白猪屯倉は十六年紀に見ゆ ○成田戶、田部の戶籍を成就せるを云 ○白猪史、續紀養老四年改白猪史氏賜葛井連姓と見ゆ ○爲瑞子之副、十七年紀に見ゆ北本副の下也の字あり

【卅一年】蘇我大臣稻目宿禰薨、宣化元年大臣となり此年まで三十五年、一代要記に年六十五とあり ○泊瀨柴籬宮、大和國城上郡なるも宮址は未詳 ○江渟臣、國造本紀に江

沼國造柴垣朝御世蘇我臣同祖武内宿禰四世孫志波勝足尼定賜國造とあり三代格に弘仁十四年割越前國江沼加賀二郡爲加賀國と見ゆ江沼は越國分國の後越前に屬せしが嵯峨天皇弘仁年中加賀國を建てられしかば加賀に屬するに至れり ○徽猷、毛詩小雅角弓の傳に徽美也猷道也とあり ○巍々、原本巍を魏に作る中本に據て改む字書に巍々は高大之貌とあり ○蕩々、字書に廣大也とあり ○東漢氏直、雄略紀七年（卷上二七〇頁）に見ゆ氏字は衍か ○葛城直、二十二年紀に出づ ○膳臣、孝元紀七年（卷上一〇九頁）に見ゆ ○（注）舸陁部古、原本陁を施に作る北本に據て改む ○道君、錄右京皇別に道公大彦命孫彦屋主田心命之後とあり釋紀道君の上に越郡司の三字あり是なるに似たり ○吉士、もと新羅國の官名より出でゝ藩國に仕奉れる人の稱に用られたるなり繼體紀に吉士老など見ゆ ○探索、原本探を採に作る北本中本に據て改む ○許勢臣、繼體紀元年（一〇頁）に見ゆ ○控引船、難波にて船をよそほひ淀川より宇治川を挖き上り勢多までの間に難所あれば其處々をば船を挖きて狹々波山まで至りしなるべし ○狹々波山、近江國志賀郡 ○近江北山、通證に北山與越前接界也とあり ○高槭館、釋紀に私記曰案假名日本紀作高麗斐乃多知とあれば高の下麗の字を脫したるか山城志に相樂郡高槭館古蹟在上狛村と見ゆ ○東漢坂上直、東漢は大和國の漢人なり河内なる西漢に對して云錄右京諸蕃に坂上大宿禰出自後漢靈帝男延王とあり ○錦部首、仁德紀四十一年（卷上二二八頁）に見ゆ ○相樂館、卽ち高槭館なり

【卅二年】坂田君、繼體紀元年（一一三頁）に見ゆ ○驛馬召到、以下屬汝までは魏志明帝紀景初三年の文に據れり ○臥內、漢書金日磾傳注に臥內天子臥處とあり ○打新羅、集解打を伐に作る ○造夫婦、文選東都賦に天地革命四海之內更造夫婦とあり任那と夫婦の睦ぶが如く相和するを云中本造夫婦をヤツコヲトメと訓み楓本並に原本も造をヤツコと訓めど當らず ○是月、集解月を日に作る ○時年若干、大日本史に本書享年闕一代要記皇年代略記並曰六十二皇代紀曰六十三神皇正統記曰八十一未知孰是とあり ○殯、神代紀上四神出生章第九一書（卷上一七頁）に見ゆる殯宮は喪屋にて御陵を作畢るまで御柩を納め奉りて仕奉る所を云 ○河內古市、古市は河內國古市郡古市鄕なり山陵は高市郡檜隈に造られし磯城島金刺宮より遠く距れる河內國に殯宮を作りて仕奉りしは故あることなるべし ○未叱子失消、原本子を號に作る楓本中本の傍注及傍訓に據て改む標注通釋亦同じく子に改む ○檜隈坂合陵、諸陵式に大和國高市郡、大和志に

乃謂道君曰、汝非天皇果如我疑、汝既伏拜膳臣、倍復足知百姓、而前詐余取調入己、宜速還之莫煩飾語、膳臣聞之、使人探索其調、具爲與之、還京復命、秋七月壬子朔、高麗使到于近江、是月、遣許勢臣猿與吉士赤鳩、發自難波津、控引船於狹狹波山、而裝飾船、乃往迎於近江北山、遂引入山背高槭館、則遣東漢坂上直子麻呂、錦部首大石以爲守護、更饗高麗使者於相樂館、

（辛卯）卅二年春三月戊申朔壬子、遣坂田耳子郎君、使於新羅問任那滅由、是月、高麗獻物幷表未得呈奏、經歷數旬占待良日、夏四月戊寅朔壬辰、天皇寢疾不豫、皇太子向外不在、驛馬召到、引入臥內、執其手詔曰、朕疾甚、以後事屬汝、汝須打新羅封建任那、更造夫婦、惟如舊日、死無恨之、是月、天皇遂崩于內寢、時年若干、五月、殯于河內古市、秋八月丙子朔、新羅遣弔使未叱子失消等奉哀於殯、是月、未叱子失消等罷、九月、葬于檜隈坂合陵、

在平田村、俗呼梅山、陵墓要覽に高市郡阪合村大字平田と見ゆ

日本書紀卷第十九

【即位前紀】渟中倉太珠敷天皇、法皇帝說に怒那久良布刀多麻斯支天皇法隆寺曼陀羅銘文に蕤奈久羅乃布等多麻斯支乃彌己等と乃の字を加へたり
○(注)石姬皇后云々、集解に此十四字を私記の攙入とす
○文史、文書史籍なり
○立爲皇太子、欽明紀には十五年立爲皇太子とあり
【元年】即天皇位、大日本史に皇年代略記云年三十五按本書享年缺故不書とあり
○皇后、皇后の上母字あるべし
○百濟大井、河內國錦部郡百濟鄉あり河內志に同郡大井村あれば同村なるべし今南河內郡彼方村に屬す

日本書紀卷第廿

渟中倉太珠敷天皇　敏達天皇

渟中倉太珠敷天皇、天國排開廣庭天皇第二子也、母曰石姬皇后、(石姬皇后、武小廣國押盾天皇女也、)天皇不信佛法、而愛文史、廿九年立爲皇太子、卅二年四月、天國排開廣庭天皇崩、

元年(壬辰)夏四月壬申朔甲戌、皇太子卽天皇位、尊皇后曰皇太后、是月、宮于百濟大井、以物部弓削守屋大連爲大連如故、以蘇我馬子宿禰爲大臣、

五月壬寅朔、天皇問皇子與大臣曰、高麗使人今何在、大臣奉對曰、在於相樂館、天皇聞之、傷惻極甚、愀然而歎曰、悲哉此使人等、名既奏聞於先考天皇矣、乃遣群臣於相樂館、撿錄所獻調物、令送京師、丙辰、天皇執高麗表疏、授於大臣、召聚諸史、令讀解之、是時諸史、於三日內、皆不

○物部弓削守屋大連、守屋は舊事紀に饒速日命十三世孫尾輿連公の子とあり公卿補任亦同じ
○蘇我馬子宿禰、稻目の子なり
○問皇子與大臣、皇子は彥人皇子竹田皇子を指すかと云(春海說)大連なきは脫せるか
○愀然、集韻に容色變也とあり
○王辰爾、欽明紀十四年(六二三頁)に見ゆ
○不愛於學、學をマナブルコと云るは後の歌集なから千載集にうつりゆく影だになしと思ふ身の學ぶる道に年の暮ぬると見ゆ
○近侍、前本近を進に作る
○東西諸史、學令に大學生取五位以上子孫及東西史部子爲之義解に謂居在皇城左右故曰東西也前代以來奕世繼業或爲史官或爲博士因以賜姓總謂之史也とあり皇城の左は大和右は河内にて大和は東河内は西に當れば東をヤマト西をカウチと云東史は漢人阿知使主の後西史は韓人王

能讀、爰有船史祖王辰爾、能奉讀釋、由是天皇與大臣俱爲讚美曰、勤乎辰爾、懿哉辰爾、汝若不愛於學、誰能讀解、宜從今始近侍殿中、既而詔東西諸史曰、汝等所習之業何故不就、汝等雖衆、不及辰爾、又高麗上表疏書于烏羽、字隨羽黑、既無識者、辰爾乃蒸羽於飯氣、以帛印羽、悉寫其字、朝庭悉異之、六月、高麗大使謂副使等曰、磯城嶋(欽明)天皇時、汝等違吾所議、被欺於他、妄分國調、輙與微者、豈非汝等過歟、其若我國王聞、必誅汝等、副使等自相謂之曰、若吾等至國時、大使顯噵吾過、是不祥事也、思欲偸殺而斷其口、是夕謀泄、大使知之、裝束衣帶、獨自潛行、立館中庭、不知所計、時有賊一人、以杖出來、打大使頭而退、次有賊一人、直向大使、打頭與手而退、大使尙嘿然立地、而拭面血、更有賊一人、執刀急來、刺大使腹而退、是時、大使恐伏地拜、後有賊一人、既殺而去、明旦、領客東漢坂上直子麻呂等推問其由、副使等乃作矯詐曰、天皇賜妻於大使、大使違勅不受、無禮玆甚、是以臣等爲天皇殺焉、有司以禮收

仁が裔なり
○書于烏羽字隨羽黑、吳語に烏羽之矰と見え烏羽の如き矰もて矢をよそひたるを云、こゝも眞の烏の羽に書したるにはあらで烏羽もて織れるものに書したるなり、高麗國がかゝる物に書きたる表を上りしは鐵盾鐵的を奉りて我武備を試みし故智を襲ひて文事の狀を試みむとせしなり字をナと訓るは允恭紀に欲知姓字(卷上二四八頁)とあり今カナといへるも假字(カリナ)の略にて之に對して漢字をば眞字(マナ)といへり　○飯氣、飯を炊ぐ時に立上る氣なり　○大使、オホツカヒはソヒツカヒに對する稱オホキミはオホオミの誤なるべし　○磯城島天皇時云々、前紀三十一年に見ゆ　○輙與微者、郡司道君の輩に與ふるを云　○其若、前本其の字なし　○自相謂之、副使以下なり　○以禮收葬、大使の格式もて葬りたるなり　○是年也、也は前本に據て補ふ

【二年】
○吉備海部直、雄略紀七年(卷上二六九頁)に見ゆ
○相議、原本議を識に作る前本北本中本に據て改む
○大嶋首、詳ならず
○丘首、是も詳ならず

【三年】
○大有遮、活本有を集に作る
○駈使於官、沒して官奴とし駈使するを云

葬、秋七月、高麗使人罷歸、是年也太歲壬辰、

二年(癸巳)夏五月丙寅朔戊辰、高麗使人泊于越海之岸、破船溺死者衆、朝庭猜頻迷路、不饗放還、仍勅吉備海部直難波送高麗使、秋七月乙丑朔、於越海岸、難波與高麗使等相議、以送使難波船人大嶋首磐日狹丘首間狹、令乘高麗使船、以高麗二人令乘送使船、如此互乘、以備姧志、俱時發船至數里許、送使難波乃恐畏波浪、執高麗二人擲入於海、八月甲午朔丁未、送使難波還來復命曰、海裏鯨魚大有、遮囓船與檝櫂、難波等恐魚吞船、不得入海、天皇聞之、識其謾語、駈使於官、不放還國、

三年(甲午)夏五月庚申朔甲子、高麗使人泊于越海之岸、秋七月己未朔戊寅、高麗使人入京奏曰、臣等去年相逐送使罷歸於國、臣等先至臣蕃、臣

○磐日狹、原本狹の字を脫す上文に據て補ふ下同じ
○請問、原本問を聞に作る前本北本に據て改む
○臣使、通證に臣は送の誤なるべしと云
○白猪屯倉、欽明紀十六年(七〇頁)に見ゆ
○膽津、原本膽を瞻に作る北本中本に據て改む
○王辰爾、原本王を壬に作る中本に據て改む
○津史、錄右京諸蕃に津宿禰菅野朝臣同祖鹽君男麻侶君之後也又續紀廿一に津史秋主等三十四人言船、葛井、津、本是一祖別爲三氏其二氏蒙連姓唯秋主等未霑改姓請改史字於是賜姓津連云々

【四年】息長眞手王、繼體紀元年(一二一頁)に見ゆ
○押坂彥人大兄皇子、記に忍坂日子人太子とあり紀に立太子のこと見えず用明紀二年に太子彥人皇子と記せるは舒明天皇の大御父なれば追尊せられ

蕃。即準使人之禮、禮饗大嶋首磐日狹等、高麗國王別以厚禮禮之。既而送使之船至今未到、故更謹遣使人幷磐日狹等、請問臣使不來之意。天皇聞卽數難波罪曰、欺誑朝庭、一也。溺殺隣使、二也。以玆大罪、不合放還。以斷其罪。冬十月戊子朔丙申、遣蘇我馬子大臣於吉備國、增益白猪屯倉與田部。卽以田部名籍授于白猪史膽津。戊戌、詔船史王辰爾弟牛、賜姓爲津史。十一月、新羅遣使進調。

(乙未)四年春正月丙辰朔甲子、立息長眞手王女廣姬爲皇后。是生一男二女。其一曰押坂彥人大兄皇子(更名麻呂古皇子)。其二曰逆登皇女。其三曰菟道磯津貝皇女。是月、立一夫人。春日臣仲君女、曰老女子夫人(更名藥君娘也)。生三男一女。其一曰難波皇子。其二曰春日皇子。其三曰桑田皇女。其四曰大派皇子。次采女伊勢大鹿首小熊女、曰菟名子夫人。生太姬皇女(更名櫻井皇女)與糠手姬皇女(更名田村皇女)。二月丙戌朔壬辰、馬子宿禰大臣還于京師、復命屯倉之事。三月乙卯朔乙丑、百濟遣使進調。多益恒歲。天皇以新羅未建任那、

しなるべし諸陵式に成相墓押坂彥人大兄皇子在大和國廣瀨郡とあり
○逆登皇女、記に坂騰王とあり
○菟道磯津貝皇女、記に宇遲王とあり記傳に此皇女と豐御食炊屋姬尊の生み給へる菟道貝鮹皇女と傳の紛れたるなるべしと云
○春日臣仲君、記に春日臣中若子に作る
○老女子夫人、原本子を君に作る諸本及記に據て改む
○(注)藥君娘、原本娘の下也の字あり前本に據て削る記傳に此君も訓コとあれば子の誤なるかと云
○難波皇子、記に難波王とあり錄左京皇別に守山眞人、路眞人、飛多眞人、英多眞人、大宅眞人、橘朝臣、右京皇別に甘南眞人等皆此皇子の後と見ゆ
○春日皇子、記には桑田王次に春日王と次第違へり
○大派皇子、記に大俣王
○伊勢大鹿首、錄右京未定雜姓に津速魂命三世孫天兒屋根命之後也とあり
○菟名子夫人、記には大鹿首之女小熊子郎女
○太姬皇女、記に布斗比賣命
○糠手姬皇女、記に寶王亦名糠手比賣王
○田村皇女、記には御子の序次に見えず日子人太子の妃の處に庶妹田村王とあり舒明天皇の御母なり
○丙戌朔壬辰、原本壬辰朔とあるは誤、集解に據て改む壬辰は七日
○三月乙卯朔、此五字集解に據て補ふ
○多々羅云々、繼體紀に和陀發鬼を知多費智に推古紀に委陀弗知鬼に作る四邑とも本任那の地なり
○卜便襲吉、原本便を使に作る前本北本中本に據て改む襲は字書に因也禮記曲禮に卜筮不相襲とあり
○譯語田、式に大和國城上郡他田坐天照御魂神社とある地是なり大和志に城上郡在太田村(今磯城郡纒向村大字太田)とあり
○廣姬薨、諸陵式に息長墓、舒明天皇之祖母名曰廣姬在近江國坂田郡(今同郡大原村大字居田)とあり

【五年】
○菟道貝鮹皇女、上の磯津貝皇女の菟道と混へたるなるべしと記傳に云注の更名も亦同じ
○是嫁於東宮聖德、東宮は令義解に謂太子所居とあり聖德は例に據れば厩戶皇子とあるべきなり
○竹田皇子、記に竹田王

詔皇子與大臣曰、莫懶懈於任那之事。夏四月乙酉朔庚寅、遣吉士金子使於新羅、吉士木蓮子使於任那、吉士譯語彥使於百濟。六月、新羅遣使進調。多益常例。幷進多々羅・須奈羅・和陀・發鬼四邑之調。是歲、命卜者占海部王家地與絲井王家地。卜便襲吉。遂營宮於譯語田。是謂幸玉宮。冬十一月、皇后廣姬薨。

(丙申)五年春三月己卯朔戊子、有司請立皇后。詔立豐御食炊屋姬尊爲皇后。是生二男五女。其一曰菟道貝鮹皇女(更名菟道磯津貝皇女也)。是嫁於東宮聖德。其二曰竹田皇子。其三曰小墾田皇女。是嫁於彥人大兄皇子。其四曰鸕鶿守皇女(更名輕守皇女)。其五曰尾張皇子。其六曰田眼皇女。是嫁於息長足日廣

額天皇、(舒明)其七曰櫻井弓張皇女、

(丁酉)六年春二月甲辰朔、詔置日祀部、私部、夏五月癸酉朔丁丑、遣大別王與小黑吉士、宰於百濟國、王人奉命爲使三韓、自稱爲宰、言宰於韓、蓋古之典乎、如今言使也、餘皆倣此、大別王未詳所出也、冬十一月庚午朔、百濟國王付還使大別王等、獻經論若干卷、幷律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造佛工、造寺工六人、遂安置難波大別王等寺、

(戊戌)七年春三月戊辰朔壬申、以菟道皇女、侍伊勢祠、卽奸池邊皇子、事顯而解、

(己亥)八年冬十月、新羅遣枳叱政奈末進調、幷送佛像、

(庚子)九年夏六月、新羅遣安刀奈末、失消奈末進調、不納以還之、

(辛丑)十年春閏二月、蝦夷數千寇於邊境、由是召其魁帥綾糟等、魁帥者大毛人也詔曰、

亦名小貝王　○小墾田皇女、記に小治田王　○鸕鷀守皇女、記に宇毛理王　○尾張皇子、記に小治王　○田眼皇女、記に多米王　○櫻井弓張皇女、記に櫻井玄王とあり

【六年】○日祀部、原本に日祀を ヒノさよめるは誤なるべし日祀と云こと詳ならねど、日奉連とある日奉に同じく、日々供物を安きて神祭りする部かよく考ふべし　○私部、后部なり后に私の字を當てたるは、漢書張敬傳に大官私官と見え注に私官皇后之官とあるを取れり、皇后廣姫の部曲として設けしなるべし原本の訓キサイチとあるは後世に私市と云ふ氏のあるより混ひたるならむ丹波國何鹿郡、因幡國八上郡其他に私部鄕あり　○大別王、所出詳ならず　○小黑吉士、詳ならず　○律師、涅槃經に如是能知佛法所作善能解說是名律師とあり善く戒律を解する者を云僧官の律師とは異なれり　○禪師、三教指歸に修心靜慮曰禪師とあり禪定を修する師を云　○比丘尼、倶舍光記に苾芻唐言乞士舊云比丘訛也尼女聲また慧琳音義に苾芻尼出家女之總名とあり女子の出家して具足戒を受けし者の通稱なり　○呪禁師、印明を結誦して加持祈禱を作す法師を云ふ呪は陀羅尼を云　○大別王等寺、等の字は北本楓本中本に據て補ふ紀略には等の字なし

【七年】池邊皇子、詳ならず

【八年】枳叱政奈末、奈末は新羅の冠名

【九年】不納以還之、前年に受けて今年却けたるは由あるべし

【十年】潤、楓本閏に作る

惟儞蝦夷者、大足彥天皇(景行)之世、合殺者斬、應原者赦、今朕遵彼前例、欲誅元惡、於是綾糟等懼然恐懼、乃下泊瀨中流、面三諸岳、漱水而盟曰、臣等蝦夷、自今以後子々孫々、古語云生兒八十綿連用淸明心、事奉天闕、臣等若違盟者、天地諸神及天皇靈、絕滅臣種矣、

(壬寅)十一年冬十月、新羅遣安刀奈末、失消奈末進調、不納以還之、

(癸卯)十二年秋七月丁酉朔、詔曰、屬我先考天皇之世、新羅滅內官家之國、天國排開廣庭天皇廿三年、任那爲新羅所滅、故云新羅滅我內官家也、先考天皇謀復任那、不果而崩、不成其志、是以朕當奉助神謀、復興任那、今在百濟火葦北國造阿利斯登子、達率日羅賢而有勇、故朕欲與其人相計、乃遣紀國造押勝與吉備海部直羽嶋、喚於百濟、冬十月、紀國造押勝等還自百濟、復命於朝曰、百濟國主奉惜日羅、不肯聽上、是歲復遣吉備海部直羽嶋、召日羅於百濟、羽嶋旣之百濟、欲先私見日羅、獨自向家門底、俄而有家裏來韓婦、用韓語言、以汝之根、入我根內、卽入家去、羽嶋便覺其意、隨後而入、於是日羅迎來、把

○邊境、陸奧國を指す　○(注)大毛人、毛人に數種あり大毛人は其中の一種なり此毛人は今の北海道なる蝦夷にはあらで陸奧出羽に住めるものなるべし　○儞、神武紀戊午年(卷上八六頁)に儞(オレ)自居之、注に儞此云飫例とあり他を卑めて云るなり　○懼然、字書に懼驚也とあり原本懼に誤る集解に從て改む　○泊瀨中流、泊瀨川は大和國磯城郡にあり泊瀨川の中流に下るは禊の爲なり　○面三諸岳、三輪大神を遙拜するなり　○(注)八十綿連、原本連一字衍れり北本楓イ本に據て削る　○天闕、字書に王者之居也とあり

【十一年】十一年云々、新羅の進調を再度退けられしなるべし

【十二年】○神謀、先考天皇の御謀を云　○火葦北國造、葦北は肥後國葦北郡なり國造本紀に葦分國造纏向日代朝吉

備彥命兒三井根命定賜國造とあり
○達率日羅、達率は二品の位なり
○紀國造、國造本紀に紀伊國造橿原朝神皇產靈命五世孫道根命定賜國造とあり
○吉備海部直、雄略紀七年(卷上二六九頁)に見ゆ
○百濟國主、北本主を二リムと訓み楓本に爾禰と訓り
○遣吉備海部直羽嶋、原本直字を脫す上文に據て補ふ
○奉惜、天皇に白し奉る故に奉惜と書けり
○門底、底は字書に下也とあり
○以汝之根入我根內、韓語を國語に譯せしなれば詳ならねど根とは身體の事にて家の內に入るべしとの意なるべし羽嶋に密事を語るに人の聽くを恐れて謎の如くに韓婦に言はしめしなり
○百濟國主、北本主を王に作る
○恩率德爾、余怒、哥奴知、通證に恩率三品此爲正使德爾余怒哥怒知三人名隸屬日羅恩率者

手使坐於座、密告之曰、僕竊聞之、百濟國主奉疑天朝、奉遣臣後、留而弗還、所以奉惜、不肯奉進、宜宣勅時、現嚴猛色、催急召焉、羽嶋乃依其計而召日羅、於是百濟國主怖畏天朝、不敢違勅、奉遣以日羅、恩率德爾、余怒、哥奴知、參官、柂師德率次干德、水手等若干人、日羅等行到吉備兒嶋屯倉、朝庭遣大伴糠手子連而慰勞焉、復遣大夫等於難波館、使訪日羅、是時、日羅被甲乘馬、到門底下、乃進廳前、進退跪拜、歎恨而曰、於檜隈宮御寓天皇之世、我君大伴金村大連奉爲國家、使於海表、火葦北國造刑部靫部阿利斯登之子、臣達率日羅、聞天皇召、恐畏來朝、乃解其甲、奉於天皇、乃營館於阿斗桑市、使住日羅、供給隨欲、復遣阿倍目臣、物部贄子連、大伴糠手子連、而問國政於日羅、日羅對言、天皇所以治天下政、要須護養黎民、何遽興兵、翻將失滅、故今合議者、仕奉朝列臣連二造、（二造者、國造伴造也、）下及百姓、悉皆饒富、令無所乏、如此三年、足食足兵、以悅使民、不懼水火、同恤國難、然後多造船舶、每津列置、使觀客人、令

故先擧之と云
○參官、原本官を宮に作る北本楓本中本並に原本の訓に據て改む通證に參官猶參軍謂副使也とあり
○柂師、集解に水手の上に移すべしと云
○德率次干德、德率は百濟四品の位
○兒嶋屯倉、備前國兒嶋郡
○難波館、難波にある客館
○門底下、通證に舒明紀作門下卽闕下といへり
○廳前、抄居處部に廳日本紀私記云萬都利古度々乃とあり後世の政所なり
○歎恨、原本歎を難に作る前本北本中本に據て改む
○御寓、原本寓を寓に作る北本楓本中本に據て改む
○我君大伴金村大連、下文に日羅自ら申せる言に葦北國造刑部靫部阿利斯登之子とあり祖先より代々大伴氏に靫部として仕へし故に尊びて我君と云しなるべし
○刑部靫部、通證に國造兼帶刑部靫部者也と云

生恐懼、爾乃以能使、使於百濟、召其國王、若不來者、召其太佐平王子等來、卽自然心生欽伏、後應問罪、又奏言、百濟人謀言、有船三百、欲請筑紫、若其實請、宜陽賜予、然則百濟欲新造國、必先以女人小子載船而至、國家望於此時、壹伎對馬多置伏兵、候至而殺、莫翻被詐、每於要害之所、堅築壘塞矣、於是恩率參官臨罷國時、（舊本以恩率爲一人、以參官爲一人也、）竊語德爾等言、計吾過筑紫許、汝等偸殺日羅者、吾具白王、當賜高爵、身及妻子、垂榮於後、德爾、余奴、皆聽許焉、參官等遂發途於血鹿、於是日羅自桑市村遷難波館、德爾等晝夜相計、將欲殺、時日羅身光有如火焰、由是德爾等恐而不殺、遂於十二月晦、候失光殺、日羅更蘇生曰、此是我駈使奴等所爲、非新羅也、言畢而死、（屬是時有新羅使、故云爾也、）天皇詔贄子大連、糠手子連、令收葬於小郡西畔丘前、以其妻子水手等居于石川、於是大伴糠手子連議曰、聚居一處、恐生其變、乃以妻子居于石川百濟村、水手等居于石川大伴村、收縛德爾等、置於下百濟河田村、遣數大夫推

問其事、德爾等伏罪言、信、是恩率參官教使爲也、僕等爲人之下、不敢違矣、由是下獄復命於朝庭、乃遣使於葦北、悉召日羅眷屬、賜德爾等、任情決罪、是時葦北君等受而皆殺、投彌賣嶋、（彌賣島、蓋姬島也）以日羅移葬於葦北、於後海畔者言、恩率之船、被風沒海、參官之船、漂泊津嶋、乃始得歸、

○解其甲云々、異國の製にて珍らしければ天皇に奉りしなるべし ○阿斗桑市、阿斗は攝津國にも河內國にも亦大和國城下郡にもあれど此時の狀より見れば河內國澁川郡跡部（今中河內郡下太子）にて物部守屋大連の領地なる別業所在地の阿斗なるべし攝津の阿斗は所在詳ならず

○物部贄子連、舊事紀に物部石上贄古連公守屋大連之弟とあり ○國政、三韓の政治を諮はせ給ふなり ○合議者、原本合を令に作る前本北本に據て改む ○悉皆饒富云々、此語に由て當時內政振はず武備足らず人民疲勞し力を外に用ふるの秋にあらざりしことを知るべし ○以悅使民、此語孝德紀にも見ゆ ○能使、通證に謂不辱命之使臣とあり ○太佐平、佐平は百濟の官十六等中の第一に當り太佐平は同官五人中の執政の臣を云 ○王子、釋紀秘訓にセシムとありオレムはセシムの誤か神功紀四十九年にも見ゆ ○謀言、百濟人等我國を窺はむ謀をめぐらすを云 ○欲請筑紫、通證に言百濟三百船人將投化日本故欲請筑紫地以居住也と云り水本には請を詣に作る ○宜陽賜予、通證に言伴聽以賜與居宅之地也と云 ○欲新造國、百濟人筑紫に移住し新に一國を造立せむと欲するなり ○壹伎、原本伎を岐に作る前本北本楓本に據て改む ○候至而殺云々、百濟人の至るを窺ひて殺せとなり通證に今按日羅議不及於新羅而反毒百濟如此甚何耶蓋當此時百濟有異心故不肯建任那日羅知之心忠告也と云り ○壘塞、天智紀卽位前紀には壘の一字をソコと訓り抄天地部に塞（和名曾古）險要之處所以隔內外也とあり ○（注）舊本云々、集解に私記攙入として削る ○計吾過筑紫許、德爾等の筑紫國を經過せる頃を見計らひて日羅を殺せとなり ○參官等遂發途、德爾等は遺り留まり參官のみ歸國せしなり ○血鹿、肥前國松浦郡値嘉鄕（今の五島列島）これなり古へは韓國の往來に皆此島に寄りしなり ○贄子大連、上文に大の字なし此人大連に任ぜられしこと本紀に見えず ○小郡、攝津志に西成郡上古難波小郡また僧日羅墓在大坂天滿同心町とあり ○石川、河內國石川郡に石川村あり今南河內郡石川村 ○百濟村、河內國錦部郡百濟鄕あり石川錦部は境を接すれば上古百濟村は石川郡に屬せしなるべし今南河內郡彼方村の內ならむ ○大伴村、河內志石川郡に南北大友の二村あり今南河內郡大伴村大字に北大伴見ゆ ○河田村、原本河を阿に作る前本北本に據て改む同志に同郡畑村とあり今南河內郡川西村大字甲田あり是なり ○數大夫、公式令に司及中國以下五位稱大夫とあれどこゝはたゞ刑部の官人を指して云 ○（注）姬島、安閑紀二年（三四頁）に媛嶋見ゆ ○以日羅、以の字は前本北本中本に據て補ふ ○葦北、通證に井澤氏曰今葦北郡有久多良木舊名百濟來此葬日羅地也と云 ○津嶋、對馬島なり

【十三年】難波吉士木蓮子、四年紀に出づ

（甲辰）十三年春二月癸巳朔庚子、遣難波吉士木蓮子使於新羅、遂之任那、

秋九月、從百濟來鹿深臣（闕名字）有彌勒石像一軀、佐伯連（闕名字）有佛像一軀、是歲、蘇我馬子宿禰請其佛像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等・池邊直氷田、使於四方訪覓修行者、於是唯於播磨國得僧還俗者、名高麗惠便、大臣乃以爲師、令度司馬達等女嶋、曰善信尼、（年十一歲）又度善信尼弟子二人、其一漢人夜菩之女豐女、名曰禪藏尼、其二錦織壺之女石女、名曰惠善尼、（壺、此云都符）馬子獨依佛法、崇敬三尼、乃以三尼付氷田直與達等、令供衣食、經營佛殿於宅東方、安置彌勒石像、屈請三尼、大會設齋、此時達等得佛舍利於齋食上、卽以舍利獻於馬子宿禰、馬子宿禰試以舍利置鐵質中、振鐵鎚打、其質與鎚悉被摧壞、而舍利不可摧毀、又投舍利於水、舍利隨心所願、浮沈於水、由是馬子宿禰・池邊氷田・司馬達等深信佛法、修行不懈、馬子宿禰亦於石川宅修治佛殿、佛法之初、自茲而作、

○鹿深臣、詳ならず ○彌勒、通證に魏書老釋志曰將來有彌勒佛繼釋迦而降世西域記曰梅呾麗耶、唐云慈氏卽姓也舊曰彌勒訛也平氏太子傳曆曰彌勒石像今在右京之元興寺東金堂と云 ○鞍部村主、河內志に鞍作故居河內國澁川郡鞍作村百濟工人多須那歸化賜姓鞍作其子都理善造佛像世稱鳥佛師太子廐戶寵而居此とあり ○司馬達等、元亨釋書に司馬達等南梁人繼體天皇十六年來朝とあれば鞍部村主と氏尸を賜はりし後も舊の氏名を稱したるなるべし ○池邊直氷田、錄和泉諸蕃に池田直坂上大宿禰同祖阿智王之後也とあり氷田は原本水田に作る北本中本に據て改む ○使、原本便に作る北本楓本中本に據て改む ○還俗、佛道に入りしものが又元の俗人に還るをいふ ○高麗惠便、元亨釋書に見ゆ ○善信尼、尼は釋紀に私記曰阿覽者梵語也、飜譯名義集比丘尼の條に尼者女也とあり是我國に於ける尼の始なり ○漢人夜菩、漢人は姓夜菩は名 ○錦織、錄右京諸蕃に錦織村主韓國人波努志之後也とあり山城及河內諸蕃にも同姓見ゆ ○（注）都符、原本都を部に作る前本北本中本に據て改む ○獨依佛法、原本獨を猶に作る前本北本に據て改む ○屈請、敬意を表して招請するを云、原本にイナセとあるはイマセの誤なりイマセは令坐の意 ○設齋、原本齋を齊に作る中本に據て改む齋は身口意の三をつゝしむを云、設齋は齋會を設くるなり ○佛舍利、名義集に舍利此云骨身又云靈骨とあり ○齋食、イミヒのイミは文字の如く淸淨にしてつゝしむを云ヒは飯なり傳曆に此齋食の上に舍

利を得たるは十四年の事とす　○卽、北本中本及紀略に據て補ふ　○鐵質、質は金ごこなり鐵を打鍛へる時の臺を云　○深信、原本深を保に作る北本に據て改む　○石川宅、大和志に高市郡石川村(今畝傍町大字石川)廢精舍今有本明寺及石浮屠高丈許云々とあり

【十四年】塔、釋氏要覽に梵語塔婆此謂高顯今略稱塔也とあり
○大野丘、大和志に廢大野丘塔在高市郡和田村礎石猶存とあり此事は平氏傳雜勘文抄南遊行囊抄等にも詳しく見ゆ
○前所獲、前の字は前本北本に據て補ふ
○柱頭、塔の心柱の下也
○佛神、釋紀に私記曰神字不讀今按西域記謂佛爲佛神とありナカコは中子の意
○父神、父の時に祭れる佛を云
○石像、上に鹿深臣が持歸りたるものなり
○中臣勝海大夫、系詳ならず集解には藍鎌子之子と云り
○陛下、楓本中本階下に作る
○難波堀江、欽明紀十三年(六二一頁)に見ゆ豐浦寺にありといへど攝津の難波なるべし北本掘を堀に作る
○雨衣、雨具なり
○佐伯造、仁賢紀五年

(乙巳)十四年春二月戊子朔壬寅、蘇我大臣馬子宿禰、起塔於大野丘北、大會設齋。即以達等前所獲舍利、藏塔柱頭。辛亥、蘇我大臣患疾。問於卜者。卜者對言、祟於父時所祭佛神之心也。大臣即遣子弟、奏其占狀。詔曰、宜依卜者之言、祭祠父神。大臣奉詔、禮拜石像、乞延壽命。是時國行疫疾、民死者衆。三月丁巳朔、物部弓削守屋大連、與中臣勝海大夫奏曰、何故不肯用臣言。自考天皇及於陛下、疫疾流行、國民可絶。豈非專由蘇我臣之興行佛法歟。詔曰、灼然、宜斷佛法。丙戌、物部弓削守屋大連、自詣於寺、踞坐胡床、斫倒其塔、縱火燔之、幷燒佛像與佛殿。既而取所燒餘佛像、令棄難波堀江。是日無雲風雨。大連被雨衣、訶責馬子宿禰與從行法侶、令生毀辱之心。乃遣佐伯造御室更名於閭礙也、喚馬子宿禰所供善信等尼。由是馬子宿禰不敢違命、惻愴啼泣、喚出尼等、付於御室。有司便奪尼等三衣、禁錮楚撻海石榴市亭。天皇思建任那、差坂田耳

(卷上三〇五頁)に出づ御室は刑部の官人なるべし
○三衣、僧の著する三種の衣服卽ち三種の袈裟なり諸乘法數に僧伽梨上衣九條二十五條鬱多羅僧中衣七條安陀會下衣卽五條とあり
○楚撻、シリカタウチは尻方打なるべし楚は禮記學記の注に荊也朴撻犯禮者撻は字書に打擊也とあり
○海石榴市、武烈紀卽位前紀(一一頁)に見ゆ
○亭、ウマヤタチは驛舘なり亭は驛と同じ
○坂田耳子王、欽明紀三十二年坂田耳子郎君とあり王は君の誤なるべし
○卒患於瘡、原本卒を率に作る前本北本中本に據て改む天皇と大臣と俄に痘瘡に罹らせ給ひしなり
○其患瘡者云々、此時世の人未だ痘瘡の名を知ず故に驚き恐れ遂に佛の祟と爲すに至れり
○三寶、佛寶法寶僧寶の三なり
○頂禮、印度古代の最敬禮なり尊者の前に俯伏し頂を地に著けて其人の足下に拜するを云

子王、爲使、屬此之時、天皇與大連卒患於瘡。故不果遣。詔橘豐日皇子曰、不可違背考天皇勅。可勤修乎任那之政也。又發瘡死者充盈於國。其患瘡者言、身如被燒、被打被摧、啼泣而死。老少竊相謂曰、是燒佛像之罪矣。夏六月、馬子宿禰奏曰、臣之疾病、至今未愈。不蒙三寶之力、難可救治。於是詔馬子宿禰曰、汝可獨行佛法。宜斷餘人。乃以三尼還付馬子宿禰。馬子宿禰受而歡悅、嘆未曾有、頂禮三尼、新營精舍、迎入供養。或本云、物部弓削守屋大連・大三輪逆君・中臣磐余連、俱謀滅佛法、欲燒寺塔、幷棄佛像。馬子宿禰諍而不從。秋八月乙酉朔己亥、天皇病彌留、崩于大殿。是時、起殯宮於廣瀨。馬子宿禰大臣佩刀而誄。物部弓削守屋大連听然而咲曰、如中獵箭之雀鳥焉。次弓削守屋大連手脚搖震而誄。馬子宿禰大臣咲曰、可懸鈴矣。由是二臣微生怨恨。三輪君逆使隼人相距於殯庭。穴穗部皇子欲取天下。發憤稱曰、何故事死王之庭、弗事生王之所也。

○精舍、寺院を云釋氏要覽に精舍釋迦譜云息心所棲曰精舍とあり智德を精練せる修行者の舍宅の意
○(注)中臣磐余連、系詳ならず
○彌留、文選王仲宣誄の注に彌終也とあり病の既にひさしきに彌りて危篤なる義雄略紀廿三年(卷上二八六頁)にも見ゆ
○崩于大殿、此天皇崩年のこと帝說は紀に同じく古事記には甲辰年四月六日崩とあり寶算は大日本史に本書享年缺神皇正統記如是院年代記並曰六十一皇代記皇年代略記歷代皇紀皇胤紹運錄並四十八未知孰是水鏡愚管抄作二十四誤とあり
○廣瀨、大和國廣瀨郡なり
○誄、シノビコトは偲び辭にて死者生前の功績を偲びて述ぶる辭なり誄は周禮の注に誄謂積累生時德行也また文選の注に濟曰誄者累也言人死後累其德行也とあり德行を累れて述ぶる意とす ○佩刀而誄、これも儀式のありしなるべし ○中獵箭之雀鳥、獵箭は猪鹿を射る矢なり雀が獵箭を負へるが如く佩刀長大にして體に適はざるを云 ○手脚搖震而誄、恐懼せしなるべし原本誄の下に搖震戰慄也の五字を注す攙入なること明なれば削る ○可懸鈴、搖震甚しく鈴を懸くればよく鳴るべしとて嘲咲せるなり ○三輪君云々、以下の事は用明紀に詳なり同紀に夏五月穴穗部皇子欲奸炊屋皇后而自强入殯宮寵臣三輪君逆乃喚兵衛重璅宮門拒不入云々とあり ○穴穗部皇子、天皇の異母弟に坐す ○生王、穴穗部皇子自らを云

日本書紀卷第廿

【卽位前紀】用明天皇、北本寮本此四字なし
○橘豐日天皇、法王帝說に多至波奈等己(ヨ)比乃彌己等とあり。
○堅鹽媛、蘇我稻目の女
○神道、神道の文字始めて此に見ゆ皇祖天神の立給ひし道なり周易に聖人以神道設教而天下服矣とあれどそれにはあらで儒佛に對して皇祖天神の定め給へるまゝに祖神を崇敬し祭祀を尊重するを云
○卽天皇位、大日本史に皇年代略記云年六十七按本書享年闕故不書とあり ○宮於磐余、原本宮を舘に作る北本寮本中本に據て改む舊事紀には都に作る ○池邊雙槻宮、帝說に伊波禮池邊宮記にはたゞ池邊宮とあり其地大和志に十市郡安部長門邑とす今磯城郡安倍村 ○守屋連、集解連の上に大の字を補ふ ○詔曰云々、集解に按轉寫者省文不載其文遂滅以下紀及三代實錄等往々有之と云り敷田氏は凡宣命は大字小字を交へ書ける物なれば然記しては此紀の體裁を紊す故に宣命の文を省きたるなりと云 ○酢香手姫皇女、天皇の皇女なり記には須賀志呂古郎子とあり ○(注)是皇女云々、以下類史一本に本文とせり ○日神祀、原本神一字衍れり北本に據て削る ○退葛城、皇女の御母廣子葛城直磐村女なるが故なり ○卅七年間云々、帝說に此王

日本書紀卷第廿一

橘豐日天皇　用明天皇
泊瀨部天皇　崇峻天皇

橘豐日天皇　用明天皇

橘豐日天皇、天國排開廣庭天皇第四子也、母曰堅鹽媛、天皇信佛法尊神道、十四年秋八月、渟中倉太珠敷天皇崩、九月甲寅朔戊午、天皇卽天皇位、宮於磐余、名曰池邊雙槻宮、以蘇我馬子宿禰爲大臣、物部弓削守屋連爲大連、並如故、壬申、詔曰云々、以酢香手姫皇女拜伊勢神宮、奉日神祀、是皇女自此天皇時逮于炊屋姫天皇之世、奉日神祀、自退葛城而薨、見炊屋姫天皇紀、或本云、卅七年間、奉日神祀、自退而薨、

拜祭伊勢神前至于三天皇也とあり三代は用明崇峻推古なり
【元年】穴穗部間人皇女、天皇の御異母妹
○廐戸皇子、推古紀元年に橘豐日天皇第二子也とあり田目皇子（帝說に聖王庶子とあり）を第一皇子としたるなり
○（注）豐耳聰、原本豐の字なし北本寮本中本に據て補ふ
○聖德、私記に音讀とあり
○豐聰耳、記に上宮之廐戸豐聰耳とあり推古紀に生而能言有聖智及壯一聞十人訴以勿失云々とあり此義なり
○法大王、潛確居類書方外部佛號曰法王法華經法王無上尊とあり
○法主王、原本主を王に作る北本楓本中本に據て改む
○是皇子、原本是を此に作り其下に之の字あり諸本に據て改訂す
○上宮、大和志に十市郡上宮（ウヘノミヤ）村あり是上宮の在りし地なりされば傍訓にカムツミヤとあれどウヘノミヤと訓べし（記傳及帝說證注）
○斑鳩、平群（今生駒）郡法隆寺村
○來目皇子、記に久米王
○殖栗皇子、記に植栗王
○茨田皇子、記に脫せり
○石寸名、帝說に伊志古那郞女に作る
○嬪、後宮職員令に妃夫人の次に嬪四員あり履中紀六年（卷上二一四一頁）に見ゆ
○田目皇子、記に多米王
○葛城直、欽明紀廿二年に見ゆ
○麻呂子皇子、北本及類史子の字なし帝說に乎麻呂古王に作り記に當麻王とあり
○當麻公、錄右京皇別に當麻眞人用明天皇々子麻呂古王之後也天武紀十三年當麻公賜姓曰眞人とあり神名帳に當麻郡比古神社二座とあり麻呂古王を祭るとぞ云
○兵衞、職員令左右兵衞府に兵衞八百人とあれどこゝは令制の兵衞にあらず敏達紀十四年に三輪公逆使隼人相拒於殯庭とあれば隼人なり　○重璅、說文に璅鏁本字又鏁鎖門鏁也とあり　○誄、原本誄に作る北本寮本に據て改む　○不荒朝庭云々、以下の句いかにも專恣の情明白なり　○兩大臣、馬子と守屋を指す　○在於殺逆君、在を存に作る　○磐余池邊、皇宮の地なり　○隱於三諸之岳、三輪氏なればなり　○隱於後宮、於の字は北本中本に據て補ふ　○（注）海石榴市宮、大和國十市郡、此分注後人の攙入なるべし　○（注）泊瀨部皇子、崇峻天皇なり　○門底、皇子の門底なり此下の注も攙入なるべし　○將之大連所、之かむとせしは穴穗皇子なり　○王者不近刑人、公羊傳に君子不近刑人近刑人則輕死之道也とあるを採れり刑人は逆を指す　○卽便隨去、皇子の門底を去るをいふ　○（注）行至於池邊也、是亦私記の攙入　○切諫、上文に穴穗皇子云々欲斬之兩大臣曰隨命とあり馬子も逆を殺すことに同意せしが更に

（丙午）元年春正月壬子朔、立穴穗部間人皇女爲皇后。是生四男。其一曰廐戸皇子。（更名豐耳聰聖德、或名豐聰耳法大王、或云法主王。）是皇子初居上宮、後移斑鳩。於豐御食炊屋姬（推古）天皇世、位居東宮、總攝萬機、行天皇事。語見豐御食炊屋姬天皇紀。其二曰來目皇子。其三曰殖栗皇子。其四曰茨田皇子。立蘇我大臣稻目宿禰女石寸名爲嬪。是生田目皇子。（更名豐浦皇子。）葛城直磐村女廣子、生一男一女。男曰麻呂子皇子。此當麻公之先也。女曰酢香手姬皇女。歷三代以奉日神。夏五月、穴穗部皇子欲奸炊屋姬皇后、而自強入於殯宮。寵臣三輪君逆乃喚兵衞、重璅宮門、拒而勿入。穴穗部皇子問曰、何人在此。兵衞答曰、三輪君逆在焉。七呼開門、遂不聽入。於是穴穗部皇子謂大臣與大連曰、逆頻無禮矣。於殯庭誄曰、不荒朝庭、淨如鏡面、臣治平奉仕。即是無禮。方今天皇子弟多在、兩大臣侍。誰得恣情專言奉仕。又余觀殯內、拒不聽入。自呼開門、七廻不應。願欲斬之。兩大臣曰、隨命。於是穴穗部皇子陰謀王天下之事、而口詐在於殺逆君。遂與物部守屋大連、率兵圍繞磐余池邊。逆君知之、隱於三諸之岳。是日夜半、潛自山出、隱於後宮。（謂炊屋姬皇后之別業。是名海石榴市宮。）逆之同姓白堤與橫山、言逆君在處。穴穗部皇子即遣守屋大連（或本云、穴穗部皇子與泊瀨部皇子、相計而遣守屋大連。）曰、汝應往討逆君并其二子。大連遂率兵去。蘇我馬子宿禰外聞斯計、詣皇子所、即逢門底、（謂皇子家門也。）將之大連所。時諫曰、王者不近刑人。不可自往。皇子不聽而行。馬子宿禰即便隨去、到於磐余、（行至於池邊也。）而切諫之。皇子乃從諫止。仍於此處、踞坐胡床、待大連焉。大連良久而至、率衆報命曰、斬逆等訖。（或本云、穴穗部皇子自行射殺。）於是馬子宿禰惻然頹歎曰、天下之亂不久矣。大連聞而答曰、汝小臣之所不識也。（此三輪君逆者、譯語田天皇之所寵愛、悉委內外之事焉。由是炊屋姬皇后與馬子宿禰、俱發恨於穴穗部皇子也。）是年也太歲丙午。

之を變じて殺すことを諫止せしなり敷田氏の說に是は馬子が姦策もて殺すべく促して他の見聞の爲に諫めたる其虛飾惡むべきなりと云り　○頹歎、中本歎を難に作る　○天下之亂不久矣、守屋の勅許を得ずして逆を誅せしを云るか　○汝小臣之所不識也、逆を誅せしは誅すべき理由ありてなり然るに天下の亂は久からずなど云へど我が行ふ所は汝の知らざる所なりと嘲りしなり　○(注)此三輪君云々、小山田與清の說に此四十四字は本文なりしが誤りて細注となりしならむと云り

【二年】丙午、諸本午を子に作る通證に考長曆子當作午二日也と云今之に據る　○御新嘗於磐余河上、舒明紀十一年にも正月に新嘗を行はれしこと見ゆ延引の理由は集解に蓋以亂也と云り　○違詔議曰云々、平田翁曰く違詔とはあるまじきことなり天皇佛教に歸依せむか否かを決し兼れて諮詢せさせ給ひしなれば各自に意見を上るは當然のことなりと云り　○(注)皇弟皇子者云々、私記の攙入なるべし　○豐國法師、法師の名此に始めて見ゆ元亨釋書便蒙に或曰百濟人慕我國化來是時佛法未周故寓豐後民間史失其名以國呼之と云り　○卿、ウシは大人なり尊敬して云り　○押坂部史、押坂は刑部か詳ならず史とあれば蕃

(丁未)二年夏四月乙巳朔丙午、御新嘗於磐余河上、是日天皇得病、還入於宮、群臣侍焉、天皇詔群臣曰、朕思欲歸三寶、卿等議之、群臣入朝而議、物部守屋大連與中臣勝海連、違詔議曰、何背國神敬他神也、由來不識若斯事矣、蘇我馬子宿禰大臣曰、可隨詔而奉助、詎生異計、於是皇弟皇子（皇弟皇子者穴穗部皇子、卽天皇庶弟）引豐國法師（闕名也）入於內裏、物部守屋大連耶睨大怒、是時押坂部史毛屎急來密語大連曰、今群臣圖卿、復將斷路、大連聞之、卽退於阿都（阿都大連之別業所在地名也）集聚人焉、中臣勝海連於家集衆隨助大連、遂作太子彥人皇子像與竹田皇子像厭之、俄而知事難濟、歸附彥人皇子於水派宮（水派、此云美麻多）舍人迹見赤檮（迹見姓也、赤檮名也、赤檮、此云伊知毗）伺勝海連自彥人皇子所退、拔刀而殺、大連從阿都家使物部八坂、大市造小坂、漆部造兄謂馬子大臣曰、吾聞群臣謀我、我故退焉、馬子大臣乃使土師

別なるべし　○斷路、大連が內裏より退出の路を斷ちて害せむとするを云　○阿都、抄に河內國澁川郡跡部鄕あり是なり今中河內郡龍華村の古名と云　○(注)阿都云々、十二字私記の攙入　○隨助、天智紀六年に側助を、齊明紀六年に引の字をキイと訓ると同じ意なり　○作太子彥人皇子像云々、二皇子共に敏達天皇の皇子なり彥人皇子は此時未だ太子に坐さず追記せしなり二皇子を厭ひしは守屋勝海共に穴穗皇子を擁立し奉らむとし此二皇子ましては障碍たるべき故に咒詛し奉れるか　○於水派宮、水派宮は武烈紀三年(五頁)に見ゆ原本於の字なし諸本に據て補ふ　○舍人、太子の舍人　○赤檮、原本檮を擣に作る應本中本に據て改む下同じ　○(注)迹見姓也云々、以下八字は私記の攙入なるべし　○物部八坂、詳ならず　○太市造小坂、錄左京諸蕃に太市首任那國人都努賀阿羅斯止之後也あり是と同じきか北本楓本小の下に市の字あり　○漆部造、天孫本紀に宇麻志摩治命四世孫三見宿禰命漆部連等祖とあり、天武紀十二年に姓宿禰を賜ふ戶異なれば別なるべし　○皮楯、總てを皮にて造り持運びに便よくしたるものなるべし　○槻曲、詳ならず　○南淵、大和國高市郡、今高市村大字稻淵是なり或は蜷淵とも云　○坂田寺、大和志に高市郡金剛寺在坂田村舊名小墾田坂田尼寺とあり今高市村大字坂田に舊趾あり　○菩薩、金剛經の注に菩普也薩濟也普濟衆生故曰菩薩猶儒者仁人君子之稱と云　○秋七月、秋の字は北本に據て補ふ　○挾侍、脇立なり本尊佛の左右に置く佛を云　○磐余池上陵、大和志に十市郡石寸腋上荒川陵在谷長門二邑と見え記に此天皇御陵在石寸掖上後遷科長中陵也とあり推古紀元年改葬の條を參考すべし　○崩、大日本史に本書享年闕神皇正統記如是院年代記倭漢合符並曰四十一、皇代略紀皇年代略記並六十九未知孰是とあり

【卽位前紀】崇峻天皇、寮本此四字なし　○泊瀨部天皇、記に長谷部若雀天皇とあり　○第十二子、紀略舊紀及太子傳二を五に作る大日本史に按舊事紀聖德太子

八嶋連於大伴毗羅夫連所、具述大連之語、由是毗羅夫連、手執弓箭皮楯、就槻曲家、不離晝夜、守護大臣（槻曲家者、大臣家也）、天皇之瘡轉盛、將欲終時、鞍部多須奈（司馬達等子也）進而奏曰、臣奉爲天皇出家修道、又奉造丈六佛像及寺、天皇爲之悲慟、今南淵坂田寺木丈六佛像、挾侍菩薩是也、癸丑、天皇崩于大殿、秋七月甲戌朔甲午、葬于磐余池上陵、

泊瀨部天皇　崇峻天皇

泊瀨部天皇、天國排開廣庭天皇第十二子也、母曰小姉君（稻目宿禰女也、已見上文）、二年夏四月、橘豐日天皇崩、五月、物部大連軍衆三度驚駭、大連元欲去

傳曆愚管鈔皇年代略記帝王編年記爲第十五子、歷代皇紀第十六子一代要記第六子水鏡神皇正統記與本書合

○（注）稻目宿禰云々、私記の攙入なるべし

○三度驚駭、度をヨリとよめるは推古紀に時をヨリ〳〵と訓るに同じ驚駭は太子傳拾遺所引元興寺緣起文に大連軍衆三度驚駭天皇喪とあり

○替立、通證に僭謂作替讀亦誤とあり

○謀泄、獵に言寄（コトヨ）せて穴穗部皇子を誘ひて事謀らむとする祕策の泄れしなり

○奉炊屋姫尊、通證に今案以太后令也且炊屋姫母出于蘇我故馬子奉以擅權也と云り

○嚴、原本にヨクテとあるはヨソヒテの誤なり

○宅部皇子、太子傳曆扶桑略記紹運錄に欽明天皇の皇子とあれど此には檜前天皇の子とあり檜前天皇は宣化天皇なれど同天皇の皇子にも見えず故に日本史は本書に據て未詳とす

○衞士、用明紀に兵衞とある同じ兵士なり令制軍防令に凡兵士向京師者名衞士とあり

餘皇子等、而立穴穗部皇子爲天皇、及至於今、望因遊獵而謀替立、密使人於穴穗部皇子曰、願與皇子將馳獵於淡路、謀泄、六月甲辰朔庚戌、蘇我馬子宿禰等奉炊屋姫尊、詔佐伯連丹經手、土師連磐村、的臣眞嚙曰、汝等嚴兵、速往誅殺穴穗部皇子、與宅部皇子、是日、夜半、佐伯連丹經手等圍穴穗部皇子宮、於是衞士先登樓上、擊穴穗部皇子肩、皇子落於樓下、走入偏室、衞士等擧燭而誅、辛亥、誅宅部皇子、（宅部皇子、檜隈天皇之子、上女王之父也、未詳、）善穴穗部皇子、故誅、甲子、善信阿尼等謂大臣曰、家出之途、以戒爲本、願向百濟、學受戒法、是月、百濟調使來朝、大臣謂使人曰、率此尼等將渡汝國、令學戒法、了時發遣、使人答曰、臣等歸蕃先噵國王、而後發遣、亦不遲也、秋七月、蘇我馬子宿禰大臣勸諸皇子與群臣、謀滅物部守屋大連、泊瀨部皇子、竹田皇子、廐戶皇子、難波皇子、春日皇子、蘇我馬子宿禰大臣、紀男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、膳臣賀拖夫、葛城臣烏那羅、倶率軍旅、進討大連、大伴連嚙、阿陪臣人、平群臣神手、坂本臣糠手、春日臣、（闕名字、）倶率軍兵、從志紀郡到澁河家、大連親率子弟與奴軍、築

○（注）檜隈天皇、宣化天皇なり

○上女王、詳ならず

○善信阿尼、善信は司馬達等の女阿尼は尼なり阿は親みて云り

○以戒爲本、優婆塞戒經に戒者名制能制一切不善法故とあり佛敎にては八戒十戒など種々の名稱を設け戒と云ことを最も尊重す

○國王、北本寮本中本王を主に作る

○亦不遲、原本亦を久に作る中本に據て改む

○竹田皇子、以下難波皇子春日皇子は敏達天皇の皇子

○紀臣男麻呂、原本男の字なし北本寮本應本に據て補ふ中本には宿禰の二字なし

○葛城臣、姓氏錄に見えず同左京皇別に葛城朝臣葛城襲津彥命之後也とあり同姓か考ふべし

○大伴連嚙、推古紀に咋、公卿補任に咋子に作る

○春日臣、詳ならず

稻城而戰、於是大連昇衣揩朴枝間、臨射如雨、其軍强盛、塡家溢野、皇子等軍與群臣衆、怯弱恐怖、三廻却還、是時、廐戶皇子束髮於額、（古俗年少兒年十五六間、束髮於額、十七八間、分爲角子、今亦然之、）而隨軍後、自忖度曰、將無見敗、非願難成、乃斮取白膠木、疾作四天王像、置於頂髮、而發誓言、（白膠木、此云農利泥、）今若使我勝敵、必當奉爲護世四王、起立寺塔、蘇我馬子大臣又發誓言、凡諸天王大神王等、助衞於我、使獲利益、願當奉爲諸天與大神王、起立寺塔、流通三寶、誓已嚴種種兵、而進討伐、爰有迹見首赤檮、射墮大連於枝下、而誅大連并其子等、由是大連之軍忽然自敗、合軍悉被皂衣、馳獵廣瀨勾原而散、是役、大連兒息與眷屬、或有逃匿葦原、改姓換名者、或有逃亡不知所向者、時人相謂曰、蘇我大臣之妻、是物部守屋大連之妹也、大臣妄用妻計、而殺大連矣、平亂之後、於攝津國造四天王寺、分大連奴半與宅、爲大寺奴田莊、以田一萬頃、賜迹見首赤檮、蘇我大臣亦依本願、於飛鳥地起法興寺、物部守屋大連資人捕鳥部萬、（萬名也、）將一百人守難波宅、而

聞大連滅、騎馬夜逃、向茅渟縣有眞香邑、仍過婦宅而遂匿山、朝庭議曰、萬懷逆心、故隱此山中、早須滅族、可不怠歟、萬衣裳弊垢、形色憔悴、持弓帶劍、獨自出來、有司遣數百衞士圍萬、萬卽驚匿篁藂、以繩繫竹引動、令他惑己所入、衞士等被詐、指搖竹馳言、萬在此、萬卽發箭、一無不中、衞士等恐不敢近、萬便弛弓挾腋、向山走去、衞士等卽夾河追射、皆不能中、於是有一衞士、疾馳先萬、而伏河側、擬射中膝、萬卽拔箭、張弓發箭、伏地而號曰、萬爲天皇之楯、將效其勇、不推問、翻致逼迫於此窮矣、可共語者來、願聞殺虜之際、衞士等競馳射萬、萬便拂捍飛矢、殺卅餘人、仍以持劍三截其弓、還屈其劍、投河水裏、別以刀子刺頸死焉、河內國司以萬死狀牒上朝庭、朝庭下符偁、斬之八段、散梟八國、河內國司、卽依符旨、臨斬梟時、雷鳴大雨、爰有萬養白犬、俯仰廻吠於其屍側、遂嚙擧頭、收置古冢、橫臥枕側、飢死於前、河內國司尤異其犬、牒上朝庭、朝庭哀不忍聽、下符稱曰、此犬世所希聞、可觀於後、須使

○從志紀郡到澁河家、志紀澁河共に河內國の郡名澁河家は上に見えたる阿都の家なり　○稻城、垂仁紀五年（卷上一二九頁）に見ゆ河內志に稻城址在弓削村（志紀郡）とあり　○衣揩朴枝間、衣揩は地名にて河內志に澁川郡衣揩村あり今長瀨村の大字に存す傳曆に登大榎木今存云とあり　○束髮於額　ヒサゴハナは瓠花なり瓠の花の如く髮を結ふを云十五六歲の男子の髮の狀なり此時太子は御年十六歲なればよく適へり　○（注）古俗云々、集解に私記の攙入とす今亦然之の亦然の二字北本寮本之爲に作る　○角子、通證に角子卽總角所謂左右髻也　今天王寺太子像亦如此とあり　○將無見敗、敵强くして敗らるゝこと無からむとなり　○非願難成、佛に願ふに非ざれば成就し難しとなり　○白膠木、抄草木部に樗（本草云沼天）惡木也辨色立成云白膠木（和名同上）箋注に按白膠木卽楓樹本草云楓香脂一名白膠香是也而楓香脂在上品樗木在下品其不同可知也崇峻紀云白膠木此云農利涅與辨色立成略同云々とあり一名を勝軍木といふ　○四天王、長阿含經に東方天王名云陀羅吒（持國）南方天王名毘瑠璃（增長）西方天王名毘留博叉（廣目）北方天王名毘沙門とあり　○項髮、景行紀四十年に頭髻を訓り髮をたばねて一つにするを云後世タブサと稱す　○（注）農利涅、原本農を豐に作る中本に據て改む　○蘇我馬子、北本寮本我の下臣の字あり　○枝下、北本下を中に作る　○忽然、原本忽然に作る北本應本楓本に據て改む　○皂衣、字書に皂は黑繒也とあり　○廣瀨勾原、廣瀨は大和國の郡名勾は今聞えず　○葦原、守屋が領地の一なり　○或有逃亡、有の字北本應本に據て補ふ　○大臣妄用妻計、通證に考皇極二年紀則妻計謂以私欲滅宗家也與馬子弑逆滔天大罪豈容天誅哉と云り　○四天王寺、今大阪市天王寺區にあり推古紀元年に云べし　○田莊、田處なり又ナリドコロとも云　○一萬頃、抄天地部に唐令云畝百爲頃とあり　○飛鳥、大和國高市郡の地名法興寺のことは推古紀に云　○資人、朝廷より大官重臣に充て賜へる人なり軍防令に資人一位百人二位八十人三位六十人云々又親王に帳內諸臣に資人など云にて知るべし　○捕鳥部、垂仁紀卅三年（卷上一三二頁）に見ゆ姓氏錄鳥取部に作る　○（注）萬名也、此三字私記の攙入なるべし　○難波宅、攝津志に東生郡森神祠の條に森村卽此有守屋難波第址とあり　○茅渟縣有眞香邑、茅渟は前に出づ有眞香は式に和泉國和泉郡阿理莫神社あり和泉志に泉南郡阿間河莊とある是なり今同郡麻生鄕村に地名存せり　○憔悴、生氣なく委縮すること　○擬射、發射すべく用意することを云　○天皇之楯、之の字は北本中本に據て補ふ萬葉二十防人歌に祁布與利波可敝里見奈久弖意富岐美乃之許乃美多弖等伊涅多都和例波とあるは萬の眞心と同じ意を表はせり　○殺虜之際、原本際を除に作る中本に據て改む、誅せらるべき理由を聞かむとなり　○刀子、抄調度部細工具に楊氏漢語抄云刀子（賀太奈）とあり　○牒上、唐志尙書省下達上有六牒其一也とあり　○下符、符は訓の如く押手なり手形とも云唐六典に凡上之所以逮下其制有六曰制敕冊令敎符、注に尙書省下於州州下於縣縣下於鄕皆曰符とあり後の制は公式令にも見ゆ　○散梟、字書に梟懸首於木也とありクシサセは串刺にて串に刺して高く揭ぐる意なるべし　○葬萬與犬、和泉志に泉南郡阿間河莊捕鳥部萬墓在八田村狗墓在萬墓北とありオクは置なり　○河內國司、司の字は北本楓本中本に據て補ふ　○餌香川原、河內國古市（今南河內）郡　○櫻井田部連、上に見ゆ　○犬、ウヌと訓るは通音なり　○嚙續身頭、身と頭と別の處にありしを嚙來て同じ處に置て續ぎ合するを云　○使收巳主、原本主を至に作る北本寮本に據て改む　○卽天皇之位、大日本史に皇年代略記一代要記並云年六十九按本書享年缺故不書とあり　○宮於倉梯、記に倉梯柴垣宮とあり大和國十市郡に倉橋村（今磯城郡多武峯村大字倉梯）あり大和志に同村金福寺卽此舊蹟と云

【元年】蜂子皇子、今羽前國東田川郡手向村羽黑

萬族、作墓而葬、由是萬族雙起墓於有眞香邑、葬萬與犬焉、河內國司言、於餌香川原有被斬人、計將數百、頭身既爛、姓字難知、但以衣色收取其身者、爰有櫻井田部連膽渟所養之犬、嚙續身頭、伏側固守、使收己主、乃起行之、八月癸卯朔甲辰、炊屋姬尊與群臣勸進天皇、卽天皇之位、以蘇我馬子宿禰爲大臣如故、卿大夫之位亦如故、是月、宮於倉梯、

（戊申）元年春三月、立大伴糠手連女小手子爲妃、是生蜂子皇子與錦代皇女、

山上に出羽神社攝社として蜂子神社あり御墓も同社境内に在りと云 ○令斤、傳曆斤を欣に作る ○聆照、拾遺記聆を令に作る ○鑪盤博士、傳曆に鑪盤師とあり鑪盤は抄佛塔具に露盤とあると同じく塔の頂に高く立つる物銅製にて層をなす輪を貫きたるが如く見ゆ之を鑄造製作する人を博士と云 ○瓦博士、傳曆に造瓦師とあり瓦は抄居處部に切韻云瓦(和名加波良)燒泥爲屋宇上とあり ○畫工、佛畫師なり ○飛鳥衣縫造、雄略紀十四年(卷上二八〇頁)に見ゆ ○始作法興寺、始作とは建築に著手せるを云竣工せしは推古天皇四年なり此寺元興寺とも飛鳥寺とも云 ○飛鳥眞神原、大和國高市郡飛鳥村神奈備山の麓 ○苫田、通證に今尚存地名苫田と云 ○是年也、也の字北本寮本に據て補ふ 【二年】近江臣滿、記に波多八代宿禰者淡海臣之祖とあり滿は傳曆に蒲と見ゆ蒲生郡の蒲を以て名とせるか ○東山道、遣されし國々は近江より陸奥に及び蝦夷の國境をも觀察せしめられしに據れば後の制の東山道の始と見るべし ○宍人臣、錄左京皇別に宍人朝臣阿部朝臣同祖大彦命男彦背立大稻腰命之後也とあり天武紀十三年朝臣の姓を賜ふ ○阿倍臣、傳曆に阿部臣枚吹(ヒラフキ)とあり ○北陸道、今のと同じ 【三年】櫻井寺、元興寺緣起に櫻井寺は今豐浦寺也と見ゆ大和志に高市郡廣嚴寺在豐浦村舊作向原又名豐浦寺傍有井曰

是歳、百濟國遣使幷僧惠總、令斤、惠寔等、獻佛舍利、百濟國遣恩率首信、德率蓋文、那率福富味身等、進調、幷獻佛舍利、僧聆照律師、令威、惠衆、惠宿、道嚴、令開等、寺工太良未太、文賈古子、鑪盤博士將德白昧淳、瓦博士麻奈父奴、陽貴文、陵貴文、昔麻帝彌、畫工白加、蘇我馬子宿禰請百濟僧等、問受戒之法、以善信尼等付百濟國使恩率首信等、發遣學問、壞飛鳥衣縫造祖樹葉之家、始作法興寺、此地名飛鳥眞神原、亦名飛鳥苫田、是年也太歳戊申、

(己酉)二年秋七月壬辰朔、遣近江臣滿於東山道、使觀蝦夷國境、遣宍人臣鴈於東海道、使觀東方濱海諸國境、遣阿倍臣於北陸道、使觀越等諸國境、

(庚戌)三年春三月、學問尼善信等、自百濟還、住櫻井寺、冬十月、入山取寺材、是歳、度尼、大伴狹手彦連女善德、大伴狛夫人新羅媛善妙、百濟媛妙光、

櫻井とあり寺名此に起れり ○大伴狛夫人、大伴の二字は北本中本に據て補ふ狛夫人は蓋狹手彦が高麗を伐ちし時虜にせるなり ○德齊法師、中本齊を濟に作る元亨釋書に釋德濟梁人司馬達等之子也與漢人善聰等八人同出家とあり 【四年】磯長陵、諸陵式に河内國石川郡河内志に在石川郡半室村西と見え陵墓要覽に南河内郡磯長村大字太子とあり ○妣皇后、御母石姫なり ○十一月、原本一を二に作る北本寮本中本及紀略に據て改む傳曆亦同じ ○紀男麻呂宿禰、水本及傳曆に紀の下臣の字あり ○巨勢猿臣、原本勢の下に臣比良夫の四字あり又猿を狹に作る北本寮本に據て改む傳曆にも巨勢臣猿とあり ○葛城烏奈良臣、傳曆に葛木小楢とあり蘇我氏と同族なり、 ○吉士金、推古紀五年(一〇九頁)に磐金とあり磐の字を脫せるか 【五年】山猪、野猪なり

又漢人善聰、善通、妙德、法定照、善智聰、善智惠、善光等、鞍部司馬達等子多須奈、同時出家、名曰德齊法師、

(辛亥)四年夏四月壬子朔甲子、葬譯語田天皇於磯長陵、是其妣皇后所葬之陵也、秋八月庚戌朔、天皇詔群臣曰、朕思欲建任那、卿等何如、群臣奏言、可建任那官家、皆同陛下所詔、冬十一月己卯朔壬午、差紀男麻呂宿禰、巨勢猿臣、大伴囓連、葛城烏奈良臣、爲大將軍、率氏々臣連、爲裨將部隊、領二萬餘軍、出居筑紫、遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那、問任那事、

(壬子)五年冬十月癸酉朔丙子、有獻山猪、天皇指猪詔曰、何時如斷此猪之頭、斷朕所嫌之人、多設兵仗、有異於常、壬午、蘇我馬子宿禰聞天皇所詔、恐嫌於己、招聚儻者、謀弑天皇、是月、起大法興寺佛堂與步廊、

十一月癸卯朔乙巳、馬子宿禰詐於群臣曰、今日進東國之調、乃使東漢直駒弑于天皇、或本云、東漢直駒、東漢直磐井子也、是日、葬天皇于倉梯岡陵、或本云、大伴嬪小手子、恨寵之衰、使人於

通證に獻之者供御之用とあり
○猪之頭、原本頭を頸に作る北本及類史に據て改む
○斷朕所嫌之人、通證云今按以此詔考之馬子既有弑逆之幾也然則前年出諸將於筑紫亦是馬子空內以逞惡之隱謀耳と云
○起大法興寺、大法興寺は他所に見えず起大は大起の顚倒ならむか
○步廊、抄居處部に廊唐韻云廊（漢語抄云保曾度能）殿下外屋也とあり
○東漢直駒、東漢直は應神紀廿年（卷上二〇四頁）に見ゆ歸化人なり歸化人を唆して弑逆を行はしめしなるべし
○弑于天皇、原本弑を殺に作る中本に據て改む此文に就て傳曆に委しく記せり天皇の崩年は大日本史に本書享年闕水鏡神皇正統記皇代記一代要記並曰七十二皇胤紹運錄皇年代略記歷代皇紀七十三未知孰是とあり
○是日葬、天皇崩御即日に葬り奉れること古今に例なし馬子が專恣暴戾推して知るべし
○倉梯岡陵、諸陵式に在大和國十市郡無陵地並陵戶大和志に在十市郡倉橋村東今曰赤坂とあり今磯城郡多武峯村に屬す
○遣驛使云々、按に馬子已が大逆を責められむことを恐れ出征將士の心を專ら外征に向けしめむとの猾黠の心より出でしにて此驛使は蓋馬子が遣はししなり
○蘇我娘嬪、中本娘の字なし傳曆に天皇嬪とあり娘恐らくは衍ならむ
○奸、北本寮本中本汗に作る

蘇我馬子宿禰曰、頃者有獻山猪、天皇指猪而詔曰、如斷猪頸、何時斷朕思人、且於內裏大作兵仗、於是馬子宿禰聽而驚之、丁未（五）、遣驛使於筑紫將軍所曰、依於內亂、莫怠外事、是月、東漢直駒、偸隱蘇我娘嬪河上娘（河上娘蘇我馬子宿禰女也）為妻、馬子宿禰忽不知河上娘為駒所偸、而謂死去、駒奸嬪事顯、為大臣所殺、

日本書紀卷第廿一

【即位前紀】豐御食炊屋姬天皇、帝說に止余美氣加支夜比賣天皇とあり此御名はいかなる由にて稱へ奉りけむ廐戶皇子の御名の類にやと思はるれど證とすべきもの聞えず
○推古天皇、北本天皇の二字なし
○軌制、成務紀（卷上一六五頁）に幹了を孝德紀大化二年に明直をヲサヲサシと訓り長々（ヲサヲサ）しの義立優りて甲斐々々しき意なり
○太珠敷、原本珠を玉に作る上下の文に據て改む
○見殺、舊紀殺を弑に作る
○渟名倉、原本倉を食に作る諸本に據て改む
○即天皇位、大日本史に按本書天皇年十八立為皇后三十四敏達帝崩三十九崇峻帝崩又天皇崩下注云七十五今推干支數之前後年紀自相反蓋有

日本書紀卷第廿二

豐御食炊屋姬天皇　推古天皇

豐御食炊屋姬天皇、天國排開廣庭天皇（欽明）中女也、橘豐日天皇同母妹也（北）、幼曰額田部皇女、姿色端麗、進止軌制、年十八歲、立為渟中倉太珠敷天皇（敏達）之皇后、卅四歲、渟中倉太珠敷天皇崩、卅九歲、當于泊瀨部天皇（崇峻）五年十一月、天皇為大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請渟中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女、以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進、至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月壬申朔己卯（八）、皇后即天皇位於豐浦宮、

元年（癸丑）春正月壬寅朔丙辰（十五）、以佛舍利置于法興寺刹柱礎中、丁巳（十六）、建刹柱、

夏四月庚午朔己卯（十）、立廐戶豐聰耳皇子、為皇太子、仍錄攝政（中）、以萬機悉委焉、橘豐日天皇（用明）第二子也、母皇后曰穴穗部間人皇女、皇后懷

姙開胎之日、巡行禁中、監察諸司、至于馬官、乃當廐戶、而不勞忽產之、生而能言、有聖智、及壯一聞十人訴、以勿失能辨、兼知未然、且習內教於高麗僧慧慈、學外典於博士覺哿、並悉達矣、父天皇愛之、令居宮南上殿、故稱其名、謂上宮廐戶豐聰耳太子、秋九月、改葬橘豐日(用明)天皇於河內磯長陵、是歲、始造四天王寺於難波荒陵、是年也太歲癸丑、

(甲寅)二年春二月丙寅朔、詔皇太子及大臣、令興隆三寶、是時、諸臣連等、各爲君親之恩、競造佛舍、卽是謂寺焉、

(乙卯)三年夏四月、沈水漂著於淡路嶋、其大一圍、嶋人不知沈水、以交薪燒於竈、其烟氣遠薰、則異以獻之、五月戊午朔丁卯、高麗僧慧慈歸化、則皇

一誤故今不書と云り　○豐浦宮、大和志に高市郡古蹟豐浦宮在豐浦村とあり今飛鳥村の大字となる

【元年】剎柱、剎は檫に同じ佛塔中心の柱なり釋紀に私記曰剎字音讀玉篇剎剎柱也また抄調度部佛塔具に檫四聲字苑云檫(俗云心乃波之良)佛塔中心柱也箋注に檫玄應音義云剎又作檫同音察梵言差多羅又云剎書無此字卽剎字略也依之檫本梵語差多羅之訛略無其字故借用剎字訛作剎後又木旁諧察聲作檫遂與木名檫字混無別也とあり　○錄攝政、字書に錄は總也とあり攝政は神功皇后紀に出づ　○以萬機悉委、正統記に厩戶皇子を皇太子として萬機の政を任せ給ふ攝政と申しき太子の監國といふこともあれどそれは暫の事なりこれは偏に天下を治め給ひけりとあり　○馬官、令制の左右馬寮ならむ　○產之、此事傳曆に詳なり　○內教、佛典をいふ　○外典、儒書をいふ　○並悉達矣、原本並を兼に作る岩本寮本應本に據て改む　○上宮、カムツミヤとあれどウヘノミヤとよむべし　○慧慈、原本慧を惠に作る諸本に據て改む下同じ　○磯長陵、諸陵式に河內國石川郡河內志に石川郡春日村とあり今の南河內郡磯長村大字春日なり磯長中陵と云　○始造四天王寺云々、崇峻紀卽位前紀に平亂之後於攝津國造四天王寺また太子傳補闕記に於玉造之東岸上卽以營四天王寺始立垣基とある如く始め玉造に建られしを今度此に移し立てたるなり扶桑略記に四天王寺法號荒陵寺荒陵鄕東建立故以處村號寺攝津志に四天王寺天王寺村山號荒陵一名三津寺又名難波大寺又稱法華園又名敬田院云々推古天皇元年正月始造寺於難波荒陵とあり

【二年】謂寺、事物紀原に攝摩騰自西域白馬駄經來初止鴻臚寺遂取寺名爲創立白馬寺後名浮屠所居皆曰寺とあり

【三年】沈水、通證に卽沈香李時珍曰木之心節置水則沈故名沈水今按世稱名香第一者有太子

太子師之、是歲、百濟僧慧聰來之、此兩僧、弘演佛教、並爲三寶之棟梁、秋七月、將軍等至自筑紫、

(丙辰)四年冬十一月、法興寺造竟、則以大臣男善德臣拜寺司、是日、慧慈慧聰二僧始住於法興寺、

(丁巳)五年夏四月丁丑朔、百濟王遣王子阿佐朝貢、冬十一月癸酉朔甲午、遣吉士磐金於新羅、

(戊午)六年夏四月、難波吉士磐金至自新羅而獻鵲二隻、乃俾養於難波杜、因以巢枝而產之、秋八月己亥朔、新羅貢孔雀一隻、冬十月戊戌朔丁未、越國獻白鹿一頭、

(己未)七年夏四月乙未朔辛酉、地動、舍屋悉破、則令四方俾祭地震神、秋九月癸亥朔、百濟貢駱駝一匹、驢一匹、羊二頭、白雉一隻、

一名法隆寺有蘭奢待一名東大寺香道祕傳曰法隆寺者聖德太子得之天竺以藏寶庫蓋謬傳此事乎とあり信友校本水を木に作る

○僧慧聰、僧の字は岩本北本應本及類史に據て補ふ

○將軍等至、崇峻紀四年に發せし人々なり

【四年】法興寺、崇峻紀五年に此寺を造り始めし事見え此年に至りて成る　○寺司、集解に按猶如後世置造興福寺長官とあり

○慧聰、原本慧を惠に作る諸本及上文に據て改む

【五年】甲午、原本甲子に作る集解に從て改む

【六年】鵲、抄羽族部に鵲本草云鵲(和名加佐々岐)飛駮馬泥鵲腦名也また本草綱目に李時珍曰鵲烏屬也大如鴉而長尾尖觜黒爪綠背白腹尾翮黒白駮雜上下飛鳴と見ゆ　○二隻、原本隻を侯に作る岩本應本中本に據て改む下同じ　○難波杜、通證に東生郡有森林卽此今有神祠云々とあれど生國魂神社を難波大社ともいへば生國魂社の舊社地の森をいひしなるべし杜は史記周本紀に畢在鎬東南杜中と見え注に徐廣曰杜一作社とあり岩本寮本共に社に作るモリは說文に森、木多貌とあり木多くして籠れる意　○孔雀、抄羽族部に兼名苑注云孔雀(俗云音宮尺)毛端圓一寸者謂之珠毛毛文如畫云々とあり　○白鹿、仁德紀五十三年(卷上二二九頁)に見ゆ

【七年】舍屋、ヤカスは家栖(ヤカス)なるべし抄居處部には宇を夜賀須と訓り

○地震神、陰陽道の祭祀に地震祭あり此神も陰陽

道の神なるべし　○駱駝、抄牛馬部に駱駝本草云駱駝（良久太乃宇末）周書云騾駝（騾卽駝字也）有肉鞍能負重致遠者也とあり　○四、原本疋に作る岩本北本寮本に據て改む下同じ　○驢、抄牛馬部に驢説文云驢（宇佐岐无末）似馬長耳とあり　○羊、抄毛群部に兼名苑云羝一名羱（比都之）羊也とあり　○白雉、治部式祥瑞に白雉岱宗之精也とあり中瑞とす

【八年】境部臣、錄攝津皇別に坂合部連大彦命之後、允恭天皇御世造立國境之標因賜姓坂合連とあり境部坂合部は同じかれど臣と連と姓を異にすれば此境部臣はそれか知り難し馬子の弟に境部臣摩理勢あれどそれとも定め難し　○穗積臣、開化紀卽位前紀（卷上一〇九頁）に見ゆ　○大將軍副將軍、軍防令に凡將帥出征滿一萬人以上將軍一人副將軍二人とあり　○於是直指新羅、原本此六字重複す岩本北本楓本等に據て削る　○多々羅、以下四城は繼體紀廿三年（二三三頁）に出づ但し弗知鬼を費智とす　○南迦羅阿羅等、南迦羅阿羅は神功紀四十九年（卷上一九〇頁）に出づ原本等を々に作る通證所引一本に據て改む　○神、原本の傍訓ミネは三禾の誤なり　○新羅任那二國、原本任那の下王の字あり北イ本中本に據て削る　○天上有神云々、此語新羅の誤辭のみにはあるまじ彼國人古くよりかゝる信念を懷きしなるべし上の字恐くは衍　○船柂、原本柂を拖に作る岩本に據て改む

【九年】斑鳩、大和國平群郡

（庚申）八年春二月、新羅與任那相攻、天皇欲救任那、是歲、命境部臣爲大將軍、以穗積臣爲副將軍、並闕名　則將萬餘衆、爲任那擊新羅、於是直指新羅、以泛海往之、乃到于新羅、攻五城而拔、於是新羅王惶之、擧白旗、到于將軍之麾下而立、割多々羅、素奈羅、弗知鬼、委陀、南迦羅、阿羅等六城以請服、時將軍共議曰、新羅知罪服之、强擊不可、則奏上、爰天皇更遣難波吉師神於新羅、復遣難波吉士木蓮子於任那、並檢挍事狀、爰新羅任那二國、遣使貢調、仍奏表之曰、天上有神、地有天皇、除是二神、何亦有畏乎、自今以後、不有相攻、且不乾船柂、每歲必朝、則遣使以召還將軍、將軍等至自新羅、卽新羅亦侵任那、

（辛酉）九年春二月、皇太子初興宮室于斑鳩、三月甲申朔戊子、遣大伴連囓于高麗、遣坂本臣糠手于百濟、以詔之曰、急救任那、夏五月、天皇居于耳梨行宮、是時大雨、河水漂蕩、滿于宮庭、秋九月辛巳朔戊子、新羅之間諜者迦摩多到對馬、則捕以貢之、流于上野、冬十一月庚辰朔甲申、議攻新羅、

○耳梨行宮、大和志に十市郡木原村とあり今磯城郡耳成村大字木原是なり　○大雨、原本大を火に作る岩本以下諸本及下文に據て改む　○間諜者、ウカミは窺見（ウカミ）なり通鑑の注に間諜間視也今謂之細作蓋俗言走報軍情飛泄密事之人也と云

【十年】來目皇子、用明天皇々子にて太子の同母弟　○諸神部、中臣忌部猿女鏡作等總べて神事に關係する事を掌る部屬なり之を授けしは軍中にて祭祀祈請を行ふ爲にて古制に則りしものなり　○國造、原本造を遣に作る諸本に據て改む　○嶋郡、筑前國志摩郡なり　○觀勒、三十一年紀及三代實錄貞觀三年六月條にも見ゆ　○貢曆本云々、曆は通證に一條兼良公の說を擧げて隋開皇二十年（推古天皇八年）に成りし皇極曆なりとす遁甲は後漢書方術傳の注に遁甲推六甲之陰而隱遁也今書七志有遁甲經とあり方術は天文醫卜の類を云　○陽胡史、錄左京諸蕃に隋煬帝の後とあれど推古天皇十年は煬帝の父文帝仁壽二年に當れば是とは別なるべし　○大友村主、姓氏錄に見えず同書に大友史とあるは異姓なり　○山背臣、詳ならず姓氏錄諸蕃に山背忌寸あれど異姓なり　○日立、原本日の下に並の字あり前本及傳曆に據て削る　○僧々隆、々の字疑はし隆は岩本阼に作る

（壬戌）十年春二月己酉朔、來目皇子爲擊新羅將軍、授諸神部及國造伴造等、并軍衆二萬五千人、夏四月戊申朔、將軍來目皇子到于筑紫、乃進屯嶋郡、而聚船舶運軍粮、六月丁未朔己酉、大伴連囓、坂本臣糠手、共至自百濟、是時、來目皇子臥病以不果征討、冬十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書、并遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日立學方術、皆學以成業、閏十月乙亥朔己丑、高麗僧々隆、雲聰、共來歸、

【十一年】皇太子、信友校本に子の下及の字あるべしと云
○謂之曰、謂は詔の誤なるべし
○娑婆、周防國佐波郡
○土師連、此氏歷世喪事を司る故に之を遣されしなり
○娑婆連、皇極紀二年に見ゆ
○埴生山岡上、河內國名所圖會に河內志に丹比郡大塚村にありと云は非なり埴生山は羽曳山の山脈にて野々上など云邊なり西は野村と云ほとり坂を登れば其所に古墳あり此墳恐くは來目皇子のならむと云陵墓要覽に今南河內郡埴生村大字埴生野とあり
○當麻皇子、岩本麻を摩に作る下同じ
○赤石檜笠岡上、播磨國赤石郡にあり萬葉七に印南野者往過奴良志天傳日笠浦波立見とあり通釋に或人云今官道の和坂(カニカサカ)の高き所をひかさ岡と云卽坂より北方に姫の御墓あり又御祠もありて檜笠社と稱すと云
○小墾田宮、大和國高市

(癸亥)十一年春二月癸酉朔丙子、來目皇子薨於筑紫、仍驛使以奏上、爰天皇聞之大驚、則召皇太子蘇我大臣、謂之曰、征新羅大將軍來目皇子薨之、其臨大事而不遂矣、甚悲乎、仍殯于周芳娑婆、乃遣土師連猪手、令掌殯事、故猪手連之孫、曰娑婆連、其是之緣也、後葬於河內埴生山岡上、夏四月壬申朔、更以來目皇子之兄當麻皇子、爲征新羅將軍、秋七月辛丑朔癸卯、當麻皇子自難波發船、丙午、當麻皇子到播磨、時從妻舍人姬王、薨於赤石、仍葬于赤石檜笠岡上、乃當麻皇子返之、遂不征討、冬十月己巳朔壬申、遷于小墾田宮、十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得是像以恭拜、時秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺、是月、皇太子請于天皇、以作大楯及靫、靫、此云由岐、又繪于旗幟、十二月戊辰朔壬申、始行冠位、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智、并十二階、並以當色絁縫之、頂撮總如囊、而著緣焉、唯元日著髻華、髻華、此云于孺、

郡豐浦村　○秦造河勝、皇極紀三年に此人を禹都麻佐云々と謠へり　○蜂岡寺、山城國葛野郡太秦村に在り廣隆寺と云緣起に推古天皇壬午之歲奉爲聖德太子所建立とあり壬午は三十年なりされば其創立の功を擧りしは同年ならむか　○大楯及靫、儀仗に用ふるなり　○繪于旗幟、是も亦式日或は儀仗に用ふ繪は後世の元日及卽位時等に建つる仗旗殿前烏像幢左日像幢次朱雀次靑龍旗右月像幢次白虎次玄武旗などの類なるべし　○始行冠位、冠は神代より被りしこと古事記及風土記に徵して明なれど之を被りて品位を區別する事は此に始まれり　○大德云云、帝說に准五行定爵位也また傳曆に太子始製五行位德仁義禮智信各有大小德攝五行也故置頭首とあり五行は木火土金水なり之を五常に配當すれば仁は木禮は火信は土義は金智は水なり故に德仁禮信義智と叙列したるなり　○當色絁、當色とは位階に相當の色なり五行を五方に配當すれば仁は木にて東禮は火にて南信は土にて中央義は金にて西智は水にて北なり東は春にて其色靑南は夏にて赤中央は土用にて黃西は秋にて白北は冬にて黑色なれば之を用ひ德は五行を統べたる名なれば陰陽を合せたる紫色を之に配當し深淺を以て大小を區別せり絁は抄布帛部に絁唐韻云絁（阿之岐沼）紬似布也箋注に按今俗太織絹是類也とあり　○頂撮總如囊、詳なることは知り難けれど大略は此文にて推測せらるる通釋に此時冠を定められしのみならず髮の樣をも改めしなるべし古代は男は左右の髻に結ふを今は一つに總束ねて髻とし囊の如き冠の內に入るべくせしものと聞えたりと云ることなり　○著緣、緣をモトホリと訓るは廻るを云古言なりへりを云　○髻華、景行紀十七年の思邦歌に見えたれど其當時のものは花木の枝を髮に挿したるをこゝなるは金銀を以て華を鏤めたるものを冠に添て著たるなり北史倭國傳に其王始制冠以錦綵爲飾とある是なり

【十二年】賜冠位、冠を賜ひしなり位は自ら其冠に備れば冠を賜ふは卽ち位を賜ふなり
○憲法、字書に謂法度也國語に賞善罰姦國之憲法也とあり此意にて制定せられしなるべし傳曆に太子肇制憲法十七條手書奏之とあり
○以和爲貴、第一條は上下和睦を以て第一とすべきことを諭されたり以和爲貴は論語學而篇に禮之用、和爲貴とあるに據れり
○無忤爲宗、人に忤ひ背くことなきを專一とするを云
○人皆有黨、人皆各々好む所を以て交り朋黨を立

(甲子)十二年春正月戊戌朔、始賜冠位於諸臣、各有差、夏四月丙寅朔戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、一曰、以和爲貴、無忤爲宗、人皆有黨、亦少達者、是以或不順君父、乍違于隣里、然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成、二曰、篤敬三寶、三寶者佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人非貴是法、人鮮尤惡、能敎從之、其不歸三寶、何以直枉、三曰、承詔必謹、君則天之、臣則地之、天覆地載、四時順行、萬氣得通、地欲覆天、則致壞耳、是以君言臣承、上行下靡、故承詔必愼、不謹自敗、四曰、群卿百寮、以禮爲本、其治民之本、要在乎禮、

つるを云

○上和下睦、孝經に民用和睦上下無怨とあるに據れり

○諧於論事云々、君臣上下相和し相諧(カナ)ひて萬事を相論ずる時は事理自ら通じ何事も成らざるは無からむとなり

○篤敬三寶、二條は佛法を信仰すべき事を論されたり

○佛法僧也、此の四字通證に拾芥抄作細注宜從といひ集解は後人の加ふる所として削る

○四生之終歸、法華經隨喜功德品に四生衆生卵生、胎生、濕生、化生とあり一切の生物を云ひ歸は悉く歸依するを云

○萬國之極宗、萬國にて此上もなき大本の教と云意

○承詔必謹、三條は謹みて詔勅を奉ずべきことを諭されたり

○君則天之云々、管子に君臣者天地之位也また禮郊特牲に天先乎地君先乎臣其義一也とある如く天は上にして君に比し地は下にして臣に比す

○四時順行、四季の順氣

上不禮而下非齊、下無禮以必有罪、是以君臣有禮、位次不亂、百姓有禮、國家自治、五曰、絶餮棄欲、明辨訴訟、其百姓之訟、一日千事、一日尙爾、況乎累歲、頃治訟者、得利爲常、見賄聽讞、便有財之訟、如石投水、乏者之訟、似水投石、是以貧民則不知所由、臣道亦於焉闕、六曰、懲惡勸善、古之良典、是以無匿人善、見惡必匡、其諂詐者、則爲覆國家之利器、爲絶人民之鋒劍、亦佞媚者、對上則好說下過、逢下則誹謗上失、其如此人、皆無忠於君、無仁於民、是大亂之本也、七曰、人各有任、掌宜不濫、其賢哲任官、頌音則起、奸者有官、禍亂則繁、世少生知、尅念作聖、事無大少、得人必治、時無急緩、遇賢自寬、因此國家永久、社稷勿危、故古聖王、爲官以求人、爲人不求官、八曰、群卿百寮、早朝晏退、公事靡盬、終日難盡、是以遲朝不逮于急、早退必事不盡、九曰、信是義本、毎事有信、其善惡成敗、要在于信、群臣共信、何事不成、群臣無信、萬事悉敗、十曰、絶忿棄瞋、不怒人違、人皆

適に宜しきにしたがふ意

○萬氣得通、原本萬を方に作る北本熈本及傳曆に據て改む萬氣は人畜草木の氣にて其氣が四時順行に由て通ずることを得となり

○地欲覆天云々、地として天を覆へさむとする時は地も亦必ず壞るゝものなりとなり君は臣を惠み臣は君を天として敬し君臣相和して萬事成り臣として君命に背く時は其身も壞ると云譬なり

○君言臣承云々、說苑に上之化下猶風靡草とあり上たる人善を行へば萬民其善に傚ふこと風の草を靡かすが如しとなり

○以禮爲本云々、四條は民を治むるの本は禮にあることを諭されたり傳曆乎を于に作る

○上不禮而下非齊云々、韓詩外傳に上無禮則不免乎刑論語に齊之以禮とあり上たるもの禮を行はざれば下たるもの違亂を致して國家齊はず下たるもの上に對して無禮を致さば刑罰に處せらるとなり傳曆に而の字なく非を

有心、心各有執、彼是則我非、我是則彼非、我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳、是非之理、詎能可定、相共賢愚、如鐶无端、是以彼人雖瞋、還恐我失、我獨雖得、從衆同擧、十一曰、明察功過、賞罰必當、日者賞不在功、罰不在罪、執事群卿、宜明賞罰、十二曰、國司國造、勿斂百姓、國靡二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公賦斂百姓、十三曰、諸任官者、同知職掌、或病或使、有闕於事、然得知之日、和如曾識、其以非與聞、勿妨公務、十四曰、群臣百寮、無有嫉妬、我既嫉人、人亦嫉我、嫉妬之患、不知其極、所以智勝於己則不悅、才優於己則嫉妬、是以五百歲之後、乃今遇賢、千載以難待一聖、其不得賢聖、何以治國、十五曰、背私向公、是臣之道矣、凡人有私必有恨、有憾必非同、非同則以私妨公、憾起則違制害法、故初章云、上下和諧、其亦是情歟、十六曰、使民以時、古之良典、故冬月有間、以可使民、從春至秋、農桑之節、不可使民、其不農何食、不桑何服、十七曰、

大事不可獨斷、必與衆宜論、少事是輕、不可必衆、唯逮論大事、若疑有失、故與衆相辨、辭則得理、秋九月、改朝禮、因以詔之曰、凡出入宮門、以兩手押地、兩脚跪之、越梱則立行、是月、始定黃書畫師、山背畫師、

不に作る　○絶饕棄欲、五條は貪欲を去るべき事を論されたり原本饕を饗に作る岩本中本及傳曆に據て改む左傳文十八年の注に貪財爲饕食爲饕とあり名利を貪る欲を絶ち棄てよとなり　○頃治訟者云々、訴ふる者より財利を貪るを常とし賄賂を取て罪を決するを云　讞は正韻に議罪と注せり諸本頃を須に作る水本集解引一本に據て改む　○有財之訟云々、文選運命論に據れり財ある者の訟は石を水に投ずる如く必ず應報あり貧者の訟は水を石に撒する如く徒勞にして少しも聽き入るゝことなしとの意　○懲惡勸善古之良典、六條は勸善懲惡の必要なることを諭さる此句は左傳成十四年に出づ　○其諂詐者云々、後漢書虞詡傳に出づ　○人各有任云々、七條は凡そ人を任命するには特に注意し人の爲に官を設くべからざる事を諭さる　○世少生知云々、生知は論語季子に生而知之上也とあるに據り尅念作聖は尙書多方に惟聖罔念作狂惟狂克念作聖とあるに據れり尅は傳曆克に作る　○大少、傳曆拾芥抄少を小に作る少小相通ず　○爲人不求官、原本爲人の二字なし岩本北本應本及傳曆に據て補ふ　○早朝晏退、八條はよく王事に勤勞すべき事を諭されたり　○公事靡盬、原本盬を鹽に作る前本岩本應本及傳曆に據て改む毛詩唐風に王事靡盬注に盬不堅牢也とあり　○信是義本、九條は信義を守るべき事を諭さる信は仁義禮智信の信なり之を五行に配すれば義は秋にして金なり信は土にして土用に當る四季の運行も土用なければ行はれず人倫も仁義禮智の四を行はむとすれど信なき時は用に立たず故に信は義の本たりと云　○群臣共信、原本群を君に作る前本岩本等諸本及傳曆に據て改む下同じ　○絶忿棄瞋云々、十條は忿瞋を絶棄すべき事を諭さる忿は心の怒瞋は表に露はれたる怒なり忿瞋を絶棄て他人の道に違へるを咎めざるを云　○心各有執、執は我執なり人何れも心あり其心に眞妄の二心あり執とは妄心を眞心と思ひ固く之を執て放たざるなり　○凡夫、釋氏要覽に大威德陀羅尼經曰於生死迷惑流轉住不正道故名凡夫とあり　○如鐶无端、傳曆に鐶を環に作る正字通に鐶通作環とあり環は圓成無端者と見ゆ我も彼も共に凡夫なれば是非の理詎れかよく之を定めむや環の端なくして終始なきが如く何れを賢何れを愚とも定め難しとなり　○明察功過云々、十一條は賞罰を明にすべき事を諭さる　○賞不在功云々、原本罪を罰に作る岩本中本傳曆に據て改む暗君は賞すべき功なくとも賞し罰すべき罪過なくとも罰するもの多しとなり　○執事群卿、君主を輔けて事を執る群卿を云　○國司國造勿斂百姓、十二條は國司國造の收斂することを戒められたり國司國造を並稱すること此に始てなり國司國造たるもの官給の外に私に百姓より稅を斂め取ること勿れとなり　○國靡二君云々、諸本靡を非に作る傳曆に據て改む禮記曾子問に天無二日土無二王とあるに據れり從來部曲の民は我私有の如く信ぜしを其弊を革めて率土の萬民を悉く王臣なりと定められしなり　○賦斂百姓、天子より任命する國司國造は皆是朝廷の臣なれば何ぞ敢て天子と同じく百姓を賦斂せむやとなり賦は課役を命ずること斂は稅を取上ぐることなり　○諸任官者云々、十三條は凡そ官に任ぜられし者は各々其職掌を知て之を守るべしとなり　○得知之日云々、原本妨を防に作る水本及傳曆に據て改む病癒え或は使を果し還りて官衙に出勤の日は同僚と和合して不參中の事も曾てより識れるが如くにせよ我は之を與り聞ずなど云て公務を妨ぐること勿れとなり水本和を知に作る　○無有嫉妬、十四條は嫉妬を戒められたり　○五百歲之後云々、原本百の字及後の字を脱す中本水本及傳曆に據て補ふ又原本今を令に作る中イ本及傳曆に據て改む賢者には五百歲に一度僅に遇ふを得れど聖人には千歲の間にも遇ひ難し聖賢に遇ふことは斯の如く難きを之を嫉妬するは非なりとの意　○背私向公云々、十五條は私心を擲て公に盡すが臣たるの道なりと諭されたり　○凡人有私、原本凡の下夫の字あり岩本寮本應本及傳曆に據て削る

○使民以時云々、十六條は人民を使役するに定まれる時を以てすべきことを諭されたり使民以時は論語學而篇に見ゆ　○大事不可獨斷、十七條は大事は擅に獨斷すべからざる事を戒めらる原本大を夫に作る傳曆に據て改む　○辭則得理、傳曆に得理の下矣の字あり　○改朝禮、古來よりの禮法を改められしなり　○出入宮門、宮衞令義解に衞門所守謂之宮門兵衞所守謂之閤門又衞門府督一人掌諸門禁衞出入禮儀とあり　○以兩手押地、通證に中務式女官降座再拜用扱地拜謂著兩手於地首不至平地とあり兩手を地に著るを云　○兩脚跪之云々、梱を越ゆるに當りて跪き手をつきて跨くなり　○黃書畫師、錄山城諸蕃に黃文連高麗人久斯那王之後也とあり是か　○山背畫師、詳ならず

(乙丑)十三年夏四月辛酉朔、天皇詔皇太子大臣及諸王諸臣、共同發誓願、以始造銅繡丈六佛像各一軀、乃命鞍作鳥爲造佛之工、是時高麗國大興王、聞日本國天皇造佛像、貢上黃金三百兩、閏七月己未朔、皇太子命諸王諸臣俾著褶、冬十月、皇太子居斑鳩宮、

【十三年】銅繡丈六佛像、銅は金銅、繡は抄布帛部に繡蔣魴切韻云繡(訓沼元毛乃)以五色絲刺萬物形狀也とあり卽ち刺繡なり　○鞍作鳥、世に所謂鳥佛師なり　○大興王、三國史記に嬰陽王(一云平陽)諱元とあり　○三百兩、通證に兩訓古呂持統紀同拾芥鈔六銖爲一分四分爲一兩今按此據唐制乃十匁(セン)也とあり　○褶、天武紀十一年二月に褶をヒラと又ヒラオビと訓り衣服令皇太子の禮服に深紫紗褶義解に謂褶者所以加袴上故云袴褶集解に褶謂似婦人裳也褶訓枚帶也又云褶著袴上也ともありヒラオビは平帶の意之をヒラミと云はヒラビの轉訛せるなり

(丙寅)十四年夏四月乙酉朔壬辰、銅繡丈六佛像並造竟、是日也、丈六銅像坐於元興寺金堂、時佛像高於金堂戶、以不得納堂、於是諸工人等議曰、破堂戶而納之、然鞍作鳥之秀工、以不壞戶得入堂、卽日設齋、於是會集人衆不可勝數、自是年初每寺、四月八日、七月十五日設齋、五月甲寅朔戊午、勅鞍作鳥曰、朕欲興隆內典、方將建佛刹、肇求舍利、時汝祖

【十四年】金堂、抄調度部に金堂楊氏云佛殿金堂也禮堂金堂前名とあり禮堂に同じ金堂と稱するは金箔を以て塗れるに由れり　○設齋、齋は齋會なりヲガミスは爲拜にて佛を禮拜するによれり　○四月八日、釋迦誕生の日にて灌佛會の初なり　○七月十五日、盂蘭盆會

の始なり齊明紀三年に委しく見ゆ　○將建佛刹、元興寺の建立を云　○佛本、集解に造佛像圖本也とあり　○大仁、第三位なり　○南淵坂田尼寺、用明紀二年に見ゆ　○請皇太子、原本にマキセテとあるは誤なり北本楓本にマギテ又マセテとあり何れにてもよしマキは求(マ)ぎなり　○勝鬘經、明三藏聖教目錄大乘經寶積部に勝鬘師子吼一乘大方便廣經一卷按求那跋陀羅譯とあり　○法華經、妙法蓮華經の略稱、秦の羅什譯す太子の講ぜられしは七卷本なり後普門品を加へて八卷とす　○岡本宮、傳曆に岡基宮とあり同書に法隆寺は與宮同基在宮之西也とあるに據れば其の東に在りしなるべし通證に平群郡三井岡本邑隣法隆寺村とあり今昔十六に大和國平群郡の鵤(イカルカ)村に岡本寺と云ふ寺有りと記せり此地なり舒明紀齊明紀等に見ゆる岡本宮は高市郡なれば之と別なり　○大喜、原本大を太に作る諸本に據て改む　○播磨國水田、帝説に天皇布施聖王播磨國揖保郡佐勢地五十萬代とある是なり　○斑鳩寺、法隆寺なり

【十五年】壬生部、皇太子の壬生部なり　○詔曰、皇太子及蘇我馬子等崇佛にのみ心を傾けて建國以來の國風たる敬神の道を忽諸にし給ひしより特に此詔を下し給ひしなるべし

父司馬達等、便獻舍利、又於國無僧尼、於是汝父多須那爲橘豐日天皇(用明)、出家、恭敬佛法、又汝姨嶋女、初出家爲諸尼導者、以修行釋教、今朕爲造丈六佛、以求好佛像、汝之所獻佛本、則合朕心、又造佛像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戶、然汝不破戶而得入、此皆汝之功也、即賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田廿町焉、鳥以此田、爲天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺、秋七月、天皇請皇太子、令講勝鬘經、三日說竟之、是歲、皇太子亦講法華經於岡本宮、天皇大喜之、播磨國水田百町施于皇太子、因以納于斑鳩寺、

(丁卯)十五年春二月庚辰朔、定壬生部、戊子、詔曰、朕聞之、曩者我皇祖天皇等、宰世也、跼天蹐地、敦禮神祇、周祠山川、幽通乾坤、是以陰陽開和、造化共調、今當朕世、祭祀神祇、豈有怠乎、故群臣共爲竭心、宜拜神

○曩者、字書に曩は昔也又久也とあり　○跼天蹐地、文選謝平原內史表に出づ字書に跼は不伸又促也曲也蹐は小步也累足也とあり恐懼の貌なり　○周祠山川、尙書堯典に出づ支那にては名山大川を祭れど我國にてはさることなし山川の神を祀れるをかく漢文のまゝに書けるなり　○幽通乾坤、天皇誠敬の大御心の天神地祇に感通するを云　○陰陽開和云々、夏冬の季候調和して萬物よく生成するを云　○共爲竭心、共の字は諸本に據て補ふ　○小野臣、記の孝昭天皇の段に天押帶日子彥命者小野臣之祖也、錄左京皇別に小野朝臣(中略)敏達天皇御世大德小野臣妹子家于近江國滋賀郡小野村因以爲氏天武紀十三年小野臣賜姓曰朝臣と見ゆ　○大唐、十五年は隋煬帝大業三年に當る通證に今按我邦以漢唐專爲西土稱故書爲大唐蓋記者之詞也とあり大字を冠するは今歐米諸國を泰西と云に同じモロコシは諸越の義其は支那南方に閩越、駱越、南越、粤越などありて之を惣べて百越とも諸越とも云ひ其諸越をモロコシと訓みて支那國一圓の惣名とせるなり　○鞍作福利、通證に蓋司馬達等之族福利字見梵書とあり　○通事、通譯なり雄略紀七年(卷上二七〇頁)に譯語とあるに同じ　○高市池、古趾詳ならず大和國高市郡なるべし　○藤原池、同上　○肩岡池、大和志に葛下郡葦田池在王寺村一名片岡池とあり　○菅原池、添下郡、今生駒郡伏見村にあるべし　○栗隈、山城國久世郡に在り既に仁德紀十二年(卷上二一九頁)に出づ　○戶苅池、河內志に古市郡戶苅池在藏內村とあり　○依網池、同志に丹比郡池田池在池內村或曰依羅池とあり

【十六年】蘇因高、通證に小妹子之訛也とあり　○裴世清、北史倭傳に文林郎裴世淸とあり　○吉士、原本士を師に作る北本應本中本に據て改む　○難波高麗館、攝津志に東生郡三韓館在安國坂上とあり　○江口、舒明紀四年にも見ゆ數田氏標注に江口は淀川の江口にて今大阪の

祇、甲午、皇太子及大臣率百寮、以祭拜神祇、秋七月戊申朔庚戌、大禮小野臣妹子遣於大唐、以鞍作福利爲通事、是歲、冬、於倭國作高市池、藤原池、肩岡池、菅原池、山背國掘大溝於栗隈、且河內國作戶苅池、依網池、亦每國置屯倉、

(戊辰)十六年夏四月、小野臣妹子至自大唐、唐國號妹子臣曰蘇因高、即大唐使人裴世清、下客十二人、從妹子臣至於筑紫、遣難波吉士雄成、召大唐客裴世清等、爲唐客更造新館於難波高麗館之上、六月壬寅朔丙辰、客等泊于難波津、是日、以飾船卅艘、迎客等于江口、安置新館、於是、以中臣宮地連摩呂、大河內直糠手、船史王平爲掌客、爰妹子臣奏之曰、

中島邊なりしとおぼし到ニ舘前ニとあるを見るべしと云遊女記に江口とあるは是とは別なりと云
○中臣宮地連、錄左京神別に中臣宮處連大中臣同祖天兒屋根命十世孫巨知人命之後也とあり
○摩呂、原本摩を磨に作る北本中本に據て改む二十年紀に中臣宮地連烏摩侶と見ゆるは同人ならむか考ふべし
○大河內直糠手、通證に北史倭傳に小德何輩臺とあるは河內直の訛なるべし
○掌客、欽明紀廿二年(七二頁)に出づ
○唐帝以書授臣云々、馭戎慨言にこは我國より彼に遣はしゝ國書を見て隋帝悅ばずとあれば是が返牒とあらむには必ず禮なき文辭を陳ねしなるべしさるものを上りたらむには天皇の受容れ給ふまじければ百濟にて掠取られしなど、僞りて申立てしなるべしと云々と云りさもあるべし
○餝騎、下文に莊馬とあり美しき鞍を著せたる馬なり餝馬の事江家次第御

臣參還之時、唐帝以書授臣、然經過百濟國之日、百濟人探以掠取、是以不得上、於是群臣議之曰、夫使人雖死之不失旨、是使矣、何怠之失大國之書哉、則坐流刑、時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪、輙不可罪、其大國客等聞之亦不良、乃赦之不坐也、秋八月辛丑朔癸卯、唐客入京、是日、遣餝騎七十五匹、而迎唐客於海石榴市衢、額田部連比羅夫以告禮辭焉、壬子、召唐客於朝庭、令奏使旨、時阿倍鳥臣、物部依網連抱二人爲客之導者也、於是大唐之國信物置於庭中、時使主裴世清親持書、兩度再拜言上使旨而立之、其書曰、皇帝問倭皇、使人長吏大禮蘇因高等至具懷、朕欽承寶命、臨仰區宇、思弘德化、覃被含靈、愛育之情、無隔遐邇、知皇介居海表、撫寧民庶、境內安樂、風俗融和、深氣至誠、遠脩朝貢、丹款之美、朕有嘉焉、稍暄、比如常也、故遣鴻臚寺掌客裴世清等、指宣往意、并送物如別、時阿倍臣出庭以受其書而進行、大伴嚙連迎出、承書置於大門前机上而奏之、事畢而退焉、是時、皇

禊日及賀茂祭使條等に見ゆ
○海石榴市、大和國城上郡なり武烈紀敏達紀等に見ゆ
○額田部連、欽明紀二十二年にも掌客額田部連と見ゆ北史に大禮哥多毗從二百餘騎郊勞至彼都とあり
○阿倍鳥臣、下に阿倍鳥子臣又阿倍內臣鳥とあるも同人なり
○物部依網連、錄河內神別に物部依羅連神饒速日命之後也とあり
○其書曰、此國書につきて馭戎慨言に經籍後傳記に小治田朝十二年云々其書曰皇帝問倭王聖德太子甚惡其黜天子之號爲倭王而不賞其使とさあるぞ實なりけむを書紀には王とおさし申せる事をきらひて皇の字に改めてのせられたるなるべし然るを太子傳曆に此隋王が書の事をいかにと天皇の問はせ玉へる太子の御答に天子賜諸侯王書式也然皇帝之字天下一耳而用倭皇字彼有其禮應恭而修と申し玉へるよし記せるは書紀の皇字につきて作れること、聞えたりすべて此傳曆にはかゝる類のつくり言多くてうけがたしと云々と云り　○長吏、北本寮本吏を史に作る　○具懷、國寶記に懷を狀に作る集解之に從ふ　○臨仰、通釋以文校本及大日本史に據て臨御に改作る　○含靈、通證に謂有情也とあり　○介居、原本介を命に作る岩本北本寮本等に據て改む介は左傳の注に間也とあり　○遠脩朝貢、太子が斯くの如き無禮なる信書を受容られしは國體を辱めたりと云べし　○稍暄、原本稍を稱に作る諸本に據て改む　○鴻臚寺、通證に漢書曰秦爲典客云々漢改爲大鴻臚釋名鴻大也臚陳也欲大以禮序陳賓客也とあり　○指宣、原本指を稍に作る國寶記に據て改む　○出庭、原本庭を進に作る北本に據て改む　○金髻華、金を以て花葉を造りしなり髻華の事上に出づ　○大郡、欽明紀廿二年(七一頁)に見ゆ　○東天皇敬白、傳曆に白を問とせり、纂には日出處天子日沒處天子と云文字を用ひしに隋煬帝の不快を買ひしことを顧慮して今回は文字を改められしなるべし　○尊、隋皇を指す尊の下國寶記に候字あり　○淸悆、原本悆を念に作る岩本熈本楓本に據て改む悆は字書に喜也とあり　○乎那利、雄成にては訓み難かるべしとさて假名を用ひしなり　○奈羅譯語、續紀卅四に椅日佐河內等賜姓長岡忌寸錄大和諸蕃に長岡忌寸己智同祖諸齒王之後とあり

子諸王諸臣悉以金髻華著頭、亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅、一云、服色皆用冠色、丙辰、饗唐客等於朝、九月辛未朔乙亥、饗客等於難波大郡、辛巳、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客而遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白西皇帝、使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解、季秋薄冷、尊何如、想淸悆、此即如常、今遣大禮蘇因高、大禮乎那利等往、謹白不具、是時、遣於唐國學生、倭漢直福因、奈羅譯語惠明、高向漢人玄理、新漢人大國、學問僧新漢人日文、南淵漢人請安、志賀漢人慧隱、新漢人廣齊等、幷八人也、是歲、新羅人多化來、

（已智は秦太子胡亥之後也）奈羅は大和國添上郡今の奈良なり譯語は雄略紀七年に出づ　○高向漢人玄理、高向は錦部郡の村名漢人は姓なり孝德紀二年には高向博士黑麻呂とあり　○新漢人、雄略紀七年（卷上二七〇頁）に出づ　○日文、孝德紀元年に旻の一字に作る　○南淵、大和國高市郡の地名　○志賀、近江國志賀郡又大和國吉野郡に志賀村あり何れか判ち難し　○慧隱、原本慧を惠に作る諸本に據て改む　○新漢人廣齊、新の字は諸本に據て補ふ齊は岩本中本濟に作る

【十七年】筑紫大宰、大宰の文字始て此に見ゆ是令制大宰府の起源なり雄略天皇の頃より我國威韓土に振はず任那日本府の威令も行はれずなり欽明の朝日本府の所在地にして我直屬の任那すら新羅に滅されし故に屢々出兵して復興を計りしかど成らず日本府も內地へ引揚ぐるに至れり宣化紀元年（三六頁）に脩造官家那津之口とみえたるは大宰府の始にてやがて令制の大宰府となり再遷して後の鎭西府となれり　○一十人、釋紀一を二に作る　○俗人、シロキヌは白衣なり僧侶の黑衣に對して云　○葦北、景行紀十八年（卷上一四九頁）に見ゆ　○吳國、集解に按江南吳地と云　○本鄕、北本本國に作る　○以歡喜、集解傍訓に據り以の上に是の字を補ふ　○道人、智度論に得道者名爲道人餘出家者未得道者亦名道人とあり水本に道人疑當作道欣と云　○十一、通證に一を人に作るべしと云　○妹子等、等の字は北本應本中本に據て補ふ

【十八年】紙墨、始て見ゆ　○碾磑、職員令主税寮の義解に水碓也作米曰碾作麪曰磑とあり　○蓋造碾磑云々、以下九字分注誤連書者と信友云

（己巳）十七年夏四月丁酉朔庚子、筑紫大宰奏上言、百濟僧道欣・惠彌爲首、一十人、俗人七十五人、泊于肥後國葦北津、是時、遣難波吉士德摩呂・船史龍、以問之曰、何來也、對曰、百濟王命以遣於吳國、其國有亂不得入、更返於本鄕、忽逢暴風、漂蕩海中、然有大幸而泊于聖帝之邊境、以歡喜、五月丁卯朔壬午、德摩呂等復奏之、則返德摩呂・龍二人、而副百濟人等送本國、至于對馬、以道人等十一皆請之欲留、乃上表而留之、因令住元興寺、秋九月、小野臣妹子等至自大唐、唯通事福利不來、

（庚午）十八年春三月、高麗王貢上僧曇徵・法定、曇徵知五經、且能作彩色及紙墨、幷造碾磑、蓋造碾磑、始于是時歟、秋七月、新羅使人沙喙部奈末竹世士、與任那使人喙部大舍首智買、到于筑紫、九月、遣使召新羅・任那使

り　○沙喙部、沙喙は地名にして部は部曲を云　○奈末竹世士、奈末は新羅の官、原本末を未に作る通鑑に據て改む又原本士を土に作る岩本應本中本に據て改む　○喙部、集解に按喙上脫沙字とあり　○大舍、新羅の官　○莊馬、餝騎に同じ原本庄馬とす莊の俗字なり　○阿斗、敏達紀十二年（九〇頁）に出づ　○間人連、錄左京皇別に間人宿禰仲哀天皇皇子譽屋別命之後也とあり天武紀十三年に宿禰の姓を賜ふ　○咋連、上に咋を嚙に作る　○蘇我豐浦蝦夷臣、馬子の子、帝説に蘇我豐浦毛人（エミシ）に作る　○各有差、原本各の字なし北本楓本中本に據て補ふ　○河內漢直、中本に河內を西の一字とす天武紀十二年に川內漢直賜姓曰連、同十三年に賜姓曰忌寸とあり錄河內諸蕃に漢河內忌寸山城忌寸同祖魯國白龍王之後也とあり　○共食者、雄略紀十四年（卷上二八〇頁）に出づ　○錦織首、欽明紀卅一年（七八頁）に錦部首とあり　○客等、等の字は中本に據て補ふ

【十九年】五月五日、干支を以て書すべきを藥獵の日なれば目安からむ爲に古記のまゝに記されたるなるべし　○藥獵、鹿の若角を採らむ爲の獵なり萬葉十六に

人、冬十月己丑朔丙申、新羅・任那使人臻於京、是日、命額田部連比羅夫、爲迎新羅客莊馬之長、以膳臣大伴爲迎任那客莊馬之長、卽安置阿斗河邊館、丁酉、客等拜朝庭、於是、命秦造河勝・土部連菟、爲新羅導者、以間人連鹽蓋・阿閉臣大籠爲任那導者、共引以自南門入之、立于庭中、時大伴咋連・蘇我豐浦蝦夷臣・坂本糠手臣・阿倍鳥子臣、共自位起之、進伏于庭、於是、兩國客等各再拜、以奏使旨、乃四大夫起進啓於大臣、時大臣自位起、立廳前而聽焉、既而賜祿諸客、各有差、乙巳、饗使人等於朝、以河內漢直贄爲新羅共食者、錦織首久僧爲任那共食者、辛亥、客等禮畢以歸焉、

（辛未）十九年夏五月五日、藥獵於菟田野、取鷄鳴時集于藤原池上、以會明乃徃之、粟田細目臣爲前部領、額田部比羅夫連爲後部領、是日、諸臣服色皆隨冠色、各著髻華、則大德小德並用金、大仁小仁用豹尾、大禮

以下用鳥尾、秋八月、新羅遣沙喙部奈末北叱智、任那遣習部大舍親智周智、共朝貢、

廿年（壬申）春正月辛巳朔丁亥、置酒宴群卿、是日、大臣上壽、歌曰、夜須彌志斯、和餓於朋者彌能、訶句理摩須、阿摩能椰蘇訶礙、異泥多多須、彌蘇羅烏彌禮麼、豫呂豆余珥、訶句志茂餓茂、知余珥茂、訶句志茂餓茂、知余珥茂訶句志茂餓茂、訶之胡彌弖、菟伽陪摩都羅武、烏呂餓彌弖、菟伽陪摩都羅武、宇多豆紀摩都流、天皇和曰、摩蘇餓豫、蘇餓能古羅破、宇摩奈羅麼、譬武伽能古摩、多智奈羅麼、句禮能摩差比、宇倍之訶茂、蘇餓能古羅烏、於朋枳彌能、菟伽破須羅志枳、二月辛亥朔庚午、改葬皇太夫人堅鹽媛於檜隈大陵、是日、誄於輕街、第一阿倍內臣鳥誄天皇之命、則

四月與五月間爾樂獵仕流時爾云々と見ゆ　○菟田野、大和志に宇陀郡足立村と見ゆ　○藤原池、大和國高市郡　○粟田細目臣、錄右京皇別に粟田朝臣天足彥國忍人命之後也天武紀十三年粟田臣賜姓曰朝臣と見ゆ　○部領、コトリは事執りの意ならむと通證に云り　○用金、集解に按鐫金爲華とあり　○豹尾、欽明紀十四年（六五頁）にも見ゆ　○鳥尾、通證に事物起原曰上黨諸山中多鶡似雉而大青色項有毛角健鬪至死而已古之爲將士者取其毛尾挿於冑上令軍士插雉尾卽此也と云り　○新羅遣、原本遣を造に作る諸本に據て改む　○北叱智、岩本北を比に作る　○習部、上の沙喙部の類なり其の類に習比部あり習の下或は比の字を脫せるか（附錄參照）

【廿年】上壽、後漢書の注に壽者人之所欲故卑下奉觴進酒皆言上壽とあり故に此に大御酒奉ると訓り　○夜須彌志斯、彌は原本彌に作る諸本に據て改む下同じ　○訶句理摩須、祝詞に天之御蔭日之御蔭と隱坐さあるに同じく天日の御影に覆はれて其中に隱坐す由なり　○阿摩能椰蘇訶礙、天日の光を云かもさにて移して天皇の御舍のことに云　○異泥多多須、御座に出御し給ふを云　○彌蘇羅烏彌禮麼、天皇の坐す御宮の形容なり　○彌禮麼、原本麼を摩に作る北本中本及類史に據て改む下同じ　○知余珥茂訶句志茂餓茂、通證に類聚國史無此二句疑衍と云　○宇多豆紀摩都流、ウタツキは宴の杯なり御盞を奉るを云　○摩蘇餓豫、次句を呼出す辭　○句禮能摩差比、鋤（サビ）は劍のことなり神武紀戊午年（卷上八四頁）に鋤持神ありさて刀劍は支那國のは我國には遠く及ばざれどこゝは遠來の物を珍しく思ひて出せしなり　○蘇餓能古羅烏、蘇我の子等と子をつけたるは親みていへるなり　○譬武加、原本譬を辟に作る諸本及類史に據て改む　○菟伽破須羅志枳、ラシは推量の辭キは過去の辭なれど現在にても強めて云ふ時に用ふ　○皇太夫人、原本太を大に作る諸本及類史に據て改む淸寧紀元年（卷上二九〇頁）に出づ　○堅鹽媛、蘇我稻目の女にて天皇の御母なり　○檜隈大陵、欽明天皇の御陵なり、此下に原本第一の二字あり岩本中本及類史に據て削る　○輕街、高市郡　○天皇之命、天皇の大詔命なり宣命使として誄を奉るなり　○奠靈、集解に原本脫塗車芻三字靈訓爲神靈非禮記檀弓曰塗車芻靈自古有之鄭註芻靈束茅爲人馬謂之靈者神之類とあり　○明器、アケホノと訓るはミケツモノの誤にて御食器（ミケツモノ）なり禮記檀弓に其曰明器神明之とあり　○明衣、景行紀四十年（卷上一六〇頁）に出づ　○大臣之辭、大臣の誄を代て申すなり　○八腹臣、腹とは氏の支別を云其例は續紀延曆三年十二月に土師氏惣有四腹云々自餘三腹者云々と見ゆ此は蘇我氏の支族を云八は大數を擧げしにて正數にあらず　○境部臣摩理勢、傳曆に據るに馬子の兄弟なり　○誄氏姓之本、蘇我氏の本を述て誄詞としたるなり　○五月五日、已卯朔癸未　○羽田、履

奠靈明器明衣之類萬五千種也、第二諸皇子等以次第各誄之、第三中臣宮地連烏摩侶誄大臣之辭、第四大臣引率八腹臣等、便以境部臣摩理勢、令誄氏姓之本矣、時人云、摩理勢烏摩侶二人能誄、唯鳥臣不能誄也、夏五月五日、藥獵之、集于羽田、以相連參趣於朝、其裝束如菟田之獵、是歲、自百濟國有化來者、其面身皆斑白、若有白癩者乎、惡其異於人、欲棄海中嶋、然其人曰、若惡臣之斑皮者、白斑牛馬不可畜於國中、亦臣有小才、能構山岳之形、其留臣而用、則爲國有利、何空之棄海嶋耶、於是聽其辭以不棄、仍令構須彌山形及吳橋於南庭、時人號其人曰路子工、亦名芝耆摩呂、又百濟人味摩之歸化、曰、學于吳、得伎樂儛、則安置櫻井而集少年、令習伎樂儛、於是眞野首弟子、新漢齊文二人、習之傳其儛、此今大市首、辟田首等祖也、

中紀五年(卷上二四〇頁)に出づ　○菟田之獵、前年五月五日の下に見ゆ　○白癩、抄疾病部に白癩(之良波太)人面及身頭皮肉色變白亦不痛癢者也とあり　○有利、クボサは字鏡集名義抄等に瘜をクブサと訓り說文に瘜は有餘賈利也と注すれば同じ意なり　○須彌山、通證に長阿含經曰四洲地心卽須彌山西域記曰蘇迷盧山唐言妙高山舊曰須彌又曰須彌婁皆訛瑯邪代醉曰崑崙山一名鐵圍卽佛家之須彌と云　○吳橋、通證に今所謂唐橋と云高く反りたるさまの橋なるべし　○路子工、詳ならねど路子は名なるべし　○芝耆摩呂、醜摩呂なるべし　○伎樂儛、吳の舞樂なり通證に伎樂見後漢志久禮訓取于吳令雅樂寮伎樂師一人義解伎樂謂吳樂とあり　○櫻井、大和志十市郡に櫻井村あり是なるべし　○眞野首弟子、錄右京蕃別に眞野造百濟國人速古王之後也とあり此族ならむ弟子は名なり　○新漢齊文、漢の下人の字を脫せるか中本齊を濟に寮本文を交に作る　○此今云々、以下十一字中本に據て補ふ錄左京諸蕃に大市首任那國人都怒我阿羅斯止之後也とあり

【廿一年】十一月、楓本應本十月とす　○掖上池、大和志に在葛上郡井戸村とあり今南葛城郡葛城村大字江戸　○畝傍池、大和國高市郡　○和珥池、大和志に添上郡和珥池在池田村一名光臺寺池と云仁德紀十三年(卷上二一九頁)に見ゆ　○置大道、此御世の京は大和國高市郡小墾田なればば大道は今の竹內街なるべしと云　○片岡、大和志に葛下郡片岡在片岡莊今泉村とあり今北葛城郡王寺村志都美村上牧村等に亘れる汎稱なり今泉村は今志都美村の大字となれり　○道垂、道の傍なり垂は邊垂の垂に同じ　○斯那提流、傳曆に支那照耶とあり、片岡の枕詞　○伊比爾惠弖、惠はウヱの約りたるにて飢の意

(癸酉)廿一年冬十一月、作掖上池、畝傍池、和珥池、又自難波至京置大道、

十二月庚午朔、皇太子遊行於片岡、時飢者臥道垂、仍問姓名、而不言、皇太子視之與飲食、卽脫衣裳覆飢者而言、安臥也、則歌之曰、斯那提流、箇多烏箇夜摩爾、伊比爾惠弖、許夜勢屢、諸能多比等、阿波禮、於夜那斯爾、那禮那理鷄迷夜、佐須陀氣能、枳彌波夜那祇、伊比爾惠弖、許夜勢留、諸能多比等、阿波禮、辛未、皇太子遣使令視飢者、使者還來之曰、飢者既死、爰皇太子大悲之、則因以葬埋於當處、墓固封也、數日之後、皇太子召近習者謂之曰、先日臥于道飢者、其非凡人、必爲眞人也、遣使令視、於是使者還來之曰、到於墓所而視之、封埋勿動、乃開以見、屍骨既空、唯衣服疊置棺上、於是皇太子復返使者、令取其衣、如常且服矣、

時人大異之曰、聖之知聖其實哉、逾惶、

○許夜勢屢、寢臥をコヤスといへるは記上卷伊邪那美命火神を生坐せる條及萬葉九に見ゆ　○那禮那理鷄迷夜、親なしに汝は生り出で來しかさはあるまじとの意　○佐須陀氣能、次句の枕詞　○枳彌波夜那祇、枳彌は大君の意ならむと守部云り傳曆に飢人起首進答歌曰斑鳩之富小河之絕者社我王之御名者忘目とあれどこれは誤にて帝說に上宮薨時巨勢三杖大夫歌伊加留我乃止美能乎何波乃多叡波許曾和何於保支美乃彌奈和須良叡米とあるが正し　○墓固封、靈異記に崗本村法林寺東北角有守部山作墓而收名曰人木墓云々とあり　○近習者、原本習の下先字あり岩本中本に據て削る　○爲必眞人、岩本中本爲の字なし眞人は史記始皇本紀に眞人者入水不濡入火不爇、說文に眞人仙人變形而登天也とあり此眞人を編年記に達磨和尙とし淸輔の袋草紙に文珠菩薩とするは無稽の說なり

(甲戌)廿二年夏五月五日、藥獵也、六月丁卯朔己卯、遣犬上君御田鍬、矢田部造闕名於大唐、秋八月、大臣臥病、爲大臣而男女幷一千人出家、

(乙亥)廿三年秋七月、犬上君御田鍬、矢田部造、至自大唐、百濟使則從犬上君而來朝、十一月己丑朔庚寅、饗百濟客矣、癸卯、高麗僧慧慈歸于國、

(丙子)廿四年春正月、桃李實之、三月、掖玖人三口歸化、夏五月、夜句人七口來之、秋七月、亦掖玖人廿口來之、先後幷卅人、皆安置於朴井、未及還皆死焉、秋七月、新羅遣奈末竹世士貢佛像、

(丁丑)廿五年夏六月、出雲國言、於神戸郡有瓜、大如缶、是歲、五穀登之、

【廿二年】五日、壬寅なり　○犬上君、君の字は岩本北本應本に據て補ふ景行紀五十一年(卷上一六一頁)に出づ　○矢田部造、崇神紀六十年(卷上一二一頁)に矢田部造祖武諸隅とあり舊事紀に詔大仁矢田部御嬬連公改姓命造則遣大唐使復大禮犬上君御田鍬爲小使とあり此に從へば矢田部造は大使なり　【廿三年】七月、北本中本九月に作る　○百濟客矣、應本中本矣の字なし　○慧慈、原本慧を惠に作る諸本に據て改む下同じ　【廿四年】掖玖人、掖玖は式神名帳に大隅國馭謨郡一座(小)益救神社あり馭謨郡は本國を距百二十里西南海中に在りて周匝百二十六里今屋久嶋と云又上代掖玖といひしは今の屋久にあらで琉球國を指せりと云說あり　○夜句、掖玖に同じ　○朴井、和泉志泉南郡の條に榎井池在西內村とあれば此地なるべし　○秋七月、此三字恐くは衍なるべし　○貢佛像、傳曆にも見ゆ　【廿五年】神戸郡、神門郡なるべし　○瓜、諸本𤓰に作る名義抄に𤓰俗とあり瓜の俗字なり　○如缶、抄器皿部に瓫唐韻云瓫(比良加)瓦器也爾雅云瓫(纂注云按瓫𤭛同字)謂之缶(音不訓保度岐)主計式に缶三口受五斗瓫(ホトキ)二口受三斗と

あり字鏡に瓮盆瓫甂甀甆等の諸字を保止支と注せり

(戊寅)廿六年秋八月癸酉朔、高麗遣使貢方物、因以言、隋煬帝興卅萬衆攻我、返之爲我所破、故貢獻俘虜貞公普通二人、及鼓吹弩抛石之類十物、幷土物駱駝一疋、是年、遣河邊臣闕名於安藝國令造舶、至山覓舶材、便得好材、以名將伐、時有人曰、霹靂木也、不可伐、河邊臣曰、其雖雷神、豈逆皇命耶、多奉幣帛、遣人夫令伐、則大雨雷電之、爰河邊臣案劍曰、雷神無犯人夫、當傷我身、而仰待之、雖十餘霹靂、不得犯河邊臣、卽化少魚以挾樹枝、卽取魚焚之、遂脩理其舶、

(己卯)廿七年夏四月己亥朔壬寅、近江國言、於蒲生河有物、其形如人、秋七月、攝津國有漁父、沈罟於堀江、有物入罟、其形如兒、非魚非人、不知所名、

(庚辰)廿八年秋八月、掖玖人二口流來於伊豆嶋、冬十月、以砂礫葺檜隈陵上、則域外積土成山、仍毎氏科之、建大柱於土山上、時倭漢坂上直樹柱勝

【廿六年】興卅萬衆攻我、隋書煬帝紀大業八年正月の條に親總六師、用申九伐云々一百一十三萬三千八百、號二百萬、其餽運者倍之、三月の條に「軍爲賊所拒、右屯衛大將軍云々皆死之、七月の條に九軍並陷將帥奔還云々とあり此年は推古天皇二十年に當れり ○弩抛石、抄調度部に弩を於保由美と注す軍防令に發弩抛石、義解に抛者猶擲也とあり又抄調度部に礟（以之波之岐）建大木置石其上發機以投敵也とあり原本抛を扰に作る集解に據て改む ○是年、是歳とあるが例なり ○河邊臣、錄右京皇別に川邊朝臣武内宿禰之後也とあり天武紀十三年に朝臣の姓を賜ふ注に闕名とあれど下に河邊臣禰受見え孝德紀に河邊臣磐管、百依、磯泊、麻呂など見ゆれば何れかの内なるべし ○舶材、舶をツムと訓るは神功紀（巻上一七七頁）に見ゆ ○霹靂、神功紀攝政前紀（巻上一七八頁）に出づ ○奉幣帛、奉は原本祭に作る集解に據て改む

【廿七年】蒲生河、蒲生は近江國の郡名なり ○形如兒云々、釋紀に兼名苑曰人魚一名鮫魚身人面者也とあり

【廿八年】砂礫、抄天地部に細石說文云礫（和名佐々禮以之）水中細石也また砂聲類云砂（和名以佐古一云須奈古）水中細礫也とあり ○檜隈陵、廿年紀に出づ ○倭漢坂上直、欽明紀卅一年に出づ ○太高、原本太を大に作る中本類史に據て改む ○大柱直、集解に營開大和人平尙寬曰高市郡檜隈鄉下平田村東北有陵俗呼曰梅山此陵大和志爲欽明天皇陵是陵域有溝渠曰池田有石像四軀俗呼曰猿遂稱猿山明和辛卯大旱土人穿小池深數十尺得一枝大柱餘大十圍長三尺越村人服部某獲而珍之藏于家所謂坂上直所樹大柱者蓋是とあり ○雉尾、原本雉を確に作る中本に據て改む ○嶋大臣、馬子なり嶋大臣と稱する由は卅四年紀に見ゆ ○天皇記及國記云々、釋紀に先代舊事本紀是也とあれど舊事本紀は僞書にて信じ難し此に擧げたる諸記の中に天皇記國記のみは皇極紀四年に蘇我臣蝦夷等臨誅悉燒天皇記國記珍寶と見えたれど其他はいかになりしか詳ならずされば其内容も知り難けれど試にいはゞ天皇記は列聖の皇位御繼承の事を始め御降誕立太子寶算等を記し奉りしものにて古事記序文に帝皇日繼とある是なるべし國記は先代の舊辭及諸國に關する事三韓統御に關する事等を洽く網羅して記せるものなるべく臣連伴造國造百八十部幷公民等本記は現存の國造本紀に據て大體を推察せらるべし

【廿九年】廐戸豐聰耳皇子命薨、考本命を尊に作る此皇子薨去の年月日に就て異說あり法隆寺金堂釋迦佛光後銘文には法興元三十二年二月二十二日（此紀の三十年壬午年なり）とし帝說は壬午年二月二十二日とし扶桑略記は二十九年とすれど二月二十二日とす傳曆には二十九年春二月として日を記さず時年四十九或說壬午年者誤也と斷定すれど法隆寺釋迦光後銘文の如きも確實なるものなれば輙く是非を決め難し ○如亡、原本亡を己に作

之太高、故時人號之曰大柱直也、十二月庚寅朔、天有赤氣、長一丈餘、形似雉尾、是歳、皇太子、嶋大臣共議之、錄天皇記及國記、臣連伴造國造百八十部幷公民等本記、

(辛巳)廿九年春二月己丑朔癸巳、半夜廐戸豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮、是時諸王諸臣及天下百姓、悉長老如失愛兒、而鹽酢之味、在口不嘗、少幼者如亡慈父母、以哭泣之聲、滿於行路、乃耕夫止耜、舂女不杵、皆曰、日月失輝、天地既崩、自今以後誰恃哉、是月、葬上宮太子於磯長陵、當是時、高麗僧慧慈聞上宮皇太子薨、以大悲之、爲皇太子請僧而設齋、仍親說經之日、誓願曰、於日本國有聖人、曰上宮豐聰耳皇子、固天攸縱、以玄聖之德生日本之國、苞貫三統、纂先聖之宏猷、恭敬三寶、救黎元

る應本中本に據て改む　○止耜、原本耜を耕に作る岩本中本に據て改む　○皆曰、曰の字は中本及傳曆に據て補ふ　○磯長陵、諸陵式に磯長墓橘豐日天皇之太子名曰聖德在河內國石川郡、河內志に叡福寺山號科長、又呼御墓山、因厩戸太子墓也今南河內郡磯長村大字太子にあり　○固天攸縱、原本攸を欣に作る岩本北本寮本等に據て改む天縱は論語子罕に固天縱之將聖とあるに據る　○玄聖、文選遊天台山賦の注に玄は遠也とあり　○三統、漢書の注に師古曰天地人是爲三統とあり　○大聖、原本大を太に作る岩本北本中本に據て改む　○斷金、易繫辭に二人同心其利斷金とあり　○某、岩本其に作る　○有何益哉、北本應本有の字なし哉は原本矣に作る北本に據て改む　○奈末伊彌買、原本末を未に作る水本集解に據て改む下同じ　○凡新羅上表云々、恐くは分注なるべし

【卅一年】大灌頂幡、原本灌を觀に作る水本集解に據て改む下同じ　○葛野秦寺、蜂岡寺を云　○惠濟、原本濟を齊に作る北本寮本楓本等に據て改む　○醫惠日、續紀卷廿天平寶字二年三月藥司難波藥師奈良等言遠祖德來本高麗人歸來五世孫惠日小治田朝廷御世被遣唐學醫術因號藥師伏願改藥師字蒙難波連許之（節略）とあり

之厄、是實大聖也、今太子既薨之、我雖異國、心在斷金、某獨生之、有何益哉、我以來年二月五日必死、因以遇上宮太子於淨土、以共化衆生、於是慧慈當于期日而死之、是以時人之彼此共言、其獨非上宮太子之聖、慧慈亦聖也、是歲、新羅遣奈末伊彌買朝貢、仍以表書奏使旨、凡新羅上表、蓋始起于此時歟、

（癸未）卅一年秋七月、新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並來朝、仍貢佛像一具、及金塔幷舍利、且大灌頂幡一具、小幡十二條、卽佛像居於葛野秦寺、以餘舍利金塔灌頂幡等、皆納于四天王寺、是時、大唐學問者僧惠濟、惠光、及醫惠日、福因等並從智洗爾等來之、於是惠日等共奏聞曰、留于唐國學者、皆學以成業、應喚、且其大唐國者法式備定珍國也、常須達、是歲、新羅伐任那、任那附新羅、於是天皇將討新羅、謀及大臣詢

○田中臣、錄右京皇別に田中臣武內宿禰五世孫稻目宿禰之後也とあり　○中臣連國、續紀三十九延曆七年六月大中臣朝臣清麻呂の傳に曾祖國子とあるは此人なるべし　○戎旅、字書に戎は兵也旅は衆也五百人爲旅とあり　○八大夫、寮本應本大を丈に作る　○因以約曰、以の字北本寮本楓本に據て補ふ　○附庸、訓義詳ならず禮記王制に附於諸侯曰附庸、晉書地理志に伯七十里子男五十里不能五十里者不達於天子附於諸侯曰附庸とあり　○遣奈末智洗遲、遣の字は北本楓本中本等に據て補ふ　○中臣連國、寮本國の下に子の字あり　○波多臣、錄右京皇別に八多朝臣武內宿禰命之後也天武紀十三年波多臣賜姓曰朝臣とあり　○近江脚身臣、近江臣と

于群卿、田中臣對曰、不可急討、先察狀以知逆、後擊之不晚也、請試遣使覩其消息、中臣連國曰、任那是元我內官家、今新羅人伐而有之、請戒戎旅、征伐新羅、以取任那、附百濟、寧非益有于新羅乎、田中臣曰、不然、百濟是多反覆之國、道路之間尙詐之、凡彼所請皆非之、故不可附百濟、則不果征焉、爰遣吉士磐金於新羅、遣吉士倉下於任那、令問任那之事、時新羅國主遣八大夫、啓新羅國事於磐金、且啓任那國事於倉下、因以約曰、任那小國、天皇附庸、何新羅輙有之、隨常定內官家、願無煩矣、則遣奈末智洗遲、副於吉士磐金、復以任那人達率奈末遲、副於吉士倉下、仍貢兩國之調、然磐金等未及于還、卽年以大德境部臣雄摩侶、小德中臣連國爲大將軍、以小德河邊臣禰受、小德物部依網連乙等、小德波多臣廣庭、小德近江脚身臣飯蓋、小德平群臣宇志、小德大伴連、（闕名）小德大宅臣軍爲副將軍、率數萬衆以征討新羅、時磐金等共會於津、將發船以候風波、於是船師滿海多至、兩國使人望瞻之愕然、乃還留

同族ならむも姓氏錄に見えず
○大宅臣、反正紀元年（卷上二四二頁）に出づ
○大舍、原本舍を倉に作る岩本に據て改む大舍は新羅十二等の位なり
○新羅國王、岩本王を主に作る
○阿曇連、上文に見えず
○早征伐耳、集解に按八年境部臣征伐新羅、蓋其時新羅多納幣物以賂境部臣而請服也又將得賂故再勸征伐前期而發軍也と云
○海津、原本津を浦に作る北本楓本に據て改む
○其新羅云々、以下十三字疑らくは分注か
【卅二年】卅二年、中イ本に二を一に作り北本三に作る通證に以長曆考之月朔有差蓋是三十一也といひ集解は卅一に改めたれど大日本史には疑を存す

焉、更代堪遲大舍爲任那調使而貢上、於是磐金等相謂之曰、是軍起之、既違前期、是以任那之事、今亦不成矣、則發船而渡之、唯將軍等始到任那而議之欲襲新羅、於是新羅國王聞軍多至、而豫慴之請服、時將軍等共議以上表之、天皇聽矣、冬十一月、磐金倉下等至自新羅、時大臣問其狀、對曰、新羅奉命以驚懼之、則並差專使、因以貢兩國之調、然見船師至、而朝貢使人更還耳、但調猶貢上、爰大臣曰、悔乎早遣師矣、時人曰、是軍事者、境部臣、阿曇連、先多得新羅幣物之故、又勸大臣、是以未待使旨、而早征伐耳、初磐金等渡新羅之日、比及津、莊船一艘迎於海津、磐金問之曰、是船者何國迎船、對曰、新羅船也、磐金亦曰、曷無任那之迎船、即時更爲任那加一船、其新羅以迎船二艘始于是時歟、自春至秋、霖雨大水、五穀不登焉、

（甲申）卅二年夏四月丙午朔戊申、有一僧、執斧毆祖父、時天皇聞之召大臣、詔之曰、夫出家者、頓歸三寶、具懷戒法、何無懺忌、輙犯惡逆、今朕聞、有僧以毆祖父、故悉聚諸寺僧尼、以推問之、若事實者重罪之、於是集諸僧尼、

○詔之、北本詔を謂に作る
○頓歸、原本頓を頼に作る岩本北本中本及傳曆に據て改む
○經三百歲、佛の漢土に來りしは後漢明帝永平十年にて其百濟に入りしは枕流王元年なれば此間三百五十年なり
○僅一百年、枕流王元年より聖明王三十年即ち我欽明天皇十五年までは百六十八年なり一百年とは大數を云るなれど少しく當らず
○我王、百濟聖明王なり
○以外僧尼、原本尼の字なし岩本中本に據て補ふ
○僧正、我朝僧官の始なり僧官とは僧正僧都律師以下のもの僧位とは法印法眼法橋以下の階級を云僧正僧都律師を總稱して僧綱と云僧正は支那にもあり僧史略に僧正正何也正政也自正正人とあり僧尼の非違を正す官にて其長官なり
○僧都、支那にては之を僧統と云統を改て都とせるなり都は統なり僧正に亞で僧侶を都る官なり
○法頭、元亨釋書資治表

而推之、則惡逆僧及諸尼並將罪、於是百濟觀勒僧表上以言、夫佛法自西國至于漢、經三百歲、乃傳之至於百濟國、而僅一百年矣、然我王聞日本天皇之賢哲、而貢上佛像及內典、未滿百歲、故當今時、以僧尼未習法律、輙犯惡逆、是以諸僧尼惶懼以不知所如、仰願其除惡逆者以外僧尼、悉赦而勿罪、是大功德也、天皇乃聽之、戊午、詔曰、夫道人尚犯法、何以誨俗人、故自今已後、任僧正僧都、仍應檢校僧尼、壬戌、以觀勒僧爲僧正、以鞍部德積爲僧都、即日以阿曇連闕名爲法頭、秋九月甲戌朔丙子、校寺及僧尼、具錄其寺所造之緣、亦僧尼入道之緣、及度之年月日也、當是時、有寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、并一千三百八十五人、冬十月癸卯朔、大臣遣阿曇連闕名阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者、元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以冀之、常得其縣以欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言、夜言矣夜不明、日言矣則日不晩、何辭不用、然今當朕之

世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦人臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名、則不聽、

(乙酉)卅三年春正月壬申朔戊寅、高麗王貢僧惠灌、仍任僧正、

(丙戌)卅四年春正月、桃李花之、三月、寒以霜降、夏五月戊子朔丁未、大臣薨、仍葬于桃原墓、大臣則稻目宿禰之子也、性有武略、亦有辨才、以恭敬三寶、家於飛鳥河之傍、乃庭中開小池、仍興小嶋於池中、故時人曰嶋大臣、六月、雪也、是歲、自三月至七月霖雨、天下大飢之、老者噉草根而死于道、幼者含乳以母子共死、又強盜竊盜並大起之不可止、

(丁亥)卅五年春二月、陸奧國有狢化人以歌之、夏五月、有蠅聚集、其凝累十丈之、浮虛以越信濃坂、鳴音如雷、則東至上野國而自散、

(戊子)卅六年春二月戊寅朔甲辰、天皇臥病、三月丁未朔戊申、日有蝕盡之、

に置寺司曰法頭後世玄蕃寮所掌職也とあり
○所造之縁、縁起を云
○入道之縁、度縁なり
○度之年月日、得度の年月日なり
○大臣、馬子なり ○葛城縣、大和國葛城郡なり神武紀(卷上九四頁)に出づ ○本居、ウブスナは産土なり ○因其縣爲姓名、葛城縣を馬子が本居の地といふは同族葛城襲津彦其地に住み又其御女磐之媛皇后のため葛城部を置き襲津彦孫玉田宿禰其子圓臣も葛城に住しかばしか言立てしならむ ○朕則自蘇我出之、按に天皇の御母堅鹽媛は稻目の女にて馬子も稻目の子なれば朕は蘇我氏より出て大臣は朕が舅なりと宣給へり舅は抄人倫部に母之昆弟爲舅母方乃乎知とあり北本寮本蘇我を蘇何に作る ○則日不晩、北本則の字なし ○亡其縣、原本亡を巳に作る應本北本に據て改む ○不聽、女帝に坐しましながら外舅の請奏を聽し給はざりしは畏き大御心と申奉るべし
【卅三年】卅三年、中本傍書に交本卅二年とあり
○惠灌、三論宗の祖なり
【卅四年】花之、原本花を華に作る諸本に據て改む
○桃原、雄略紀七年(卷上二七一頁)に上桃原下桃原とあり大和國高市郡なり
○家於飛鳥河之傍、大和志に高市郡飛鳥村島莊村有島宮古蹟とあり
○強盜竊盜、抄人倫部に偷兒(和名奴須比止)竊盜(和名美曾加奴須比止)群盜一云強盜見唐律賊盜律に強盜凡強盜謂以威若力而取其財先強後盜先盜後強等とあり
【卅五年】狢、抄毛群部に狢(漢語抄云无之奈)似

壬子、天皇病甚之不可諱、則召田村皇子謂之曰、昇天位而經綸鴻基、馭萬機以亭育黎元、本非輙言、恒之所重、故汝愼以察之、不可輙言、卽日召山背大兄教之曰、汝肝稚之、若雖心望而勿諠言、必待群言以宜從、癸丑、天皇崩之、時年七十三、卽殯於南庭、夏四月壬午朔辛卯、雹零、大如桃子、壬辰、雹零、大如李子、自春至夏旱之、秋九月乙巳朔戊午、始起天皇喪禮、是時群臣各誄於殯宮、先是、天皇遺詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓太飢、其爲朕興陵以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、壬辰、葬竹田皇子之陵、

日本書紀卷第廿二

狐而善睡者也本草啓蒙に狸の一種にして頭尖り鼻出目青色身は黄黒褐色とあり
○化人、原本化を比に作る北本中本及紀略に據て改む
○信濃坂、信濃國西筑摩郡と美濃國惠奈郡との堺なる坂なり
【卅六年】日有蝕、日蝕始て爰に見ゆ
○不可諱、御病の癒えざるを云
○田村皇子、敏達天皇の皇孫にて押坂彦人皇子の御子即ち舒明天皇に坐す
○不可輙言、應本楓本中本輙を輕に作る傳曆に二月天皇不悆遺詔曰田村皇子宜纂大業仍詔山背大兄王曰汝年少宜從群臣即崩于大殿とあり
○山背大兄、廐戸皇子の御子なり後入鹿の爲に弑せられ給ふ
○肝稚、心稚しと云に同じ未熟なるを云 ○癸丑、記には戊子年三月十五日癸丑崩とあり年月と干支は紀に合ひ日は違へり記傳に此記注に干支を記せること例なければ書紀に依て後に加へたるにや又若しもとよりの文ならば書紀と干支の傳の異なるなりと云 ○(注)時年七十三、原本三を五に作る岩本に據て改む大日本史に崩下不書享年注曰本書注時年七十五水鏡皇胤紹運錄皇代略記皇年代略記愚管抄一代要記並曰七十三今從皇代略記丙子歲生算之則實爲七十三從本書十八歲立爲皇后之文則七十六年也未知孰是とあれど諸書何れも七十三とありて岩本に合へり故に今之に從ふ ○壬午朔、信友校本及集解長曆を推して壬午を丁丑に改めたれど尙よく考ふべし ○乙巳朔戊午、原本に己巳朔戊子とあり通證に當作乙巳朔戊午といひ乙を己、午を子に誤れりと思へば之に從ふ ○喪禮、原本喪を哀に作る諸本に據て改む ○比年、原本比を此に作る諸本に據て改む ○竹田皇子、天皇の皇子なり諸陵式に磯長山田陵推古天皇在河內國石川郡とあり河內志に南山田村とす今南河內郡山田村に屬す

【即位前紀】息長足日廣額天皇、息長は天皇の御祖母は息長眞手王の女なれば御母方によれる御名足日は用明天皇を橘豐日尊皇極天皇を天豐財重日足姬尊と申奉ると同じ意の稱へ名廣額は御容貌に據れるなるべし
○彥人大兄皇子、敏達天皇の御子
○糠手姬皇女、彥人大兄皇子の御異母妹更名は田村皇女
○散、北本楓本等にアカレと訓るはよし原本ミアレとあるはワカレの誤かと通釋にアレムとあるもいかゞ
○詎王、通證に詎當レ作誰と云
○諠讙、原本讙を護に作る諸本に據て改むナリトヨクは響騷くなり字書に諠も讙も譁也と注す
○采女臣、錄右京神別に采女朝臣神饒速日命六世

日本書紀卷第廿三

息長足日廣額天皇　舒明天皇

息長足日廣額天皇、渟中倉太珠敷(敏達)天皇孫、彥人大兄皇子之子也、母曰糠手姬皇女、豐御食炊屋姬天皇廿九年、皇太子豐聰耳尊薨、而未立皇太子、以卅六年三月天皇崩、九月葬禮畢之、嗣位未定、當是時蘇我蝦夷臣爲大臣、獨欲定嗣位、顧畏群臣不從、則與阿倍麻呂臣議、而聚群臣饗於大臣家、食訖將散、大臣令阿倍臣語群臣曰、今天皇既崩無嗣、若急不計、畏有亂乎、今以詎王爲嗣、天皇臥病之日、詔田村皇子曰、天下大任、本非輙言、爾田村皇子愼以察之、不可緩、次詔山背大兄王曰、汝獨莫諠讙、必從群言、愼以勿違、則是天皇遺言焉、今誰爲天皇、時群臣嘿之無答、亦問之、非答、强且問之、於是大伴鯨連進曰、既從天皇遺命耳、更不可待群言、阿倍臣則問曰、何謂也、開其意、對曰、天皇曷思歟、詔

孫大水口宿禰之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣姓を賜ふ
○高向臣、錄右京皇別に高向朝臣武內宿禰六世孫猪子臣之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣姓を賜ふ
○中臣連彌氣、御食子なり中臣本系帳に御食子鎌足公の父可多能祜大連の子とあり
○難波吉士、安閑紀二年八月（三四頁）に出づ
○許勢臣大麻呂、許勢臣は崇峻紀卽位前紀に出づ原本麻を摩に作る中本に據て改む
○佐伯連、崇峻紀卽位前紀に出づ
○紀臣、同上
○蘇我倉麻呂、公卿補任に馬子之子倉山田麻呂之父とあり原本麻を摩に作る北本中本に據て改む
○（注）雄當、公卿補任に雄正に作る
○境部摩理勢臣、推古紀二十年二月に出づ
○櫻井臣、錄左京皇別に櫻井朝臣蘇我石川宿禰四世孫稻目宿禰大臣之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣姓を賜ふ

田村皇子曰、天下大任也不可緩、因此而言、皇位既定、誰人異言、時采女臣摩禮志、高向臣宇摩、中臣連彌氣、難波吉士身刺、四臣曰、隨大伴連言、更無異、許勢臣大麻呂、佐伯連東人、紀臣鹽手三人進曰、山背大兄王、是宜爲天皇、唯蘇我倉麻呂臣（更名雄當）獨曰、臣也當時不得便言、更思之後啓、爰大臣知群臣不和、而不能成事退之、先是大臣獨問境部摩理勢臣曰、今天皇崩無嗣、誰爲天皇、對曰、擧山背大兄爲天皇、是時山背大兄居於斑鳩宮、漏聆是議、卽遣三國王、櫻井臣和慈古二人、密謂大臣曰、傳聞之、叔父以田村皇子欲爲天皇、我聞此言、立思矣居思矣、未得其理、願分明欲知叔父之意、於是大臣得山背大兄之告、而不能獨對、則喚阿倍臣、中臣連、紀臣、河邊臣、高向臣、采女臣、大伴連、許勢臣等、仍曲擧山背大兄之語、既而便且謂大夫等曰、汝大夫等、共詣於斑鳩宮、當啓山背大兄王曰、賤臣何之獨輙定嗣位、唯擧天皇之遺詔、以告于群臣、群臣並言、如遺言、田村皇子自當嗣位、更詎異言、是群卿言

○叔父、集解に按太子傳大兄之母馬子之女蝦夷卽外叔父也とあり眞の叔父ならずとも叔父と稱する例多し
○謂大夫等、北本謂を語に作る
○面日、通證に面訓末禰婆牟蓋古語也釋同とあれど北本にはマウアハムとあり楓本にも左傍にはマウアハムとあればマウはマヰにて參會むなるべしマネハムにては意通ぜず按にネはヒアの訛ならむか
○啓於山背大兄、兄の字は北本應本中本に據て補ふ
○來之國政、之の字は北本中本に據て補ふ來は通證に謂將來也とあり
○遣重臣等、原本遣を遺に作る北本中本に據て改む
○少々、原本小々に作る北本中本に據て改む
○禁省、禁中と云に同じ
○閤門、宮衞令義解に衞門所守謂之宮門兵衞所守謂之閤門とあり又字書に閤は內中小門唐制天子御便殿見群臣謂之入閤とあり奧向にある

也、特非臣心、但雖有臣私意、而惶之不得傳啓、乃面日親啓焉、爰群大夫等受大臣之言、共詣于斑鳩宮、使三國王、櫻井臣以大臣之辭啓於山背大兄、時大兄王使傳問群大夫等曰、天皇遺詔奈之何、對曰、臣等不知其深、唯得大臣語狀稱、天皇臥病之日、詔田村皇子曰、非輕輙言來之國政、是以爾田村皇子愼以言之、不可緩、次詔大兄王曰、汝肝稚而勿諠言、必宜從群言、是乃近侍諸女王及采女等悉知之、且大王所察、於是大兄王且令問之曰、是遺詔也、專誰人聆焉、答曰、臣等不知其密、既而更亦令告群大夫等曰、愛之叔父勞思、非一介之使、遣重臣等而教覺、是大恩也、然今群卿所噵天皇遺命者、少々違我之所聆、吾聞天皇臥病、而馳上之侍于門下、時中臣連彌氣自禁省出之曰、天皇命以喚之、則參進向于閤門、亦栗隈采女黑女迎於庭中、引入大殿、於是近習者栗下女王爲首、女孺鮪女等八人、幷數十人侍於天皇之側、且田村皇子在焉、時天皇沈病不能覩我、乃栗下女王奏曰、所喚山

門なり故にウチツミカドと訓り
○栗隈采女、山城國久世郡栗隈より出し采女、黑女は名なり
○栗下女王、父祖詳ならず
○女孺、後宮職員令內侍司に女孺一百人とあり司中の雜役に充つ此女孺より采女にも補する例類史四十天長七年に見ゆ
○側、原本にオホトとあるはオモトの誤なるべしオモトは御許なり
○蒙是大恩、嗣位を授け給へる詔を蒙り給ふを云
○豐浦寺、大和志に添下郡豐浦廢寺豐浦村初名向原寺一名建興寺舊在高市郡とあり
○遣八口采女、原本遣を遺に作る北本中本に據て改む八口は地名なるべけれど詳ならず
○爲汝叔父、中本爲の字なし
○餮、字書に貪也とあり
○天神地祇云々、天神地祇にかけて誓ふなり此時の遺詔田村皇子と山背大兄王との御言何れが眞なるか容易に定め難きも下文に先王臨沒謂諸子等

背大兄王參赴、卽天皇起臨之、詔曰、朕以寡薄久勞大業、今曆運將終、以病不可諱、故汝本爲朕之心腹、愛寵之情不可爲比、其國家大基是非朕世、自本務之、汝雖肝稚、愼以言、乃當時侍之近習者悉知焉、故我蒙是大恩、而一則以懼、一則以悲、踊躍歡喜、不知所如、仍以爲、社稷宗廟重事也、我眇少以不賢、何敢當焉、當是時、思欲語叔父及群卿等、然未有可導之時、於今非言耳、吾曾將訊叔父之病、向京而居豐浦寺、是日、天皇遣八口采女鮪女、詔之曰、爲汝叔父大臣常爲汝愁言、百歲之後、嗣位非當汝乎、故愼以自愛矣、既分明有是事、何疑也、然我豈餮天下、唯顯聆事耳、則天神地祇共證之、是以冀正欲知天皇之遺勅、亦大臣所遣群卿者、從來如嚴矛（嚴矛、此云伊箇之保虛）取中事而奏請人等也、故能宜白叔父、既而泊瀨仲王、別喚中臣連・河邊臣、謂之曰、我等父子並自蘇我出之、天下所知、是以如高山恃之、願嗣位勿輙言、則令三國王・櫻井臣、副群卿而遣之曰、欲聞還言、時大臣遣紀臣・大伴連、謂三國王・櫻井臣曰、

曰云々と宣給ひ又入鹿に攻められて困苦し給ひし時の御言に以一身之故豈煩萬民云々とあるにても山背大兄王は僞など宣給はざる御性質の如く拜せらる通釋に此王は聖德太子の御子に坐て御威勢盛なりしかば蝦夷の爲には御外姪ながら忌まれ給ひしなるべし故に田村皇子に心を寄て遺詔をあらぬ狀に取餝りて言出しかど群卿の思ふ所も如何と其心を引見しなりと云るが如く恐くは蝦夷が己の非望を遂げむ爲に田村皇子に對する遺詔を僞りしによりてかゝる爭を生じたるなるべし
○嚴矛云々、釋紀に私記曰凡取矛立地之時必取其中故云とあり不偏不黨にして公平に奏請するを云
○泊瀨仲王、聖德太子の御子大兄王の異母弟なり
○我等父子云々、御父聖德太子はもとより蘇我の出なれども此王は膳氏の女の生たるなれば父子蘇我出とは申難し按に後に馬子女子刀目古郎女の御養となりなどし給ひし事

曰、先日言訖、更無異矣、然臣敢之輕誰王也、重誰王也、於是數日之後、山背大兄亦遣櫻井臣、告大臣曰、先日之事陳聞耳、寧違叔父哉、是日、大臣病動、以不能面言於櫻井臣、明日、大臣喚櫻井臣、卽遣阿倍臣・中臣連・河邊臣・小墾田臣・大伴連、啓山背大兄言、自磯城嶋宮御宇天皇之世、及近世者、群卿皆賢哲也、唯今臣不賢而遇當乏人之時、誤居群臣上耳、是以不得定基、然是事重也、不能傳導、故老臣雖勞、面啓之、其唯不誤遺勅者也、非臣私意、既而大臣傳阿倍臣・中臣連、更問境部臣曰、誰王爲天皇、對曰、先是大臣親問之日、僕啓既訖之、今何更亦傳以告耶、乃大忿而起行之、適是時、蘇我氏諸族等悉集、爲嶋大臣造墓而次于墓所、爰摩理勢臣壞墓所之廬、退蘇我田家而不仕、時大臣慍之、遣身狹君勝牛・錦織首赤猪而誨曰、吾知汝言之非、以干支之義、不得害、唯他非汝是、我必忤他從汝、若他是汝非、我當乖汝從他、是以汝遂有不從者、我與汝有瑕、則國亦亂、然乃後生言之、吾二人破國也、是後葉之惡名焉、汝愼以勿起逆心、然猶不從、而遂赴于斑鳩、住於泊瀨王宮、於是大

ありてかく言へるかと通釋に云り　○陳聞耳、集解に陳下疑脫所字かと云　○小墾田臣、錄右京皇別に小治田朝臣武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也とあり天武紀十三年十一月に朝臣姓を賜ふ　○遇當乏人之時、釋紀遇を適に作る是なるに似たり之の字は北本中本に據て補ふ　○非臣私意、北本非の下唯の字あり　○造墓、馬子が桃原の墓なり　○蘇我田家、蘇我は地名、田家は田宅田莊と同じく別莊なり　○身狹君、原本に狹身に作る中本引一本に據て改む錄攝津未定雜姓に牟佐吳公吳國王青淸王之後とある此氏なるべし記に天押足日子命牟邪臣之祖也また雄略紀二年（卷上二六三頁）に身狹村主とあれど此は別姓なるべし　○錦織首、仁德紀四十一年（卷上二一八頁）に出づ　○干支之義、仁德紀四十年（卷上二一六頁）に友于之義とあるを北本中本等に干支に作れり　○有瑕、瑕は隙也心の合はざるを云、物語類にも仲惡しきをひまありと云り　○頃者、原本頃を項に作る楓本中本に據て改む　○聖皇、推古天皇を申奉れるならむ　○不忘、原本忘を忌に作る應本中本に據て改む　○先王、聖德太子なり　○臨沒、原本沒を設に作る北本中本に據て改む　○諸惡莫作云々、此二句涅槃經增一阿含經に見ゆ　○來目物部、來目は職名、物部は姓なり來目部は雄略紀二年（卷上二六二頁）に出づ　○兄子、通證に胄子也と云　○瓦舍、通證に此時雖寺非佛殿不用瓦故有此名と　○姧一二尼、此事は摩理勢父子に寃を負せたる讒言なること下の歌に明なり　○刺頸、原本刺を剌に作る中本に據て改む　○于泥備椰摩云々、守部云此は山に籠れりし程の歌にて未自刺頸死ざりし程に時人の歌ひしなれば山を探りし間日比經たるべし一首の意は畝火山の木立は薄けれどもせめて其を憑みとしてか毛津壯子が籠らせりけむ可惜壯子を救助くる人はなきか蝦夷が惡を懲す人はなきかと下に含めたるなり原本苫を苦に作る北本中本に據て改む

【元年】以天皇之璽印云々、去年三月先帝崩御の後嗣位定まらず衆議紛々たりしが大臣蘇我蝦夷は田村皇子を立むと欲し境部摩理勢は山背大兄皇子を立つべしと主張し遂に其身を滅すに至れりかくて蝦夷の意行はれ田村皇子は遂に卽位し給ひぬ　○鍾愛、原本メグシをメグミとす中本に據て訂す　○皇綜、集解に皇綜未知所出疑統誤とあり　○田部連、舊紀に物部小前宿禰連公田部連等祖とあり　○掖玖、推古紀二十四年（一二七頁）に見ゆ　【二年】寶皇女、皇極天皇に坐す　○大海皇子、天武紀に大海人皇子とあり

臣益怒、乃遣群卿、請于山背大兄曰、頃者摩理勢違臣、匿於泊瀨王宮、願得摩理勢、欲推其所由、爰大兄王答曰、摩理勢素聖皇所好、而暫來耳、豈違叔父之情耶、願勿瑕、則謂摩理勢曰、汝不忘先王之恩而來、甚愛矣、然其因汝一人而天下應亂、亦先王臨沒、謂諸子等曰、諸惡莫作、諸善奉行、余承斯言、以爲永戒、是以雖有私情、忍以無怨、復我不能違叔父、願自今以後勿憚改意、從群而无退、是時、大夫等且誨摩理勢臣之曰、不可違大兄王之命、於是摩理勢臣進無所歸、乃泣哭更還之、居於家十餘日、泊瀨王忽發病薨、爰摩理勢臣曰、我生之誰恃矣、大臣將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲子阿椰出于門、坐胡床而待、時軍至乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、唯兄子毛津逃匿于尼寺瓦舍、卽姧一二尼、於是一尼嫉妬令顯、圍寺將捕、乃出之入畝傍山、因以探山、毛津走無所入、刺頸而死山中、時人歌曰、

于泥備椰摩、虛多智于須家苫、多能彌介茂、氣莬能和區呉能、虛茂邏勢利祁牟、

（己丑）元年春正月癸卯朔丙午、大臣及群卿共以天皇之璽印、獻於田村皇子、則辭之曰、宗廟重事矣、寡人不賢、何敢當乎、群臣伏固請曰、大王先朝鍾愛、幽顯屬心、宜纂皇綜、光臨億兆、卽日卽天皇位、夏四月辛未朔、遣田部連闕名於掖玖、是年也太歲己丑、

（庚寅）二年春正月丁卯朔戊寅、立寶皇女爲皇后、后生二男一女、一曰葛城皇子、近江大津宮御宇天皇二曰間人皇女、三曰大海皇子、淨御原宮御宇天皇夫人蘇我嶋大臣女法提郎媛生古人皇子、更名大兄皇子又娶吉備國蚊屋采女生蚊屋皇子、三月丙寅朔、高麗大使宴子拔、小使若德、百濟大使恩率素子、小使德率武德、共朝貢、秋八月癸巳朔丁酉、以大仁犬上君三田耜・大仁藥師惠日、

○蚊屋、備中國賀夜郡　○犬上君三田耜、推古紀二十二年に出づ　○藥師惠日、同紀二十一年に出づ　○岡本宮、大和志に高市郡岡本宮岡村（今高市村大字岡）とあり　○難波大郡及云々、北本及を乃に作る傍訓を本文に寫入たるか大郡は欽明紀二十二年に出づ唐客の爲に新館を造れる事推古紀十六年四月（一一九頁）に見ゆ攝津志に東成郡三韓舘在安國寺坂上とあり　【三年】百濟王義慈、三年辛卯は武王璋三十二年にて此時義慈未だ卽位せず其卽位は十三年辛丑にて十年の後なり　○王子豐章、皇極紀二年に百濟太子餘豐とあると同人なるべしされば章は衍にて王子豐とあるべきなり　○津國、原本津の上攝の字あり北本應本及紀略に據て削る　○有間溫湯、有馬郡にあり釋紀所引の攝津風土記に有馬郡有鹽原山此邊有鹽湯因以爲名とあり　【四年】大唐云々、此年唐太宗貞觀六年なり　○靈雲、前に見えず　○僧旻、推古紀十六年（一二一頁）に出づ　○勝、錄山城諸蕃に勝百濟人多利須々之後也とあり　○泊于難波津、原本泊を到に作る諸本に據て改む　○大伴連馬養、大日本史大伴金村傳に據るに金村の孫咋の長子なり　○江口、推古紀十六年（一一九頁）に出づ

遣於大唐、庚子、饗高麗百濟客於朝、九月癸亥朔丙寅、高麗百濟客歸于國、是月、田部連等至自掖玖、冬十月壬辰朔癸卯、天皇遷於飛鳥岡傍、是謂岡本宮、是歲、改脩理難波大郡及三韓館、

（辛卯）三年春二月辛卯朔庚子、掖玖人歸化、三月庚申朔、百濟王義慈入王子豐章爲質、秋九月丁巳朔乙亥、幸于津國有間溫湯、冬十二月丙戌朔戊戌、天皇至自溫湯、

（壬辰）四年秋八月、大唐遣高表仁送三田耜、共泊于對馬、是時學問僧靈雲、僧旻、及勝鳥養、新羅送使等從之、冬十月辛亥朔甲寅、唐國使人高表仁等泊于難波津、則遣大伴連馬養迎於江口、船卅二艘及鼓吹旗幟皆具整飾、便告高表仁等曰、聞天子所命之使到于天皇朝、迎之、時高表仁對曰、風寒之日、飾整船艘以賜迎之、歡愧也、於是令難波吉士小槻、大河內直矢伏爲導者到于館前、乃遣伊岐史乙等、難波吉士八牛引客等

○歡愧、北本愧を悅に作る　○大河內直、推古紀十六年六月（一一九頁）に出づ　○到于館前、于の字は諸本に據て補ふ　○伊岐史、錄左京諸蕃に伊吉連出自長安人劉楊雍也とあり天武紀十二年十月に連姓を賜ふ　○給神酒、私記に神酒和語云美和また玄蕃式に新羅客入朝者給神酒とあり　【五年】高表仁等歸國、舊唐書に遣新州刺史高表仁持節往之表仁無綏遠之才與王爭禮不宣朝命而還とあり按に紀に十月難波の館に入て神酒を給りし事見えたるのみにて他の記事なきに據れば唐王の命を述べずして歸りしは事實なるべし　【六年】彗星、抄天地部に彗星兼名苑注云彗星（和名波々岐保之）言其形如篲也とあり　【七年】正月、北本寮本中本及紀略に三月とあり　○廻、原本廻に作る中本に據て改む　○瑞蓮、抄草木部に藕爾雅云其根藕（波知須乃禰）また蕖爾雅云其本蔤（波知須乃波比）郭璞曰莖下白蒻在泥中者也蓮爾雅云其子蓮其中菂郭璞曰蓮謂房也菂蓮中子也とありハチスは蜂巣にて房を云り　○劍池、大和國高市郡萬葉に御佩を劍池の蓮葉に云々と見ゆ　○一莖二花、群芳譜に並頭蓮晉泰和間生於玄圃謂之嘉蓮今所在見之とあり　【八年】日蝕之、之の字は北本寮本に據て補ふ　○劾、原本刻に作る北本及通證集解に據て改む廣韻に劾推窮罪人とあり　○三輪君、用明紀元年正月（九六頁）に出づ　○推鞫、北本鞫を鞠に作る鞫鞠同じ考課令義解に鞫者窮罪也とあり　○刺頸、原本刺を判に作る北本寮本中本に據て改

入於館、卽日給神酒、

（癸巳）五年春正月己卯朔甲辰、大唐客高表仁等歸國、送使吉士雄摩呂、黑摩呂等、到對馬而還之、

（甲午）六年秋八月、長星見南方、時人曰彗星、

（乙未）七年春正月、彗星廻見于東、夏六月乙丑朔甲戌、百濟遣達率柔等朝貢、秋七月乙未朔辛丑、饗百濟客於朝、是月、瑞蓮生於劍池、一莖二花、

（丙申）八年春正月壬辰朔、日蝕之、三月、悉劾姧采女者、皆罪之、是時三輪君小鷦鷯苦其推鞫、刺頸而死、夏五月、霖雨大水、六月、災岡本宮、天皇遷居田中宮、秋七月己丑朔、大派王謂豐浦大臣曰、群卿及百寮朝參已懈、自今以後、卯始朝之、巳後退之、因以鍾爲節、然大臣不從、是歲大旱、天下飢之、

○田中宮、大和志に高市郡田中宮在田中村とあり ○大派王、敏達紀四年に大派皇子とあり ○豐浦大臣、蝦夷なり ○卯始朝之、參朝時制此に始て見ゆ ○因以鐘爲節、北本因の下之の字あり鐘は鐘と同じ古字通用す鐘を撞きて合圖とするを云是も唐六典に見えて彼に採給ひしなり

【九年】流星、抄天部に兼名苑云流星一名奔星(和名與八比保之)また宋書天文志に流星天使也自上而降曰流自下而升曰飛大者曰奔亦流星也とあり此星の奔る音を以て名付たるにて呼(ヨバヒ)星の義か ○地雷、神代紀(卷上一八頁)に土雷の名あれど異り史記天官書に天鼓有音如雷非雷音在地而下及地其所往者兵發其下とある是なるべし ○僧旻僧、下の僧字は通證に疑衍とし集解は削る ○天狗、史記天官書に天狗狀如大奔星其下止地類狗所墮及炎火望之如火光炎々衝天また山海經に天門山有赤犬名曰天狗其光飛天流而爲星長數十丈其疾如風其聲如雷其光如電とありアマツキツネと訓るは傳暦に僧旻法師曰是謂天狐也とあるに據れるか ○乙酉朔、原本酉を丑に作る北本楓本に據て改む ○上毛野君、崇神紀四十八年(卷上一二一頁)に出づ ○壘、字書に軍壁也とありソコは通釋に底に同じと云 ○不知所如、原本如を知に作る北本寮本中本に據て改む ○則謂夫曰、則は中本及紀略に據て補ふ ○汝祖等云々、上毛野君の祖等が武功を建てしこと景行紀五十五、六年神功紀四十九年仁德紀五十三年等に見ゆ ○水表政、水表は海外なり政は通釋考本京極本信友所校一古本に據て敵の字に改む ○令飲夫、令の字は北本中本に據て補ふ ○數十人、人の字は北本に據て補ふ ○取仗、原本仗の上に伏の字あり北本應本中本に據て削る ○振旅、左傳成七年の注に振は整也旅は衆也とあり亂れたる軍衆の整へるを云

【十年】桃李、原本李を季に作る諸本に據て改む

(丁酉)九年春二月丙辰朔戊寅、大星從東流西、便有音似雷、時人曰、流星之音、亦曰、地雷、於是僧旻僧曰、非流星、是天狗也、其吠聲似雷耳、三月乙酉朔丙戌、日蝕之、是歲、蝦夷叛以不朝、即拜大仁上毛野君形名、爲將軍令討、還爲蝦夷見敗而走入壘、遂爲賊所圍、軍衆悉漏城空之、將軍迷不知所如、時日暮踰垣欲逃、爰方名君妻歎曰、慷哉、爲蝦夷將見殺、則謂夫曰、汝祖等渡蒼海、跨萬里、平水表政、以威武傳於後葉、今汝頓屈先祖之名、必爲後世見嗤、乃酌酒強之令飲夫、而親佩夫之劍、張十弓、令女人數十人俾鳴弦、既而夫更起之取仗而進之、蝦夷以爲軍衆猶多、而稍引退之、於是散卒更聚、亦振旅焉、擊蝦夷大敗以悉虜、

(戊戌)十年秋七月丁未朔乙丑、大風之、折木發屋、九月、霖雨、桃李華、冬十月、

○有馬溫湯宮、攝津志に有馬郡有馬行宮在湯山村杉谷とあり

【十一年】新嘗、通證に記不時也とあるが如く例に違へるに依て書せるなりされば毎年十一月に新嘗の行はれしこと此文にて推知すべし ○蓋因幸云々、以下歟に至る十字集解に私記攙入として削る ○見則飢之、晏子春秋に彗星之出天爲民之亂見之とあり ○大宮、百濟宮なり大和志に十市郡百濟宮飯高村故地今半入廣瀬郡とあり ○大寺、大和志に廣瀬郡百濟寺在百濟邑二條隣十市郡三代實錄爲十市郡また三代實錄廿八に元慶四年十月廿日彼寺(大安寺)三綱申牒偁、昔日聖德太子創建平群郡熊凝道場飛鳥岡本天皇遷建十市郡百濟川邊號曰百濟大寺と見ゆ ○川側、原本側を測に作る北本楓本に據て改む大和志に廣瀬郡百濟川自高市郡流於郡東界至于河合入廣瀬川とあり ○書直、天武紀十年十二月に書直智德賜姓曰連と見ゆ ○秋九月、秋の字衍か ○惠隱、推古紀十六年(一二一頁)に慧隱とあり ○伊豫溫湯宮、伊豫國溫泉郡にあり萬葉三山邊赤人の歌に伊豫の高嶺の射狹庭の岡に立して云々と見え萬葉釋に立湯岡側碑文處曰伊社邇波之岡也とあるに據れば此行幸の古蹟は湯岡の側なる伊社邇波と云處なるべし ○九重塔、百濟寺の塔なりコシは通證に越也層級之義と云

【十二年】廐坂宮、大和志に高市郡廐坂宮在所未詳とあり ○无量壽經、編年記に觀無量壽經一卷允恭天皇十三年宋元嘉中西域三藏畺良耶舍譯とあり是なるべ

幸有間溫湯宮、是歲、百濟新羅任那並朝貢、

(己亥)十一年春正月乙巳朔壬子、車駕還自溫湯、乙卯、新嘗、蓋因幸有間以闕新嘗歟、丙辰、無雲而雷、丙寅、大風而雨、己巳、長星見西北、時旻師曰、彗星也、見則飢之、秋七月、詔曰、今年造作大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處、是以西民造宮、東民作寺、便以書直縣爲大匠、秋九月、大唐學問僧惠隱、惠雲、從新羅送使入京、冬十一月庚子朔、饗新羅客於朝、因給冠位一級、十二月己巳朔壬午、幸于伊豫溫湯宮、是月、於百濟川側建九重塔、

(庚子)十二年春二月戊辰朔甲戌、星入月、夏四月丁卯朔壬午、天皇至自伊豫、便居廐坂宮、五月丁酉朔辛丑、大設齋、因以請惠隱僧令說无量壽經、冬十月乙丑朔乙亥、大唐學問僧清安、學生高向漢人玄理、傳新羅

○清安、推古紀十六年にし
○南淵漢人請安さ見ゆ
○玄理、推古紀十六年(一二三頁)に出づる高向漢人玄理なり
○傳新羅、新羅を經て本國に歸るは順路にあらず事故ありしなるべし
○賜爵一級、賜冠位一級さ云に同じ
【十三年】崩、大日本史に本書享年闕皇胤紹運錄愚管抄正統記皇代記一代要記並曰卽位年三十七崩年四十九水鏡曰卽位年四十七未レ知二孰是一さあり
○百濟大殯、大は敬稱なるべし大內大宮などの大に同じ

而至之、仍百濟新羅朝貢之使共從來之、則各賜爵一級、是月、徙於百濟宮、

(辛丑)十三年冬十月己丑朔丁酉、天皇崩于百濟宮、丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時、東宮開別皇子(天智)年十六而誄之、

日本書紀卷第廿三

【卽位前紀】天豐財重日足姬、天豐は美稱財は天皇の御名を寶皇女さ申奉るによれり重日足姬は後に稱奉りし美稱なり
○茅渟王、諸陵式に片岡葦田墓茅渟皇子在二大和國葛下郡一さあり
○吉備姬王、紹運錄に欽明天皇孫櫻井皇子の女さあり吉備島皇祖母命さも申奉る
○順考古道云々、我國の古道卽ち惟神の道に順ひて政事を聞食したりさなり
【元年】(正月)恐懾、原本慑を攝に作る諸本に據て改むヒシケは倭訓栞にひしくは壓字をよめり引敷の義なるべしさ云
○路不拾遺、此語淮南子氾論訓に出づ
(二月)阿曇連比羅夫、始て出づ、阿曇連は應神紀三年(卷上一九六頁)に出づ推古紀三十一年を參

日本書紀卷第廿四

天豐財重日足姬天皇　皇極天皇

天豐財重日重日、此云伊柯之比足姬天皇、渟中倉太珠敷天皇(敏達)曾孫、押坂彥人大兄皇子孫、茅渟王女也、母曰吉備姬王、天皇順考古道而爲政也、息長足日廣額天皇(舒明)二年、立爲皇后、十三年十月、息長足日廣額天皇崩、

(壬寅)元年春正月丁巳朔辛未、皇后卽天皇位、以蘇我臣蝦夷爲大臣如故、大臣兒入鹿更名鞍作自執國政、威勝於父、由是盜賊恐懾、路不拾遺、乙酉、百濟使人大仁阿曇連比羅夫、從筑紫國乘驛馬來言、百濟國聞天皇崩、奉遣弔使、臣隨弔使共到筑紫、而臣望仕於葬、故先獨來也、然其國者今大亂矣、二月丁亥朔戊子、遣阿曇山背連比良夫、草壁吉士磐金、倭漢書直縣、遣百濟弔使所、問彼消息、弔使報言、百濟國主謂臣言、塞上恒作惡之、請付還使、天朝不許、百濟弔使傔人等言、去年十一

看せよ
○驛馬、早馬なり驛馬の制孝德紀二年正月に見ゆ
○今大亂、傳曆に二月百濟使弔天皇之喪使人言國內大亂弟王子兒翹岐及男女並內佐平高名人等四十餘人爲島王所殺云々縁斯國則大亂也とあり
○阿曇山背連比羅夫、阿曇連比羅夫に同じ、山背の二字集解には衍とす
○草壁吉士、雄略紀十四年(卷上二八一頁)に大草香部吉士見え天武紀十二年に草壁吉士賜姓曰連と見ゆ
○書直縣、舒明紀十一年(二四七頁)に見ゆ
○遣百濟、遣の字衍か又は於などの誤ならむ
○塞上、百濟王の弟の名なり孝德紀白雉元年十月に見ゆ當時既に我國に來り本國の爲に惡しき事など爲し故に授給へと申請ひしなるべし
○傔人、從者なり繼體紀廿三年(二四頁)に見ゆ
○大佐平智積卒、下文七月の條に智積來朝の事見ゆれば卒とあるは傔人等の誤聞なるべし大佐平は百濟の執政なり

月、大佐平智積卒、又百濟使人擲崐崘使於海裏、今年正月國主母薨、又弟王子兒翹岐、及其母妹女子四人、內佐平岐味、有高名之人卌餘被放於嶋、壬辰、高麗使人泊難波津、丁未、遣諸大夫於難波郡、撿高麗國所貢金銀等幷其獻物、使人貢獻既訖而諮云、去年六月、弟王子薨、秋九月、大臣伊梨柯須彌弑大王、幷殺伊梨渠世斯等百八十餘人、仍以弟王子兒爲王、以己同姓都須流金流爲大臣、戊申、饗高麗百濟客於難波郡、詔大臣曰、以津守連大海可使於高麗、以國勝吉士水鷄可使於百濟、水鷄此云倶比那、以草壁吉士眞跡可使於新羅、以坂本吉士長兄可使於任那、庚戌、召翹岐安置於安曇山背連家、辛亥、饗高麗百濟客、癸丑、高麗使人百濟使人並罷歸、三月丙辰朔戊午、無雲而雨、辛酉、新羅遣賀騰極使與弔喪使、庚午、新羅使人罷歸、是月、霖雨、夏四月丙戌朔癸巳、太使翹岐將其從者拜朝、乙未、蘇我大臣於畝傍家喚百濟翹岐等親對語話、仍賜良馬一疋鐵二十鋌、唯不喚塞上、是月、霖雨、五月乙卯

○崐崘使、尙書禹貢の注に崐崘在臨羌西西戎西域也舊唐書南蕃傳に自林邑以南皆卷髮黑身通號爲崐崙とあり林邑は西域記十三摩呾吒國の條に東有摩訶瞻波國卽此云林邑是也と見ゆ此使は其國より百濟に來れる使人か或は我國に來りしを百濟の使が同船して海に擲げしか何れかならむ
○內佐平、新唐書に內臣佐平宣納號令とあり
○被放於嶋、傳曆には爲島王所殺とあり
○難波郡、通證に謂大郡之館とあり信友校本には一作館とあれど次にも難波郡とあれば誤にあらず
○伊梨柯須彌弑大王、原本弑を殺に作る岩本中本に據て改む伊梨柯須彌は傳曆に入霞と書り此事史記高麗本紀に二十五年十月蓋蘇文弑王とあり柯蘇彌は蓋蘇文、伊梨は官名にて大兄なるべし二十五年は壬寅にて皇極天皇元年なり此に去年六月とあるは一年の差あり
○以弟王子兒爲王、子は岩本中本及傳曆に據て補

朔己未、於河內國依網屯倉前召翹岐等令觀射獵、庚午、百濟國調使船與吉士船倶泊于難波津、蓋吉士前奉使於百濟乎、壬申、百濟使人進調、吉士服命、乙亥、翹岐從者一人死去、丙子、翹岐兒死去、是時翹岐與妻畏忌兒死、果不臨喪、凡百濟新羅風俗、有死亡者、雖父母兄弟夫婦姉妹、永不自看、以此而觀、無慈之甚豈別禽獸、丁丑、熟稻始見、戊寅、翹岐將其妻子移於百濟大井家、乃遣人葬兒於石川、六月乙酉朔庚子、微雨、是月、大旱、秋七月甲寅朔壬戌、客星入月、乙亥、饗百濟使人大佐平智積等於朝、或本云、百濟使人大佐平智積及兒達率闕名、恩率軍善、乃命健兒相撲於翹岐前、智積等宴畢而退拜翹岐門、丙子、蘇我臣入鹿豎者獲白雀子、是日同時有人以白雀納籠而送蘇我大臣、戊寅、群臣相語之曰、隨村々祝部所教、或殺牛馬祭諸社神、或頻移市、或禱河伯、既無所效、蘇我大臣報曰、可於寺々轉讀大乘經典、悔過如佛所說、敬而祈雨、庚辰、於大寺南庭嚴佛菩薩像與四天王像、屈請衆僧讀大雲經等、于時蘇我大臣手執香鑪、燒香發願、辛巳、微雨、壬午、不能祈雨、故停讀經、八月甲申朔、天皇幸南淵河上、

跪拜四方、仰天而祈、卽雷大雨、遂雨五日、溥潤天下、（或本云、五日連雨、九穀登熟、）於是天下百姓俱稱萬歲曰、至德天皇、己丑、百濟使參官等罷歸、仍賜大舶與同船三艘、（同船、母慮紀舟、）是日、夜半雷鳴於西南角、而風雨、參官等所乘船舶觸岸而破、丙申、以小德授百濟質達率長福、中客以下授位一級、賜物各有差、戊戌、以船賜百濟參官等發遣、己亥、高麗使人罷歸、己酉、百濟新羅使人罷歸、九月癸丑朔乙卯、天皇詔大臣曰、朕思欲起造大寺、宜發近江與越之丁、復課諸國使造船舶、辛未、天皇詔大臣曰、起是月限十二月以來、欲營宮室、可於國々取殿屋材、然東限遠江、西限安藝、發造宮丁、癸酉、越邊蝦夷數千内附、冬十月癸未朔庚寅、地震而雨、辛卯、地震、是夜、地震而風、甲午、饗蝦夷於朝、丁酉、蘇我大臣設蝦夷於家、而躬慰問、是日、新羅弔使船、與賀騰極使船、泊于壹岐嶋、丙午、夜中地震、是月、行夏令、無雲而雨、十一月壬子朔癸丑、大雨雷、丙辰、夜半雷一鳴於西北角、己未、雷五鳴於西北角、庚申、天暖如春氣、辛酉、雨下、壬戌、天暖

ふ爲王とあるは寶藏王を指せり同王は史記に建武王弟大陽王之子也とあり弟王子兒とあるに適へり
○都須流金流、都須流は官名にて對盧、金流は名なるべし
○高麗百濟客、客の字は北本楓本に據て補ふ
○津守連大海、津守連は欽明紀四年（四七頁）に見ゆ通證に田裳見宿禰十四代廣麻呂弟とあり
○國勝吉士水鷄、詳ならず齊明紀二年に難波吉士國勝等自百濟還とあるは別人か考ふべし
○坂本吉士、詳ならず
○安曇、岩本中本安を阿に作る
（三月）辛酉、諸本に據て補ふ
○賀騰極使、騰極は登極に同じ卽位を賀する使
（四月）太使、中本には大使とあり私記に太を渾（コニ）と訓り
○於敵傍家、原本於の字なく敵を敏に作る岩本北本應本等に據て補ひ訂す
○鐵、北本寮本錢に作る恐くは非なり
○不喚塞上、翹岐等の冠さなるもの故に喚されざ

如春氣、甲子、雷一鳴於北方、而風發、丁卯、天皇御新嘗、是日、皇子大臣各自新嘗、十二月壬午朔、天暖如春氣、甲申、雷五鳴於晝、二鳴於夜、甲午、初發息長足日廣額天皇喪、是日、小德巨勢臣德太代大派皇子而誄、次小德粟田臣細目代輕皇子而誄、次小德大伴連馬飼代大臣而誄、乙未、息長山田公奉誄日嗣、辛丑、雷三鳴於東北角、庚寅、雷二鳴於東、而風雨、壬寅、葬息長足日廣額天皇于滑谷岡、是日、天皇遷移於小墾田宮、（或本云、遷於東宮南庭之權宮、）甲辰、雷一鳴於夜、其聲若裂、辛亥、天暖如春氣、是歲、蘇我大臣蝦夷立己祖廟於葛城高宮、而爲八佾之儛、遂作歌曰、野麻騰能、飫斯能毗稜栖鳴、倭拕羅務騰、阿庸比拕豆矩梨、擧始豆矩羅符母、又盡發擧國之民、幷百八十部曲、預造雙墓於今來、一曰大陵、爲大臣墓、一曰小陵、爲入鹿臣墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上宮乳部之民、（乳部、此云美父、）役使營兆所、於是上宮大娘姬王發憤而歎曰、蘇我臣專擅國政、多行無禮、天無二日、國無二王、何由任意悉役封民、自茲結恨、遂

るなり
（五月）依網屯倉、仁德紀四十三年に出づ丹北郡三宅村にあり
○射獵、己未は五日なれば藥獵なるべし通證に端午騎射之始とあれど延喜式に凡五月五日天皇觀騎射走馬設御座於武德殿とある騎射なりとは見るべからず
○調使船、調の字は諸本に據て補ふ
○（注）蓋吉士云々、集解に此十字私記攙入とす
○服命、服復通用す天智紀にも見ゆ
○丙子、原本子を申に作る岩本中本に據て改む
○姉妹、原本妹姉に作る中本に據て改む
○熟稻始見、始は岩本北本應本等に據て補ふ五月熟稻始て見ゆとは祥瑞として擧げたるならむ
○百濟大井家、敏達紀元年（八一頁）に見ゆ河内國錦織郡百濟鄕にあり
○石川、河内國石川郡
（七月）客星、史記天官書に客星出天廷有奇命とまた隋書天文志に客星者周伯、老子、王蓬絮、國皇、溫星、凡五星皆

取俱亡、是年也太歲壬寅、

客星也とあり

○大佐平智積、按に上文既に卒去とあり此に使人として來朝せるを見れば傔人の言は誤聞なりしなるべし　○健兒、續紀廢帝紀に天平寶字六年二月簡點郡司子弟百姓年四十以下二十已上練習弓馬者以爲健兒とみえて其人數は兵部式に見えたれど此はそれとは異なりて訓に見えたる如したゞ力者なりされば此時は諸國より出しにもあるべからず　○相撲、抄術藝部に相撲漢武故事云角觝今之相撲也王隱晉書云相撲(和名須末比)下伎也スマヒは言海に爭(スマ)ひの義二人力を鬪はする技と云通證に此七月相撲節之始也とあるが如く是は古へ禁中にて毎年七月に行はれし相撲節の始なり　○拜翹岐、翹岐は弟王子の兒なれば智積等敬禮して退けるなるべし　○豎者、抄人倫部に童禮記云童(和良波)未冠之稱也また侲子文選東京賦注云侲子(師說和良波閇)童男童女也と見え字書に豎童僕之未冠者と見ゆ入鹿が家に召使ひたる童僕なるべし　○白雀子、治部式に中瑞とす、蘇我氏かゝる祥瑞を得て悦びしは內心に欲する事あるが故なるべし　○相語、原本語を謂に作る岩本北本中本に據て改む　○殺牛馬祭云々、是は漢土の風の移れるなり漢書于定國傳に郡中枯旱三年卜筮其故于公曰孝婦不當死前太守彊斷之咎黨在是乎於是太守殺牛祭孝婦冢因表其墓天立大雨歲熟とあり　○移市、市場を異處に移し市廛の門を閉て集り來る人を內に入れざらしむる祭と見えたり後漢書禮儀志に請雨の注に董仲舒春秋繁露曰大旱雩祭而請雨又曰諸巫毋大小皆相聚於郭門爲小壇以脯酒祭女獨擇寬大便處移市市使無內丈夫丈夫無得相從飲食令吏妻各往視其夫皆到即起雨注而已とあり同書郎顗傳にも自冬涉春訖無嘉澤云々薦祭山川暴龍移市と見えたり　○禱河伯、是も皇國風の祭にはあらじ河伯は史記正義に河伯華陽潼鄕人姓馮氏名夷浴於河中而溺死遂爲河伯と見ゆ　○轉讀、大部の經を處々摘みて讀むを云眞讀に對して云　○大乘經典、佛敎に大乘小乘の別あり天台四敎義に究竟大乘無過華嚴大集大品法華涅槃五部大乘經自此起とあり　○大寺、舒明紀十一年に造れる百濟大寺なり　○四天王、崇峻紀即位前紀(一〇一頁)に出づ　○大雲經、原本雲を乘に作る岩本北本寮本に據て改む佛說大雲請雨經を云　○香鑪、抄調度部に香鑪小品經云以白銀香爐燒黑沈水供養般若とあり　○燒香、香は抄香藥部に香樓炭經曰凡雜香有四十二種と見え沈香以下種々の香名を擧ぐ萬葉十六に香塗流(コリヌレル)塔爾莫依云々香をコリとよめるはカヲリの約か或は烟の凝る意かと云　○不能祈雨、通證に謂無雨也と云　(八月)南淵河上、大和志云高市郡男淵女淵在畑村南淵即此　○跪拜四方、通證に四方拜始見とあれど後世の四方拜とは異なり此は天地四方を拜して雨を天神地祇に祈給ふなり　○(注)九穀、五雜俎に九穀者黍稷麻麥稻粱菽大小豆、古今注に九穀黍稷稻粱三豆二麥とあり水本には九を五とす　○至德天皇、論語泰伯に子曰泰伯其可謂至德也とあり　○參官、敏達紀十二年(八九頁)に出づ　○大舶、ツムは神功紀即位前紀(卷上一七七頁)に出づ　○同船、欽明紀十四年(六三頁)に出づ　○(注)毋慮紀舟、應本藤本慮を盧に作る　○鳴於西南角、於は北本寮本中本に據て補ふ　○小德、原本小を少に作る北本中本に據て改む　○中客、上客に對して云　○戊戌、原本戊辰に作る岩本中本に據て改む干支を推すに戊辰は九月十六日にて此月戊辰なし　○新羅使人、集解に新羅二字を削る按に上文三月庚午新羅使既に歸り其後來朝の事見えざるに由れり　(九月)起造大寺、集解云舒明天皇十一年詔曰造作大宮及大寺蓋未落成而天皇崩故有此擧大寺は大安寺即ち百濟寺を云　○越之丁、原本此下百濟大寺の四字を分注す攙入なること明なれば削る　○船舶、原本舶を舫に作る岩本北本應本等に據て改む　○限十二月以來、通釋に以來をコナタと訓るを思に十二箇月の內に造り畢へむとの詔なるべしと云　○欲營宮室、北本營の下造の字あり此宮室は飛鳥板葺の宮なり　○殿屋材、原本材を村に作る岩本北本應本等に據て改む　○蝦蛦、北本楓本等蛦を夷に作る集解云檢字書無蛦字蓋因蝦字誤同施虫而唐書亦作蛦同書日本傳には蝦蛦と見ゆれば何れにてもよし　(十月)設、饗應するを云　○泊于壹岐嶋、集解に三月庚午所罷歸蓋途中遲留以是日至壹岐島とあり寮本藤本岐を伎に岩本藝に作る　○行夏令、夏の氣候の流行するなり禮記月令に孟冬行夏令則國多暴風方冬不寒蟄虫復出とあり　○無雲而雨、而の字諸本に據て補ふ　(十一月)壬子、岩本北本中本に據て補ふ　○御新嘗、丁卯は十六日にて中卯なり神祇令云仲冬下卯大嘗祭新嘗祭は神代以來の舊儀なれど十一月中卯を用る例は正しく此に見えたり　○皇子、原本皇の下太の字あり岩本以下諸本及類史に據て削る　○各自新嘗、上代は家毎に新嘗祭を行ひし事此の記事及常陸風土記萬葉十四に見えたる上總國歌にて明なり　(十二月)發息長足日廣額天皇喪、舒明天皇は十三年十月崩御し給ひしに十五箇月を經て喪を發せらる　○巨勢臣德太、原本臣を巨に作る岩本北本應本等に據て改む公卿補任に德太雄柄宿禰七世孫

(癸卯)二年春正月壬子朔旦、五色大雲滿覆於天、而闕於寅、一色青霧周起於地、辛酉大風、二月辛巳朔庚子、桃華始見、乙巳雹傷草木華葉、是月、風雷雨氷、行冬令、國內巫覡等折取枝葉、懸挂木綿、伺候大臣渡橋之時、爭陳神語入微之說、其巫甚多、不可悉聽、三月辛亥朔癸亥、災難波百濟客館堂與民家室、乙亥、霜傷草木華葉、是月、風雷雨氷、行冬令、夏四月庚辰朔丙戌、大風而雨、丁亥、風起天寒、己亥、西風而雹、天寒人著綿袍三領、庚子、筑紫大宰馳驛奏曰、百濟國主兒翹岐弟王子

父胡孫子也男人大臣之後大化五年四月甲午任左大臣年五十一任右大臣年月未詳とあり　○大派皇子、敏達天皇の皇子　○粟田臣細目、推古紀十九年(一一三頁)に出づ　○輕皇子、孝德天皇　○大伴連馬飼、金村大臣の曾孫咋子連の子孝德紀即位前紀に大伴長德連字馬飼又大化五年紀に授大紫爲右大臣とあり　○息長山田公、應神天皇々子稚渟毛二俣王の後、息長は近江國坂田郡の地名なり姓氏錄左京皇別に息長眞人と見ゆ　○奉誄日嗣、持統紀二年に當麻眞人智德奉誄皇祖等之騰極次第とあるに同じ　○庚寅、九日なり十三日甲午の前にあるべきなり集解信友校本には此條を前に移せり　○滑谷、三才圖會に滑谷在大和國高市郡冬野村邊とあり　○小墾田宮、高市郡にあり　○(注)東宮、中本東を常に作る　○己祖廟、北本寮本楓本に己の字なし支那の廟制に傚ひて作りしものなるべし　○葛城高宮、大和志に葛上郡高宮已廢存宮戸森脇二村高丘廟在森脇村(今南葛城郡吐田鄕村大字となる)とあり葛城は此氏の本居なり　○八佾之儛、論語八佾に子謂季子八佾舞於庭注に馬融曰佾列也天子八佾諸侯六魯以周公故受王者禮樂有八佾舞今季桓子僭於家廟舞之故孔子譏之とあり是も支那の俗を摸したるものなれど僭越の甚しきなり　○遂作歌、北本遂の字なし守部云八佾の儛の驕れるのみならず遂にかゝるおふけなき歌をさへよめると云意なり　○飫斯能毗稜栖鳴云々、歌の表は倭の忍海の河の廣き瀬を渡らむと足結手刷り腰のわたりまでも引揚げて身の用意すといひて裏には今間なく大八洲を廣く押領せむそれ故にまづ先祖の廟をも天子と等しく祭りおくぞとなり(守部の解)　○百八十部曲、洽く諸氏の有せる部民なり　○造雙墓於今來、於は北本中本に據て補ふ大和志に葛上郡今木雙墓在古瀬水泥邑與吉野郡今木村隣とあり　○乳部之民、ミブは御產(ミウブ)部なり宮乳部は聖德太子の爲に定め置かれたる乳部の民を云　○(注)美父、原本父を文に作る北本中本に據て改む　○瑩兆、中本瑩を塋に作る　○上宮大娘姬王、聖德太子の御女　○天無二日云々、禮記曾子問に出づ　○取俱亡、考本信友校本取を所に作る

【二年】寅、東北方なり　○雹、抄天地部に陸詞曰雹(和名阿良禮)雨氷也とあり　○雨氷、原本氷雨に作る岩本北本應本等に據て改む　○國內巫覡云々、以下不可悉聽までは三年紀にも出づ巫覡は抄人倫部に巫覡說文云巫(和名加牟奈岐)祝女也文字集略云覡(乎乃古加牟奈岐)男祝也とありカムナキは神を和(ナゴ)し奉る意なり原本覡を親に作る岩本に據て改む　○折取枝葉、枝葉は賢木の枝葉にて後に云玉串な

るべし
○渡橋之時、通釋に上の忍の廣瀨を渡らむとさある歌は廣瀨に大橋をわたし其橋を亘るさまを水を渡るが如くに詠るなるべし其今渡らむとする前驅を伺候ひて巫覡どもが大臣の喜ぶべき祥瑞を神語に託して爭ひ陳しなるべしと云
○家室、中本室を屋に作る
○綿袍、通證に溫袍也とあり
○丁未、類史遷御條に此日を庚子とす
○飛鳥板蓋新宮、扶桑略記に一說云同年移都於飛鳥板蓋新宮是大和國高市郡丘本宮同地也とあり大和志に高市郡板蓋宮川原宮倶在岡飛鳥二村間とさ見ゆ
○甲辰、大日本史に此條を上の丁未の上に移して今推干支訂之と注す
○相謂之曰、相の字は岩本中本に據て補ふ
○己亥年、己亥は舒明天皇十一年にて今年まで五年なり
○背違、岩本寮本背を皆に作る

共調使來、丁未、自權宮移幸飛鳥板蓋新宮、甲辰、近江國言、雹下、其大徑一寸、五月庚戌朔乙丑、月有蝕之、六月己卯朔辛卯、筑紫大宰馳驛奏曰、高麗遣使來朝、群卿聞而相謂之曰、高麗自己亥年不朝、而今年朝也、辛丑、百濟進調船泊于難波津、秋七月己酉朔辛亥、遣數大夫於難波郡、檢百濟國調與獻物、於是大夫問調使曰、所進國調欠少前例、送大臣物不改去年所還之色、送群卿物亦全不將來、皆違前例、其狀何也、大使達率自斯、副使恩率軍善、倶答諮曰、即今可備、自斯質達率武子之子、是月、茨田池水大臭、少虫覆水、其虫口黑而身白、八月戊申朔壬戌、茨田池水變如藍汁、死虫覆水、溝瀆之流亦復凝結、厚三四寸、大小魚臭如夏爛死、由是不中喫焉、九月丁丑朔壬午、葬息長足日廣額天皇于押坂陵、（或本云、呼廣額天皇爲高市天皇也、）丁亥、吉備嶋皇祖母命薨、癸巳、詔土師娑婆連猪手、視皇祖母命喪、天皇自皇祖母命臥病、及至發喪、不避床側、視養無倦、乙未、葬皇祖母命于檀弓崗、是日、大雨而雹、丙午、

○武子之子、岩本中本子の下に也の字あり
○茨田池、河內國茨田郡平池村（今北河內郡友呂岐村大字）
○八月、原本此下に戊月の二字あり諸本に據て削る
○葬、改葬なり
○押坂陵、諸陵式に押坂內陵在大和國城上郡、大和志に在忍坂村上、今稱丹冢、陵墓要覽に磯城郡城島村大字忍坂とあり
○吉備嶋皇祖母命、吉備姬王卽ち天皇並孝德天皇の大御母に坐す島は高市郡の地名祖母は親母の義なり
○土師娑婆連猪手、推古紀十一年に見ゆ
○皇祖母命喪、命の字は諸本に據て補ふ
○檀弓崗、諸陵式に檜隈墓吉備姬王在高市郡檜隈陵域內、陵墓要覽に坂合村大字平田とあり
○漸變、岩本寮本中本等漸の下一の漸の字あり
○如前所勅、國司等に從前の如く任所に赴きて其國を治めよと宣給ひしなり
○紫冠、大德の冠なるべ

罷造皇祖母命墓役、仍賜臣連伴造帛布各有差、是月、茨田池水漸變成白色、亦無臭氣、冬十月丁未朔己酉、饗賜群臣伴造於朝堂庭、而議授位之事、遂詔國司、如前所勅、更無改換、宜之厥任、愼爾所治、壬子、蘇我大臣蝦夷縁病不朝、私授紫冠於子入鹿、擬大臣位、復呼其弟曰物部大臣、大臣之祖母、物部弓削大連之妹、故因母財取威於世、戊午、蘇我臣入鹿獨謀將廢上宮王等而立古人大兄爲天皇、于時有童謠曰、

伊波能杯儞、古佐屢渠梅野俱、渠梅多儞母、多礙底騰衰羅栖、歌麻之之能烏膩、（蘇我臣入鹿深忌上宮王等威名振於天下、獨謨僣立、）

是月、茨田池水還清、十一月丙子朔、蘇我臣入鹿遣小德巨勢德太臣、大仁土師娑婆連、掩山背大兄王等於斑鳩、（或本云、以巨勢德太臣・倭馬飼首爲將軍、）於是奴三成與數十舍人出而拒戰、土師娑婆連中箭而死、軍衆恐退、軍中之人相謂之曰、一人當千、謂三成歟、山背大兄仍取馬骨投置內寢、遂率其妃并子弟等、得間逃出、隱膽駒山、三輪文屋君、舍人田目連及其女、菟田諸石、伊勢阿部堅經從焉、巨勢德太

し
○復呼其弟云々、諸本に弟をオト、と訓めど傳曆に復呼其第字曰物部大臣とあり又姓氏錄布留宿禰の條に齊明天皇（皇極の誤なるべし）御世宗我蝦夷大臣號武藏臣物部首幷神主首とありされば其とは蝦夷を指せるにて蝦夷の第の名を物部大臣の第とも呼ばしめしならむ本文に見ゆるが如く外戚の關係より物部守屋大連の遺產を領し併せて其姓氏をも冒せしなるべし
○古人大兄、舒明天皇の皇子にて母は蘇我馬子の女法提郞媛なるが故に之を立むとしたるなり
○童謠、字鏡に謠徒歌爲謠是也和佐宇太とあり守部云童謠は時の異變を善惡共に神の謠はしめ給ふを云和邪は神態の和邪なりと
○伊波能杯儞云々、一首の解下文に見ゆ
○古佐屢渠梅野倶、守部はコメに子妻を含めたりと云
○渠梅多儞母、俗に米なりとも云が如し

臣等燒斑鳩宮、灰中見骨、誤謂王死、解圍退出、由是山背大兄王等、四五日間淹留於山、不得喫飲、三輪文屋君進而勸曰、請移向於深草屯倉、從茲乘馬、詣東國、以乳部爲本、興師還戰、其勝必矣、山背大兄王等對曰、如卿所導、其勝必然、但吾情冀十年不役百姓、以一身之故、豈煩勞萬民、又於後世、不欲民言由吾之故喪己父母、豈其戰勝之後、方言丈夫哉、夫損身固國、不亦丈夫者歟、有人遙見上宮王等於山中、還導蘇我臣入鹿、入鹿聞而大懼、速發軍旅、述王所在於高向臣國押曰、速可向山求捉彼王、國押報曰、僕守天皇宮、不敢出外、入鹿即將自往、于時古人大兄皇子喘息而來問、向何處、入鹿具說所由、古人皇子曰、鼠伏穴而生、失穴而死、入鹿由是止行、遣軍將等求於膽駒、竟不能覓、於是山背大兄王等自山還入斑鳩寺、軍將等即以兵圍寺、於是山背大兄王使三輪文屋君謂軍將等曰、吾起兵伐入鹿者、其勝定之、然由一身之故、不欲傷殘百姓、是以吾之一身賜於入

○多礙底膽㝠羅栖、飮食ふことを古くタゲと云トホラセは通り給へなり山背王の山に隱り給むにせめて米なりとも喫て通らせとの意、下文に四五日間淹留於山不得喫飲とある前兆なり
○歌麻之々能烏膩、山羊の老翁にて山背王に喩ふ
○（注）蘇我臣、北本楓本臣を大臣に作る
○獨謨、原本謨を誤に作る北本應本中本及釋紀に據て改む
○僭立、ヒトコロヒと訓るは通證に獨擅之意と云
（以上注）
○（注）倭馬飼首、孝德紀大化元年に馬飼造續紀天平十一年に養得馬飼連乙麻呂見ゆ皆同姓なるべし
○奴、大兄王に召使はる、奴なるべし
○山背大兄、大兄の下王の字を脫せるか
○內寢、ヨドノは夜殿なり寢室を云
○三輪文屋君、三輪君は舒明紀八年（一四五頁）に出づ
○田目連、錄大和神別に多米宿禰天日鷲命二十二世孫意保止命之後也とある是か天武紀十三年に田目連賜姓曰宿禰とあり
○伊勢阿部、通證に多氣郡有敢氏人見續日本紀今安濃郡有阿部村と云
○德太臣、諸本太を大に作る
○見骨、傍訓ミデ、は見出而の義なり
○退出、中本出を去に作る
○淹留、ヘスムは經住の意なるべし
○不得喫飲、モノモエマヰノボラズは食物も得參上らずにて聞食すを得ざるを云
○深草屯倉、山城國紀伊郡深草にあり
○乳部、上宮太子の乳部と定置れたる民の東國に多く在しなるべし
○十年不役百姓、何か故ありて誓はれしなるべし
○丈夫、原本大夫に作る岩本北本に據て改む下同じ
○還導、原本導に作る諸本に據て改む
○高向臣國押、高向臣は舒明紀卽位前紀（一三八頁）に出づ續紀四和銅元年八月攝津大夫高向朝臣麻呂薨難波朝廷刑部尙書國忍之子也とあり
○求捉、原本捉を投に作る岩本中本に據て改むカスウ、カスヰイは齊明紀天武紀にも出づ北本にはカスムと訓り
○喘息、イワケは雄略紀（卷上二六〇頁）に駭を訓るに同じ字書に喘は疾息也とあり
○鼠伏穴云々、集解に按言喩入鹿莫自往と云
○定之、ウツナシは通證に蓋不虛也とあり或は疑なしの意か
○傷殘、中本殘害に作る
○自經倶死、原本經を経に作る北本應本に據て改む　傳曆に一說曰癸卯年十二月十一日丙戌亥時蘇我大臣兒林臣入鹿致奴王子兒名輕王巨勢德太臣大伴馬甘連中臣鹽屋連枚夫等六人發惡逆計太子々孫男女二十三人王無罪被害と云ひ山背大兄王以下の御名を列擧せり
○寺、斑鳩寺なり山背大兄王の御墓此地にあり式に北岡墓とある是也大和志に在平群郡法隆寺墓上有寺曰法積寺四畔圓丘五とあり大兄王のみならず此時倶に死給ひし廿三人の御屍をも此處に葬りしなるべし
○儞之身命、儞は爾に同じイガのイはイマシのイに同じ神武紀に見ゆ
○

鹿、終與子弟妃妾一時自經倶死也、于時五色幡蓋、種種伎樂、照灼於空、臨垂於寺、衆人仰觀稱嘆、遂指示於入鹿、其幡蓋等變爲黑雲、由是入鹿不能得見、蘇我大臣蝦夷聞山背大兄王等總被亡於入鹿、而嗔罵曰、噫入鹿極甚愚癡、專行暴惡、儞之身命不亦殆乎、時人說前謠之應曰、以伊波能杯儞而喩上宮、以古佐屢而喩林臣、（林臣、入鹿也、）以渠梅野倶而喩燒上宮、以渠梅拖儞母陀礙底膽㝠羅栖柯麻之之能鳴而喩山背王之頭髮斑雜毛似山羊、又曰棄捨其宮匿深山相也、是歲、百濟太子餘豐以蜜蜂房四枚放養於三輪山、而終不蕃息、

(注)林臣入鹿也、傳曆に蘇我大臣兒林臣入鹿とあり此五字私記の攙入なるべし　○班雜、フ、キは源順集に黒かみのふ、きになればと見ゆフ、セは誤なるべし　○山羊、抄毛群部に羺羊爾雅注云羺羊(和名加万之師)大於羊而大角字鏡に狹をよみ康頼本草に羚角を訓り名義は通證に羱鹿也と云　○蜜蜂房、抄蟲豸部に蜜蜂方言注云蜜蜂(和名美知波知)黒蜂在竹木爲孔又有室者也、飮食部に蜜説文云蜜(音密俗云美知)甘飴也野王按蜂採百花醞釀所成也とあり房は巢なり

【三年】中臣鎌子連、錄左京神別に藤原朝臣天兒屋根命二十三世孫内大臣大織冠中臣連鎌子とあり孝德紀白雉五年には鎌足に作れり大鏡に鎌足常陸に生るとあれど家傳には内大臣諱鎌足字中郎大倭國高市郡人也云々美氣古卿之長子也母曰大伴夫人とあり　○神祇伯、繼體紀元年にも見え神祇の長官なり伯とあるは追稱なるべし　○三嶋、攝津國嶋上郡にあり安閑紀元年に出づ此氏の別業ありし處にして家傳に詳なり　○阿倍氏、孝德紀大化元年に見ゆる元妃阿倍倉梯麻呂大臣女小足媛なるべし原本倍を陪に作る岩本北本麗本に據て改む　○(注)充舍人、原本充を宛に作る岩本中本に據て改む　○忠正、原本忠を惠に作る岩本中本及紀略に據て改む

三年(甲辰)春正月乙亥朔、以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三嶋、于時輕皇子(孝德)患脚不朝、中臣鎌子連曾善於輕皇子、故詣彼宮而將侍宿、輕皇子深識中臣鎌子連之意氣高逸容止難犯、乃使寵妃阿倍氏淨掃別殿高鋪新蓐、靡不具給、敬重特異、中臣鎌子連便感所遇、而語舍人曰、殊奉恩澤、過前所望、誰能不使王天下耶、(謂充舍人爲駈使也、)舍人便以所語陳於皇子、皇子大悅、中臣鎌子連爲人忠正、有匡濟心、乃憤蘇我臣入鹿失君臣長幼之序、挾闚闕社稷之權、歷試接於王宗之中、而求可立功名哲主、便附心於中大兄、疏然未獲展其幽抱、偶預中大兄於法興寺槻樹之下打毱之侶、而候皮鞋隨毱脫落、取置掌中、前跪恭奉、中大兄對跪敬執、自茲相善、倶述所懷、既無所匿、復恐他嫌頻接、而倶手把黃卷、自

改む　○匡濟心、字書に匡は正也又方正也又救也とあり濟は成也又賙救也又相助也とあり　○蘇我臣、北本臣の上大の字あり　○闚闕、字書に私視也　○歷試、字書に歷は過也經也行也又次也とあり經過して試むるなり歷をツタヒと訓るは傳ひの意　○接於王宗之中、王宗は通證に謂王家之同宗也とあり於の字は北本中本に據て補ふ　○哲主、集解に原作主非と云て王に改む　○疏然、通釋に本のまゝにても聞ゆれど按に疏は踈の字の誤にもあるべしと云　○法興寺、崇峻紀即位前紀推古紀四年に見ゆ　○打毱、蹴鞠を云抄術藝部に打毬唐韻云毬(音求末利字知)毛丸打者也劉向別錄云打毬昔黄帝所造本因兵勢而爲之また蹴鞠傳玄彈棊賦序云漢成帝好蹴鞠(此間云末利古由)公羊傳注云以足逆踏也とあり此に打毬

學周孔之教於南淵先生所、遂於路上往還之間、並肩潛圖、無不相協、於是中臣鎌子連議曰、謀大事者不如有輔、請納蘇我倉山田麻呂長女爲妃、而成婚姻之昵、然後陳說欲與計事、成功之路莫近於茲、中大兄聞而大悅、曲從所議、中臣鎌子連即自往媒要訖、而長女所期之夜被偸於族、(族謂身狹臣也、)由是倉山田臣憂惶、仰臥不知所爲、少女恠父憂惶、就而問曰、憂惶何也、父陳其由、少女曰、願勿爲憂、以我奉進、亦復不晩、父便大悅、遂進其女、奉以赤心、更無所忌、中臣鎌子連擧佐伯連子麻呂・葛木稚犬養連網田於中大兄曰、云々、三月、休留(休留、茅鴟也、)產子於豐浦大臣大津宅倉、倭國言、頃者菟田郡人押坂直(闕名)將一童子欣遊雪上、登菟田山、便見紫菌挺雪而生、高六寸餘、滿四町許、乃使童子採取、還示隣家、摠言不知、且疑毒物、於是押坂直與童子煮而食之、大有氣味、明日往見、都不在焉、押坂直與童子因喫菌羹、無病而壽、或人云、蓋俗不知芝草、而妄言菌耶、夏六月癸卯朔、大伴馬飼連獻百

の字を用ひたれど卽ち䩸鞠なり
○皮鞋、倭名抄に見えず釋名に鞋解也著時縮其上如履然解其上則舒解也とあり
○黃卷、成語考に縑緗黃卷總謂經書代醉編に古人寫書皆用黃紙以蘗染之所以辟蠹也故名書曰黃卷とみゆ
○周孔之敎、周公孔子を云て總て聖賢の敎の意
○南淵先生、通證に先生未詳其名疑南淵朝臣之先也以先生爲推古十六年所謂南淵漢人請安按集解には學問僧非學生也と云是學問僧南淵漢人請安是也此時釋氏兼儒如孝德天皇之時是法師任國博士是也と云り大和志に南淵先生墓在（高市郡）稻淵村今稱明神冢と見ゆ
○蘇我倉山田麻呂、原本山倉田に作る岩本北本應本等に據て改む公卿補任に馬子大臣之孫雄正子臣之子也とあり蝦夷の姪にして入鹿とは從父兄弟なり家傳に知山田臣與鞍作相忌白中大兄曰察山田臣之爲人剛毅果敢

合花、其莖長八尺、其本異而末連、乙巳、志紀上郡言、有人於三輪山見猿、晝睡、竊執其臂、不害其身、猿猶合眼歌曰、武舸都烏爾、陀底屢制羅我、儞古儞擧曾、倭我底嗚騰羅每、拖我佐基泥、佐基泥曾母野、倭我底騰羅須謀野、其人驚怪猿歌、放捨而去、此是經歷數年、上宮王等爲蘇我鞍作圍於膽駒山之兆也、戊申、於劍池蓮中有一莖二萼者、豐浦大臣妄推曰、是蘇我臣將榮之瑞也、卽以金墨書、而獻大法興寺丈六佛、是月、國內巫覡等折取枝葉、懸掛木綿、伺大臣度橋之時、爭陳神語入微之說、其巫甚多、不可具聽、老人等曰、移風之兆也、于時有謠歌三首、其一曰、波波魯魯儞、渠騰曾枳擧喩屢、之麻能野父播羅、其二曰、烏智可拖能、阿婆努能枳枳始、騰余謀作儒、倭例播儞始柯騰、比騰曾騰余謀須、其三曰、烏麼野始儞、倭例烏比岐例底、制始比騰能、於謀提母始羅孺、伊弊母始羅孺母也、秋七月、東國不盡河邊人大生部多、勸祭虫於村里之人曰、此者常世神也、祭此神者、致富與壽、巫覡等遂詐託於神語曰、祭常世神者、

威望亦高若得其意事必須成請先作婚姻之昵然後布心腸之策とみゆ
○婚姻、爾雅釋親に婿之父爲姻婦之父爲婚婦之父母壻之父母相謂爲婚姻とあり
○媒要、原本媒を謀に作る岩本北本中本等に據て改む
○（注）身狹臣、孝德紀大化五年に據るに山田麻呂の異母弟なり
○恾父憂惶、岩本惶を色に作る
○憂惶何也、岩本北本楓本等憂を悔に作る
○遂進其女、天智紀に遠智娘と見ゆ持統天皇の御母なり
○佐伯連、欽明紀二十五年（六五頁）に出づ
○稚犬養連、錄攝津神別に若犬養宿禰火明命十六世孫尾綱根命之後也、天武紀十三年に賜姓曰宿禰と見ゆ
○云々、集解に按轉寫之人省功不載遂缺其文と云
○休留、抄羽族部に鵂鶹張華博物志云鵂鶹鳥（休留二音漢語抄云以比止與）とあり其偏傍を省るなり通證に蓋言響（イヒトヨム）之義其鳴聲似人語今俗所謂布久呂布也と云
○豐浦大臣、蘇我蝦夷なり豐浦は河內國河內郡の地名
○大津宅、和泉志に和泉郡大津とあり蓋豐浦大臣の別莊なり
○倭國言、次に志紀上郡とある如く倭國司より言上せし

貧人致富、老人還少、由是加勸捨民家財寶、陳酒菜六畜於路側、而使呼曰、新富入來、都鄙之人、取常世虫、置於淸座、歌儛求福、棄捨珍財、都無所益、損費極甚、於是葛野秦造河勝惡民所惑、打大生部多、其巫覡等恐休其勸祭、時人便作歌曰、禹都麻佐波、柯微騰母柯微騰、枳擧曳倶屢、騰擧預能柯微乎、宇智岐多麻須母、此虫者常生於橘樹、或生於曼椒、（曼椒、此云褒曾紀、）其長四寸餘、其大如頭指許、其色綠而有黑點、其貌全似養蠶、冬十一月、蘇我大臣蝦夷兒入鹿臣、雙起家於甘檮岡、稱大臣家曰宮門、入鹿家曰谷宮門、（谷、此云波佐麻、）稱男女曰王子、家外作城柵、門傍作兵庫、每門置盛水舟一、木鉤數十、以備火災、恒使力人持兵守家、大臣使長直於大丹穗山、造桙削寺、更起家於畝傍山東、穿池爲城、起庫儲箭、恒將五十兵士、繞身出入、名健人曰東方儐從者、氏々人等入侍其門、名曰祖子孺者、漢直等全侍二門、

なり　○頃者、原本頃を項に作る楓本中本に據て改む　○押坂直、錄左京未定雜姓に忍坂連火明命之後さあり　○紫菌、本草綱目に一名木芝本經氣味甘温無毒さあり　○芝草、說文に芝神芝也本草に有青赤黃白黑紫六色注に芝爲瑞草服之さあり治部式に形似珊瑚枝葉連結或丹或紫或黒或金色或隨四時變色一云一年三華食之令眉壽さありて下瑞さす　○百合花、百合は抄草木部に百合本草云百合一名磨罷(音罷和名由里)あり原本花を華に作る今諸本に從ふ　○志紀上郡、大和國城上郡なり城上郡司の上申せしなり　○合眼、目を塞ぐを云ヒシキテは上に恐懾をヒシテさ訓るヒシに同じ　○武𪊕都烏爾云々、一首の表の意は向の峰に立る我夫のにこやか(柔)なる手を以てこそ我手を取らめ誰か醜の拆手(恐しき手)を以て荒けなく我手を取るぞさ譬を執へし人を猿の告めて云るにて裏の心は山背王をば柔かにいたはり奉るべきに入鹿が強暴なる軍將を遣して弑奉るさは何事ぞやさ告めたるなり原本佐基泥曾母野を基佐泥曾母野に作る集解に據て改む　○此是經歷數年云々、之を言上したるは三年六月なれど此猿怪ありしは二年十一月以前の事なれば其由を此に注記したるなり　○劍池蓮、舒明紀七年(一四五頁)にも見ゆ　○將榮、原本將來に作る諸本に據て改む　○金墨、金泥なり　○國內巫覡云々、以下不可具聽まで二年紀二月の條に出で類史にも二年二月の事さす　○其一曰、波波魯魯爾さ書たるは上古の書法なり此意は神の彈き給ふ琴の音の遙に聞ゆるは今こそ蘇我大臣の宅地さなりてあれ此島の地はやがて神の領し給べき藪原さなるべしさなり島は馬子の時より宅地さして島大臣さ呼しなり倘歌の意は四年六月に見ゆ　○其二曰、上宮王は御性質女々しく入鹿の罪をも鳴らし給ず彼方の淺野の雉の如く音も立ずして臥しましゝかご天道是を許さず中大兄鎌子をして其罪を鳴して誅せしめ給むさなり岩本中本阿婆野を阿娑野に作る阿娑野ならば朝野なるべし　○其三曰、林に我を引入れて巧を爲す人の面も其家も知らずさなり入鹿が己れを大極殿に欺き引入れて殺さむさ企つる人のあるに其人の面も家も知らず居ることの愚かさよさの意なり倘歌の意は下文に出づ原本麼を麻に作る岩本中本に據て改む　○不盡河、駿河國にあり今の富士川なり　○大生部、姓氏錄に見えず續紀卷九神龜元年二月に大生部直三穗麻呂さ云人見えたる外には史に見えず　○常世神、常世國の神を云常世は絕域の地を云るか　○陳酒菜、原本酒の下陳の字あり集解に據て削る　○六畜、爾雅釋畜に馬牛羊豕犬雞謂之六畜　○淸座、シキヰは敷居なり常世虫を祀る座を淸らかに設くるを云　○葛野、山城國葛野郡卽ち秦氏の居地なり　○秦造、推古紀十一年(一一二頁)に出づ　○禹都麻佐波云々、太秦は、卽ち秦造河勝はもよ世の流言に聞え渡れる常世の神を打懲めましぬることよさの意なり河勝が打たるは多を打てば其神の根を斷つに依りてかく云るなり　○生於橘樹、於は北本藤本中本に據て補ふ　○曼椒、抄草木部に蔓椒(伊多知波之加美一云保曾岐)通證に今云犬山椒さあり延喜式(齋宮)には椶椒さ書けり　(十一月)甘檮岡、高市郡豐浦村にあり　○谷宮門、谷は上に滑谷崗さあり　○兵庫、抄居處部に唐令云諸軍器在庫(漢語抄云豆八毛能久良)皆造棚閣安置別異さありヤクラは櫓の字を訓みて唐韻云櫓(夜久良)城上守禦樓さあればハモノクラさ訓べきか下文には然訓り　○盛水舟、俗に云ふ用水桶　○木鉤、淮南子氾論訓注に高誘曰鉤鎌也さあり　○長直、錄和泉神別に長公積羽八重事代主命之後也さあり　○大丹穗山、三代實錄元慶二年二月式外大和國大仁保神に從五位下を授くさあるを志に在高市郡入谷村さ見ゆされば此山高市郡にあるべし　○梓削寺、大和志に高市郡廢寺梓削寺古蹟在丹生谷村さあり　○健人、垂仁紀七年(卷上一三〇頁)に力士を上文に健兒をよめり　○東方儐從者、古より坂東の兵士の勇猛なる事世に聞えたれば之を採用せしなるべしシトリべは後取部なり安閑紀元年に儐從をシトヘワラハさ訓るも同じ　○氏々人、諸氏の人なり　○祖子孺者、通證に此號猶史記所謂家人子也嘉曆公卿勅使記家子一人さあり集解に按祖卽蝦蛦子孺昵近之義さあり　○漢直、此氏は古より蘇我氏さ特殊の關係あるに據て全ら二門を守らしめしなり二門は宮門さ谷官門さなり

【四年】阜嶺、たゞ山嶺(ミネ)なりチカノタケさ訓は惡し　○宮寺、原本宮を官に作る北本應本楓本等に據り

（乙巳）四年春正月、或於阜嶺、或於河邊、或於宮寺之間、遙見有物而聽猿吟、或一十許、或廿許、就而視之、物便不見、尚聞鳴嘯之響、不能獲覩其身、舊本

改む　○(注)舊本云々、京を難波に移すことは孝德紀大化元年に見えたり兆の下也の字は諸本に據て補ふ　○伊勢大神之使也、景行紀四十年(卷上五八頁)に荒神之使也さ云事見えたりそれさ同じ後世熊野の烏八幡の鳩日吉の猿などを神使さ云も皆同じ　(四月)鞍作、推古紀十四年(一一七頁)に出づ　○以虎爲友、虎の怪を爲す事太平廣記等に例多し　○黃地、黃は說文に地之色也さあり此はたゞ地さ云に同じ　○白水、泉なり此はたゞ水の意　○大極殿、抄居處部に大極殿朝堂院正殿名也さあり但し此に大極殿さあるは追稱にて當時は大安(ヤスミ)殿さ云しなり大極殿をオホヤスミドノさ訓べき由玉勝間に見ゆ　○俳優、字書に雜戲也さありワザヒトはワザヲキビトの略なり神代紀(卷上二八頁)に見ゆ　○方便、翻譯名義集に能巧用諸法隨機利物故曰方便さあり

云、是歳移京於難波、而板蓋宮爲墟之兆也、時人曰、此是伊勢大神之使也、夏四月戊戌朔、高麗學問僧等言、同學鞍作得志、以虎爲友、學取其術、或使枯山變爲青山、或使黃地變爲白水、種々奇術、不可殫究、又虎授其針曰、愼矣愼矣、勿令人知、以此治之、病無不愈、果如所言、治無不差、得志恒以其針隱置柱中、於後虎折其柱、取針走去、高麗國知得志欲歸之意、與毒殺之、六月丁酉朔甲辰、中大兄密謂倉山田麻呂臣曰、三韓進調之日、必將使卿讀唱其表、遂陳欲斬入鹿之謀、麻呂臣奉許焉、戊申、天皇御大極殿、古人大兄侍焉、中臣鎌子連知蘇我入鹿臣爲人多疑、晝夜持劍、而教俳優方便令解、入鹿臣咲而解劍、入侍于座、倉山田麻呂臣進而讀唱三韓表文、於是中大兄戒衞門府、一時倶鏁十二通門、勿使往來、召聚衞門府於一所、將給祿、時中大兄卽自執長槍、隱於殿側、中臣鎌子連等持弓矢而爲助衞、使海犬養連勝麻呂授箱中兩劍於佐伯連子麻呂與葛城稚犬養連網田曰、努力努力、急須應斬、子麻呂等、以水送飯、恐而反吐、

中臣鎌子連、嘖而使勵、倉山田麻呂臣恐唱　表文將盡、而子麻呂等不來、流汗浹身、亂聲動手、鞍作臣怪而問曰、何故掉戰、山田麻呂對曰、恐近　天皇、不覺流汗、中大兄見子麻呂等畏入鹿威、便旋不進、曰咄嗟、卽共子麻呂等、出其不意、以劍傷割入鹿頭肩、入鹿驚起、子麻呂運手揮劍、傷其一脚、入鹿轉就御座、叩頭曰、當居嗣位、天之子也、臣不知罪、乞垂審察、天皇大驚、詔中大兄曰、不知所作、有何事耶、中大兄伏地奏曰、鞍作盡滅天宗、將傾　日位、豈以天孫代鞍作耶、（蘇我臣入鹿、更名鞍作、）天皇卽起入於殿中、佐伯連子麻呂、稚犬養連網田斬入鹿臣、是日雨下潦水溢庭、以席障子覆鞍作屍、古人大兄見走入私宮、謂於人曰、韓人殺鞍作臣、（謂因韓政而誅、）吾心痛矣、卽入臥内、杜門不出、中大兄卽入法興寺、爲城而備、凡諸皇子、諸王、諸卿大夫、臣連伴造國造、悉皆隨侍、使人賜鞍作臣屍於大臣蝦夷、於是漢直等摠聚眷屬、擐甲持兵、將助大臣處設軍陣、中大兄使將軍巨勢德陀臣、以天地開　闢君臣　始有、說於賊黨、令

○衞門府、職員令に衞門府督一人掌下諸門禁衞出入禮義以時巡檢及隼人門籍門牓事上とあり抄職官部に衞門府を由介比乃豆加佐と訓り靫を負ひて仕奉る由の名なり

○十二通門、宮城には四方に各三門ありて合せて十二門なり拾芥抄に正南曰朱雀南之左曰美福南之右曰皇嘉北曰偉鑒北之東曰達智西曰安嘉東曰待賢東之南曰郁芳北曰陽明西曰藻壁西之南曰談天北曰殷富とあり但し是は延曆以後平安城の名稱にて當時は如何にありしか知り難し

○召聚衞門府云々、異變を生ぜしめざる爲なり入鹿の威に怖れて彼に從ふもの多ければ之を懸念し給ふなり

○海犬養連、錄右京神別に海犬養海神綿積命之後也とありて姓なし天武紀十三年十二月海犬養連賜姓曰宿禰と見ゆ

○授箱中兩劍、原本授を投に作る諸本に據て改む

○急須、急に瞬間にの意なり

知所赴、於是高向臣國押謂漢直等曰、吾等由君大郎應當被戮、大臣亦於今日明日立俟其誅決矣、然則爲誰空戰、盡被刑乎、言畢解劍投弓、捨此而去、賊徒亦隨散走、己酉、蘇我臣蝦夷等臨誅、悉燒天皇記國記珍寶、船史惠尺卽疾取所燒國記、而奉獻中大兄、是日、蘇我臣蝦夷及鞍作屍、許葬於墓、復許哭泣、於是或人說第一謠歌曰、其歌所謂、波魯波魯儞、渠騰曾枳舉喩屢、之麻能野文播羅、此卽宮殿接起於嶋大臣家、而中大兄與中臣鎌子連、密圖大義、謀戮入鹿之兆也、說第二謠歌曰、其歌所謂、烏智可拕能、阿婆努能枳枳始、騰余謀佐儒、倭例播禰始柯騰、比騰曾騰余謀須、此卽上宮王等、性順、都無有罪、而爲入鹿見害、雖不自報、天使人誅之兆也、說第三謠歌曰、其歌所謂、烏麼野始儞、倭例烏比岐以例底、制始比騰能、於謀提母始羅孺、伊弊母始羅孺母也、此卽入鹿臣、忽於宮中、爲佐伯連子麻呂、稚犬養連網田所斬之兆也、庚戌、讓位於輕皇子、立中大兄爲皇太子、

○以水送飯、水をかけて飯を食ふを云字鏡に糕糯等を伊比須久と訓み糕は米和羹也糯は字書に米汁と云り空穗に穀を斷ち鹽斷ちて木實松の葉をすきて源氏にさるべきもの作りてすかせ奉ると見ゆ

○反吐、タマヒは抄疾病部に歐吐（字亦作嘔）倍止都久又太萬比とあり

○浹身、原本浹を沃に作る諸本及紀略に據て改む浹は字書に洽也とあり

○便旋、メクラヒは徘徊（メクリ）の延びたるなり

○咄嗟、原本咄を吐に作る岩本に據て改む字書に呵叱之義とあり

○天之子也云々、天之子は天神の御子と申すが如し正しく日嗣の位に坐す天神の御子なればかゝる事件の曲直は神ながら知看すべし審察を仰ぎ奉るとの意なり

○天宗、天綜天統など云に同じ皇統の意也集解に按謂天子宗室也とあり

○席障子、席は抄調度部坐臥具に筵說文云筵（和名無之呂）竹席也唐韻云席（訓同上）障子は同部屏障具に障子漢語鈔云障子

（屛風之屬也）とありて訓なしシトミは同居處部に蔀周禮注云蔀（字亦作䒶）蔀和名之度美覆暖障光者也とあるを採りしなるべし通釋は敷田氏の標注に據て席を張たる障子なるべしと云ひたれど障子は衝立なり故に屛風の屬と云此は大極殿にての事にて席張りたる障子などあるべくも思はれねば集解の說の如く席を以て屍を覆ひ障子を以て之を圍みしなるべし

○私宮、古人大兄の住給ふ宮なり

○韓人殺鞍作云々、敷田氏は古人大兄皇子禍の身に及む事を懼れ韓人に托して面從せしにこそと云ひ通釋には僞り造れる韓人等も共に立ちて之に預れるか又は大兄のあわてまして眞の韓人が殺せりと見給ひしまゝに宣給へるかと云　○撰甲、原本撰を懷に作る岩本寮本中本に據て改む　○將助大臣、將は岩本中本及家傳に據て補ふ　○處設、處は岩本北本に據て補ふ處或は遽の誤か　○令知所赴、賊黨卽ち漢直等の眷屬は元來唐人の種なれば革命の國風に慣れ反賊にも與せしを我國の君臣の名分を說諭して赴くべき所を知らしめ給ひしなり原本赴を起に作る岩本水本に據て改む　○高向臣國押、二年紀に出づ　○君太郎、入鹿の字なり傳曆に入鹿時人稱太郎とあり太郎は嫡子の稱にて君太郎とは太郎君と云が如し　○悉燒天皇記國記、馬子以來世々大臣となり殊に竊窬を抱きたれば祕府の珍寶は悉く其家に預り居たりしならむ此記等の事は推古紀廿八年（一一九頁）に見ゆ　○船史惠尺、續紀文武紀四年に道照和尙物化俗姓船連父惠釋小錦下とあり　○奉獻、獻の字岩本中本に據て補ふ　○許葬於墓、通證に所謂今木雙墓也とあり通釋には蝦夷父子大罪ありて戮せられし者なれば其死屍を散梟とすべきを宥めて墓に葬り又哭泣を許されしにいかでか豫て作置る大陵小陵などに葬ることを得む必ず別處に假初に作りしなるべしと云り　○哭泣、ネツカへは哭奉仕なり泣きて尸に仕るを云　○以例氏、上文以の字なし　○讓位、我國にて讓位の始なり

日本書紀卷第廿四

【卽位前紀】天萬豐日天皇、日によそへて稱へ奉れる美稱、始は輕皇子後に輕萬德（マトコ）皇子とも申奉る

○尊佛法輕神道、此六字本紀の文例に違へり後人の加筆なるべしと云

○（注）生國魂社、式に攝津國東生郡難波坐生國咲國魂神社とある是なり攝津志に舊在玉造生玉庄府城地天正中太閤遷祠郡戶（コウツ）南加祭田とあり官幣大社生國魂神社是なり

○詔曰云々、宣命の文を略したるなり

○古人大兄、下文に古人太子とあれば此時皇太子に坐ししなるべし

○殿下、儀制令に於三后皇太子上啓稱殿下

○殿下之舅、御母の御弟にませばかく云

○禪位、集解には活字本に據て此下に於輕皇子の四字を補ふ

○爾輕皇子云々、是も亦宣命の語を省けるなり

○（注）古人大市皇子、大市は大和國城上郡大市是なるべし

○拱手、手を左右にして

日本書紀卷第廿五

天萬豐日天皇　孝德天皇

天萬豐日天皇、天豐財重日足姬天皇同母弟也、尊佛法、輕神道、（斮生國魂社樹之類是也）爲人柔仁好儒、不擇貴賤、頻降恩勅、天豐財重日足姬天皇四年六月庚戌（十四）、天豐財重日足姬天皇、思欲傳位於中大兄、而詔曰、云々、中大兄退語於中臣鎌子連、中臣鎌子連議曰、古人大兄、殿下之兄也、輕皇子、殿下之舅也、方今古人大兄在、而殿下陟天皇位、便違人弟恭遜之心、且立舅以答民望、不亦可乎、於是中大兄深嘉厥議、密以奏聞、天豐財重日足姬天皇授璽綬禪位、策曰、咨爾輕皇子云々、輕皇子再三固辭、轉讓於古人大兄（更名古人大市皇子）曰、大兄命是昔天皇所生、而又年長、以斯二理、可居天位、於是古人大兄避座逡巡、拱手辭曰、奉順天皇聖旨、何勞推讓於臣、臣願出家入于吉野、勤修佛道、奉祐天皇、辭訖、解所

佩刀、投擲於地、亦命帳內、皆令解刀、卽自詣於法興寺佛殿與塔間、剔除髯髮、披著袈裟、由是輕皇子不得固辭、昇壇卽祚、于時大伴長德(字馬飼)連帶金靫、立於壇右、犬上健部君帶金靫、立於壇左、百官臣連國造伴造百八十部、羅列匝拜、是日、奉號於豐財天皇、曰皇祖母尊、以中大兄爲皇太子、以阿倍內麻呂臣爲左大臣、蘇我倉山田石川麻呂臣爲右大臣、以大錦冠授中臣鎌子連、爲內臣、增封若干戶云々、中臣鎌子連、懷至忠之誠、據宰臣之勢、處官司之上、故進退廢置、計從事立云々、以沙門旻法師・高向史玄理、爲國博士、辛亥(十五)、以金策、賜阿倍倉梯麻呂大臣與蘇我山田石川麻呂大臣、(或本云、賜練金、)乙卯(十九)、天皇皇祖母尊皇太子、於大槻樹之下、召集群臣盟曰、(告天神地祇曰、天覆地載、帝道唯一、而末代澆薄、君臣失序、皇天假手於我、誅殄暴逆、今共瀝心血、而自今以後、君無二政、臣無貳朝、若貳此盟、天災地妖、鬼誅人伐、皎如日月也、)改天豐財重日足姬天皇四年、爲大化元年、

抱くをコマヌクといへど禮容に非ず左傍にツクルと訓るが如く手を正しうし給ふ狀なり　○投擲於地、通釋に古人大兄は先帝の長子にませば當然卽位し給ふべきを中大兄の其を超えて位を踐み給はむと思ぼす下心ましましくて先づ御舅を位に卽け參らせむとするは其計略なることを知食せば甚く之を憤り給ひ何勞推讓於臣と宣ひて佩刀をさへ地に投擲ち給ふなり是後日此皇子の吉野にて謀反し給ふことの張本なりと云　○卽自、集解自を日に作る應本卽の字なし　○髯、北本鬚に作る　○袈裟、抄調度部僧坊具に袈裟(俗云介佐)天竺語也此云無垢衣又功德衣孫愐曰傳法衣卽沙門之服也翻譯名義集に袈裟具云迦羅沙曳此云不正色從色得名章服儀云袈裟之目因於衣色如經中壞色衣也とあり　○昇壇、原本昇を升に作る北本に據て改む　○大伴長德、公卿補任に白雉二年七月薨字馬養或鳥養金村大臣之曾孫父咋子連也とあり　○金靫、金にて餝れる靫なり　○犬上健部君、景行紀五十一年(卷上一六一頁)に出づ日本武尊の後なり　○奉號、原本號於を顚倒せり北本應本に據て改む　○豐財天皇、天豐財重日足姬天皇を略きて書けり　○阿倍內麻呂、次に倉梯麻呂とあるも同人也　○左右大臣、始て見ゆ抄職官部に大臣於保伊萬宇智岐美とあり此時の大臣は令制の左右大臣の如くならで臣姓なる阿倍氏蘇我氏を大臣とせられしなれば名は同じくして實は異れる所あり　○大錦冠、此時未だ此冠なし特に製りて賜へりしなるべし大化三年に至て七色十三階の冠を制し給ふ其中第七階に大錦冠あり　○內臣、扶桑

(乙巳)大化元年秋七月丁卯朔戊辰、立息長足日廣額(舒明)天皇女間人皇女爲皇后、立二妃、元妃阿倍倉梯麻呂大臣女曰小足媛、生有間皇子、次妃蘇我山田石川麻呂大臣女曰乳娘、丙子(十)、高麗百濟新羅並遣使進調、百濟調使兼領任那使、進任那調、唯百濟大使佐平緣福遇病、留津館而不入於京、巨勢德太臣詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子奉遣之使、既往短而將來長、是故可以溫和之心相繼往來而已、又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百濟國爲內官家、譬如三絞之綱、中間以任那國屬賜

略記抄本に年三十一又云內臣准大臣位也とあり鎌足公は連姓なれば此內臣の臣は阿倍氏等の大臣の臣と異なり內々にありて天皇の御諮詢に應ずる前つ君の意なり內大臣に進みても然なり　○增封、封は戶人(ヘヒト)なり賦役令に凡封戶者皆以課戶充調全給其田租爲二分一分入官一分給主とあり補任に鎌足は此時二千戶を封ずと見えたれば是までの封戶に加へて二千戶を增給せられしなり　○云々、集解に云々二字不穩疑詔曰二字誤といへど是は封を增し給ふ宣命を略けるなるべし　○懷至忠之誠、以下計從事立に至る廿四字は魏志武帝紀伊尹懷至忠之誠云々の文を取て鎌足を伊尹霍光に比て賛せしなり　○沙門、翻譯名義集に佛法及外道凡出家者皆名沙門とあり　○國博士、こゝは令制の國々の博士ならで日本全體としての博士と見るべし　○金策、金を以て作りたる書札なり文選遊天台山賦に出づ　○(注)練金、コマカネとあるは誤なり釋紀にコナカネとあるぞ宜き熟金(コナカネ)なり　○盟曰、楓本中本所引の旁書に曰を焉に作る　○(注)告天神地祇、以下如日月也に至る六十八字は本文に續けて大書すべきなり此文を熟讀するに蘇我氏の如き驕傲の臣の再出せむことを恐れ諸臣をして忠誠ならむことを神祇に盟はしめ給へるなり　○誅殄暴逆、蘇我入鹿を除き給ふを云　○大化、釋紀に兼方案之誅殄入鹿臣之暴逆天下安寧政化敷行故號元於大化とあり之を年號の見えし始めとすれど繼體天皇の御代に善記の號ありしこと濫觴抄二中歷等に見えたれば內々には既に用ひられし事ありしも洽く行はれざりしが此に至りて公に元號を定め汎く世に行はしめられしなり

【大化元年】小足媛、編年記に男足に作る　○調使、原本使を進に作る北本中本に據て改む　○進任那調、進の字は中本水本に據て補ふ　○津館、難波館なり　○巨勢德太臣、通證に上當有以字と云　○明神云々、續紀一に現御神萬葉に明津神吾皇之等あるも皆同じ意にて明かに見え給ふ神の義なり令詔書式に明神御宇日本天皇詔旨義解に謂以大事宣於蕃國使之辭也とあり　○日本、通釋に詔命の時はヒノモトとよまず御宇日本(シロシメスニホン)と音讀にするが例なりと云　○高麗神子、獨り御國人

のみならず外國の人ども神の子なりと申さるゝは内外を隔てぬ廣き御心と申すべし
○既往短云々、集解に按使至之日短不至日長故曰可以相繼而至朝廷也と云
○三絞之綱、ミセはミツヨリの誤ならむ出雲風土記に三自(ミツヨリ)之綱打掛而とあれば三筋搓り合せて絡ひたるを云其意は高麗百濟新羅は三絞の綱の如く心を一にして我朝に仕へ奉れとの譬に出ししなり
○三輪栗隈君、集解に按三輪氏在栗隈者也と云栗隈は山城國久世郡にあり
○不易面、壯健にして姿の何時も變らぬを云
○鬼部、高麗の部名なれど他に見えず
○上古聖王、我皇祖皇宗を申奉る
○以悅使民、是れ御歷代天皇の人民を威壓することなく心の中より悅び服はせ給ふ大御心なるが此御諮詢に答奉りし石川麻呂の心もいとめでたし
○先以云々、禁祕抄に禁

百濟、後遣三輪栗隈君東人、觀察任那國堺、是故百濟王隨勅悉示其堺、而調有闕、由是却還其調、任那所出物者、天皇之所明覽、夫自今以後、可具題國與所出調、汝佐平等、不易面來、早須明報、今重遣三輪君東人、馬飼造、（闕名）又勅可送遣鬼部達率意斯妻子等、戊寅、天皇詔阿倍倉梯萬侶大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、當遵上古聖王之跡而治天下、復當有信可治天下、己卯、天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問大夫與百伴造等、以悅使民之路、庚辰、蘇我石川麻呂大臣奏曰、先以祭鎭神祇、然後應議政事、是日、遣倭漢直比羅夫於尾張國、忌部首子麻呂於美濃國、課供神之幣、八月丙申朔庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戶籍、及挍田畝、其薗池水陸之利、與百姓俱、又國司等在國不得判罪、不得取他貨賂、令致民於貧苦、上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、但以公事往來之時、得

中作法先神事後他事とあり太政官式に凡内外諸司所申庶務辨官惣勘申太政官其史讀申皆依司次若申數事各先神事云々と見えしなど皆同じ意なり
○供神之幣、集解に蓋大嘗祭神幣也と云かく見れば上の美濃尾張の二國が悠紀主基兩國と卜定せられしならむ
○(八月)隨天神之所奉寄、所奉寄は大祓詞に事依奉伎如此依志奉志などある如く大政を寄せ授け給はりしを云
○國家所有公民、朝廷の所有し給ふ公民にて公領の人々なり
○大小所領人衆、臣連伴造等の領する人衆にて上向に對して私領の人民を云
○之任、任國に罷るを云
○皆作戶籍、戶籍は允恭紀に注す大政を一新せむには先づ戶數人口を調査せざるべからず然れば崇神天皇が四道將軍の復命後挍人民とあるも此の作戶籍とあるも同意なり
○挍田畝、田畠を調査す

騎部内之馬、得飡部内之飯、介以上奉法、必須褒賞、違法當降爵位、判官以下、取他貨賂、二倍徵之、遂以輕重科罪、其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人、若違限外將者、主與所從之人、並當科罪、若有求名之人、元非國造伴造縣稻置而輒詐訴言、自我祖時、領此官家、治是郡縣、汝等國司、不得隨詐便牒於朝、審得實狀而後可申、又於閑曠之所、起造兵庫、收聚國郡刀甲弓矢、邊國近與蝦夷接境處者、可盡數集其兵、而猶假授本主、其於倭國六縣被遣使者、宜造戶籍、并挍田畝、（謂撿覈墾田頃畝及民戶口年紀）汝等國司、可明聽退、卽賜帛布、各有差、是日、設鍾匱於朝、而詔曰、若憂訴之人、有伴造者、其伴造先勘當而奏、有尊長者、其尊長先勘當而奏、若其伴造尊長、不審所訴、收牒納匱、以其罪々之、其收牒者、昧旦執牒、奏於內裏、朕題年月、便示群卿、或懈怠不理、或阿黨有曲、訴者可以撞鍾、由是懸鍾置匱於朝、天下之民、咸知朕意、又男女之法者、良男良女共所生子、配其父、若良男娶婢所生子、配其母、若良女嫁

るを云ふ
○薗池、蔬菜菓樹の生ずる地なり
○水陸之利云々、百姓と共に其利を分ち國司獨り其利を占むることを得ざれとなり凡國造は皇別と功臣とを任じ神代の國主（クニヌシ）の遺風なりしを此に至りて郡縣の制に一變せるなり
○判官以下、官職に四等を建つる事此に始て見ゆ判官は國にありては掾と云ひ郡にては主政と云
○次官從者七人、此下に判官從者六人の六字を脫せしならむ
○求名之人、門地を僞りて榮名を求むる人を云
○縣稻置、縣の下恐らくは主の字を脫す
○閑曠之所、字書に閑は散也冗也曠は空也虛也とありて空地を云
○蝦夷、原本夷を蛦に作る今諸本に從ふ
○數集其兵、兵器の數を調査して集むるを云
○假授本主、授の字は北本應本中本に據て補ふ
○倭國六縣、祝詞式祈年祭の條に御縣爾坐云々高市、葛木、十市、志貴、

奴所生子配其父、若兩家奴婢所生子配其母、若寺家仕丁之子者、如良人法、若別入奴婢者、如奴婢法、今克見人爲制之始、癸卯、遣使於大寺、喚聚僧尼而詔曰、於磯城嶋宮御宇天皇（欽明）十三年中、百濟明王奉傳佛法於我大倭、是時、群臣倶不欲傳、而蘇我稻目宿禰獨信其法、天皇乃詔稻目宿禰使奉其法、於譯語田宮御宇天皇（敏達）之世、蘇我馬子宿禰追遵考父之風、猶重能仁之教、而餘臣不信、此典幾亡、天皇詔馬子宿禰、而使奉其法、於小墾田宮御宇天皇（推古）之世、馬子宿禰奉爲天皇、造丈六繡像、丈六銅像、顯揚佛教、恭敬僧尼、朕更復思崇正教、光啓大猷、故以沙門狛大法師福亮、惠雲、常安、靈雲、惠至、寺主僧旻、道登、惠隣、惠妙而爲十師、別以惠妙法師爲百濟寺々主、此十師等、宜能教導衆僧、脩行釋教、要使如法、凡自天皇至于伴造所造之寺、不能營者、朕皆助作、今拜寺司等與寺主、巡行諸寺、驗僧尼奴婢田畝之實、而盡顯奏、即以來目臣、闕名三輪色夫君、額田部連甥爲法頭、九月丙寅朔、遣使者於諸國治兵、或本

山邊、曾布とあり此六縣は天皇の御料地にて戶籍なども確かなるものなく田畠の步數なども精確ならざりし故に特に使者を差して戶籍を造り田畠を撿挍せしめられしなり
○（注）謂撿覈云々、通證に墾田所開墾之田、頃畝田數也舊讀恐非戶戶計也口生齒也年紀令義解猶云年歲也とあり集解は此十三字爲私記據後漢書光武紀文所注後遂攙入と云
○設鍾匱於朝而、鍾は鐘に通ず匱は字書に匣也とあり抄器皿部に櫃（和名比都）似厨向上開闔器也と見ゆ姦吏の爲に訴を曲げらるゝ時は鐘を撞きもし伴造尊長の者其寃鞫を審にせざる時は其旨を記して匱に納よとなり而の字は北本中本及類史に據て補ふ
○勘當而奏、伴造尊長が先づ勘當して奏すべきものは之を奏したるなり此事後世まで因襲して平安朝までは氏長者武家時代になりては總領之を勘當せり是上古氏族制の遺風なり

云、從六月至于九月、遣使者於四方國、集種種兵器、（三）戊辰、古人皇子與蘇我田口臣川掘、物部朴井連椎子、吉備笠臣垂、倭漢文直麻呂、朴市秦造田來津謀反、或本云、古人太子、或本云、古人大兄、此皇子入吉野山、故或云吉野太子、垂、此云之娜屢、（十二）丁丑、吉備笠臣垂自首於中大兄曰、吉野古人皇子、與蘇我田口臣川掘等謀反、臣預其徒、或本云、吉備笠臣垂言於阿倍大臣與蘇我臣曰、臣預於吉野皇子謀反之徒、故今自首也、中大兄即使菟田朴室古、高麗宮知、將兵若干討古人大市皇子等、或本云、十一月甲午卅日、中大兄使阿倍渠曾倍臣、佐伯部子麻呂二人、將兵卅人、攻古人大兄、斬古人大兄與子、其妃妾自經死、或本云、十一月、吉野大兄王謀反、事覺伏誅也、（十九）甲申、遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、毎天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等伴造國造各置己民、恣情駈使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼幷數萬頃田、或者全無容針少地、進調賦時、其臣連伴造等先自收斂、然後分進、修治宮殿、築造園陵、各率己民、隨事而作、易曰、損上益下、節以制度、不傷財、不害民、方今百姓猶乏、而有勢者分割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後不得賣地、勿妄作主、兼幷劣弱、百姓大悅、冬十二月乙未朔（九）癸卯、天皇遷都難波長柄豐碕、老

人等相謂之曰、自春至夏、鼠向難波、遷都之兆也、戊午、越國言、海畔枯査向東移去、沙上有跡、如耕田狀、是年也太歲乙巳、

○題年月、公式令詔書式に年月御畫日とある起因なり　○阿黨、靈異記に儻加太知波比とあり片幸（カタチハヒ）にて俗に最貧と云が如し僧尼令義解には阿曲朋黨とあり　○於朝、類史此二字なし　○男女之法云々、豫め男女の奸濫を拒ぎ絶たむとの法なり　○良男良女、民に良賤あることは上に見ゆ　○良男娶婢所生子配其母、戸令に凡官戸、陵戸、家人、公私奴婢與良人爲夫妻所生男女不知情者從良皆離之其逃亡所生男女皆從賤とあり　○寺家仕丁之子云々、諸寺の仕丁となる者にて官の仕丁と別なる由を云るなり　○別入奴婢、寺家の仕丁にして奴婢となる者は良人法と異なりとなり　○今克見人爲制之始、通證に言使人々知爲制之始也と云北本中本克を剋に作る　○大寺、百濟大寺にて上に出づ　○能仁之敎、能仁は祖庭事苑に梵云釋迦此言能仁とあり　釋迦を云原本仁の下世の字あり　北本應本中本に據て削る　○小墾田宮御宇天皇、天皇の二字は中本に據て補ふ　○狛大法師福亮、狛は高麗大法師は僧綱の位なり　貞觀六年二月紀に制定僧綱位階詔曰國典所載僧位之制本有三階滿位、法師位、大法師位是也とあり　○惠雲、舒明紀十一年（一四七頁）に出づ○常安、舒明紀十二年（一四七頁）淸安に作る　○靈雲、同紀四年（一四四頁）に出づ　○惠至、白雉二年に惠資とあると同人か　○寺主僧旻、原本寺主を細注とす釋紀に據て大書す僧旻は前に出づ　○道登、白雉元年に出づ扶桑略記に此僧孝德紀二年宇治橋を造るとあり　○惠隣、詳ならず　○惠妙、中本及釋紀に據て補ふ此下に集解は惠隱の二字を補て曰福亮以下九人なり慧隱は舒明天皇十二年に出づ十師中にありし事明なり故に補ふと　○十師、續紀卅二寶龜三年三月に十禪師を置くとあり之に同じ　○天皇、先代の天皇を申す　○不能營、修覆することは能はざるを云　○今拜、原本今を令に作る中本交本（楓本傍注）に據て改む　○來目臣、天武紀十三年來目臣賜姓曰朝臣とあり錄右京皇別に久米朝臣武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也とある同氏か、○額田部連、推古紀十八年（一一三頁）に出づ　○法頭、同紀三十二年（一二三頁）に出づ　（九月）治兵、兵は兵器なり　○（注）至于九月、于は諸本に據て補ふ　○蘇我田口臣川掘、錄左京皇別に田口朝臣武内宿禰之後也蝙蝠臣豐御食炊屋姫天皇御世家於大和國高市郡田口村仍號田口臣　○物部朴井連椎子、連の字は北本應本中本に據て補ふ又椎の下に中本之の字あり、椎子の訓は齊明紀四年に物部朴井連鮪に作ればシヒコとよむべきなり舊紀に物部荒猪連公榎井臣等祖とあり　○吉備笠臣垂、臣の字は北本應本中本及下文に據て補ふ笠臣は應神紀廿二年（卷上二〇五頁）に出づ　○倭漢文直、皇極紀元年（一四九頁）に出づ　○朴市秦造田來津、天智紀卽位前紀に出づ　○（注）古人太子、原本太を大に作る北本應本中本に據て改む　○自首、正字通に有咎自陳及告人罪曰首とあり　○（注）阿倍大臣、阿倍倉麻呂　○蘇我大臣、蘇我山田石河麻呂　○菟田朴室古、錄左京神別に榎室連火明命十七世孫吳足尼之後也とあり　○高麗宮知、高麗は氏宮知は名なり　○（注）卅日、傍注の攙入なるべし　○阿倍渠曾倍臣、錄左京皇別に許曾倍朝臣大彥命之後也とあり　○兵卌人、北本應本楓本中本卌を冊に作る　○錄民元數、元數は大數にて全國の戸口を錄するなり　○標代民、通證に言置標題代號之民也と云訓は栗田博士のミナシロと訓むべしと云れしに從ふべし　○臣連等、等の字は國造の下にあるべきなり　○進調賦時、原本進の上に及の字あり　北本楓本應本に據て削る　○園陵、字書に帝王陵寢曰園とあり御陵を云　○率己民云々、宮殿園陵の築造修繕等に臣連等私民を率ゐて赴くを云　○易曰云々、易の益卦の象に益損上益下民悅无疆とあり之を引きたるは臣連を損し百姓の闕乏を益せしめむとての御意なり　○不害民、不の字は中本に據て補ふ　○水陸、水田陸田なり　（十二月）長柄、攝津志に西成郡今有南長柄北長柄二村とあり（今大坂市東淀川區南北長柄町）　○豐碕、此宮趾を攝津志に在本莊村今有小祠と記せり敷田氏標注に按に同郡山口村惣社の地蓋豐碕宮の舊趾ならむと云　○相謂、北本中本謂を語に作り應本楓本原本に同じ　○枯査、抄舟車部に査唐韵云槎（字亦作査楂和名宇岐々）水中浮木也とあり

（丙午）二年春正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處處田庄、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛賜官人百姓、有差、又曰、大夫所使治民也、能盡其治、則民賴之、故重其祿、所以爲民也、其二曰、初脩京師、置畿內國司郡司、關塞斥候防人、驛馬傳馬、及造鈴契、定山河、凡京每坊置長一人、四坊置令一人、掌按檢戸口、督察姧非、其坊令取坊內明廉强直堪時務者充、里坊長並取里坊百姓淸正强幹者充、若當里坊無人、聽於比里坊簡用、凡畿內、東自名墾橫河以來、南自紀伊兄山以來、（兄、此云制、）西自赤石櫛淵以來、北自近江狹々波合坂山以來、爲畿內國、凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、其郡司並取國造性識淸廉堪時務者爲大領少領、强幹聰敏工書筭者爲主政主帳、凡給驛馬傳馬、皆依鈴傳符剋數、凡諸國及關給鈴契、並長官執、無次官執、

【大化二年】賀正禮、始て見ゆ所謂元日朝拜なり大日本史に公事根源曰元日朝賀始于神武天皇元年正月至此又見可以爲朝拜之原始とあり　○改新之詔、通證に謂與民更始也とあり　（其一）子代之民、古へ天皇皇后皇子等御子坐さゞる時に部民を置て御名を永世に傳へられしを云亦之を御名代の民とも云　○別、景行紀四年（卷上一四四頁）に七十餘子皆封國郡各如其國故當今時謂諸國之別者其別王之苗裔とある別なり　○村首、下文首長とあるに同じ　○部曲、安閑紀元年（三二頁）に見ゆ　○田庄、字書に莊は田舍也また庄俗借作莊とあり田庄は後世の庄園なり庄園の沿革は栗田博士の莊園考に詳なり　○食封、へヒトはへは戸ヒトは人なり土地を賜はらず官位の高下に依て民戸を賜はり封ずる所の戸口の租庸調にて食せしむ故に食封と云是より先土地を賜はり其地に住る民

の租庸調を以て生活したるを土地を賜はる事など全く廢して戸口のみを賜はる事に改められしなり　○大夫、公式令に於二太政官三位以上稱二大夫一司及中國以下五位稱二大夫一とあり此大夫は五位以上なりされど此時には未だ四位五位の名目なし　○官人百姓、通釋に栗田寛云官人百寮と云が如し

(其二)初脩京師、京師を始て定めたるにあらず其位置を改修したるあり　○關塞、抄道路具に關は世岐塞は曾古とあれど周禮關の注に界上之門也とありこゝは關塞を合せて關と云り　○斥候、原本斥を片に作る北本に據て改むウカミは推古紀九年に間諜者をウカミヒトと訓るウカミに同じく窺見なり職員令大國の條に兼二知饗給征討斥候一義解に斥逐也言二候逐非常一也と云　○防人、埼守にて邊要の地に置きて外寇を防ぐ兵士なり軍防令に凡防人在レ防守固之外各量二防人多少一於二當處側近一給二空間地一逐二水陸所一レ宜掛酌營種并雜菜以供二防人食一云々とあり　○驛馬、萬葉に波由馬とあり早馬なり主として官の急使の乘用に充つるものなり　○傳馬、ツタハリウマの訓は他に見えず北本中本にはツタヘウマと訓り廐牧令に凡諸道置二傳馬一大路二十匹中路十匹小路五匹使稀之處國司量置不二必須一足皆取二筋骨强壯者一充毎レ馬各令二中中戸養飼一若馬有二闕失一者卽以二驛稻一市替其傳馬毎レ郡各五皆用二官馬一云々とあり傳馬は主として租調運搬の用に充つるものなり　○鈴契、鈴は令を傳ふるの具契は契符なり鈴は驛鈴をいひ其他の鈴をも云公式令に車駕巡二幸京師一留守官給二鈴契一とある類是なり契は木契にて俗に云割符なり　○定山河、成務紀五年(卷上一六五頁)にも見えたれど此時再び定め給ひしなり　○凡京云々、上文の脩二京師一の目なり以下畿非に至る二十三字は戸令と同文にて按檢を撿挍と改めしのみ　○毎坊、通證に和名抄坊末知唐武德制鄕保隣里在二城邑一曰レ坊田野曰レ村とあり　○長一人、一の字は北本應本中本及類史に據て補ふ　○令、ウナカシは上より課するにて下文催駈の訓も同義なり　○凡畿內云々、原本畿を幾に作る北本楓本に據て改む下同じ以下畿內に關する目なり　○名墾橫河、名墾は伊賀國名張郡なり橫河は今の長田川なるべしと云　○紀伊兄山、紀伊國那賀郡にあり　○赤石櫛淵、赤石は播磨國明石郡なれど櫛淵は詳ならず　○狹々波、近江國滋賀郡、神功紀攝政元年(卷上一八四頁)に出づ　○合坂山、神功紀(同上)に逢坂に作り今も逢坂山と云　○爲畿內國、以上の區域內を畿內國と定めたるにて後世に所謂畿內國とは異り　○凡郡云々、以下郡司を置くの目なり　○四十里、里は下文に凡五十戸とあり四十里卽ち二千戸を大郡と爲す中郡小郡之に準ず但し大寶令には之を改て大上中下小の五等とす戸令に凡郡以二二十里以下十六里以上一爲二大郡一十二里以上爲二上郡一八里以上爲二中郡一四里以上爲二下郡一二里以上爲二小郡一と見ゆ　○郡司、類史延曆十七年三月詔に昔難波朝廷始置二諸郡一仍擇レ有レ勞補二郡領一子孫相襲永任二其官一云々宜其譜第之選永從二停廢一取二藝業著聞堪レ理レ郡者一爲レ之とあり大化の改新は族制封建制の如き政體を變じて隋唐郡縣の制を取り世職を停めて更迭遷替の官吏を任命せられたれど民に親み化を行ふ郡司には祖先以來土著の國造を取て世襲せしめしなりこは中央政府の左右大臣も尙ほ臣姓なる阿倍蘇我氏を任ぜられし如く舊慣を俄に變ずることは人心の動搖を恐れて爲さざりしなり　○大領少領、抄職官部に長官郡曰二大領一加美次官郡曰二少領一須介とあり　○書筭、書は文字を書くをいひ筭は算なり計算するを云　○主政主帳、抄職官部に判官郡曰二主政一萬豆利古止比止佐官郡曰二主帳一とありフミビトは書記なり郡司以下此に至るまで選叙令の文に同じく大領以下主帳に至るまでの所掌は職員令に詳なり　○凡給云々、以下驛傳を置くの目なり　○皆依鈴傳符剋數、此文公式令に同じ原本皆依轉倒す令に據て訂す鈴は驛鈴なり官命にて遠國に急行する時驛馬を徵し之に乘りて振りつゝ行くなり鈴には剋ありて五剋ならば驛馬五匹六剋ならば六匹を出さしむるなり傳符は傳馬を出さする符にて此符にも剋あること公式令に見ゆ　○凡諸國云々、是は鈴契を給ふ目なり鈴を給ふ數は公式令に凡諸國給レ鈴者大宰府二十口三關及陸奧國各四口大上國三口中下國二口其三關國各給二關契二枚一云々とあり

(其三)初造戸籍、戸籍を造る事は允恭紀四年(卷上二四六頁)に見ゆ此に初とあるは形式を改正せられし故にかく云るなるべし造籍の事は戸令に詳なり

其三曰、初造戸籍、計帳、班田收授之法、凡五十戸爲里、毎里置長一人、掌按撿戸口、課殖農桑、禁察非違、催駈賦役、若山谷阻險、地遠人稀之處、隨便量置、凡田長卅歩、廣十二歩爲段、十段爲町、段租稻二束二把、町租稻廿二束、其四曰、罷舊賦役、而行田之調、凡絹絁絲綿、並隨鄕土所出、田一町絹一丈、四町成匹、長四丈、廣二尺半、絁二丈、二町成匹、長廣同絹、布四丈、長廣同絹絁、一町成端、（絲綿絇屯、諸處不見）別收戸別之調、一戸貲布一丈二尺、凡調副物鹽贄、亦隨鄕土所出、凡官馬者、中馬毎一百戸輸一匹、若細馬毎二百戸輸一匹、其買馬直者、一戸布一丈二尺、凡兵者、人身輸刀甲弓矢幡鼓、凡仕丁者、改舊毎卅戸一人、（以一人充廝也）而毎五十戸一人、（以一人充廝）以充諸司、以五十戸充仕丁一人之粮、一戸庸布一丈二尺、庸米五斗、凡采女者、貢郡少領以上姉妹及子女形容端正者、（從丁一人、從女二人）以一百戸充采女一人之粮、庸布庸米皆准仕丁、

○計帳、調庸の事を記せる帳なりフムタは文札にて籍に同じ計帳の事は主計式に詳なり

○班田收授之法、田令に凡田六年一班(神田寺田不レ在二此限一)若以二身死一應レ退レ田毎レ至二班年一卽從二收授一と見え其他班田に關する事詳に見ゆ大化の改新は天皇皇子御自の土地と權臣等の始め上より賜はりし土地を私有し公民をも私役せしを悉く國土人民を公地公民とし其收めし田畠を滿六歲に達せし男女に下し賜ひしなり

○凡五十戸爲里、通證に今按是漢制也晁錯五家爲レ伍伍有レ長十長一里里有二假士一唐令曰諸戸以二百戸一爲レ里五里爲レ鄕此紀不レ言レ鄕蓋古者不二別置一レ鄕故鄕里相通稱レ之其訓亦同とあり全く隋唐の制を取れりとするは非なれど大に之を參考せしことは明なり　○催駈賦役、賦役令義解に賦者斂也調庸及義倉諸國貢献者等爲レ賦也役者使也歲役雜徭等爲レ役也また通證に萬葉集楚取五十戸良我許惠波、此言二催駈賦役一也とあり　○若山谷阻險、以下十五字原本下文の稻二十二束の下にあり戸令に據るに此にあるべし故に改む　○凡田長卅歩云々、以下廿二束まで田令の文に同じ歩は字書に六尺曰レ歩拾芥抄に田以二方六尺一爲二一歩一卅六歩爲二一段頭一三百六十歩爲二一段積一と云　○租稻二束二把、神祇令田租の義解に新輸曰レ租經貯曰レ稅也田令の義解に段地獲二稻五十束一束稻舂得二米五升一也卽於レ町者須レ得二五百束一也とあり　(其四)罷舊賦役云々、崇神天皇以來今回改新以前までの賦役を廢し其代として田の調卽ち租稻の外に其地方に出づる布帛を納めしむるを云　○凡絹絁云々、以下十一字賦役令の文に同じ但令には綿の下布の字あり是は必ずあるべきなり絹絁は同令の義解に細爲レ絹也麁爲レ絁也とあり堅く細かに織りたるを絹といひ糸も太く麁目に織りたるを絁と云　○四町成匹、原本匹を疋に作る今北本應本に據る字彙に匹曰二四丈一則八端故从二八匸一象二束帛之形一借爲二匹偶字一別用レ疋非とあり類聚名義抄に疋は匹の俗字といひ字類抄にも匹は疋之正字也と云　○半、イツキは五寸なり　○絁二丈、賦役令には正丁一人絹絁八尺五寸六丁成レ匹長五丈一尺廣二尺二寸とあり　○長廣同絹絁、廣の字は類史に據て補ふ　○端、ムラは詳ならず通證に小爾雅倍レ丈謂二之端一通典准二武德制一曰二其絹絁一爲レ匹布爲レ端此紀蓋據レ此令式等皆亦同今俗布帛通曰レ端曰レ疋此古